新約外典全

バチェラー・オブ・アーツ
ドクトル・オブ・フィロソフィ　杉浦貞二郎譯

改造社版

凡例

新約外典と稱すべきものは、其範圍に殆んど定りがないが、普通約三十卷のものを云ふのである。其内本書に收めた十四卷は最も重要なるものである。此等十四卷の選擇については、卷尾に附錄とせる新約外典概論を見れば明かであらう。併し唯だ讀むで面白い小說の如きものは此他に多い。兎に角、正當なる理解を以て本書を讀まんとするには、讀者は先づ卷尾に附錄とせる概論を一讀せられねばならぬ。

本書を飜譯するに用ひた原本は一冊ではない。殆んど各卷異れる出版にかゝる最良のものと思ふものを採つた。就中、Nestlé の *Novi Testamenti Graeci Supplementum* は諸福音書斷片の原文を得るに最も便宜の本である。併し最近發掘して公刊になつたもの、例へばオクシリンカス・パピリの如きは、其發表された單行本に依るほかない。

我々日本人は漢字の詩でも作るが、歐米で五年や十年學むで來ても希臘文を讀むとは十歲頃から覺へた漢文を讀むやうには行かぬ。歐米の學者が希拉を讀むのは、我々が漢文を讀む如きものまで、我々は此等古典語學に於て到底彼等には及ばぬ。故に疑のある處は英獨佛拉の譯本を參考し

て飜譯に誤謬なきを期したが、英獨などでも、疑はしい處は矢張り區々になつて居るのが多い。併し英語で Walker の *Apocryphal Gospels, Acts, and Revelations* 及び Lake 教授の *Apostlic Father's* 獨乙では Hennecke 博士の *Neutestamentliche Apokryphen*, 及び佛語では Bousquet et Amann の *Les Apocryphes du Nouveau Testament* から益したことを茲に謝する。特にヘネツケの書は他に無いものが多いので最も便宜を得た。とは云へ、本書は英獨などからの重譯ではないから、矢張り原本から日本文に譯した其責任は我輩の負ふ所である。併しまだ〳〵杜撰な箇所の多いことゝ思ふ。幸に大方の叱正を得れば後の版に訂正するであらう。

此飜譯に當つて助力を賜つた友人及び原本を貸與された方々に厚く御禮を申して置く。

大正九年九月

譯者識

新約外典

目次

希伯來人福音書……（一）
　附錄　ファユーム斷片……（七）
エビオン宗福音書……（九）
　附錄　ストラスブルク斷片……（一二）
埃及人福音書……（一五）
　附錄　オクシリンカス斷片……（一七）
彼得傳福音書……（一九）
聖言集
　ロギア〔オクシリンカス斷片〕……（二五）

新約外典

アグラファ……（二八）
ヤコブ福音書前篇……（四七）
多馬傳福音書……（六五）
ニコデモ傳福音書
ピラト行傳……（七五）
耶蘇黃泉行記……（一〇八）
保羅及提苦拉行傳……（一一九）
クレメンス書……（一三五）
バルナバ書……（一八七）
十二使徒の教訓……（二一九）
彼得默示錄……（二三一）
ヘルマスの牧者……（二三七）

附錄

新約外典概論

總論……（三五九）
各論……（三七一）

卷頭

外典原文斷片
凡例
目次

譯者稿

新約外典

希伯來人福音書

一

看よ、主の母と其兄弟、彼に曰ひけるは、『洗者ヨハネ赦罪の洗禮を行へり、我等行きて彼より受洗すべし。』と。されど彼れ曰ひ給ひけるは、『我れ如何なる罪を犯したればとて彼より受洗すべきか。但し斯く曰ふも、我れ識らずして爲せしことと有らば知らず。』

主水中より上り給ひし時、聖靈瀧の如く降りて彼の上に停り、曰ひ給ひけるは、『我子よ、我れ總ての豫言者にて、汝の來り、また我が汝に息すみ得るを期せり。汝は我息ひ、我長子にして、

永久の支配者なり。』

二

『我母なる聖靈、いま我髪の一筋にて我を捕へ、大なるタボール山へ連れ行けり。』

三

（イエルサレムへ連れ行き）

『明日の飯を今日我等に與へ給へ。』

四

手の萎へたる人、イエスに乞ふて曰ひけるは、『我は石工にして、我手にて食を稼ぐ者なり。イエスよ、我れ汝に願ふ、我が食を得るに恥を以てする如きこと無きやう、我健康を回復せよ。』

五

『ヨハネの子（シモンよ、汝は幸福なり。）』

イエス曰ひ給ひけるは、『汝の兄弟汝に對し言語にて汝に罪を犯し、而かも申譯せば、一日に七度赦せよ。』其弟子シモン彼に曰ひけるは、『七度までか。』主答へて曰ひ給ひけるは、『我れ實に汝に曰はん、七度を七十倍するまでせよ。そは豫言者たちすら、聖靈を以て潔められたる後ち尚は罪ある言をなせり。』

六

或他の富める人、彼に曰ひけるは、『我れ如何なる善行をなさば生くべきか。』と。之に答へて曰ひ給はく、『嗚人よ、律法と豫言とを完うせよ。』彼答へけるは、『我既に之を完ふせり。』彼曰ひ給はく、『行け、而して汝の全財産を賣りて貧者に分配し、後ち來りて我に從へ。』 於是、その富める人頭を掻き初めたり、彼は之を好まざりしなり。主彼に曰ひ給ひけるは、『如何にして汝、「我既に律法と豫言とを完ふせり」と言ふや。律法に錄せずや、「汝己の如く汝の隣人を愛すべしと。」然るに看よ、多くの汝の兄弟なるアブラハムの裔、身に弊衣を纏ひ飢へて死に瀕せり。然るに汝の邸宅には多くの佳き物充てるも、その一つだに彼等に與へられざるなり。』斯くて彼、其傍に坐せ

七

し弟子シモンを顧て曰ひ給ひけるは、『ヨナの子シモンよ、駱駝が針の孔を通るは、富者が天國に入るよりもいと易きかな。』

八

（群衆呼ばりて曰ふ、『ダギデの子にホサナ……）オサンナ・バルラーマ。』

九

『（汝等が殺せし）エホイアダの子ザカリヤ……』

一〇

（三人の僕のうち、一人は主人より預りたる金を娼家に入りて遊蕩に費し、一人は之を匿し置けり。斯くて主人の歸りたる時に、一人は賞を受け、一人は之を増殖し、又た一人は叱られ、而して今一人は獄に投ぜられたり。）

一一

爰に彼（ペテロ）否認し、また宣誓し、また呪詛したり。

爰に彼等の教師の子にて（バラバといふ……）

一二

神殿の大鴨居折れ、碎けて地に落ちたり。

一三

一四

主その衣を祭司の僕に與へたる後、ヤコブの處に到りて彼に現れ給へり。そはヤコブ、主の盃を飲みし時より彼が死人のうちより甦（よみがへ）り給ふを見る迄、食を取らずと誓ひたればなり。……主曰ひ給ひけるは、『卓と麪包（パン）を持ち來れ。……』彼れ麪包を取り、祝して之を擘き、正直（しやうぢき）ヤコブに與へて、彼に曰ひ給ひけるは、『我兄弟よ、汝の麪包を食せよ、人の子眠れる者のうちより起きたればなり。』

彼れペテロ及びペテロと倶に在りし者に來り……彼等に曰ひ給ひけるは、『我を捉へ我を弄（いぢ）り、我が軀體なき靈物にあらざるを見よ。』と。彼等直ちに彼に觸れて、彼の肉と血を握りたることを

確信せり。

一五　『その兄弟の靈を惱ます者は（大なる罪を犯すなり。）

一六　主その弟子に曰ひ給ひけるは、『汝等の兄弟と親和せるに非ざれば欣ぶ勿れ。』

一七　主曰ひ給ひけるは、『我れ、天に在す我父の我に與へ給へる最良の者を我ために選ふべし。』

一八　『索むる者は、其索むる物を得るまで息まざるべく、之を得たる時は驚くべく、驚きて彼は王となりて初めて息むべし。』

附録　ファイユーム斷片

……我が去らざるべからざる前に、汝等すべて……如く……聖書に從ひ(今)し、卽ち曰く、『我れ牧者を打たん、されば群羊散……とも、我は爲さざるべし。』と。ペテロ曰ひけるは、『他の者みなたび我を否認すべし……』主曰ひ給ひけるは、『雞二たび鳴かん、……汝は誰よりも先きに三

エビオン宗福音書

一

ユダヤ王ヘロデの御代(みよ)に、（カヤパ大祭司たりし時、）ヨハネ來りてヨルダン川にて悔改めの洗禮(スマ)を施せり。彼はアロンの支族にて、祭司ザカリヤとエリサベツの子と稱せられ、民みな彼の許に行けり。

二

ヨハネ洗禮を行ひし時、パリサイ人彼に行きて受洗せり、エルサレムの全民も亦た然かなせり。

彼は駱駝の毛織衣を纏ひ、腰に皮の帶を締め、其食はマナの如き味ある野蜜にて膏塊の如き形を

三

人々受洗し、イエスも亦た來りてヨハネより洗禮を受け給へり。彼れ水より上り給ひし時、天開け、聖靈の鴿（はと）の形にて降り、己に入るを見給へり。又た天より聲ありて曰ふ、『汝は我愛子なり、我れ汝を喜（よろこ）ぶ。』又曰ふ、『今日われ汝を生めり。』斯くて大なる光明其處を照せり。ヨハネは彼を視て曰ふ、『主よ汝は誰にて在ますや。』と。復た天より聲ありて聞ゆ、『此は我愛子なり、我がいたく喜ぶ者なり。』於是ヨハネその足下に伏して曰ひけるは、『主よ願くは我に洗禮を授け給へ。』されど彼れ之を遮りて曰ひ給ふ、『之を忍べ、そは萬の事は遂行せられざるべからざればなり。』

四

イエスといふ人あり、齡凡そ三十歳。此人我等を選べり。彼れカペナウムに來り、ペテロと呼ぶシモンの家に入れり。彼口を開きて曰ひ給ひけるは、『我れチベリヤの海邊を歩み、ゼベダイの子ヨハネとヤコブ、又たシモンとアンデレとタダイと熱狂シモン、及びイスカリオテのユダを選べり。而して汝マタイ、我れ汝が納稅所に坐せる時に汝を呼びて汝は我に從へり。我計畫により、汝等はイスラエルへの證（あかし）の爲め十二使徒たるべし。』

『視よ汝の母と汝の兄弟等外に立てり。』と、彼等の
又た我兄弟とは誰ぞや。』斯くて彼れ其手を弟子た
をなす者、これ我兄弟また我母また我姉妹なり。』
と。

六

イエス曰ひ給ふ、『我れ犧牲(いけにへ)を廢せんとて來る。汝
りまた汝等より去らざるべし。』

七

弟子たちイエスに曰ひけるは、『汝過越(すぎこし)の食をな
答へ給ひけるは、『我れ汝等と過越の羔(こひつじ)の肉を食せん
ことを欲せず。』

附録　ストラスブルク斷片

一

【表面】

……彼……によりて知られ……その實によりて讃められ……多くの……アメーン。おゝ父よ、今汝の(力を)賜はり、(彼等)をして我と共に……を支へしめ給へ。アメーン。(我れ)その國の王權を授かりぬ、これ……彼に屬する王權にして、……彼等を知らず、其謙遜……彼等を蔑視せり。父よ、我れ(汝によりて)王となりぬ。願くは萬物を我に從はせ給へ。アメーン。誰によりて(最後の)敵を征服し得べきや。……に依る。アメーン。誰によりて死の刺(とげ)は(破壞)せらるべきや。獨子(ひとりご)に(依る)。アメーン。誰に支配は屬するや。(是れ聖子(みこ)のものなり。)アメーン。(誰によりて萬物は造られしや。)長子により……

【裏面】

（イエス）全く頌榮を終りし時、彼れ我等を顧みて曰ひ給ひけるは、『我れ汝等より取らるべき時來りぬ。靈は願ふなれど肉は弱きなり。されば（暫し俟ちて我を）番せよ。』と。されど我等使徒たちは嘆き（つゝ彼に）曰ひけるは、『神の（子）よ……自ら……』彼答へて曰ひ給はく、『汝等肉體の亡ぶを恐る勿れ、寧ろ（暗黒の）力……を恐るべし。我が凡て汝等に告げしことを記憶せよ。彼等（も し我を）迫害せば、又た汝等をも迫害すべし。……されば欣べ、我れ（世に打勝てり）、我れ……

二

【表面】

我れ汝等にすべて我榮光を現はし、又たすべて汝等の有する力と汝等の使徒職の奥義を汝等に示さんため……時……

【裏面】

我等の眼は全（すべ）ての所を透視し、我等彼が神たることの榮光と（其）國の全き榮光を觀たり。彼れ我等に我等の）使徒權を授け……

附錄　ストラスブルク斷片

埃及人福音書

一

サロメ曰ひけるは、『何時まで死は世界を支配するや。』主答へて曰ひ給ひけるは、『汝等が兒を産まん限り。』サロメ、兒を産むことの許されざると思ひて、『されば我れ兒を産みしことなきは善かりき。』と曰へるに、主答へ給ふ、『如何なる草本にても食へ、但し苦きは食ふ勿れ。』

二

サロメ、彼が尋ねたることの何時示さるべきやを問へるに、主答へ給ひけるは、『汝等羞恥の覆物を蹂躙せん時、二つのものより一つの作らるゝ時、男女と共に男にも女にもあらざる者に作らるゝ時。』

救主自ら曰ひ給へり、『我れ女子の勞作を毀(こぼ)たんとて來れり。』

附録

オクシリンカス斷片

一

晨より夕に至るまで、また夕より晨まで、汝等何を食ひ、また何を衣んとて（煩ふ勿れ）。汝等は、成長するも紡（つむ）がざる百合に勝ること遠し。既に一着の衣を有し、汝等尚ほ何を（缺くや）……何人か汝の身長を延ばし得んや。彼自ら汝に衣服を賜ふ。』弟子等彼に曰ふ、『何時汝我等に現れ給ふや、また何時我等汝を見るべきや。』彼曰ひ給ひけるは、『汝等が裸體（はたか）となりても恥ぢざらん時……。……』彼曰ひ給ひけるは、『汝等は智慧の鍵を匿せり。汝等自ら入らず、また入らんとする者のためにも開かざるなり。

二

……彼惡事をなす前に種々の狡巧（たくみ）なる辯解をなす。されど汝等も亦た彼等と等しき苦みを受くることなきやう注意せよ。それ人々の間に惡をなす者は、雷に生ける人の間に其酬を受くるのみ

ならず、其刑罰と苛責また彼等を待てり。

斯くて彼等を随へ潔齋の場に到り、神殿の中を歩み居給ひしが、或るパリサイ人にて、レギと名くる祭司長彼等に遇ひ、救主に曰ひけるは、『汝自ら洗はず、また汝の弟子等も其足を洗はざるに、汝誰の許可を得て此潔齋の場に入り、此清浄なる神殿の中を歩みたり。此處は何人たりとも、其身を潔め其衣を更へたるに非ざれば入る能はず、又た此等の神器を見物するを許さず。』と。救主は其弟子等と直ちに立ち止り、彼に答へて、『然らば此神殿中に在る汝は清浄なるか。』と曰ひ給ひければ、彼曰ふ、『我は潔し、それは我れ一方の階段より降りて、ダギデの池にて洗ひ、他の階段より昇り來れり、又た我れ清き白衣を着し、而して來り此等の神器を見たり。』救主答へて彼に曰ひ給ひけるは、『禍なる哉、汝等は瞽にして見へざるなり。汝は此流水にて洗ふも、犬と豚は日夜其うちに投入れらるなり。且つ汝は外面の皮膚を洗び拭ふ、而かも此は藝娼妓も亦た遊野郎のために洗ひ拭ひ膏つけて美化する所のもの、その内心は蛇蝎と諸悪とに滿つ。之に反し、汝が未だ浴せずと稱する我と我弟子は、……より來る永生の水にて沐浴したり。……汝等禍なる哉、……

彼得後傳福音書〔アクミーム斷片〕

一　……されどユダヤ人は一人も手を洗はざりき、ヘロデも亦た其判官等も爲さざりき。彼等手を洗ふを否みて、ピラトは立あがれり。斯くて國王ヘロデは主を連れ行くべきを命じて曰ふ、『予が汝等に爲すべしと命じたることは、何事にも彼になすべし。』

二　茲にピラト及び主の友なるヨセフ立ち、彼等が主を磔刑にせんとするを知り、ピラトの許に來りて之を葬らん爲め主の體を乞へり。ピラト乃ちヘロデへ遣してその體を乞ひければ、ヘロデ曰ふ、『ピラト兄、よし何人の之を乞ふものなしとするも、我等は彼を葬るべきなり。そは安息日近づけり。而して法に錄して曰く、「死に處せられたる者あるまゝにて日歿に及ぶべからず。」と。』

三　群衆は主を受取り、彼を後より押しながら走りつゝ曰ふ、『神の子は我等の手中に在り、我等彼を引づり行かん。』と。又た彼に紫の衣を着せ審判の座に坐せしめて曰ふ、『呼、イスラエル國

王陛下、裁判を正しく爲し給ふべし』と。斯くて其一人、荊棘の圜冠を持來りて主の首に冠らせたり。又た他のもの立ちて彼の眼に唾きし、また他のものは彼の頰を撲ち、或者は彼を笞うちて曰ふ、『我等この榮譽を以て神の子を崇敬むべし。』と。

四 彼等二人の罪人を連れ來り、主をその中間に磔にせり。されど彼少しも痛を覺へ給はざるもの〻如く、默して言ひ給はず。而して彼等十字架を起こし、之に『是イラスエルの王也。』と記せり。彼等また彼の衣類を其前に置きて鬮引にて分配せり。罪人の一人彼等を罵りて曰ふ、『我等は、自ら爲せる惡業のために此苦痛を受くれど、人々の救拯者となりし此人は汝等に如何なる惡事をなせしや。』と。彼等却つて怒り、彼が苦惱のうちに死するやう、其脚を折るべからずと命じぬ。

五 斯くて正午になりしに、ユダヤ全國暗黑になりければ、彼等は騷ぎあひ、また彼が未だ死せざるうちに日の入りたるにはあらざるかとて心痛せり。

そは彼等の法に死刑に處せられたる者あるまゝにて、日沒に及ぶべからずと錄されたればなり。彼等の一人、『酸に苦汁を混ぜたるを彼に飲ませよ。』と曰ひ、彼等その汁をつくりて彼に飲ましめぬ。斯くて彼等すべての爲すべきことを遂行し、己が頭上に罪業を重ねぬ。多くの者は既に夜なりと思ひ提燈を携へて往き來し、また失倒せり。主叫びて、『吁、我力、我力、汝既に我を去りぬ。』

と曰ひ、此言の後ち逝き給へり。此時エルサレムの神殿の御幕二つに裂けたり。

六 於是、彼等主の手より釘を抜き、彼を地におろせしが、全地震るひ、人々大に怖れたり。それより日また輝き、晝の第九時なりしことを知りぬ。ユダヤ人等は喜び、彼の屍（しかばね）を葬るべくヨセフに與へり。蓋し彼が如何なる善事を爲せしかは彼之を見たればなり。ヨセフは主の屍をとり、之を湯灌し、麻布にて包み、ヨセフの園と稱ふる自らの墓所へ持ち行けり。

七 是に於てユダヤ人、長老、及び祭司等は、自らになせる己が惡業を覺り、自ら搏ちて曰ふ、『我等は罪の爲めに呪（のろ）はるべきかな、神罰は近く、エルサレムは亡びん。』と。我等同伴者は憂慮措く能はず、心痛みて身を匿くせり。彼等我等を罪人と呼び、また神殿に放火せんと企つるものなりと云ひて、我等を尋ね居たり。我等は此等のことの爲めに食をもなさず、安息日まで夜晝悼み哭き居たり。

八 學者とパリサイ宗人と長老等は、民みな慟きて其胸をうち『此人死して此の如き大なる徴ありしとせば、如何に彼の義人なりしかを知るべし。』と曰ふと聞きて、互に集れり。長老等懼れ、ピラトの許に來り、請ふて曰ふ、『我等に若干の兵を與へよ、彼の弟子等來りて彼を盜み、また人民は彼が甦りたりと思ひて我等に害する如きことなきやう、三日間彼の墓を警護せん。』と。ピラ

ト乃ち百夫長ペトロニウスと其兵を遣はして墓を監視せしめたり。長老及び學者等も彼等と共に
墓に往き、百夫長及び兵卒等其他其處に在りし者等と共に、大なる石を轉ばし墓の入口に置き、且
つ七ヶ所に封印して、傍に天幕を張り、晝夜墓を警衛したり。

九 安息日の朝になりければ、エルサレム及び其附近より衆くのもの封印せる墓を見んとて來
れり。夜になり主の日近づきける時、兵卒は二人づゝにて番しつゝありしに、天に大なる聲あり、
仰ぎ見るに天開け、二人の人大なる輝を以て降り墓邊に來れり。入口に在りし石は自ら轉がりて
墓は半ば開き、二人の若者之に入れり。

一〇 兵卒等之を見て、百夫長及び長老等も亦た番しありしを以て彼等を喚び起せり。彼等其
見し處を告げつゝありしに、三人のもの墓より出で來るを見たり、その二人は一人を扶け、一の
十字架其の後に隨へり。また二人の首は天まで達せしが、扶導されたる者の首は天の上に及べり。
且つ天より聲ありて曰ふ、『汝眠れる者に敎へしや。』と。十字架より答ありて曰ふ、『然り。』

一一 是に於て彼等互に、行きてピラトに此等の事を告ぐべきやを議(はか)れり。彼等なほ其事を考
へ居りしに、天再たび開け、一人の人降り來りて墓に入れり。百夫長及び彼と偕にありし者此等
の事を見、彼等が守り居たりし墓を棄てゝ其夜ピラトの許に急ぎ行き、大に當惑しつゝその見し

とを悉く語り、且つ曰く、『誠に彼は神の子なりき。』と。ピラト答へて曰ひけるは、『予は此神子の血には關係なし、汝等が斯く判決したるなり。』と。於是、彼等みな彼に近より彼に懇願して、百夫長と兵卒等に其視しことを何も言ふべからずと命せんことを乞へり。彼等曰ふ、『我等神の前に大罪を犯すも、ユダヤ人民の手に捕へられて石にて打ち殺さるるよりも尚ほ可なり。』と。ピラト百夫長と兵卒に何事も口外すべからずと命令せり。

一二　主の弟子なるマグダレナのマリヤは、ユダヤ人等が激怒のうちに彼を葬りしにより彼等を恐れ、婦人が通常其愛する死者のために爲す事を主の墓場にて爲さゞりしが故に、主日の明け なんとする頃、其友を連れ主の葬りありし墓に來れり。彼等ユダヤ人に見られんことを恐れて曰ひけるは、『主の磔(はりつけ)せられ給ひし日には我等嘆き悲むこと能はざりしかど、而かも我等いま其墓に が内に入り彼の傍に坐して爲すべきことを爲し得べからしむるものありや。石は巨大にして、且つ我等を見る者あらんことを恐る。されど、よし我等之を爲し得ずとも、我等が主の紀念に携へ來りし物を入口に置き得ば、我等は家に歸るまで慟哭せん。』と。

一三　彼等往き、墓の開けるを見、近づきて其内を視たり。彼等視しに、或る若き人ありて墓

の眞中に坐し居たり、美貌にして甚だしく輝ける衣を纏へる人なりしが、此人彼等に曰ひけるは、
『汝等何の爲めに來れるや。磔せられし者か。汝等何人を尋ぬるや。彼は起きて去れり。されど
若し汝等信ぜずば、內を覗きて彼の置かれし所を看よ、彼は在らず。彼は起きて、その遣はされ
し元の所に往きたればなり。』婦人等其時恐れて逃げぬ。

一四　除酵節の最終日となり、祭の終れるを以て多くの人その鄉土に歸らんとて出て行けり。

されど主の十二弟子は嘆き且つ憂へ居りしが、遂に各自將に起らんとせし事の爲めに憂へつゝ其
家に去れり。されど我シモン・ペテロと弟アンデレは網をとり海へ往きぬ。アルパイの兒レギ亦
また我等と偕なりき。彼は主が……

聖言集

ロギア「オクシリンカス斷片」

一

・・・斯くて汝の兄弟の眼にある微塵をとり得るやう明かに視るべし。』

イエス曰ひ給ふ、『汝等世界より斷食するに非ざれば決して神の國を看ざるべく、また安息日に誠に安息せざれば父を看ざるべし。』

イエス曰ひ給ふ、『我れ世界の中央に立ち、肉體にて我れ凡ての人の醉えるを見たり、又た其うちに一人の渇けるを見ざりき。我魂は人の子等の爲めに愁ふ、そは彼等の心は瞽にして、その貧しきことを見ざればなり。』

イエス曰ひ給ふ、『人二人ある所には神必ず彼等と偕なるべく、唯だ一人なる處には、我曰ふ、

我其人と偕に在り。石を起し見よ、汝其處に我を看るべし、木を割りて見よ、我其處に在り。』

イエス曰ひ給ふ、『豫言者は其故郷にて尊ばれず、醫者は己を知れる者を治すること能はず。』

イエス曰ひ給ふ、『高き岡の頂に建てられて設立せる市は落つることなく又隱るることなし。』

イエス曰ひ給ふ、『汝一つの耳にて聞く……』

二

是れ、いま活き又た曾ては死に給ひしイエスがユダ・トマスに語り給ひし眞の言葉なり。主彼に曰ひ給ひけるは、『誰にても此等の言を聞かん者は決して死を味はざるべし。』と

イエス曰ひ給ふ、『父を索むる者をして彼を見出し得るまで索めしめよ。見出し得ば彼れ驚くべし、驚きて彼れ統治め、統治めて後ち息ふべし。』

イエス曰ひ給ふ、『其國に我等を誘致する者は誰ぞ、とや。（然り）御國は天に在り。されど地の上にあるもの、空の鳥、又た地の下と陰府にあるもの、又た海の魚、此等のもの皆な汝等を御國へ誘致す。天國は又た汝等の中にあり、自を知る者は之を見るべし。故に汝等誠に自を知らば、汝等は全能なる父の息子また息女たるべく、汝等自ら神の市に在るを知らん、汝等はその市なり。』

イエス曰ひ給ふ、『人榮光の處に就て空談しつゝ大膽に季節のことを尋ぬるに躊躇せざるべし、されど汝等は沈默を保つべし、そは多くの先なる者は後になり、後なる者は先になり、之を見出す者尠し。』

イエス曰ひ給ふ、『汝の面前にあらざるもの、また汝に匿されたるもの、みな汝に啓示さるべし、そは隱れたるものにして現はれざるなく、埋められたるものにして擧げられざるなし。』

弟子たち彼に問ふて曰ふ、『我等如何に斷食するや、また如何に禱るべきや、また此の如き務に就て我等如何に守るべきや、また如何に施捨すべきや。』イエス曰ひ給はく、『汝等その應報を失はざるやう心せよ。眞理に屬する事のほか何事をも爲す勿れ、そは汝等此等のことを爲さば、隱れたる奥義を知るべし。我れ汝等に曰はん幸福なるかな、……

アグラファ

〔不文訓〕

一　福なり。』〔アブガルス書第二章〕

二　る勿れ。』彼また我等に曰ひ給ふ、『汝等多くの苦惱を經て神の國に入らざるべからず。』〔約翰行傳〕

三　なる物を右にするに非ざれば、汝等我國に入ることあらざるべし。』〔腓立比行傳〕

四　に榮冠を受くる者なれ。』〔同上〕

五　我また彼の曰ひ給へるを聞けり、『我と偕なる者は我を領會せざりき。』

六　『汝は幸福なる哉、よし汝われを見ざりしも我を信ず。そは我に就て記して曰ふ、「我を見

る者は我を信ぜず、我を見ざる者我を信ぜん。」と。』〔アッダイ敎義〕

七　我等が言語にて民に敎ゆる所のもの、又た自ら之を人の前に實踐すべきことを、主我等に敎へ給へり。〔同上〕

八　我に語り給ひしキリストの言、我れ之を空ふせざるべし、曰く、『何人よりも何物をも受くる勿れ、又た此世に何物をも所有する勿れ。』と。〔同上〕

九　主また福音書に曰ひ給ひし如く、『人若し我名の爲めに凡ての物を棄つる時は、次の世に於て限なき生を繼承すべし。』〔アガサンゲルス〕

一〇　記して曰ふ、『大なる物を求めよ、さらば小なる物汝に加へらるべし。天に屬する物を求めよ、されば地に屬する物も加へらるべし。』〔アムブローズ第一書〕

一一　我等に語り給ひしキリストの言に曰ふ、『何人よりも何物をも受くる勿れ、又た此世に何物をも有つなかれ。』〔古代敘利亞文書〕

一二　彼れ福音書に曰へるあり、『汝等老練なる兩替屋の如くなるべし。』と。〔アペレス〕

一三　弟子たち主に向ひ、我等の信仰を增し給へ、とのみ何故に願ひたるかを尋ねたるに、主彼等に曰ひ給はく、『汝等シモンの信仰あれば山と雖も亦た動くべし。』又た曰ひ給はく、『汝等

如く疑ひて世の中に沈むべからず、彼れ疑ひたる時に沈まんとし居たり。』〔アフラアテス〕

一四 錄して曰く……我等の主曰ひ給ひけるは、『禱りて倦むことなかれ。』〔同上〕

一五 錄して曰く、『第一は祈禱する者なり、祈禱を捧ぐる者なり、其捧ぐるものに斑點なきかを檢して後ち捧げよ、然らざれば其捧物は地上に殘りて天に上らざるべし。』〔同上〕

一六 我等の救主彼等に曰ひ給はく、『汝等はカインの子にしてアブラハムの子にあらず。』〔同上〕

一七 そは錄して曰ふ、『善きものの必ず來るべく、之を來らす者は幸福なるかな。惡きものも必ず來る、されど之を持ち來たす者は禍なるかな。』〔同上〕

一八 彼れ我等に豫告せり、卽ち敎へて曰ひ給へり、『弱者は强者によりて救はるべし。』と。〔使徒教會律〕

一九 記して曰く、『近きものも遠きものも主は己に屬する者を知り給ふ。』〔使徒法憲〕

二〇 主エルサレムに近づきし時曰ひ給ひけるは、『ソドムは汝によりて義とせられたり。』〔同上〕

二一 『與ふる者は受くる者よりも福なり。』と主の曰ひ給しが如く、また曰ひ給ひけるは、

自ら有つ物ありながら偽りて他より受くる者、又た自ら生活し得るに他より施を受くる者は禍なる哉。此等のものは兩ながら審判の日に主なる神に辯明せざるべからず。』〔同上〕

二二　主彼等に命じ、全世界に福音を宣傳し各國民を弟子となし、洗禮を施して彼の死に入るべしと曰ひ給へり。〔同上〕

二三　主が辛辣に且つ峻嚴に、僞基督また僞教師ありと言ひ給ひしは彼等のことなり、即ち、『彼等は恩惠（みめぐみ）の靈を褻瀆（けがし）し、而かも彼より受けたる賜物あるにも關（かゝ）はらず恩惠後に斯くなせり。彼等は此世に在りても又た來らんとする世にも赦免せらるべきにあらず。』〔同上〕

二四　『斯くて惡き者は永久の刑罰に行くべし、されど正き者は永遠の生に行き、目未だ見ず、耳未だ聞かず、又た人の心に想ひたることなき物を繼承すべし、是れ神が己を愛するものゝ爲めに備へ給ひしものにして、彼は神の國に入りて樂まん。』〔同上〕

二五　『汝等は我が來るまで、此パンを食ひ此杯を飲む毎に我死を證するものなり。』〔同上〕

二六　そはロゴス復た我等に曰ひ給ふ、『人もし接吻して愉快なりしが故に之を再びせんか、故に接吻の挨拶はわけて心すべきなり。若し少にても汚れたる心を以てせば、我等は永生を失ふなり。』〔アテナゴラス「レガチオ」〕

二十七　主の來臨に關して豫告せりと言はるユダヤの豫言者に就て我等如何に考ふべきやと、使徒たちが尋ねたるに答へて、主曰ひ給ひけるは、『汝等は、己よりも前に在りて死者に就て語れる、活ける人を論ぜず。』〔アウグスチヌス「異説駁論」〕

二八　主曰ひ給ひけるは、『見よ、我れ最後のものを最初のものゝ如く取るなり。』〔バルナバ書〕

二九　そは彼れ曰ひ給ふ、『我を見、また我國を取らんと思ふ者は、苦惱と受難によりて我を受けざるべからず。』〔同上〕

三〇　其言によれば、『試練を受けたる者おの〳〵嘉賞せらるべきに非ず。』〔カシアヌス〕

三一　又た錄して曰ふ、『汝の施物が掌中にて汗するまで、之を與へんとする人の正しきものなるやを見よ。』〔カシオドラス〕

三二　此故に聖書信者に宣す、『主の聖者は神の榮光と其權能とを繼承すべし。……目未だ見ず耳未だ聞かず、人の心また未だ想はざる榮光にして、彼等は永遠に主の御國に歡樂すべし。』〔歷山クレメント氏〕

三三　聖書に曰ふ、『彼等は機絲（はたいと）を取りて何物をも織らざる者なり。』〔同上〕

三四　彼曰ひ給ふ、『汝は汝の兄弟を見、汝は汝の神を見る。』〔同上及びテルツリアヌス〕

三五　『そは彼曰ひ給ふ、大なる物を索めよ、されば小なる物も汝等に加へらるべし。』〔歴山クレメントス其他〕

三六　故に聖書は我等を辯證家たらしめんとし、我等を戒めて曰ふ、『汝等老練なる兩替屋の如くなるべし。』〔同上〕

三七　主また曰ひ給ふ、『既婚者は妻を出すべからず、未婚者は娶るべからず、まだ貞潔の故に結婚せじと誓ひたる者は終まで獨身たるべし。』〔歴山クレメントス〕

三八　主或福音書に、『我奥義は我と我家の子等の爲めなり。』と云ひ給ひしは客なるが故にあらず。〔歴山クレメントス〕

三九　故に救主曰ひ給ふ、『汝と汝の靈魂とを救ふべし。』〔同上〕

四〇　そは主曰ひ給ふ、『我父の御旨を爲す者は我兄弟また共嗣子なり、故に何人をも汝の父と呼ぶ勿れ、地にある者は主人なり、天上天下全家の父は天に在り。』〔同上〕

四一　彼斯く曰ひ給ふ、『汝等憐まれん爲めに憐あるべし、赦されん爲めに他を赦すべし、汝が爲す如く汝にも爲さるべく、汝が他を判く如く汝も判かれ、汝が親切なる如くに汝も親切にせられ、汝が度る尺度と同じ尺度を以て汝等も度らるべし。』〔羅馬クレメンス書〕

四二 捨てゝ曰はん、『我を離れ去れ、汝惡業者よ、我れ汝が何處よりせるを知らざるなり。』

四三 主福音に曰ひ給ふ。『汝群狼中の羊の如くなるべし。』 ペテロ答へて曰ひ給ひけるは、『既に死したる後に羊は狼を恐る、勿れ、されど汝等が死したる後なほ靈魂と軀體とを地獄に投入る者を恐るべし。』 〔同上〕

四四 主福音に曰ひ給ふ、『汝小なるものを保たざれば誰か汝に大なるものを與へんや、我汝等に曰はん、小事に忠なる者は大事にも亦た忠なりと。』 〔同上〕

四五 眞の豫言者我等に曰ひ給へり、『僞りの豫言者先づ僞る者より來る、次に之と等しく、聖所の移されたる後ち、眞の福音密かに傳へらるべし、是れ異端を正さん爲めなり。終りに近づきて反基督先づ來り、其よりイエスが實に基督たるを示さるべく、而して後ち永遠の光輝きて暗黒のものみな失踪すべし。』 〔クレメンス訓話〕

四六 眞の豫言者自ら曰ひ給へり、『我は生の門なり、我より入る者は生に入る。』 〔同上〕

四七　彼また曰ひ給はく、『我はモーセが豫言せる者なり、彼曰ふ、「主なる我等の神、汝等の兄弟のうちより汝等のために我が如き一豫言者を起し給はん。萬事彼に聞くべし。其豫言者に聞かざる者は死すべし」と。』〔同上〕

四八　聖書の曰ふ如く、神が誘惑し給ふなりと思ふ者に彼曰ひ給ふ。『誘惑する者は惡き者なり。』〔同上〕

四九　『多體一心なるべし、各人自らに爲されんと欲する善き事を其隣人に對して爲さんと心がくべし。』〔同上〕

五〇　神天地と及び其内にある萬物を造り給へり、即ち眞の豫言者の我等に語れるが如し。〔同上〕

五一　そは豫言者我等に誓つて曰ひ給へり、『誠に我汝等に告ぐ、「汝等活ける水により て生れ更り、父と子と聖靈の名に入るに非ざれば、天國に入る可からず。」』〔同上〕

五二　眞の豫言者曰ひ給ひぬ、『善きもの必ず來らざるべからず、而して其因て來る彼は頌むべきかな、』尚ほ又た、『惡も亦た來らざるべからず、されど其依て來るべき彼は禍なるかな。』〔同上〕

五三　『假令人凡て正しき事をなすも、一たび偶像を拜む時は、罰せられざるべからず。』と豫言者曰ひ給ふ。〔同上〕

五四　我等の主なる救主の曰ひ給ひし如く、『分派及び異端は必ず起るべし。』〔同上〕

五五　又た他の所に曰ひ給へり、『惡き種を播ける者は惡魔なり。』又た曰ひ給ふ、『惡魔を口實を得せしむること勿れ。』〔同上〕

五六　『我十二の僕（しもべ）また我と偕（とも）に在り。』〔アスキュー原本〕

五七　『我一千年間光の代（よ）に從つて治めん。』〔同上〕

五八　善き主曰ひ給はく、『汝の忿（いかり）をして日の入るまでに至らしむる勿れ。』

五九　されど此事に就てまた曰へるあり、『誰に與ふべきかを知り得るまで汝の施物が手のうちにて汗になるも放すなかれ。』〔使徒訓〕

六〇　故に我また福音中に曰へり、『汝の敵を愛せよ、不信者の滅亡のために歎く者は祝福さるべきかな。』〔ディダスカリヤ〕

六一　彼また我等に現れ、我等を教へて曰ひ給ひけるは、『汝等決して此等の日に我爲めに斷食する勿れ、我また汝等の魂を憂しむるを要せず。』〔叙利亞語ディダスカリヤ〕

六二　我等の主曰ひ給ひけるは、『彼等の赦されんことを願ふ。』又た彼等に就て曰ひ給はく、『父よ、彼等は其爲せしこと又其言ふ所を知らざるなり、若し爲し得れば彼等を赦し給へ。』〔同上〕

六三　彼曰ひ給ひけるは、『最終日は夜間盜人の來る如く來らん。』〔ディディムス〕

六四　彼曰ひ給ひけるは、『我れ地の造られざりし先きに汝等を選べり。』〔エフライム・シルス〕

六五　キリスト凡ての苦難に其羊を衞り給ひし如く、此惱みの寂寥に於て彼等を慰めて曰ひ給ふ、『我れ孤獨なる者と偕に在り。』と、これ心細き者が悲まざらん爲めなり。又た『二人ある處には我も亦た彼等と偕にして又た我等と偕に在り。』と、そは彼は我等の歡喜恩惠我等を覆へばなり。〔同上〕

六六　『されど病苦のある處へ醫者急ぐ。』〔同上〕

六七　故に彼れ仲裁者を神の子等と稱し、又た曰ひ給ひけるは、『神の靈に於て歩む者は神の子等なり。』〔同上〕

六八　彼が煩悶せりとのことは其言と一致するが如し、曰く、『我れ何時まで汝等と偕に在りて汝等と語らんや。』又曰ふ、『われ現代に愛想盡きたり、彼等は我を試む、十度、否二十度、十度を十度。』〔同上〕

六九　そは彼曰ひ給ひけるは、『彼その國の家を清め阻礙物をはらひ給ふ。』〔同上〕

七〇　『飢へ渴く者は幸福なるかな。そは彼等滿腹すべければなり。滿服せる者は禍なるかな、

そは彼等は飢渇すべければなり。悲み嘆く者は幸福なるかな、そは彼等笑ふ者は禍なるかな、彼は斷へず悲み嘆くべければなり。慈悲なる者は幸福なるかな、そは彼等慈悲にあづかるべければなり。無慈悲なる者は禍なるかな、そは彼等は慈悲にあづかるべければなり。』〔同上〕

七一　又、『神は倨傲なるを却け、謙遜なる者に恩惠を加へ給ふ。』〔同上〕

七二　『豫言者を通じて語る者は我なり。』〔エピファニウス〕

七三　彼曰ひ給ひけるは、『父我を生み給ひ、我れ父より來りて此處に在り。』〔同上〕

七四　又曰ひ給ひけるは、『我れ戸を敲く、我ために戸を開く者あらば、我と我父來りて彼と共に棲まん。』〔同上〕

七五　彼曰ひ給ひけるは、『我を知らん者は父を知り、我を見し者は父を見しなり。』〔同上〕

七六　勞働は其雇傭に値す、勞働する者は其食に不足することなし。』〔同上〕

七七　『惡鬼を敬せよ、これ其援助を得んとに非ず、彼等の害を受けざらん爲めなり。』〔ユーチミウス・ザガベヌス〕

七八　『死に到る困惑あり、生に到る困惑あり。』〔ヒエロニムス〕

七九　活けるイエス其弟子に答へて曰ひ給はく、『幸福なるかな、世界に磔せられ、而かも世界が彼を磔せしにあらざる者。』〔イエウー第一書〕

八〇　そは主ペテロと他の使徒の所に來りて、彼等に曰ひ給ひけるは、『我を捕へ、我に觸れ、我が體形なき靈物ならざるを知れ。』と。斯くて彼等直ちに彼に觸れ、其肉と靈とに納得して信ぜり。〔イグナチウス〕

八一　『我屢々此等の言に就て聞かんことを欲し、而かも我に語る者なかりき。』と、彼の曰ひ給ふを、彼等は此「者」とは眞神の義なりとせり。〔同上〕

八二　神の純乳に拙く石膏を混じたり。〔同上〕

八三　主の弟子ヨハネを知れる長老たちの語る處によれば、彼等は、主が當時如何に教へ給ひしか彼より聞けり。主曰ひ給ひけるは、『葡萄の蔓延びておの〳〵一萬の莖を出し、各莖一萬の枝を出し各枝一萬の芽を出し、各芽一萬の房を垂れ、各房一萬粒の實を結び、各粒之を壓せば二十五升の酒を生ず。聖徒の一人一つの房を握る時は、他の枝叫びて曰ふ、「此方が良き房なり、此方を採り、以て主を祝せよ。」と。麥粒も亦た一萬の穗を出し、各粒純精なる麥粉十斤を生ず。其他各種の果實、種實、蔬菜みな然り。凡ての動物も亦た地より其食を得て食ひ、溫順に人に歸服して互

に爭はず平和に棲息す。』以上のことは、パピアスが其書五巻中の第四巻に證言する處なり。彼はヨハネに聽ける者にして又たポリカルプの友にてあり、昔の高德の人なり。彼尙ほ附して曰ふ、『此等のことは信ずる者には荒唐なるとに非ず』と。而して賣師奴ユダ之を疑ひ、如何にして主は此の如き成育をなさしめ給ふやと尋ねたるに、主は、『此の處に來らん者は之を觀るべし。』と曰ひ給へりとぞ。〔同上〕

八四　彼の言に曰ふ、『各人の分は其人の値に從ひて父の定むる處なり。』〔同上〕

八五　彼また曰ひ給はく、『人の初よりも先きに在りし者は頌讃すべきかな。』〔同上〕

八六　彼斯く曰ひ給へり、『われ正しき者を召さんとて來らず、罪ある者を呼びて悔改めさせんとてなり。そは天の父は罪人を罰せんよりも寧ろ其悔改を欲し給ふ。』〔ジュスチヌス〕

八七　『新しき律法は汝等が恒に聖日化せんことを要求す。』〔同上〕

八八　そは彼曰ひ給ひけるは、『多くの者外面羊の皮を被り我名に於て來るも、內心は暴き豺狼なり。分派異端あらん。』〔同上〕

八九　我れ神の言に曰へるを知る、『萬物の造主にして全能なる神の此大なる智慧は汝等より祕せらるべし。』〔同上〕

九〇　我等の主イエス・キリスト曰ひ給ひけるは、『(其時)我汝等を如何なる狀態に於て見るとも、其によりて汝等を審判すべし。』〔同上〕

九一　『我等の住所は天に在り。』と曰ひ給ひし如く、肉體の天に昇ることが不可能ならざるを彼等に示さんとて、彼等が眺め居る所にて、彼は其肉體のまゝにて天に上げられたり。〔同上〕

九二　ペテロ曰ふ、『主は使徒たちに向ひて曰ひ給ひけるは、「誰にてもイスラエルの者悔改めて我名により神を信ぜば其罪赦さるべし。故に十二年の後ち全世界に行きて、我等未だ之を聞かずと曰ふもの一人もなきやうにせよ。」』〔同上〕

九三　ペテロの「說教集」に、主その復活の後ち弟子たちに曰ひ給はく、『我れ汝等が我にふさはしき者又た忠實なる使者と思ひて、汝等十二の弟子を選拔して世界に遣せしは地に住める者に福音を宣傳し、人々我を信じて唯だ一とりのほか神なきことを知り、また之を聞きて信ずる者は救はるべきことを彼等に示さん爲めなり。されど彼等のうち信ぜざる者も、彼等自ら慥かに之を聞きたる事を證言し、我等之を聞かずと言ひ得る口實なからしめん爲なり。』〔同上〕

九四　最初より凡て理會ある魂に告げられたり、曰く、『汝等よく神を知らず理解なく如何なる事を爲さんとも、彼を知りて悔改むるにいたらば、凡ての罪は赦さるべし。』〔同上〕

に、呼氣を吹入れんに、神の允許により、これ一羽の鳥とならん。我れ又た盲者を治し、癩病を癒し、又た神の允許によりて死せる者を復活せしめ、又た我れ汝等が何を食ふべきか、家に何を藏(たく)ふべきかを告げん。若し汝等信ぜば、汝等に示さるべき徴兆(しるし)實に此に在り。』」〔コーラン〕

九六　使徒たちの曰へるを記憶せよ、曰く、『マリヤの子、イエスよ、汝の主は我等の爲めに天より食卓の準備せるを降し得るや。』彼曰ふ、『汝等信者ならば神を畏れよ。』彼等曰ふ、我等其を食し心を確められて之が證人たらんことを願ふ。』マリヤの子イエス曰ふ、『我等の主なる神よ、天より食卓を我等に下し給ふて、我等の第一の者にも最後の者にも循環卓となし、又た汝よりの徴兆とし、且つ我等を養ひ給へ、そは汝は最善の養育者なればなり。』斯くて神曰ひ給はく、『誠に我れ汝等に之を下さん、されど此事の後ち汝等のうち尚ほ信ぜざる者あらば、我必ず他のものに施すごとなき刑罰を以て其者に臨まん。』」〔同上〕

九七　我れ我前にありし律法を證し、又た前に汝等に與へられたる禁戒の一部を解かんとて來れり。我また汝等の主よりの徴兆を以て來る。されば、汝等神を畏れ、我に服從せよ。我主は眞の神にして又た汝等の主なり。故に彼を拜せよ。是れ正道なり。』〔同上〕

九八　マリヤの子イエス、其使徒等に曰ひけるは、『汝等信ずる者よ、神の手傳たれ。誰か神を助けんとて來る者ぞ。』使徒たち曰ふ、『我等神の手傳とならん。』斯くてイスラエルの兒等の一部は信じ、一部は信ぜざりき。されど信ぜし者は其敵より利あらしめ。彼等は之を征服したり。〔同上〕■

九九　イエス明證を以て來りし時曰ひけるは、『今我れ智慧を以て汝等に來れり。汝等互に爭論せることの一部は、我れ之に解決を與へん。故に汝等神を畏れ又た我に從へ。誠に神は我主にして又た汝等の主なり、故に汝等彼を拜せよ。是れ正道なり。』〔同上〕

一〇〇　我等が平安あらんことを願ふイエス曰へり、『世界は汝等が渡らざるべからざる橋にすぎず、此處に汝等の住家を建つべからず。』〔亞剌比亞一寺院の石門〕

一〇一　主ヨハネに曰ひ給ひけるは、『いざ來りて我に洗せよ。』彼曰ひけるは、我れ竊盜を働くことは爲し能はず。〔セヴュルス祈禱書〕

一〇二　主の言を聞け、『汝等信仰と望に注意せよ、されば神を愛することゝ親切の愛は此より來る、而かもこれ永生に到るの途なり。』〔マカリウス〕

一〇三　『汝等戰に強くなりて、かの老蛇と鬪へ、されば汝等永遠の國を得べし。』と主曰ひ給ふ。〔古代英語說教書〕

一〇四　『貧民を養ひ得んが爲めにも亦た斷食する者は幸福なり。』〔オリゲヌス〕

一〇五　救主自ら曰ひ給ひけるは、『我に近きものは火（父？）に近し、我れより遠き者は御國に遠し。』〔同上〕

一〇六　イエス曰ひ給へり、『我れ弱き者のために弱く、飢へたる者のために飢へ、渇ける者のために渇けり。』〔同上〕

一〇七　保羅行傳に主の言として錄されたるものあり、『我れ再たび磔せられんとす。』〔同上〕

一〇八　イエス曰ひ給ふ、『汝等自ら信賴すべき兩替屋たるを證せよ。』〔同上〕

一〇九　『喜び悦べ而して汝等の歡樂を增せ、そは時は滿ち、我れ世の初より準備されたる衣を着けん時來れり……喜び悦べ、汝等は地上にて萬の人よりも幸福なり、そは全世界を救ふ者は汝等なればなり。』〔「ピスチス・ソフィア」〕

一一〇　故に我曾て汝等に曰へり、『汝等は我國にて我右又我左に坐して、我と偕に治めん。』〔同上〕

一一一　故に我曾て汝等に曰へり『我があらん處には我十二僕も亦た我と偕にあるべし。』〔同上〕

一一二　『かの神祕は我にして、我はかの神祕なり、我れ彼等にして彼等は我なり。』〔同上〕

一一三　我れ此故に曾て汝等に曰へり、『全世界と其うちの全（すべ）てのものを斥けよ。これ汝等自ら

のために、汝が既に有するものに尚ほ他の物を加へざらんとてなり。』〔同上〕

一一四　曾て我れ汝等に曰ふ、『此等の奥義は彼等に其初めより犯せる罪を赦すのみならず、我が既に汝等に告げし其時より之を汝等に負はしめず。』〔同上〕

一一五　『悪に報ゆるに悪、罵詈に報ゆるに罵詈、打撃に報ゆるに打撃、呪詛に報ゆるに呪詛を以てする勿れ。』〔ポリカルプ〕

一一六　主の弟子ヨハネが民に與へし書に、主自ら我等を訓戒し給ふ、『汝等水の面又は鏡に自らを見る如く、汝等のうちに我の寫れるを見る。』〔偽シプリヤン「ヅオプス・モンチプス」〕

一一七　主戒めて曰ひ給ふ、『汝のうちにある聖靈をして愁へしむる勿れ、又た汝のうちにある光明を滅す勿れ。』〔同上「アレアトリプス」〕

一一八　『神によるにあらず、自らの僭越なる考によりて事を爲す者は禍なるかな。』〔同上シングラリターテクレリコーラム〕

一一九　『人若し働かざれば之に食せしむる勿れ、そは汝は額に汗して食すべければなり。』〔偽イグナチウス「マグネシア書」〕

一二〇　善に混するに惡を以てする者は善人と稱すべからず。』〔同上「ツラリア書」〕

一二一　『友よ、我れ汝に不當なることをせず。汝はその生涯に汝の分を得たり。今汝に歸する

ものを取りて去れ。』〔セルギウス引用〕

一一二　彼曰ひ給ふ、『汝等誘惑に陷らざるやう覺醒して禱れ……是と等しく、何人も努力せずして天國に入るべからずとの言あり。』〔テルツリアヌス〕

一一三　聖書に言へるあり、『長き繩の如くに其罪を繫ぐ者は禍なるかな。』〔同上〕

一一四　福音の語に曰ふ、『そは此世の姿は移り行くべければなり。』〔セオドルス・バルサモ〕

一一五　主イエス・キリスト、（ペテロに）曰ひ給ひけるは、『誠に汝の後の眼、永久に此世の光に閉ちられざるべし。』〔ギタ・シユヌーチ〕

一一六　我（ラビ・エリエゼル）一日ナザレ人イエスの弟子の一人なるケファ・セカンヤのヤコブに遇ひしに、彼曰く、『汝の律法に記して、娼婦の賃金を神の家に持ち來る勿れとあり、されど、其金を以て大祭司の厠を作りては如何』と。我れ此問に對して如何に答ふべきやを知らざりしが、彼曰ひけるは、『ナザレのイエスは我等に教へて曰へり、「彼れ遊女の償金より之を積みたれば是は復た歸りて遊女の償金となるべし、要するに不潔なる處より來れるものは復た不潔なる處へ行くべし。」と。』我れ此解釋を喜びしが、『「汝の途を彼より遠く離れしめよ」との聖書の言に背き、異敎者に近づきたりとて、我は異端者として訟られたり。』〔タルムード〕

ヤコブ傳福音書前篇

神の聖母マリヤの誕生

一　イスラエル十二支族の記録にヨアキムなる者あり、彼れ甚だ富めるものなりしが、二倍の供物を捧げて曰ふ、『我が餘れるものは凡ての人々に與へらるべく、又た我罪の赦しのために主に獻ぜられざるべからず』と。蓋し主の大なる日近づき、イスラエルの子等皆な供物を捧げ居たりしなり。此時彼に對しルーベン立ちて曰ふ、汝はイスラエルに子孫を殘さゝる故に供物を獻ずるは宜しからず』と。ヨアキムいたく憂へ、十二支族の記錄吏の許に行きて曰ひけるは、『我れイスラエルの十二支族の記錄を見、イスラエルに子孫を殘さゝる者はただ我のみなるやを知らん。』と。斯くして彼れ正義しき者は皆イスラエルに子孫を殘したるを見、また先祖アブラハムも其晩年に於て神より一子イサクを授かりたることを想ひ出せり。ヨアキム甚しく憂へ、其妻の處に來らずし

て荒野に退き、其處に天幕を張り、四十日四十夜斷食をなし、自ら曰へるやう、『主たる我神われを憐み給ふまでは我れは飲食に行かざるべし、祈禱こそ我糧食我飲料たるべし。』と。

二 其妻アンナ二重に悲み二重に歎きて曰ふ、『我れ我が寡婦となりしためのに哀まざるべからずと。』其時主の大なる日近づきければ、其婢ユヂト曰ふ『汝いつまで汝の魂を辱しむるや。看よ、主の大なる日は近つけり、汝悲み居るは宜しからず、汝この頭飾帶をとれ、此は其を作りし女が我に與へたるものなれど、我は汝の婢にて此の如き見事なる物を着くべき身分にあらず。』と。アンナ曰ひけるは、『我を去れ、我事未だ終らず、主我をいたく辱め給へり、我は或る惡き者が之を汝に與へ、而して汝いま來りて我をして汝の罪を分かたしめんとするに非ざるなきやを恐る。』 ユヂト曰ひけるは、『主汝の腹を閉ざしてイスラエルに汝の裔を作らざらしむるを見て、我れ如何なればとて汝を呪はんや』と。アンナ尙は憂へ居たりしが、遂に悲哀の衣を脫ぎ、其頭を清め、婚禮の衣裳を着けて、第九時頃庭園に逍遙せんとて行けり。彼れ桂の木を見て其下に坐し主に祈りて曰ひけるは、『我列祖たちの神よ、汝がサラーの腹を祝福して一子イサクを授け給ひし如く、また我を祝して我禱を聽き玉へ。』と。

三 彼れ仰ぎて樹上に燕の巢あるを見て更に哀みて曰ひけるは、

『嗚哀(あゝかな)し。我を生める者は誰ぞ、我を妊みし胎は何れぞ。
我はイスラエルの子等の前に呪はれて生れ、辱を受け、
彼等は我を嘲りて我を神の宮より逐出せり。
『嗚哀し。我れ我身を何に喩(たと)へんや。
我は空の鳥にだも若(し)かず。
空の鳥すら汝の前に兒を生むなり、主(しゅ)よ。
『嗚哀し。我れ我身を何に喩へんや。
我は地の獣にだも若かず。
地の獣すら汝の前に兒を生むなり、主よ。
『嗚哀し。我れ我身を何に喩へんや。
我は此等の水にだも若かず。
此等の水すら汝の前に産み出すなり、主よ。
『嗚哀し。我れ我身を何に喩へんや。
我はこの土にだも若かず。

四　さる程に、看よ、主の使その傍に立ちて曰ふ、『アンナよ、アンナよ、主汝の禱を聽き給へり、汝妊みて兒を産まん、且つ汝の兒は世界中に評判と成らん。』と。アンナ曰ひけるは、『われ若し男にても女にても産まば、われ其兒を主なる我神に捧げ、彼その生の終りまで神事に奉仕せん。』と。斯くて又た二人の天使來りて彼女に曰ひけるは、『看よ、汝の夫ヨアキム其群蓄を連れ來る。』そは主の使彼れに行きて曰けるは、『ヨアキム、ヨアキム、主たる神汝の禱を聽き給へり、此處より行け、そは、看よ、汝の妻アンナ妊娠せん。』と。斯くてヨハキム行きて其牧羊者を呼びて曰ふ、『斑點なく瑕瑾なき牝羊十匹を連れ來れ、これ主なる我神のものたるべし、又た柔和なる犢十二匹を連れ來れ、これ祭司及び長老たちのものたるべし、一般人民のために山羊百匹を連れ來れ。』と。而して看よ、アンナ門に立ちヨアキムの來るを見、走り行きて其首に取縋がりて曰ふ、『今ま我れ主なる神いたく我を福し給へるを知る、そは看よ、寡婦もはや寡婦にあらず、石婦れる我れ妊まん。』と。斯くしてヨアキム第一日を其家に息へり。

五　翌日彼その供物を持ち來りて自ら曰ひけるは、若し主なる神我に福すべくば、祭司の額の審判牌（ペタロン）之を我に示すべし。』と。斯くてヨアキムその供物を持來りて、祭司が主の祭壇に進む時に

其審判牌を注目し、己れに罪なきことを見たり、斯くてヨアキム曰ひけるは、『我れ今まで主我を福し凡て我罪を赦し給へるを知る。』と。斯くて彼れ義とせられて主の聖殿より下りて其家に去れり。斯くて彼女の月満ちて九ケ月目に産せり。彼れ産婆に曰ひけるは、『我が産めるは何ぞ。』と。産婆曰ひけるは、『女なり。』と。アンナ曰ひけるは、『けふ我魂大きくなりぬ。』と。斯くて彼れ臥したり。アンナ、其日満ちければ、潔めを受け、兒に乳を與へ、其兒の名をマリヤと名けたり。

六 その兒日々強くなり、六ケ月となれる時其母彼れを地に下ろして立ち得るやを見しに、彼れ七歩あゆみて母の懐に來れり。母彼れを急ぎ抱きて曰ふ、『われ汝を主の聖殿に連れ行くまで汝は決して此地を歩むべからず。』と。斯くて神龕を其寢室に造り、不淨なる者の來るなからしめたり。又たヘブルの潔き娘等を招き、彼等は嬰兒にかしづけり。斯くて嬰兒滿一才となれる時、ヨアキム大なる祝宴を張り、祭司、學者、長老、またイスラエルの凡ての人々を招きたり。ヨアキム嬰兒を祭司等の許に連れ來りければ、彼等嬰兒を祝して曰ふ、『我等が 列祖たちの神よ此兒を祝福し萬代に傳はるべき不朽の名を之に授け給へ。』と。庶民もまた曰ふ、『斯くあれかし、斯くあれかし、アメーン。』ヨアキム又た兒を祭司長に連れ 來りければ、彼等も祝して曰ふ、『いと高き神よ、此嬰兒を覽そなはし、永遠の祝福もて之を祝し給へ。』と。斯くて其母彼れを抱き、其寢室の神龕に連れ行きて

乳を與へぬ。アンナ斯くて主なる神に唱ひて曰ふ、『我れ我が主なる神に歌を唱はん、そは神我を覽そなはし、我敵の謗を除き給へり、主は其正義の實を我に授け給へり、これ他に類なく、其賜や豐なり。誰かルビムの子等に告げてアンナは兒に乳を與ふると言はん、聞け、汝等イスラエルの十二支族よ聞け、アンナは今や其兒に乳を與ふるなり。』と。斯くて彼れ嬰兒を神龕の寢室に寐かせ、出でて彼等を饗せり。斯くて晩餐了りし時、彼等イスラエルの神を頌めつゝ喜びて出行けり。

七　嬰兒三歳の歳月加はり、二歳となりければ、ヨアキム曰ひけるは、『我等のなせし誓を守り、嬰兒を主の聖殿に連れ行かん、主我等を離れ又た我等の供物を受けざるに至らんことを恐る。』と。アンナ曰ひけるは、『嬰兒が父母を慕ひ尋ぬることなきやう三歳になるまで待たん。』ヨアキム曰ふ、『然らば待たん。』と。嬰兒三歳になりし時ヨアキム曰ふ、『ヘブルの潔き娘等を招き、各燭を取り、其燃ゆるを持ちて立ち、嬰兒が後を向き主の聖殿より其心の奪はれざる樣なさしめん。』と。彼等此の如くして神殿に到れり。祭司嬰兒を受け、之に接吻し、之を祝福して曰ふ、『主千萬代に汝の名を大ならしめたり、主、終の日に於てイスラエルの兒等の救拯が汝にあるを示すべし。』と。斯くて彼嬰兒を祭壇の第三段に置き、主なる神之に恩惠を下し給ひぬ。嬰兒其足にて踊り、イスラエルの全家かれを愛せり。

八 而して嬰兒は後ろを向かざりし故、其兩親は驚き主なる神を頌めつゝ去りぬ。一
の聖殿に在りて恰も其處に住む鳩の如く、また天使の手より食物を受け居たり。斯くて
四歳になりければ、祭司等會議を開きて曰ひけるは、『看よマリヤ主の聖殿にて十四歳に達したり。
彼れ主の聖所を穢さゝらんために我等如何に爲すべきか。』 尚ほ彼等祭司長に曰ふ、『汝は主の祭
壇の側に立つものなり、聖所内に行き彼女に就て禱れ、而して何にても主の汝に示し給ふことは我
等之をなすべし。』と。祭司長十二の鈴と衣とを取りて至聖所に入り、彼女に就て禱れり。而して
看よ、主の使彼れの傍に立ち彼に告げて曰ふ、『ザカリヤよ、ザカリヤよ、此處を出で行きて人民
中より鰥夫を集合し、彼等をして各一本の棒を持參せしめよ。彼等の内にて誰にても主の徽兆を
示し給ふ者こそマリヤを娶るべし。』と。斯くて招集使ユダヤの國中に遣はされ、主の喇叭吹奏せ
られ、凡ての者走り廻りぬ。

九 ヨセフは其斧を捨て彼等に會せんとて行けり。彼等集りければ、各自其棒を持ちて祭司長
の許に行けり。祭司長は彼等の棒を取り、神殿に入りて禱りぬ、禱り終りて又た棒を取りて出で
來り、之を彼等に返せしに、其等の棒には何の徽非もなかりしが、ヨセフ最後に其棒を受けしに、看
よ、一羽の鳩その棒より出でゝヨセフの頭の上を飛べり。祭司ヨセフに曰ひけるは、『汝は鬮にて

主の處女を取り汝のものとすべく選ばれたり。』と。されどヨセフ辭して曰ひけるは、『我には兒供等あり、且つ我は老いて彼女は少女なり。我れイスラエルの兒等の笑物とならんを恐る。』と。祭司彼に曰ひけるは、『主なる汝の神を恐れよ、ダタン、またアビラム、またコラーに主の爲し給へることを記臆せよ、彼等が反抗せしが故に地は口を開きて彼等を呑込みしに非ずや。ヨセフよ、汝に臨まんことの汝の家に起らんことを恐れよ。』と。斯くてヨセフ恐怖し、彼女を取りて其ものを我家に置き、我家屋建築の仕事に出で行くも、また汝に來らん、主汝を護るべし。』と。

一〇

此處にまた祭司等の評議ありて曰ふ、『我等主の聖殿の幔を作るべし。』と。祭司長またマリヤがダギデ族なることと神の前に尚ほ潔きことを思ひ出せり。斯くて役人等出で行き、童貞女を求めて七人を得て誰が金を綯り、また白、また細麻、また絹、また眞紫と猩々緋はマリヤの籤に落ちければ、斯くて眞紫と猩々緋はマリヤの籤に落ちければ、彼が言ふまでサムエル彼に代りたり。マリヤは緋をとり之を績みぬ。

一一　マリヤ水瓶をとり水を汲まんとて出行けり。其時、看よ、聲ありて曰ふ、『慶賀す、汝神寵(みめぐみ)を受けたる者よ、主汝と偕(とも)にあり、汝は女の中にて幸福なる者なり。』と。彼れ周圍を見廻はし右を視、また左を視、其聲の何處より來るかを見たり。彼れ慄きつゝ其家に歸り、水瓶を下に置き、また紫を取り其座に坐りて之を績み出せしが、此時、また看よ、主の使彼女の前に立ちて曰ふ、『マリヤよ、懼るゝ勿れ、汝は萬物の主より恩惠を得たり、汝神の言により懷妊すべし。』と。マリヤ此言を聞き、自ら心に考へて曰へらく、『我れ主なる活ける神によりて妊むべきか、我れ多くの婦の產する如く產すべきか。』と。主の使曰ひけるは、『然らず、マリヤよ、主の大能汝を庇はん、此故に汝より生まれん聖者はまた至上者の子と稱へられん。斯くて汝その名をイエスと名くべし、そは彼れ罪より其民を救ふべければなり。』と。マリヤ曰ひけるは、『看よ、主の婢(しもめ)、主の前にあり、汝の言の如く我にあれかし。』と。

一二　マリヤ紫と緋を作り之を祭司の許に持ち行けり。祭司かれを祝して曰ひけるは、『マリヤよ主なる神汝の名を讃揚し、汝は地の終まで萬代に崇敬(あがめ)らるべし。』と。マリヤいたく喜び、其親族なるエリサベスの許に行きて其戸を敲けり。エリサベス其音を聞き、手にしたる緋を捨て、走り行き戸を開き、マリヤを見て彼女を祝して曰ひけるは、『如何にして我に此事あるや、我主の母來

りて我れを訪はんとは、そは看よ、我腹にあるもの跳りて汝を祝せり。』と。されどマリヤは天使長ガブリエルの言ひし秘事を忘却し天を凝視して曰ふ、『お、主よ、我何者なればとて、萬代に我を崇敬すべきや。』と。斯くてかれ三ケ月エリサベスと偕にありて、日々に身重くなれり。されどマリヤは恐れて其家に歸り、自らイスラエルの兒等の目より隱れたり。此神祕の起りしはマリヤが齡十六歳の時にてありき。

一三　斯くてマリヤその第六ヶ月になりしが、看よ、ヨセフ其建築より歸り、家に入りてマリヤが孕みて大なるを見たり。彼れ顏を搏ち、悲服にて地上に伏し、いたく歎きて曰ひけるは、『我れ何の顏ありて主なる我神に見えんや、また我れ此女に就て如何なる祈禱を捧げんや。我れ主の聖殿より童貞にて彼女を受け、而かも我れ彼女を監視せざりき。我を追ひ落せし者は何人ぞや、我家にて此惡事を働き童貞女を汚辱せし者は何人ぞ、アダムの歷史がまた我に繰返されしものにあらずや、アダムが頌歌を唱ふの時、蛇來り、エヴの單獨なるを見て、彼女を欺き了りし如く、我にも今まで亦た正にその如くなりぬ。』と。ヨセフ悲哀より立ち上り、マリヤを呼びて曰ひけるは『嗚、汝、神の恩惠を受けたるものにして、如何なればとて此の如き事をなし、主なる汝の神を忘れしぞや、何故に汝我魂を沈むるや、汝、至聖所にて育てられ天使の手より食物を受けたる者にして、

何故に我魂を辱しむるや。』と。マリヤいたく泣きて曰ひけるは、『我に罪なし、我如何なる男とも交りしことなし。汝の腹にあるものは何處より來りしものぞや。』と。ヨセフ彼女に曰ふ、『さらば、汝の腹にあるものは何處よと。マリヤ曰ひけるは、『主なる我神かけて、我れその何處よりせるかを知らず。』と。

一四 斯くてヨセフ大に恐れ、彼女の處より去り、かれに就て如何に處置すべきかを考へたり。ヨセフ曰ひけるは、『若し我れ彼女の罪を隱匿せんか、我れ主の律法に對して爭ふ者とならん、若し又た我れ彼女をイスラエルの兒等に曝露せんか、彼腹にあるもの或は天使より來りしものにして、我は無辜の血を流して死に至らしむる者となるなきを保せず。我れ彼を如何に處置すべき乎。我れ密かに彼女を離緣せんかな。』と。斯くて夜となりしに、看よ、主の使夢に彼に現れて曰ふ、『此娘の事を恐るゝ勿れ、彼の胎内にあるものは聖靈によるものなり、彼れ男兒を生まん、汝其名をイエスと名くべし、そは彼れ罪より其民を救ふべければなり。』と。ヨセフ寢より起き、此恩惠を授け給へるイスラエルの神を頌榮し、マリヤを留め置けり。

一五 此にアンナス彼の許に來りて曰ひけるは、『汝何故に我等の集會に出でざりしや。ヨセフ彼に曰ひけるは、われ旅にて勞れたれば一日休みたり。』と。此時アンナス顧みて、マリヤの孕めることを看、祭司長の許に走り行きて曰ひけるは、『汝が保證せしヨセフは大罪を犯したり。』祭司

の曰く、『如何にして然るや。』彼曰く『彼は其主の聖殿より受けし童貞女を汚辱し、竊かに之と姦し、而かも其事をイスラエルの兒等に現はさゞりき。』祭司答へて曰ひけるは、『ヨセフ果して此の如き事を爲せしや。』アンナス學者に曰ひけるは、『汝吏員を遣はし童貞女が姙娠せるを見るべし。』と。斯くて吏員行きて彼が言ひし如くなりしを看、ヨセフと共に彼女を法廷へ連れ來れり。祭司曰ひけるは、『マリヤよ、汝何故に此の如き事を爲せしや、汝何故に汝の精神を下劣にして主たる汝の神を忘れしぞや。聖所中の聖所にて人となりし汝、天使の手にて育てられ、聖歌を耳にし、神の前に踊りし汝、如何なればとて如此事を爲せしや。』マリヤはいたく泣きて曰ふやう、『我れ主なる我神かけて、我れ主の前に潔白にして 決して男子に關知せざるを誓ふ。』と。祭司またヨセフに曰ひけるは、『汝何故に此の如き事を爲せしや。』と。ヨセフ曰ひけるは、『我れ神に誓ひて言ふ、我は此女に對して潔白なり。』と。是に於て祭司曰ひけるは、『僞證する勿れ、眞實を白狀すべし。汝竊かに彼女を姦して倘ほ之をイスラエルの兒等に祕し、而かも其裔の祝福せられんが爲めに強き手の下に其頭を下げざるか。』ヨセフ默然たり。

一六　祭司曰ひけるは、『汝が主の聖殿より受けたる童貞女を返上すべし。』と。ヨセフ慟泣す。祭司曰ひけるは、『我れ主の試罪の水を汝に飲ましめん、主汝の罪を汝の眼前に顯はし給はん。』祭

司斯くて水をとりヨセフに飲ましめて山に遣はせしが、彼害なくして歸りぬ。
も飲ましめて山に送りしが、彼れ害なくして歸りたり。人々彼等に罪なきを見て驚きあひぬ。是
に於て祭司、『主なる神汝等の罪を顯はさゞれば我亦た汝等を裁判せざるべし。』と曰ひて、彼等を
放免せり。ヨセフ、マリヤをつれて其家に歸り、喜びてイスラエルの神を頌榮せり。

一七 こゝに皇帝アウグスツスより、ユダヤのベツレヘムの民皆な登錄すべしとの勅令ありけ
れば、ヨセフ曰ひけるは、『我れ息子等を登錄すべきも、此女を如何にせん。妻として登錄せんか、我
れ耻かし。娘とせんか、イスラエルの兒等みな彼女が我娘にあらざるを知る。遮莫、主の日到らば
聖意の如くなるべし。』と。彼れ驢馬に鞍おき、マリヤを乘せて、一人の息子は馬の口をとり、ヨセ
司は後より從へり。斯くて彼等村より三里程の處に來りし時、ヨセフ顧みてマリヤの憂へ居る樣を
見窃かに謂へらく、こは如何にならん。ヨセフ復た顧みてその笑ふを見たり。
こゝに彼れ曰ひけるは、『マリヤよ、汝が時に笑ひ時に憂ふるを見るは何故ぞや。』マリヤ、ヨセフ
に曰ふ、『我れ眼に二種の人々を見るが故なり、一は嘆き悲み、他は歡喜雀躍せり。』と。彼等道路の中
央に來り、マリヤ彼に曰ひけるは、『我を驢馬よりおろせ、胎内のもの押し出でんとす。』と。ヨセ
彼女を驢馬より下ろして曰ふ、『我れ汝を何處に連れ行き、汝の耻を隱さんや、此處は荒野なり。』

一八　彼れ其處に一の洞穴を發見し、彼女を連れ行き、二人の子を彼女と共に置きて、彼はベツレヘムの方面に產婆を求めんとて出で行けり。

斯くて我れヨセフ、歩むともなく歩みたり。我れ上空を仰ぎ、空の愕然たるを見たり。我れ俯して地を視たるに、食鉢ありて勞働者上極を眺め、其固定し空の鳥の靜止せるを見たり。我れ俯して地を視たるに、食鉢ありて勞働者横はり其手は鉢の中にありき。食せんとする者は食せず、上げんとする者上げず、口に食物を入れんとする者之を入れず、而かも凡のもの皆な上を向き居たり。我また羊の歩めるを見たるに羊は停止し、牧者は之を擊たんとて手を擧げたる儘にて手は空にありき。我れ川の流を視たるに、水飲なんとする小山羊の口水面に休止して水を飲まず、總ての物その動作を進めざりき。

一九　我れ一人の婦人が山より下り來るを見たり。其女我に曰ひけるは、『おゝ人よ汝何處に行くや。』我曰ふ、『我れヘブル人の產婆を求む。』彼れ我に答へけるは、『汝はイスラエル人なりや。』我曰ふ、『我れ曰ふ、『然り。』彼曰ふ、『かの洞穴にて產するものは何人なりや。』我れ曰ふ、『我に約婚せる者なり。』彼曰ふ、『彼はマリヤとて主の聖殿にて育てられたる者にて、我れ神籤にて妻として得たり。而かも彼女は我妻にあらず、聖靈によりて孕みたるなり。』

產婆彼に曰ひけるは、『これ眞實なりや。』ヨセフかれに曰ひけるは、『來りて看よ。』斯くて產婆

彼と共に行けり。彼等洞穴の所に立ち、光雲其穴を蔽へるを見たり。産婆曰ひけるは、『今日我魂は祝され、我眼奇異を看たり。救拯イスラエルに下れり。』と。斯くて雲忽ち洞穴より消え、大なる光明その内に輝き、眼之を見る能はざりき。暫くして其光明減退し、遂に嬰兒現れ、行きて其母マリヤの乳房をとれり。産婆叫びて曰ひけるは、『是れ我に大なる日なり、我れ奇異を觀たればなり。』と。産婆洞穴より去り、サロメ彼れに遇ひしに、産婆彼女に曰ふ、『サロメよ、サロメよ、我れ汝に語るべき奇異を見たり。童貞女が兒を産めり、之れその能くすべきにあらず。』と。サロメ曰ひけるは、『我れ主なる我神に誓ひて、我れ自ら我指を入れて各部を探檢せざれば、處女が産したりとの如きを信ぜざるべし。』と。

二〇　産婆内に入り、マリヤに曰ひけるは、『汝の體を見せよ、汝に就て少からざる論議起りたり。』斯くてサロメ其指を入れて叫び曰ひけるは、『我は我邪惡と不信のために呪はるべきかな、我れ活ける神を試みたり。吁、我手は火に燒けたるが如く落ちんとす。』と。又た彼れ主の御前に跪まづきて曰ふ、『我列祖たちの神よ、我がアブラハム、イサク、ヤコブの裔なることを覺へ給ふて、我をイスラエルの兒等に示し給ふことなく、貧しき者に復へし給へ。おゝ主よ、我れ御名により我務を爲し、汝の手より我應報を得たることは主の知り給ふ所なり。』と。斯くて看よ。主の使者

彼女の傍に立ちて曰ひけるは、『サロメよ、サロメよ、主汝の祈を聽き給へり。汝に安全と喜びあらん。』サロメ進みて嬰兒を抱きて曰ふ、『我れ彼を拜せん、大なる主イスラエルに生れ給へり。』と。斯くて看よ、サロメよ、サロメよ、嬰兒のエルサレムに來るまでは汝が今ま見たる奇異を人に告ぐべからず。』と。

二一　此時ヨセフはユダヤに入らんと準備しありしが、こゝにユダヤのベツレヘムに大なる騷擾起りたり。そは道士來りて曰ひけるは、『ユダヤ人の王として生れ給へる者は何處に在すや。我等東國にて其星を見、彼を拜せんとて來れり。』ヘロデ之を聞きて大に煩悶し、役人を道士の處に遣せり。彼また祭司を呼び、彼等を審問して曰く、『キリストに關して如何に錄されありや、その生るべき處は何處ぞ。』彼等曰く、『ユダヤのベツレヘムなり、斯く錄されあり。』と。ヘロデ彼等を放免し、次に道士を審問して曰く、『汝等今 生れたる王に關して如何なる兆を觀たりや。』道士曰く、『我等諸星の間に輝く一の大なる星を見たり、之がため諸星は光を失ひて現れざりき。我等乃ちイスラエルに其王の生れ給へるを知り、之を拜せんとて來れり。』ヘロデ曰く、『行きて彼を尋ねよ、而して彼を見ば我に告げよ、我も亦た往きて彼を拜せん。』と。道士出で行きしに、看よ、彼等が東方に

て觀たる星先だちて進み、洞穴の上に停まれり。道士嬰兒か其母マリヤと共にあるを見、其嚢中より黄金乳香沒藥を出して獻せり。されど天使より再たびユダヤに入るべからすと戒められ、他の路をとりて其國へ歸れり。

二二　茲にヘロデ道士等に愚弄せられたるを知り、怒りて殺戮者を遣し彼等に告けて曰く、『二歳以下の兒を殺せ。』と。マリヤは嬰兒等の殺さるを聞きて恐れ、其兒をとりて布に包み午櫪に置けり。エリサベスは役人がヨハネを尋ぬるを聞き、彼を携へて山に行き、隱すべき所を求めしかど得ず、大聲に呻めきて曰ふ、『おゝ主のものなる山よ、此母と兒を受け入れ。』よ。山直ちに割れて彼女を受け、光その周圍に輝き、一天使倶に在りて彼等を警護せり。

二三　ヘロデ、ヨハネを索め、役人をザカリヤに遣して曰ふ、『汝の兒を何處に隱せしや。』彼答へて彼等に曰ひけるは、『我は聖事に事ふる神の僕にして、常に神の聖殿にあれば、我兒の何處にあるやを知らず。』と。役人去りて此事をヘロデに告げければ、ヘロデに怒りて曰ふ、『其兒にはイスラエルの王たるの運あり。』と。彼また使をザカリヤに遣して曰く、『汝の兒は何處にありや、眞を白狀すべし、汝の命は我手中に在るを知らざるか。』

二四　ザカリヤ曰ひけるは、『汝もし我血を流さば、我は神事に殉す、汝無辜の血を神殿に流すが故、神は必ず我靈を迎へ給ふべし。』斯くてザカ

リヤは黎明に殺され、イスラエルの人々彼が殺されたるを知らざりき。

二四 朝禮の時刻に至り、祭司等往きしに、ザカリヤ常の如く出でて彼等を頌榮するを待てり。然るに彼れ尚ほ出でざりしかは、聖壇の側に血の附着せるを見、且聲ありて物言ふを聞けり、曰く、『ザカリヤは殺されたり、その復讐者の來るまで此血を拭ふべからず。』と。彼れ此聲を聞きて怖れ、出でて之を他の祭司等に告げたり。斯くて彼等皆な内に入りて、ありし事を見けるに、神殿の萬字格子（まんじこうし）は音をなして動きしも、上より下まで其幕裂け、其血の石に化せるを見、大に懼れて出でゝ其殺されたるを聞きて悲み、三日三夜弔したり。三日の後、祭司等誰か彼の補缺たるべきかを議し、シメオン籤に當りぬ。此ミメオンは、メシヤが肉體もて現はるを見るまでは死せざるべしと聖靈によりて告げられたる人なり。

二五 エルサレムにて此物語を錄する我れヤコブ、ヘロデの死せる時騒亂起りしにより、その靜まるまで荒野に退き、此物語を錄する能力と智を授け給ひし主なる神を頌榮せり。願くは永遠に頌むべき我等の主イエス・キリストを畏る者に恩惠あらんことを。アメーン。

多馬傳福音書

主の幼時に關するイスラエルの哲學者トマスの記錄

一　イスラエル人なる我れトマス、汝等のために此記錄を記し、我等の主（しゅ）イエス・キリストが其生後我國にて幼時になし給ひし奇蹟を、異邦の間に起りし兄弟たちに知らしめんとす。卽ち下の如し。

二　此幼兒イエス五歲の時、山間を流るゝ水の溜れる處にて遊び、其流水を集めて池となし、直ちに之を清水になし、只だ一言にて水を其命に從はしめたり。斯くて彼軟らかき粘土をもて十二の雀の形を作れり。彼れ此事をなせるは安息日なりき。他に多くの小兒等も彼と共に遊び居たりき。或るユダヤ人、イエスが安息日に遊び、彼が爲せし所を見て、去りて其父ヨセフに曰ひける は、『看よ、汝の兒、川にて遊び、粘土を取りて十二の鳥など作り、安息日を瀆したり。』ヨセフ其

處に來り之を見て彼に叫び曰ひけるは、『何故に汝安息日に爲すべからざることを爲すや。』イエス其手を拍ち、土の雀に叫びて曰ひ給ふ、『いざ往け。』雀すなはち飛び、鳴きつゝ去りぬ。之を觀たるユダヤ人等驚き、行きて其見しイエスが爲せし事を彼等の長に告げたり。

三 學者アンナの兒ヨセフと共に其處に立ち居たりしが、柳の枝を取りて、イエスが溜めし水を流せもり。イエス其爲せし事を見て怒り、彼に曰ひ給ふ、『惡き不敬虔なる愚か者よ、池が汝に何の害ありや、又た水が汝に何の關することありや。看よ、汝立どころに木の如く乾き、葉も根も果も生ぜざるべし。』其兒直ちに乾物になりぬ。イエス其處を去り、ヨセフの家に歸れり。されど乾物になりし兒の兩親彼を哭きてヨセフの處に連れ來り、此の如き兒を有つが故に彼を責めたり。（斯くてイエス衆人の願によりて彼を癒し給へり。）

四 其後ち彼れ村を過ぎしに、或小供走り來りて彼に當り、其肩を打てり。イエス怒り、彼に曰ひ給ひけるは、『汝は今來りし途を歸るべからず。』其兒直ちに死して倒れたり。之を見し者曰ひけるは、『此兒は何處より生れたりや、其言ふ所のものみな實現す。』死したる兒の親、ヨセフの處に到り、彼を責めて曰ふ、『汝は此の如き兒を有つが故に、斷じて我等と共に此村に住むべからず。然らざれば汝彼に呪はずして祝することを教へよ、彼は我等の小供を殺しつゝあるなり。』

五 ヨセフ其兒を別に呼びて誡めて曰ふ、『汝何故に此の如き事をなすや、彼等は難澁して我等を憎み、我等を迫害するは、『我この汝の言が汝の心より出でざるを知る。されど汝のために我れ默すべけれど、彼等は其罰を受くべし。』斯くて彼を非難せし者は瞽(めしひ)となれり。之を見たる者大に恐れ、且つ甚だ迷ひ、評して曰ふ、『彼の曰ふ所は善惡共に言々事實となり驚異となる。』彼等イエスが此の如き事をなせしを見し時、ヨセフ立ちて彼の耳を捉へ强く引けり。其兒大に怒り彼に曰ふ、『求めて得ざるも汝には尙ほ可なり。且つ汝の爲せることは慥かに智ある事をなせしを見し時、ヨセフ立ちて彼の耳を捉へ强く引けり。ことに非ず。汝は我が汝の兒なるを知らざるか。我を煩す勿れ。』

六 ザカリヤと名くる或教師、或處に立ち居りしが、イエスが其父に曰へることを聞きて、子にして此の如き言をなすを大に驚けり。數日の後、彼ヨセフに來り曰ひけるは、『汝は智ある子を持てり、彼には心あり、彼れ書を學び得んが爲めに我に托せよ、我れ彼に書を教ゆると共に凡ての知識を授け、如何に長者に對し、祖先及び列祖に對し、之を尊ふべきか、又た如何に同輩を愛すべきかを教へん。』彼『アルファ』より『オ(メガ)』まで皆な明かに又た精確に曰へり。彼ザカリヤ教師を眺めて曰ひ給ふ、『汝は『アルファ』の性質を知らざるに、如何にして人に『ベタ』を教ゆることを得んや、汝僞善者よ、若し汝之を知らば先づ『アルファ』を教へよ、さらば我等『ベタ』に就て汝を信ぜん。』斯くて彼れ第一字に

就て教師に尋ね初めけるに、彼答ふる能はざりき。多くの人の聞き居れる所にて此兒ザカリヤに曰ひけるは、『師よ、第一字の順序を聞け、先づ其諸線を注意せよ、汝の見る其等を横切る中の線は共通なり、二線は會し、此等を支へて又た一點に來る最高部、互に會する同種の三交叉點、同長の主部と副部、此等はAの諸線なり。』

七　ザカリヤ師は其兒の第一字に關し此の如く大に寓意あるを語るを聞きて、其話と教に就て失心せんばかりなりき。彼其處に居りし者に曰ひけるは、『噫、我れ何たる陋劣漢ぞ、我は我心を失ひ、此小兒を此處に連れ來りて自ら恥辱を買へり。兄弟ヨセフよ、乞ふらくは彼を連れて去れ。我れ彼の嚴しき眼光に堪へず。我れ彼の意を少しも解すること能はず。此兒は地に屬するものに非ず、火をも服し得べし。慥かに彼は此世の造られざる前に生れたるなり。如何なる腹彼を宿したりや、如何なる胎彼を孕みたりや、我之を知らず。噫、我友よ、彼は我魂を飛ばせり。我は何たる愚劣ぞ、我自ら我を欺き居たり。我は一生徒を得ざるなり。我は一生徒を得んと努力し、一教師を見たり。友よ、我心は羞恥に充つ、そは我れ老人なるに小兒に敗けたればなり。此兒の故に我には落膽と死のほか何物もあることなし。我れ今何の顔ありて此兒に面せんや。人我が一小兒に敗れたるを曰はば、我何と答ふべけん。彼が語れる第一字の諸線に就て我れ如何に解すべきや。吁、

我友よ、我之を知らざるなり。我れ彼の言ふ半句も解せざるなり。ヨセフ兄、願はくは彼を連れて去れ。彼は何たる偉大なる者ぞ、神か天使か將た何者か、我之を知らず。』

八 ユダヤ人等ザカリヤを慰めつゝありしに、イエス高聲にて笑ひ曰ひ給はく、『今ぞ汝の知識に實らしめ、心の瞽(めしひ)の目を開くべし。我れ天より降りて此處にあり、これ彼等を呪ひ、彼等を招きて天に在るものに到らせんが爲めなり、そは汝等の爲めに我を遣せし者之を我に命じ給へり。』斯くて此兒の語り了りし時、其呪に打たれたる者みな治(なほ)されたり。此後ち復た彼に呪はれて不具とならざらん爲め敢て彼を怒らする者なかりき。

九 數日の後、イエス或家の二階にて遊びけるが、彼と遊び居たる小兒の一人家の上より落ちて死せり。他の小兒等は之を見て皆な逃げ去りしが、イエス獨り靜かに立ちぬ。死せる小兒の兩親來り彼を叱責し……彼を脅迫せり。イエス屋根より跳び下り、小兒の屍の側に立ち、大聲に叫び給ひけるは、『ゼノよ、起きて我に告げよ、我れ汝を突き飛ばせしや。』彼直ちに起き上り曰ひけるは、『主よ、決して然らず、汝は我を突き飛ばさず、我を起し給へるなり。』此事を見たる者みな驚けり。斯くて其兒の兩親は此爲されし奇蹟の故に神を頌榮し又たイエスを讃揚せり。

一〇 又た數日の後ち、或青年附近に木を割り居りしが、過ちて斧來りて其足を二つに切り、

多量の血出の爲めに死せり。人々騒ぎ、走り集りしが、イエスも亦た走り行けり。彼れ群衆を分け入り、青年の傷ける足を捉へ、立どころに之を治せり。斯くて彼れ青年に曰ひ給ひけるは、『いざ起きて木を割り、而して我を記憶せよ。』群衆そのありし事を見て、小兒を讃揚して曰ふ、『誠に神の靈此兒のうちに宿れり。』

一一 彼六才の時、其母彼に水瓶を與へて、家に水を汲み來らしめたり。されど彼れ人中にて或者に當り、瓶を壞せり。於是イエス其被たる衣をたゝみ、之に水を滿たして、其母の處へ運びぬ。其母玆に奇蹟のなされたるを見て、彼に接吻し、其見し彼が爲せし神秘を誰にも告げざりき。

一二 又た種蒔き時に此兒父と共に畠に種まかんとて行けり。其時父の蒔き居りし間に彼は一粒の種を下せしが、彼之を刈り入れ、之を打ちしに、百石を穫たり。斯くて彼れ村中の貧民を呼び集め、禾場に入れて穀物を彼等に與へて、彼此事をなせるは齡八才の時なりき。

一三 彼の父は木匠にて、此頃耒耜と軛を製作せり。或る富める人彼に臥榻を注文せしに、その横桁一本短かくして如何にすべきやを知らざりしが、イエス其父ヨセフに曰ふ、『他の二本を取りて中のと等しくせよ。』ヨセフ其兒の曰ふ如くせしに、イエス他の一端に立ち、その短かき桁を

取りて引き延ばし、他の桁と等しくなせり。其父ヨセフ之を見て驚き、彼を抱きて接吻して曰ふ、『我は幸福なるかな、神此兒を我に賜ひたればなり。』

一四 ヨセフ再たび其兒が心も體も健かなるを見て、文盲なるべからずと決心し、彼を連れて他の教師の所に至りぬ。教師ヨセフに曰ひけるは、『我先づ彼に希臘字を教へ、後ち希伯來字を教へん。そは此教師は此兒のなしたる試驗を知り居り、彼を恐れたればなり、兎まれ、彼れ「いろは」を書き、長時彼の樣子に注意せしが、彼は何も答へざりき。イエス彼に曰ひ給ひけるは、『若し汝誠に教師たらば、又たよく文字を知り居らば、我に『アルファ』の字の力を告げよ、されば我汝に『ベタ』の力を告げん。』教師之を聞きて大に怒り彼の頭を打てり。兒は痛を受け彼を呪ひしに、彼直ちに失神し、伏して地に倒れたり。兒はヨセフの家に歸る。ヨセフ憂ひ、彼の母に命じて曰ふ、『此兒を外に出さしむる勿れ、彼を怒らする者皆な死すべければはなり。』

一五 其後暫くして、『ヨセフの眞の友なる他の教師、彼に曰ひけるは、『汝の兒を我學校に連れ來れよ、我或は其機嫌を取りつゝ文字を教ゆるを得ん。』ヨセフ曰ふ、『兄弟よ、若し汝勇氣あらば彼を取れ。』彼れ乃ち恐れ憂ひつゝ彼を連れ行けり、されど兒は喜びて從へり。彼學校に行き、机の上に書物のあるを見て之を取り、其中にある字を讀まず、只だ口を開きて聖靈によりて

語り、側に立てる者に律法を教へ給へり。其言の整へると、其小兒にも似ず斯く語るを驚き合へり。ヨセフ之を聞きて恐れ、此教師も亦何も知らざるやを疑ひて、走り學校へ行きぬ。教師ヨセフに曰ひけるは、『兄弟よ、我れ此兒を生徒として取りしに、彼は天惠と智慧とに充てり。兄弟よ、願はくば彼を連れて家に歸れ。』兒は之を聞きて彼に向ひて笑ひ曰ふ、『汝の言ふ所は正しく又た其證言は直し、汝の教師は直ちに癒されたるべし。』斯くて他の教師は直ちに癒されたり。ヨセフ兒を連れ家に去れり。

一六　ヨセフ其兒ヤコブを遣はして、木を束ね家へ運ばしめけるに、イエスも亦た共に行けり。ヤコブ薪木を集め居たる時、蝮その手を咬めり。彼れ苦悶し、死に瀕せしかば、イエス近より、咬口を吹き給ひしに、蝮は裂け、ヤコブは直ちに健全になりたり。

一七　此後またヨセフの隣の嬰兒病みて死せり。其母いたく悲めり。イエス大なる哭きと騒を聞き、急ぎ走り入り、嬰兒の死せるを見て其胸に觸れて曰ひ給ひけるは、『兒よ我れ汝に言ふ、死せずして活き、汝の母と共に在れ。』嬰兒眼を開きて笑へり。彼また母に曰ひ給ふ、『兒を取りて乳を與へ、而して我を記憶せよ。』驚きつゝ立ち居たる群衆之を見て曰ひけるは、『誠に此兒は神かの使なり、その發する言みな事實となればなり。』イエスは其家を出で、復た他の小兒等と遊

べり。

一八 其後ち又た暫くして、家を建て居りし所に騒ぎありければ、イエス立あがり其處に行けり。一人の男死して横はれるを見て、イエス共手を取り曰ひ給ひけるは、『男よ、我れ汝に言ふ、起きよ、而して行きて汝の作業せよ。』彼直ちに起きて彼を讃揚せり。之を視たる群衆は驚き曰ひけるは、『此兒は天より來れる者なり、そは彼れ多くの靈を其死より救ひ、又た生涯其救拯を續くべければなり。

一九 彼十二才の時、彼が兩親例年の如く多くの旅伴と共に過越祭にエルサレムへ上り、祭の後ち彼等復た歸路に就けり。彼等歸らんとせしに、イエスはまたエルサレムへ戻れり。兩親は彼が道伴のうちにあるならんと思ひ居り、一日行きたる後ち、其親族の間を尋ね、其在らざるを見て大に憂慮し、彼を尋ねて京へ引返せり。三日の後ち、彼が教師のなかに坐し、律法につき且つ聞き且つ問ひ居れるを見たり。人々皆な彼に注意し、彼が小兒にして尚ほ民の長老及び教師たちの口を噤ましめ、律法の要點と豫言の比喩とを説明せるに驚けり。彼母マリヤ行きて彼に曰ひけるは、『兒よ、何故かゝる事を我等に爲せしぞ、看よ、我等甚だしく憂ひて汝を尋ね居たり。』イエス彼等に曰ひ給ふ、『何故汝等我を尋ぬるや、我れ我父の業を爲すを知らざるや。』學者とパリサイ宗人曰

ふ、『汝は此兒の母なりや。』彼曰ふ、『我は母なり。』彼等彼れに曰ひけるは、『汝は女のうちにて幸福なる者なり。そは神汝の胎の實を祝福し給へばなり。我等が此の如き榮光と此の如き德と智慧は未だ曾て見また聞きたることなし。』イエス立ちて其母に伴ひ、兩親に順へり。彼母そのありし事共を悉く其心に藏めたり。イエスは智慧も惠も身のたけも彌增さり給ひぬ。願くは榮光代々彼に在らんことを。アメーン。

ニコデモ傳福音書

前篇　ピラト行傳

我等の主耶蘇基督に關しポンテオ・ピラトの時代に作られたる記錄

執政官衞兵の我れアナニヤ、律法に通じ聖書に因り我等の主耶蘇基督（イエス・キリスト）を知りて彼を信ずるに至り洗禮を受くるに適するものと認められたる者、ポンテオ・ピラトのときにユダヤ人等が收藏したる、我等の主耶蘇基督の事件に關して爲されたる事を當時記したる記錄を搜索し、ヘブル語にて書かれたる、此等の記錄を發見せり。而して我れ神の冥助により、我等の君フラギウス・セオトチウスの治世第十七年とフラギウスの第六年卽ち第九定稅年（インヂクチヲ）に於て、我等の主耶蘇基督の名を呼ぶ者等が之を知り得んがため、茲に希臘語に飜譯せり。

故に之を讀みて又た之を他に轉錄せんと欲する者は凡て我を記憶し、神我に豐かなる惠を下し

給ふて、我が彼に反きて犯せる罪惡を赦し給はんことを我ために禱れ。
冀くは平安、之を讀む者、また之を聞く者、また其家族の上に在らんこと
を。アメーン。

維時、羅馬皇帝チベリウス・カイザルの治世第十五年、卽ちヘロデ、ガリラヤの國王たりし第十
九年四月朔の八日前、三月二十五日、ルフスとルベリオの代官職中、オリムピヤ祭第二百二回の
第四年、ヨセフ・カヤパ・ユダヤ人の大祭司たりし時。

我等の主耶蘇基督救世神の磔刑受難後、ニコデモがヘブル語にて錄し且つ後世に遺したる記錄
は下の如し。

一　祭司長と學者、アンナス、カヤパ、セメス、ダタイ、又たガマリエル、ユダ、レギとネフ
タリム、アレキサンデルとヤイロ、及び他のユダヤ人等評議會を開き、多くの事につきイエスを訴
へてピラトに來り曰ひけるは、『我等は此人が大工ヨセフの子にしてマリヤより生れたるを知る。
然るに、彼れは自ら神の子にして王なりと曰ひ、且つ彼れは安息日を汚し吾等が先祖の律法を廢
せんことを望めり。』ピラト曰ひけるは『彼れがそれを廢せんと欲し又た爲さんと欲することは何

ぞや。』ユダヤ人曰ひけるに『律法は安息日に誰をも癒す勿れと記されたるに、此人は安息日に於て、跛(ちんば)と傴僂(せむし)、枯へたる者と盲人(めしひ)と中風に艱めるもの、龍と惡鬼に憑(つ)けるものを惡しき方法にて癒したり。』ピラト彼等に曰ひけるは『如何なる惡しき方法に因りしや。』彼等彼れに曰ひけるは『彼れは魔術師なり、惡鬼の王ベルゼブルに依りて諸々の惡鬼を逐ひ出したれば、凡てものは皆彼れに從ひぬ。』ピラト彼等に曰ひけるは『こは不淨なる靈によりて惡鬼を逐ひ出したるにあらずたゞエスキユラピアスの神に依れるのみ。』と。

ユダヤ人ピラトに曰ひけるは『我等は閣下が彼れを裁判に召し出して審問せられんことを願ふ。』と。而してピラトは彼等を呼びて曰ひけるは『代官たる吾れ如何にして王を審問すべきやを語るべし。』彼等彼れに曰ひけるは『吾等は彼れが王なることを言はず、彼自ら王なりと言へり。』ピラト使丁を召して曰ひけるは『イエスを丁寧にこゝに連れ來れ。』使丁出で行き、彼れを認めて拜し、その外衣を取り地上に擴げて彼れに曰ひけるは『吾が主よ、この上を歩みて入り給へ、代官汝を召したり。』ユダヤ人は使丁の爲せし事を見てピラトに向ひて叫び曰ひけるは、『何故に汝は使丁を遣して彼に入り來ることを命じて呼丁を遣さゞりしか、そは慥に使丁は彼れを見て彼れを拜し、地上に其胴衣を擴げて王の如く彼を歩ましめたり。』

ピラトは使丁を呼び彼れに曰ひけるは『何故に汝は之を爲せしや、又た何故に地に外衣を擴げてイエスを歩ましめしや。』使丁彼れに曰ひけるは『代官閣下、汝は吾れをエルサレムにあるアレキサンデルの許に遣せしとき吾れは驢馬の上に坐する彼れを見たりき。而してヘブル人の子等は各々その手に枝を持ちて叫び、又た他のものは彼れの下に彼等の衣服を布きて曰ひけるは「汝最と高き所に在ます者、今ま救ひ給へ、主の名によりて來るものは福なる哉と。」』

ユダヤ人等に曰ひけるは『ヘブルの子等はヘブル語にて叫びたり。人は何によりて叫びしや。』使丁彼れ等に曰ひけるは『吾れユダヤ人の一人に尋ねて曰ひけるは「彼等がヘブル語にて叫べるは何ぞや。」と、而して彼れ吾が爲めにそれを譯したり。』ピラト、ユダヤ人等に曰ひけるは『彼等がヘブル語にて叫びしは何ぞや。』ユダヤ人彼に曰ひけるは『ホサンナ・メムブローメ・バルークアムマ・アドナイ』ピラト彼等に曰ひけるは『此ホザナ云々の語は如何に譯せらる可きや。』ユダヤ人彼に曰ひけるは『今最と高き所に在す者救ひ給へ主の名によりて來る者は福なる哉。』ピラト彼等に曰ひけるは『若し汝等小供等が語りたる語を事實と認めば何に因りて使丁は誤れりと言ふや。』彼等默然たりき。而して代官使丁に曰ひけるは『出で行け而して汝が欲する儘に彼を連れ來れ。』使丁出で行きて前と同樣にてイエスに曰ひけるは『吾が主よ入り

給へ代官は汝を召せばなり。』

イエス入り給ひしに、旗を持つもの等皆己が旗を持ちけるが、其等の旗の頂上は曲りて何れもイエスを拝したり。而してユダヤ人等は何れの旗も皆曲りてイエスを拝し居たりし状を見て烈しく旗手等を責め叫びたり。ピラト、ユダヤ人等に曰ひけるは『汝等は如何に旗の頂上が曲りてイエスを拝みしを驚かざるか。』ユダヤ人、ピラト旗手を呼びて曰ひけるは『我等は旗手等が旗を下げて彼を拝せしを見たり。』ピラト、『何故汝等是を爲せしや。』彼等ピラトに曰ふ『吾等はギリシヤ人にして宮の奴隷なり、何ぞ彼を拝するを得んや。慥に吾等は旗を立て居たりしに其の頂上自ら下に傾き彼れを拝するに至りしなり。』

ピラトは會堂の役員と民の長老達に曰ひけるは、『汝等己等の爲めに強き力ある人々を選び、而して彼等をして旗を持せしめ、果して尚は其旗の頂上が傾くやを試ましめよ。』と。於是、ユダヤ人等十二人の強き力ある人々を選び、六人宛各々旗を持たしめ代官の庭前に置かれたりき。ピラト使丁に曰ひけるは『彼を代官邸の外に連れ出し、再び汝が欲する儘に入り來らしめよ。』イエスと使丁は代官邸より出で行きたり。ピラトは前に旗を持ちし人々を召して曰ひけるは、『若しイエスが入り來らんときに旗が傾かざれば、我れ汝等の首を切り離すことを該撒（ガイザル）の命にかけて誓へり。』

斯くて代官再びイエスに入り來るを命せしがば、使丁は前の如く同樣に行ふてその外衣の上を歩むことなど、種々なることをイエスに懇願せしが、彼れはその上を歩みて入りぬ。イエス入りしとき旗は再び傾きてイエスを拜しぬ。

二　ピラト之を見て恐れ、その審判の座より去らんことを欲したり。而して彼れ尙ほ去らんことを考へ居りしに、その妻彼に使を遣して曰ひけるは『この正しき人に干渉する勿れ。我れ今夜彼に關する多くの事の爲めに苦みたればなり。』ピラト、ユダヤ人等を召して曰ひけるは『汝等と其ユダヤの宗教に屬せんことを欲することゝを知る。』彼等ピラトに曰ひけるは『然り、吾等は知れり。』彼れユダヤ人等に曰ひけるは、『視よ我妻は、我が妻が神を拜するものゝ一人にして、汝等と其ユダヤの宗教に屬せんことを欲することゝを知る。』彼等ピラトに曰ひけるは『然り、吾等は知れり。』彼れユダヤ人等に曰ひけるは、『此正しき人に關する使を我に遣はして今夜この正しき人に關する多くの事柄につき苦みたれば、此正しき人に干渉する勿れと言たり。』ユダヤ人答へてピラトに曰ひけるは『我等は彼が魔術師なりしことを語らざりしが、視よ彼れは汝が妻に夢を見せしめたり。』

ピラト、イエスを召して彼れに曰ひけるは『此等は汝に對して何を證（あか）しするや。汝は何をも言はざるか。』イエス曰ひけるは『彼等力あるにあらざれば、何事をも言ふを得ざる可し、そは凡てのものは皆善と惡とを言ふ可き己の口の力を有すればなり。彼等はそれを注意せざる可らず。』

ユダヤ人の長老イエスに答へて曰ひけるは『我等何を注意すべきや、第一に汝が私通に因りて生れしこと、第二に汝が嬰兒殺戮の原因となりしこと、第三に汝の父ヨセフと汝の母マリヤは人々の信用を失ひしが故に埃及に逃れしことの三あり。』ユダヤ人の中の敬虔なるものにして傍觀し居りたる人々曰ひけるは『吾等は彼れが私通に因りて生れたりしことを否定す、そは我等ヨセフはマリヤと婚約せしことを知ればなり、されば彼れは私通に因りて生れたるにはあらず。』ピラト、イエスが私通に因り生れたりと言ひしユダヤ人に曰ひけるは『汝等の語りしこの話は眞ならず。何となれば亦汝等の中の是等の同胞等が曰へるが如くヨセフとマリヤは婚約したるが故なり。』アンナスとカヤパ、ピラトに曰ひけるは『我等の中凡ての人々は彼れが私通に因りて生れたりと叫びてその婚約の事實は信ぜられざるなり。是等の人々はユダヤ教に改宗したるものとは何ぞや。』とアンナスとカヤパ、ピラトはアンナスとカヤパを呼びて曰ひけるは『ユダヤ教に改宗したるものとはギリシヤ人の子等なるも今ユダヤ人となりしものなり。』彼れが私通に因りて生れしに非ずと曰ひし人々、卽ちラザラロ、アステリオ、アントニオス、ヤコブ、アムネス、ゼラス、サムエル、イサク、フィネース、クリスパ、アグリツパ、ユダ等曰ふ、『我等は改宗したるものに

あらず。眞にユダヤ人の子孫なり。故に眞實を語る。そは吾等、ヨセフとマリヤの婚約に列席したるものなればなり。』

ピラト、イエスが私通に因りて生れざることを主張せし此等の十二人を呼びて、曰ひけるは『我に汝等が言ふ所卽ち耶蘇は姦淫に因りて生れざりしことを言ふは果して眞なるや、該撒（カイザル）の命にかけて誓ふことを嚴命す。』その人々ピラトに曰ひけるは『我等には誓約するは罪惡なれば之を爲すべからずとの律法あり。彼等該撒の命にかけて我等が曰ひしが如き事實なきことを誓はゞ、吾等は死に當る可きものなり。』ピラト、アンナスとカヤバに曰ひけるは、『汝等は是に對して何事も答ふる所なきか。』アンナスとカヤバ、ピラトに曰ひけるは『此等の十二人がイエスは私通に因りて生れたるものにあらずと言ひしは信ぜられ、我等一同イエスは私通に因りて生れたるものにして且つ己れは神の子にして王なりと、自ら曰へりと叫びたるも我等の言は信ぜられざるなり。』と。

ピラト、イエスが私通に因りて生れたるものにあらずと曰ひし十二人の外凡ての人々を出で行かしめ、而しその十二人とイエスとを相離れしめたり。而してピラトその十二人に曰ひけるは『如何なる理由の爲めに人々はイエスを死刑に處せんと願ふや。』その十二人ピラトに曰ひけるは『人

人イエスが安息日に病人を癒せしが故に怒れるなり。』ピラト曰ひけるは『善き行爲の爲めに人々はイエスを死刑に處せんとを願ふか。』と。十二人ピラトに曰ひけるは『然り。』

三　ピラトは甚だしく怒りて代官邸の外に出で行き其等の人々に曰ひけるは、『我れ日輪を證據に立て、此人に徴なきを言明す。』ユダヤ人等答へて代官に曰ひけるは『此人惡事を爲したるにあらざれば、我等は汝に此人を渡さざる可し。』ピラト『汝等イエスを取りて、汝等の律法に從つて彼を審け。』と曰ひしに、ユダヤ人等ピラトに答へて『我等に人を死刑に處する權なし。』と曰ひたり。ピラト曰ひけるは『神は汝等が彼を死刑に處せずして、我が彼を死刑にす可しと言ふか。』と。

ピラトは再び代官邸に入り、而して私かにイエスに語りて曰ひけるは、『汝はユダヤ人の王なるか』と。イエス、ピラトに答へけるは『汝は之を自らに因りて言ふか或は他の人が我に就て汝に告げしに由るか。』ピラト、イエスに答へけるは『我あにユダヤ人ならんや、汝の國民と祭司長等は汝を我に渡したり。汝何を爲せしぞ。』イエス答へけるは『我國は此世の國にあらず、そは若し我國此世の國ならば、我僕等は我をユダヤ人等に渡さざる爲に戰ふ可し。然れども今我國は此世のものにあらざるなり。』ピラト、イエスに曰ひけるは、『然らば汝は王なるか。』イエス彼れに答へて『汝は我が王なるを曰ふ、我れ是れが爲めに生れ、眞理に就けるものみな我聲を聞くに至らんが

爲めに來れり。』ピラト彼れに曰ひけるは、『眞理とは何ぞや。』イエス彼れに曰ふ、『眞理は地上にあらざるか。』イエス彼に曰ひけるは『眞理を語る人々が、地上に力を有する人々に如何に審かるかを見ん。』

四

ピラト、イエスを邸内に殘し、出でてユダヤ人に曰ひけるは『吾は彼に過ちあるを見ず。』ユダヤ人彼に曰ひけるは『彼は「我れ此の宮を壞し三日にして之を建つるを得」と言へり。』ピラト曰ふ『何の宮か。』ユダヤ人等曰ふ『ソロモンは之れを建つるに四十六年を要せしに、此の人は之れを倒壞して三日にして之れを建つと言へり。』ピラト彼等に曰ふ『我はこの正しき人の血に罪なし。汝等自ら之れに當る可し。』ユダヤ人等曰ひけるは『彼の血は我等と我等の子孫の上にかゝる可し』と。

ピラトは長老祭司レギの徒を召し私かに曰ひけるは『汝等が彼れを訴へし罪は一も死罪に當らざるが故に斯く行ふ可らず、そは汝等の訴ふる所は人を癒したることゝ安息日を汚したる事なれば其人は死に當るや否や。』ピラト曰ふ、『その人は死に當るなり。』ユダヤ人等ピラトに曰ふ『若し何人にても該撒（カイザル）に惡口せば其人は死に當るや。』ピラト曰ふ、『その人は死に當るなり。』長老祭司及びレギの者等曰ひけるは『若し何人にても該撒に惡口せばその人は死に當る可し、然るに此人は神を惡口せり。』と。

代官はユダヤ人等を代官邸の外に出して後ちイエスを召して曰ひけるは『我汝に何を爲す可きや。』イエス、ピラトに曰ひけるは『汝に示されたるが如くせよ。』ピラト曰ふ『如何に示されたりしか。』イエス曰ひけるは『モーセと豫言者等は豫め吾が死と復活に就て語りぬ。』ユダヤ人は之に氣附き之を耳にしてピラトに曰ひけるは『此の瀆すこと以上に更に何を聞くを要せんや。』ピラト、ユダヤ人等に曰ひけるは『若し此等の語が瀆すものと言ふを得ば、汝等はその罪に依り彼れを連れ去りて汝等の會堂に到り而して汝等の律法に從つて彼れを審判せよ』と。ユダヤ人等ピラトに曰ひけるは『吾等の律法には、人その同胞に對して惡事を行はば四十に一を減じたる笞を受く可きものとせらるゝも、神を瀆すものは石にて打ち殺さる可しとす。』

ピラト彼等に曰ひけるは『汝等彼を取りて欲する儘に處罰せよ。』ユダヤ人等ピラトに曰ひけるは『我等は彼が磔せられんことを願ふ。』と。ピラト曰ひけるは『彼は磔刑に當るものとは思はれざるなり。』と。

代官傍に立てるユダヤ人の群集を見廻し、多くのユダヤ人等の涕泣し居たるを見て曰ひけるは『凡ての群集は彼の死するを好まず。』ユダヤ人の長老達曰ひけるは『彼が殺されんため吾等群集は此處に來れるなり。』ピラト、ユダヤ人に曰ひけるは『何故に彼れは死せざる可からざるか。』と。

ユダヤ人等曰ふ『彼れは自ら稱して神の子また王となせり。』

五 ユダヤ人の一人にしてニコデモなるもの、代官の前に立ちて曰ひけるは『仰ぎ願くば我をして語らしめよ。』ピラト曰ふ、『言ふ可し。』ニコデモ曰ふ『我れ長老祭司及びレヒ平の徒會堂にあるユダヤ人等の群集の凡てに對して、「汝等は此人に何を爲さんことを求むるにや。」と曰へり。此人は誰れ人も爲さゞりし亦爲すを得ざる多くの奇跡と不思議なる事を爲せり。彼れを放免す可し、彼に惡事を爲す勿れ。若し彼が行ふ奇跡が果して神に屬するものとせば之に應驗ある可きも、若し入に屬すとせば、之に何等の效果あらんや。そは慥かに神に因りて埃及に遣されたるモーセは、主が埃及の王パラオの前に爲すことを彼れに命ぜし多くの奇跡を行ひたればなり。バラオの家來にしてヤンネとヤンブレなるものありけるが、彼れはモーセが行ひし奇跡の一をも行ひ能はざりき。然るに埃及人等は此等の人々を神々として崇めたり。彼等が行ひし奇跡は神より來らざりしが故に、ヤンネとヤンブレと此等の人々を信仰するに至りし人々は滅されたり。されば今此人を赦せ、此人は死罪に當らざればなり。』

ユダヤ人等ニコデモに曰ふ『汝は此人の弟子となりたれば、汝が彼れを辯護するは當然なり。』ニコデモ彼等に曰ふ『察するに代官も亦彼を辯護するが故に彼の弟子となるに至らん。皇帝は彼

れを位高き此の位地に任命せしに非ずや。』ユダヤ人は甚だしく怒りて、ニコデモに對し切齒扼腕せしが、ピラト、ユダヤ人等に曰ふ『汝等は眞理を聞きて何故に切齒憤慨するや。』彼等ニコデモに曰ふ『眞に、誠に、汝等が曰ふ如く我これを受けんことを切望す。』

六 ユダヤ人の一人進み出で一言するの許可を與へられんことを代官に願ひしに、代官曰ふ『若し汝何事かを言はんことを願はば言ふ可し。』そのユダヤ人曰ひけるは『我は卅八年病床にありて苦みしが、イエス來りて幾多の惡鬼及び種々なる病患は癒されしとき、二三の青年我を憐みて我と共に床全部を運びて彼の許に至らしめしに、イエス我を見て憐み「汝の床を取り上げて歩め。」と曰ひ給ひしにより床を取り上げて歩みたり。』ユダヤ人ピラトに曰ふ『癒されたる日は何の日なりしやを彼れに尋ねよ。』『癒されたるは安息日なり』と曰ひしに、ユダヤ人等曰ふ『彼が安息日に癒して諸惡鬼を逐出せりと吾等が言ひしは實に此事にあらずや。』と。

又た一人のユダヤ人進み出で、曰ひけるは『我は生れつきの盲人なりき。我は音を聞けども人の顏は見へず。イエス通りかゝり給ひし時、我れ「ダギテの子よ我を憐み給へ。」と聲を限りに叫びしに、彼は實に我を憐み、我兩眼にその兩手を置き給ひしが直ちに我目見ることを得たり。』亦他

のユダヤ人進み出で曰ふ『我は癩病人なりき、然るに彼れ一言にて我を癒しぬ。』と。

七 或る婦人遠くより叫びて曰ひけるは『我は血の出づる病に苦しめられしに、彼の衣に觸れたれば十二年の間苦みたりし血漏の病苦は止まりぬ。』ユダヤ人曰ひけるは『我等には婦人の證據は採用す可からずと定められたる律法あり。』と。

八 他の男女の群集叫びて曰ひけるは『此人は豫言者なり。彼は惡鬼を服せるものなり。』ピラト彼は惡鬼を服せし者なりと言ひし人々に曰ふ『然らば何故汝等の敎師等は彼に服せざりしか。』彼等ピラトに曰ふ『我等之を知らざるなり。』亦他の人々曰ひけるに『彼はラザロが死して四日經しに之を墓より甦らしめたり。』之を聽きたる代官は戰慄し、凡てのユダヤ人の群に向つて曰ひけるは『何故に汝等は罪なき血を流さんことを求むるや。』

九 こゝに至りピラトはニコデモ及びイエスは私通に因りて生れたるものにあらずと言ひし十二人を召して曰ひけるは、『人民の中に一揆あらんも知れず、我れ何を爲す可きや。』人々彼に曰ふ『我等之を知らず彼等をして其責を負はしめよ。』ピラトは再び凡てのユダヤ人の群集を召して曰ひけるは、『汝等は除酵節に一人の囚人を赦すの例あるを知る。こゝに其名をバラバとて一人の

死刑囚あり。彼は人を殺したるものにして獄中にあり。又た汝等の前に立つイエスあり。此人に就ては我れ罪あるを見ず。彼等の中孰れを赦さんことを汝等は願ふや。』彼等は『バラバを赦せ。』と叫びければ、ピラト曰ふ『然らばキリストと稱するイエスを如何にす可きか。』ユダヤ人等『彼れを十字架に附けよ。』と曰へり。而して亦他の人々曰ひけるは『若し汝はイエスが自ら神の子にして王なりと曰ひたるに之を赦せば、汝は該撒（カイザル）に對して忠ならず。汝は此人が王となり該撒が王たらざるを願ふや。』と。

ピラト怒りてユダヤ人等に曰ひけるは『汝の國民は常に反逆的にして汝の恩人に反抗したり。』ユダヤ人等曰ふ『如何なる恩人なるや。』ピラト彼等に曰ふ『汝等の神は苦しき奴隷より汝等を救ひ埃及より導き出して、乾ける地の如くに安全に海中を通過せしめ、曠野にては「マナ」を以て汝等を養ひ、鶉を汝に與へ、岩より水を出して汝等の渇を療し、且つ律法を與へたり。かく擁護せられたるにも拘らず汝等は神を怒らしめ、金の犢（こうし）を求むるに至りぬ、汝等は神を激怒せしむるに至りしが故に、彼は汝等を殺さんとせしが、モーセの切なる祈禱に因りて、汝等は死を免れたり。而して今汝等は我を強ひて皇帝を嫌ふものとす。』

彼れ審判の座より起ちて出行かんとせしに、ユダヤ人等叫びて曰ひけるは『吾等は該撒は王な

るもイエスは王にあらざるを知る。そは憖に博士等は彼を王として供へ物を持ち來りければなり。而してヘロデは博士等より王が生れたりと聞きて彼を殺さんことを求めしが、彼の父ヨセフは之を知りてイエスと其母を連れて埃及に逃れたり。ヘロデ之を知りてベツレヘムに生れたるヘブルの嬰兒を滅したり。』

ピラト、此等の事を聞きて怖れたり。而して群集叫び居たりしが故に、彼等をして沈默せしむることを命じて曰ひけるは『この人はヘロデが求めし所のものなるや。』ユダヤ人は『然り此人なり。』と曰へり。ピラトは水を取り、『我れは此正義しき人の血に關與せず、汝等自ら其責に當れ。』と曰ひながら、日輪に面してその兩手を洗ひしに、再びユダヤ人は叫びて曰ふ『彼れの血は我等と我等の子孫の上にあるべし。』と。

ピラトは己が坐せし審判席の幕を引くことを命じ、又たイエスに曰ひけるは、『汝の國民は王なりとの故を以て汝を訴へたり。此理由により尊むべき諸王の議定に從つて、汝は先づ鞭うたるゝこと、而して尚ほ汝が就縛せる園中にて十字架に懸けらる可きことを宣告す。二人の惡人デスマとゲスタも汝と共に磔せらるべし。』

イエス代官邸より出でしに二人の惡人も彼と共に出行きぬ。彼等は定められたる場所に

到り、人々その衣服を脫がしめ、腰に手拭を纏はしめて彼を十字架に附けたり。二人の惡人も亦た共に磔(はりつけ)にせり。イエス曰ひけるは『父よ、彼等を赦し給へ、そは彼等はその爲す所を知らざればなり。』兵卒等は各々イエスの衣裳を分配せしが、人々はイエスを眺めて立ち居たり。大祭司と有司等は共にイエスを嘲弄して曰ひけるは『彼は他人を救へり、今自らを救へよ。若し彼れ神の子ならば十字架より下りよ。』兵卒等來りて膽を混ぜたる醋を進めながら彼れを嘲弄して曰ひけるは、『汝はユダヤ人等の王なる汝自ら救へよ。』

ピラトは宣告の後ち、ユダヤ等が『彼はユダヤ人の王なり。』と曰ひしに從つて、希臘、拉甸、希伯來の語にて罪標を記すべしと命じたり。

磔せられたる惡人の一人イエスに曰ひけるは『汝若しキリストならば汝自らと吾等とを救へ。』デスマ之に應じ彼を責めて曰ふ、『汝は同罪に處せられたるに神を恐れざるか。我等は正しく訴ふるところなし、そは我等の行爲に適(ふさ)はしき罰を受けたればなり。されど此人は何の惡事もなさず。』彼れ又たイエスに向つて曰ふ、『主よ汝の國に於て吾を憶ひ給へ。』イエス曰ひけるは、『誠に實に我れ汝に告げん、汝は今日我と共に樂園(パラダイス)にある可し。』と。

一一 時に第六時頃なりしが、第九時迄大陽は黑くなりて、全地暗くなり神殿の幕は中央より

裂け、イエス大聲に叫びて『パダク・エプキド・ルエル』と曰へり、譯せば「父よ汝の手に我が靈を委ぬ。」との義なり。斯くて彼れ魂を渡しぬ。百夫長ありしことを目擊して神を崇め曰ひけるは『此は正しき人なり。』此光景を親しく目擊したる群集はみな胸を打ちて去りぬ。

百夫長は萬事を代官に報告せしが、代官とその妻は詳に之を聞きて非常に悲み、その日は飲食せざりき。ピラトはユダヤ人に使を遣して、『汝等はありし事を目擊せしや。』と尋ねしに、彼等は『例の如く日蝕ありたり。』と曰へり。

イエスの友は遙かに立ち、ガリラヤよりピラトに行きてイエスの屍を乞ひたるヨセフと名くる人、ピラトの議員にして、神の國を熱望し居た

や。』ユダヤ人彼に曰ひけるは『汝は如何にして會堂に來りしや、そは汝は彼の仲間のものなれば、汝は來らん世に於て彼と運命を共にすべければなり。』ニコデモ曰ふ『實に然り。』ヨセフも亦た同樣に進み出で彼等に曰ひけるは『我はイエスの屍を求めしが故に何故に、汝は我に對して怒れるや。視よ我れ淨き白布にて彼を包み新らしき墓に入れ、而して墓の入口に石をころばし置きぬ。汝等は彼を十字架に附けるを悔ゆるとなく、鎗を以て彼を刺したるを見れば、汝等はかの正しき人を虐待したり。』ユダヤ人ヨセフを捕へ一週間の首めの日迄拘束して曰ひけるは、『安息日始まりしが故に我等は汝に何事をも爲すを得ず。汝も亦た葬らるべき者なれど、汝の肉は空の鳥に與へらるべし。』ヨセフ、ユダヤ人に曰ひけるは『是等は生ける神と聖なるダヰデを誹謗したる高慢なるゴリアの語なり。神は豫言者によりて「仇を返すは我にあり、我れ必ず之に報いん」と曰ひ給へり。今肉に於て割禮を受けざるも、心に割禮を受けたるもの、水を取り、日輪に面して手を洗ひて「吾れ此の正しき人の血に關與せず、汝等自ら其責を負へ。」と曰へり。而して汝等ピラトに答へて「彼の血は我等と我等の子孫にかゝはるべし。」と曰ひたりき。今我れ汝が曰ひし如く、神の怒汝の子孫に臨むことなからんを恐るゝなり。』ユダヤ人之を以つて彼等の魂に苦を感ぜしかば、ヨセフを捕へて窓なき室に拘禁し、番兵は其入口を守り、ヨセフが拘禁せられし、室の戸を封じ置けり。

安息日に至り會堂の役人祭司及びレギの徒は、週の初日に凡てのもの會堂に集る可き布告を發したり。朝早く起きて會堂に集りし凡ての群集は如何なる死刑によりて彼れを殺す可きやを相議したり。議員たち座に着きければ、彼等は出來る限りの侮辱を以て彼を連れ來るを命じたり。然るに室の戸を開きたるに、彼れ見へざりければ、凡ての人々驚愕の餘り恐怖に打たれたり。そは封印はその儘にありてカヤパは其室の鍵を持ち居たればなり。斯くて彼等は最早やイエスの爲めにピラトの前にありて語りし人々に手を附けざりき。

一三

彼等尙ほ會堂内に坐しヨセフに就きて驚き居りしに、イエスの弟子等が彼の死體を盜まざらんが爲めにユダヤ人がイエスの墓を警衞せんとてピラトに乞ふて得たる衞兵來れり。彼等來りて、其の見しことを會堂の役員と祭司とレギの徒に報告せり。卽ち『大なる地震ありて、我等は天使の天より下りて墓の口より石をまろばし、その上に坐して雪の如く電光の如く輝きたるを見たり。吾等は甚しく恐れて死したる人々の如く横はりぬ。我等天使が、墓の傍に留まりし婦人等に向ひ「恐るゝ勿れ、我れ汝等が十字架に附けられたるイエスを求むるを知ればなり。彼れはこゝに在らず、彼が曰ひし如く彼は甦りたり。來れ、主がありし所を見、速かに行きて、彼は死より甦りてガリラヤにあることを彼の弟子達に告げよ。」と曰ひし聲を聽きたり。』と。

ユダヤ人曰ひけるは『彼は如何なる婦人に語りしや。』 番兵曰ひけるは『彼は知らず。』 ユダヤ人曰ふ、『此事は何時にてありしや。』 番兵曰ふ、『何故に汝等は彼等を捕へざりしや。』 番兵の人々曰ふは『我等は日光を見るを豫期せざりし故、恐怖して死人の如くなりぬ。如何にして彼等を捕ふるを得んや。』 き給ふ如く、我れ斷じて汝等の言を信ずる能はず。』 番兵の人々ユダヤ人に曰ひけるは『汝等は此人に關して多くの驚く可き奇跡を見たるに拘らず、尚ほ汝等は彼を信ぜざるに、如何にして我等を信ずるを得んや。汝等主が活き給へるを誓ひしは慥に善し、そは彼れ誠に活きて在ませばなり。』 番兵の人々再び曰ひけるは『我等は汝等がイエスの死體を得んことを求めたる人を一室に閉ち込めて戸に封印までしたるに、汝等之を開きて彼れを見ざりしと聞けり。さらば汝等が守りしその人を我等に與へば、我等はイエスを汝等に與へん。』 ユダヤ人曰ひけるは『ヨセフは己れの市に去れり。』 番兵の人々ユダヤ人に曰ひけるは『天使の曰ひしが如くイエスは甦りてガリラヤに在り。』

ユダヤ人は此等の言を聞きて甚だしく恐れて曰ひけるは『吾等は彼等が誰れなりしやを知らず。』 ユダヤ人曰ふ、『眞夜中なり。』 イエスに行かざるやう注意せざる可らず。』 ユダヤ人相議し 多額の金を集め、之を兵卒共に與へ

て曰ふ、『「我等が眠れる間に彼の弟子等夜中に來り彼を盜みたり。」と言へ。若し此事代官の耳に入らば、我等は彼を說き、汝等をして災なからしむ可し。』と。兵卒等はその金を受け取りて命ぜられし儘に語りぬ。

一四　祭司ピネース、敎師アダス及びレギの徒に曰ひけるは『我等はイエスとその弟子等がマミルクと呼べる山に坐するを見たり、彼れ己の弟子等に曰ひけるは「萬の國々に行き凡ての人々に說敎せよ、信じて洗禮を受くるものは救はれ、信ぜざるものは罰せらるべし。而して此等の休徵は信ずるものに從ふ可し、卽ち彼等は我名に於て惡鬼を逐ひ出し、新らしき語を語り、蛇を捕ふ可し、或は彼等如何なる恐ろしきものを呑むとも毫も害せられざる可く、病人に手を置かば、病人は癒ゆるべし。」イエスその弟子等にかく語りしに、我等彼が天に連れ行かるるを見たり。』と。

長老、祭司、及びレギの徒曰ひけるは『イスラエルの神に榮光を歸し、汝が今我等に語りし事を眞實に見聞したるや否やを彼れに告白せよ。』　其等の事を語りたる人々曰ひけるは『我等の列祖アブラハム、イサク、ヤコブの神なる主は活き給ふ如く、慥かに我等は此等の事を聽き彼が天に連れ行かれしを見たり。』　長老、祭司、レギの徒彼等に曰ふ、『汝等はこの知らせを我等に與ふる爲

に來たりしや或は神に祈禱を捧ぐる爲に來りしや。』　彼等曰ふ、『神に祈禱を捧ぐる爲めなり。』と。
長老、祭司長、レギの徒彼等に曰ひけるは『若し汝等神に祈禱を捧ぐるために來りしならば、何故
に凡ての人々の面前に於て是等の馬鹿らしき物語を語りしや。』　祭司ピネース、教師アダス、レギ
のハガイは會堂の役員祭司等及びレギの徒に曰ひけるは『若し吾等が語りし所視し所にして罪あ
らば、實に我等は汝等の前にあり、汝等が目に善と思ふ如く我等に爲すべし。』　彼等は律法により
て誰にも最早や是等の物語を爲さざるやう彼等に誓はしめ、而して彼等に飲食せしめ又た金を與
へて彼等を市より出し、又た三人の者を遣して彼等をガリラヤに送りぬ。

此等の三人はガリラヤに行きたるに大祭司と會堂の役員及び長老等は共に會堂に入りて戸を閉
ぢ大なる悲を以て『是れイスラエルに起りし奇跡なるや。』と曰ひて哀めり。アンナスとカヤパ曰
ひけるは『何故に汝等は斯くも甚だしく感動せるや、何故に汝等は泣くや。汝等はイエスの弟子
等が墓を守るものに金を與へて、天使來りて墓の入口にある石をまろばしたりしと言ひふらせと
彼等に命じたるを知らざるか。』　祭司と長老等曰ひけるは『彼の弟子等が彼の死體を盜みたりと
するも、如何にして生命が彼の體に入り、彼はガリラヤを巡回するに至りしぞや。』　彼等、此等の
事に對して答ふる能はざりしにより甚だしく躊躇したる後ち『割禮を受けざるものを信ずるは吾

等に正當ならず。』と曰ひたるのみなりき。

一五 ニコデモ起き上りユダヤ人の評議會の前に立ちて曰ひけるは『汝等主の民よ、汝等はガリラヤより來れる此等の人々が神を畏るゝの人又た眞面目にして貪慾を嫌ひ、平和を好める人なるを知らざるに非ず。而して彼等は誓約して宣言し「吾等はマミルクの山上にイエスが其弟子等と共に居るを見、又た彼は我等が彼より聞きし事を教へ、彼が天に連れ行かるゝを視たり。と告白したりき。然るに誰も如何なる形ちにて昇り行きしやを彼等に尋ねたるものなし。そは慥かに聖書の中に敎へらるゝが如く、エリヤも亦天に連れ行かれたればなり、エリシャ大聲にて叫びしにエリヤは己れの羊の裘をエリシャに投げたればエリシャ其羊皮をヨルダン河に投げて之を渡りエリコに到りぬ。豫言者の子等彼に遭て曰けるは「エリシャよ、汝の主なるエリヤは何處に居るや。」彼曰ひけるは「彼れは天に連れ行かれたり。」豫言者の子等エリシャに曰ひけるは「或る靈彼を捕へて一山嶽の上に投ぜざりしや。我等僕を伴ひて彼を捜索す可し。」遣し、或はキリストが靈によりて連れ行かれしを知れり。今我が言ふ所に耳を傾けよ、我等イスラエル國中到處に人を彼等はエリシャを説き勸め、彼は彼等と共に行けり。彼等三日の間彼れを探し索たるも彼を得ず、斯くて彼が連れ行かれし山の上に投げられしにあらざるやを査べしめよ。』此動

議は全議員の賛成を得、彼等はイスラエルの各地に人々を遣はしてイエスを
ざりき。されど彼等アリマテヤにてヨセフを發見せしが、誰れも敢て彼に手を
　彼等は長老、祭司、及びレギの徒に報告して曰ふ、『我等はイスラエルの到る
エスを得ず只アリマテヤに於てヨセフを得たりき。』と。彼等はヨセフのことを聽て非常に悦び、
イスラエルの神を頌榮せり。會堂の役員、祭司、及びレギの徒は彼等がヨセフに會ふべき方法に
就て會議を催したる後ち、一枚の紙を取りてヨセフに贈りぬ。書面は左の如くなりき。
『汝安かれ、我等は神と汝とに背きて罪を犯したるを知れり。我等凡て悲みきたるが故に、汝
が汝の先祖等と汝の子孫に來ることを許さんことをイスラエルの神に祈れりき。我等は戸を開きた
るに汝を見ざりき。我等は汝に背きて惡しき相談を議したることを知る。されど、おゝ尊むべき
父ヨセフよ、主は汝を護りて自ら汝に背きたる我等の謀を風の如く散し給へり。』
　會堂の役員、祭司及びレギの徒は、凡てのイスラエルの中よりヨセフ自ら親みありたるヨセフの
友七人を選び、彼等に吾等に來るべし、されど若し彼れそれを讀まざれば彼は吾等を取りてそれを讀まば
彼れ汝等と共に安きを告げて歸り來れ。』彼等は人々を祝福して行かしめたり。人々はヨセフに對して敵意あると
明かなり。彼れ

に來りて恭しく彼に敬禮して曰ひけるは『汝に平安あれ。』彼等は書面の卷物を彼れに與へければ、ヨセフはそれを受け、手紙を讀みての人々に平安あれ。』彼等曰ひけるは『イスラエルが無辜の血を流さざるやう彼等を救ひ給ひしてそれを卷き、神を讃めて曰ひけるは『イ主なる神は讃む可き哉、天使を送りてその翼の下に我を覆ひ給ひし主は讃む可き哉。』斯くて彼は彼等の前に食を供しければ、彼等は飲食してその處に眠りぬ。

彼等朝早く起き上りて祈禱せり。ヨセフは己れの驢馬に鞍を置きて人々と共に出立し、聖都エルサレムに來りぬ。凡ての人々ヨセフに遭ひて叫び曰ひけるは『汝の入京に平和あれ。』彼れ凡ての人々に曰ふ『汝等に平安あれ。』而して彼れその人々に接吻したり。人々はヨセフと共に祈り、彼等は彼れを見て驚きたり。ニコデモは己れの家に彼れを歡迎して盛なる宴會を開き己れの家にアンナスとカヤバと長老等と祭司等とレギの徒を招きたり。彼等はヨセフと共に飲食して悦び聖歌を謳ひて後ち各々は己が家に進み行けり。されどヨセフはニコデモの家に留まりぬ。

準備日なりし翌日、會堂の役員と祭司等及びレギの徒朝早くニコデモの家に行けり、ニコデモ彼等に遭つて曰ひけるは『汝と凡て汝の家族とヨセフの家族に平安あれ。』彼等曰ふ『汝とヨセフと凡ての議員座に着きければ、ヨセフは彼等を己れの家に連れ來りぬ。斯くて凡ての議員

アンナスとカヤパの間に座に着きぬ、而して誰れも彼に一言だも言ふものなかりき。ヱけるは『何故に汝等は吾れを呼びしや。』而して彼等はヨセフに語るやうニコデモその口を開きヨセフに曰ひけるは『父よ、汝は尊むべき教師と祭司等と、レヰ人の徒が汝より學ぶ所あらんことを欲するを知るべし。』ヨセフ曰ひけるは『尋ねよ。』アンナスとカヤバは律法を取りヨセフに誓はしめて曰ひけるは『イスラエルの神を頌栄し彼れに懺悔せよ、そは豫言者ヨシュアに因りて誓はしめられたるアカルは自ら僞證するとなく、凡てを彼に顯はして一言をも彼れに隱さざりき。故に汝も亦一言をも吾等に隱す勿れ。』ヨセフ曰ふ『吾れ一言をも汝に隱さべし。』アンナスとカヤバ、ヨセフに曰ひけるは『汝はイエスの屍を乞ひ得て淨き白布にて之を包み、墓の中に置きたるが故に我等は憂愁して悲めり。之れに因り我等は窓無き室の中に汝を拘禁して堅く閉し、戸の上に封印を施し、番兵をして汝が拘禁せられし所を守らしめたりき。週間の首日に至りて我等は戸を開き見たりしに、汝を見ず、吾等は非常に悲みたり。昨日に至る迄主の凡ての人々は驚愕と恐怖に沈みぬ。今汝に起りし事を吾等に語れ。』

ヨセフ曰ひけるは『準備の日の第十時頃汝等は我を拘禁せしが、我れは安息日中留まりぬ。眞夜中に我れ起ちて祈禱し居りしに、汝等が我を拘禁したる室は四隅に釣り上げられ、我は目に電光

の如き光明を見て恐れて地に倒れしが、或る人我手を取りて、我が倒れたる場所より我を運び去れり。吾が身は頭より足に至る迄水氣を注がれ、馥郁たる香せり。彼れ我が顔を拭ひ接吻して曰ひけるは「恐るゝ勿れヨセフよ、汝の目を開けよ、而して汝に語るものは誰れなるかを見よ。」我れは仰ぎてイエスを見たり。我れ怖れ震ひしが正に幻ならんかと思ひしが故に、我れは誡を唱ひしに彼れ吾と共に其誡を唱へたりき。幽靈もし人に遇ひて誡の唱へらるを聞かば直ちに消ゆるは汝等の知る處なり。彼が我と共にその誡を唱へしを見て、我そのものに曰ひけるは「ラビ・エリアよ。」彼れ我に曰ひけるは「我はエリアにあらず。」我彼に曰ひけるは「我主よ汝は誰れなるや。」彼れ我に曰ひけるは「我は汝が屍をピラトに乞ひたりしイエスなり、汝は淨き白布を以て我を覆ひ、我顔に布を被せ汝の新き墓に我を葬りて墓の入口に大なる石をまろばしたり。」われかく我に語りし彼に曰ひけるは「我が汝を葬りし場所を我に示せ。」彼れ我を連れ行きて我が彼を葬りし所を我に示せり。而して麻布も顔の覆も内に在りき。斯くて我れ其イエスなりしことを知れり。彼れ我手を取りて吾が家の戸が閉ちられあるにも拘らず中に導き入れ、我を我寢床に連れ行きて我に曰ひけるは、「汝に平安あれ。」彼れ我に接吻して尚ほ曰ひけるは、「四十日の間汝の家より出で行くなかれ、視よ吾れはガリラヤにある我兄弟等に行けばなり。」

一六 會堂の役員、祭司等及びレギの徒はヨセフより是等の語を聞きて地に伏し死せるものゝ如くなり、第九時迄何事も飲食せざりき。ニコデモはヨセフと共にアンナスとカヤバ、祭司等とレギの徒を說き勸めて曰ふ『起きて立ち上れ、而してパンを食して汝等の靈を强めよ、明日は主の安息日なればなり。』彼等は立ち上り、神に祈禱せり。人々飲食して各々の家に歸へりたり。

安息日に至り我等の教師、祭司及びレギの徒は互に論じ居りしが、彼等曰ひけるは『我等に臨みし此怒は何事ぞや、そは我等は彼の父と母とを知ればなり。』一教師なるレギ曰ひけるは『我れ彼の兩親は神を畏れて自ら祈禱を怠りしとなく、又た一年に三度十分の一を獻ずるを知る。イエスが生れしとき、其兩親は彼を此處に連れ來り、神に祭物と燔祭を供へたり。其時大なる教師シメオン彼れを抱き上げ曰ひけるは、「主よ今汝の言に從ひて汝の僕を安全に逝かしめ給へ。そは吾眼は汝が諸(すべ)ての民の前に備へ給ひし救を見たればなり。是れ卽ち異邦人に賜へる啓示の光にして、汝の民イスラエルの榮光なり。」シメオンは彼等を祝し彼の母マリヤに曰ひけるは「我れは此子に就て善き音を汝に與ふ。」マリヤ曰ひけるは「我主よそれは善き事なり。」シメオン彼女に曰ひける は「善きことなり、見よ、彼れイスラエルの多くの人が或は倒れ或は起たん爲め、又た言ひ逆らひを受くる徴のために置かる、而して衆の心情の念が露れん爲め劍また汝の靈を刺し透すべし。」』

彼等教師なるレギに曰ふ『如何にして汝は是等の事を知れるか。』レギ彼等に曰ふ『汝等は我が彼より律法を學びたるを知らざるか。』議員彼に曰ふ『我等は汝の父を見んことを願ふ。』彼等は彼の父を招き、彼に尋ねたるに、彼れ彼等に曰ひけるは『何故に汝等は我子を信ぜざるや。聖にして正義(ただ)しきシメオン自ら彼れに律法を教へたり。』議員、ラビ・レギに曰ひけるは『汝が語りし言は眞なるか。』彼曰ふ『眞なり。』會堂の役員、祭司及びレギの徒互の間に曰ひけるは『來れ、吾等、かの來りて彼の教訓と彼の昇天に就きて語りしガリラヤにある三人を招き、如何にして彼等は彼が天に連れ行かれしを見たるやを語らしめよ。』この建議は凡ての賛成を得て、彼等は前にガリラヤに行きし三人を遣して曰ひけるは『ラビ・アダス、ラビ・ヒネース、ラビ・ハガイに告げよ、「汝等及び汝等と共なる凡てに平安あれ。大なる問題は議員の中に起りたれば、我等はこの聖なる場所エルサレムに汝等を招かんとて汝等に遣されたり。」と。』

其人々ガリラヤに出立し、彼等が坐して律法を調ぶるを見たりしが、彼等は彼等の平安なるを祝したり。ガリラヤにありたる人々己等の許に來れる人々に曰ひけるは『凡てのイスラエルに平安あれ。』彼等は『汝等に平和あれ。』と曰ひしに、彼等再び彼等に曰ひけるは『何故に汝等來りしや。』遣されたりし人々曰ひけるは『議員は汝等を聖都エルサレムに招きたり。』人々は彼等が議

員によりて尋ねられたりしことを聽きて神に祈禱を捧げ、
全にエルサレムに向つて出立せり。
翌日議員は會堂に坐して彼等に尋ねて曰ひけるは『汝
てその十一人の弟子等を教ゆるを見しや、而して汝等彼が
に答へて曰ひけるは『吾等は彼が天に連れ行かれしを、見たるが儘に語りしのみ。』
アンナスは『彼等を互に離して置き、彼等の言ふ所が一致するや否やを見るべし。』と曰ひし
より、彼等は一同を互に離しめたり。而して彼等は初めにアダスを召して曰ひけるは『如何にし
て汝はイエスの昇天を見しや。』アダス曰ひけるは『彼は尚ほマミルクの山上に坐して己れの弟
子等を教へ居りしが、吾等は雲の彼と其弟子等を覆ふを見たり。雲は彼れを天に連れ行きたるに
由り、弟子等は地上に其顏を伏せたり。』彼等は祭司ピネースを呼び亦尋ねて曰ひけるは『如何に
して汝はイエスの昇天を見しや。』而して彼れ同樣に語れり。彼等又ハガイに尋ねたるに、彼も亦
た一樣に語りたりき。議員曰ひけるは『モーセの律法は二人或は三人の口に因りて語らば立證せ
らるべしと教へたり。』教師ブテム曰ひけるは『エノクは神と共に歩みけるが、彼は居らずなり
ぬ、そは神彼れを取りたればなり。』と律法に記されたり。

の死は我等之を聞けども之を視ざりき、そは主の律法に記されたり曰く「モーセは主の口より死せしが、誰も今日に至る迄彼の墓を知らず。」と。』而してラビ・レギ曰ひける『イエスを見しときに何故に彼は「視よ彼はイスラエルの多くの人の或は倒れ或は起たん爲め、また言ひ逆らひを受くる徴の爲に置かる。」と曰ひしや。』ラビ・イサク曰ひける『「視よ我れ汝の顔の前に使を遣さん、彼れ汝に先ちて行き凡ての善き道に汝を守らん、そは我名は彼に求められたればなり。」と律法に記されたり。』

その時アンナスとカヤパ曰ひけるは『汝等は誤りなく誰れもエノクの死を見ざりしことと、誰もモーセの死を名づくること能ざりし事がモーセの律法に記されたることを曰ひぬ。而かもイエスはピラトの前に審かれ、我等は彼がその顔を打たれ、唾せられ、兵卒等が彼れに荊の冠を被ぶらせたるを見たりき、彼れは筥にて鞭たれ、ピラトより宣告せられ、クラニュムにて十字架に附けられ、二人の盜人亦た彼と共に磔せられたりき。彼等は彼に膽と醋とを混じたるものを飲ましめ、兵卒ロンギヌスは鎗を以て彼の脇腹を刺したりき。吾等の尊む可き父なるヨセフは彼に屍を乞ひ、彼は其言の如く甦りたり。而して三人の教師が曰へるが如く、我等は彼の昇天を視たりき。又ラビ・レギは、ラビ・シメオンが語りし事と、彼れは「視よ彼れはイスラエルの多くの人の或は倒れ

或は起きん爲め、又た言逆らひを受くる徴の爲めに置かる。」と曰ひしとを證明したり。』と。凡ての敎師等も亦た主の凡ての人々に曰ひけるに『若し此れ主より出でしならば汝等おゝヤコブの家よ、木に懸りし凡てのものは咀はれたるものなり。」と記されたるを知らざる可らずと知りながらも汝の目に怪異とする「天地を造らざる神は滅さるべし。」と敎へらる。』祭司等及びレギの徒互に曰ひけるは『若し彼の記憶がヨベルと稱する年に至らば、そは永遠に續くべし。而して彼は己れの爲めに新しき民を起せしとを知るべし。』其時會堂の役員と祭司及びレギの徒凡てのイスラエル人に告げて曰ひけるは『人の手の工を拜する人は呪はれ、造り主に勝りて造られたるものを拜する者は咀はるべし。』而して凡ての人々曰ひけるは『アメーン、アメーン。』

凡ての人々主を讃揚して曰ひけるは、『頌むべきかな、主はその語り給ひし所に從ひて其民イスラエルに安きを賜へり。彼れ其僕モーセに語り給ひし善き言は一も無爲に終らざりき。主なる我等の神は主が我等の先祖等と共なりし如く我等と共にありて、我等を滅し給はざらんことを願ふ。即ち我等が彼に心情を傾け、凡て彼の道を歩み、彼れが我等の列祖たちに命じ給へる彼の誡と彼れの判を守り得んが爲め我等を滅し給ふ勿れ。斯くて主はその日に凡ての地上に王となり、我等の主は一にして彼の名は只一つとなるに至らん。主は我等の王なり。彼れ我等を救ひ給はん。噫

主よ何處にも汝の如きものなし。おゝ主よ汝は大なり、汝の名は偉なり。主よ吾等を癒し給へ、而して吾等は全く癒さるべし。主よ吾等を救ひ給へ、而して吾等は救はるべし。そは吾等は汝のものにして汝の家督なればなり。主は其大なる名のために己れの民を棄て給はざるべし、そは主は吾等を己れの民と爲すことを始め給ひたればなり。』

一同は頌榮の歌を謳ひて神に榮光を歸しつゝ各人皆己が家に歸り行きぬ。そは榮光世々限なくものなればなり。アメーン。

後篇　耶蘇黄泉行記

一（一七）ヨセフ曰ひけるはイエスの甦（よみがへ）りしを怪異とするか。されど彼は只獨り甦りたるにあらずして、彼また多くの人を甦らしめ、エルサレムの人々多く之を見たるは驚くべきことなり。若し汝等は他の人々を知らずとするも、汝等は少くともイエスを受けたるシメオンと、今彼等の墓は開かれて内に何物もなく、彼等は生きてアリマテヤに住し居れるを知れるならん。我等は過ぐる日に彼等を葬りしばかりなるに、

人々を遣して其等の墓の開かれて空虚なるを知りたり。ヨセフ曰ひけるは『我等アリマテヤに行きて彼等に會はん。』

されば祭司長アンナスとカヤパ及びヨセフ、ニコデモ、ガマリエル及び他の人々は彼れ等と共に起ちてアリマテヤに行き、ヨセフが語りし人々を見たり。彼等は祈禱を捧げて互に挨拶せり。その後ち彼等は彼等と共にエルサレムに來り、彼等を會堂に連れ來りて戸を閉ぢ、その眞中にユダヤ人の舊き契約を置きて祭司長彼等に曰ひけるは、『我等は汝等がイスラエルの神にして主なるものに依りて誓ひ、如何にして汝等は甦り又た誰れが死より汝等を甦らしめたるかを正しく語らんことを願ふ。』甦りたりし人々之を聽きてその顏の上に十字の章を畫して祭司長に曰ひけるは、『吾等に紙と墨と筆とを與へよ。』彼等は此等の品を持ち來りしに、彼等坐して此く記したり。

二(一八) 世界の復活にして生命なる主イエス・キリストよ、願くは汝が復活と汝が黄泉に於て行ひ給ひし多くの奇跡を、詳しく語り得る恩惠を吾等に與へ給はんことを。我等は其時世の初めより眠りたる凡ての人々と共に黄泉にありしに、眞夜中の頃日輪の如く思はれたる光明起りて此等暗黒の地を照し、我等は悉く照されて互に見ることを得たりき。直ちに我等の先祖アブラハムは族長等及び豫言者と共に會合し、彼等は喜悦に溢れて互に曰ひ合ひけるは『この光明は大なる光明

の源より來れるものなり。』その處に居りし豫言者イザヤ曰ひけるは『この光明は父と子と聖靈よ
り出でたるものなり、卽ち我が生前に豫言して「ゼブロンの地、ネフタリの地、暗に坐したる人
々は大なる光明を見たり。」と曰ひし所の人なり。』
　その時嚮野より一隱者その中に入り來りぬ。族長等彼れに曰ひけるは『汝は誰れなるや。』彼
れ曰ひけるは『我は豫言者の最終のものにして、神の子の途を直くし、人々に罪の赦を得んがた
めに悔改めを宣したるヨハネなり。神の子我に來り給ひしにより、我れ遠くより彼を見て人々に
曰ひけるは「世の罪を負ふ神の小羔（こひつじ）を視よ。」我れ我手にてヨルダン河にて彼れに洗禮を施しける
に、聖靈鳩の如く彼れの上に下るを見たり。又た神卽ち聖父より聲あり、「こは我が心に適ふ我が愛
子なり。」と曰ふを聞けり。此故に彼また我を此處に遣し、神の獨子が此處に來り給ふを宣べしめ
給へり、これ彼を信ずるものは救はれ彼を信ぜざるものは罰せられんとてなり。故に我れ今また
汝等すべてに告ぐ、汝等は凡て彼を見ん時に彼れを崇拜すべく、又た汝等が空なる上の世界にて
偶像を拜したる罪と其他汝等が犯したる罪を悔ひ改むる時は今よりほかなく、この機會を失して
は復た此の如き機會なかるべし。』

三（一九）ヨハネ斯く黃泉にある人々に敎へけるに最初に造られたる始祖アダム之を聞き、その

子セスに曰ひけるは、『我子よ、我死すべき運命の定りしとき、我れ汝を何處に遣したるかを人々の先祖等と豫言者たちに語らんことを願ふ。』セス曰ひけるは、『豫言者等と族長等よ聞け、最初に造られたる我父アダム嘗つて死に終らんとするに當り、彼れ我を遣して樂園の入口に近く行きて神に懇願せしめ、神が天使をして我を導き憐みの木に至り、我をして油を取り來りて父に塗り、彼がその病より復た起ち得るやう請はしめければ、我れ其の如く爲せり。祈禱の後ちに主の使來りて我れに曰ひけるは「セスよ、汝は何を求むるや。汝は病人を復起せしむる油を求むるや。此は今得らるべきにあらず。故に行きて汝の父に告げよ、世界の創造より五千五百年の終りし後ち神の獨子はこの世に來りて人となるに至らん、彼此油を彼にそゝぎて彼を起さしめ、水と聖靈を以て彼れ及び彼より出でたる子孫を洗ひ淨め、斯くて彼は諸々の病より癒さるゝに至ると云へども、而かも今は尙ほ不可能なりと。」』族長等と豫言者等は此等の語を聞きて非常に悦びたり。

四(二〇) 凡てのものかく喜悦の中にありしとき、暗黑の相續者サタナ來りて黄泉に曰ひけるは『吁(あ)、凡てを呑込みて常に飽くことなきものよ、我語を聞け。ユダヤ人の中にイエスと名けられたるものあり、自ら稱して神の子と呼べり。されど人なるが故に我等の工(わざ)に誘はれたるユダヤ人

の爲めに彼は磔刑になりぬ。而して彼れ今死したれば吾等はこゝに彼れを拘禁するやう準備せよ。そは我れ彼れが人なるを知る。且つ我れたればなり。」と曰へるを聞きに會する毎に彼等を迫害したればなり。彼れ又た上の世界にて人と共に住みたるとき多くの惡事を我に爲せり。一言にて彼等を癒したり。又た我が葬らんと準備したる多くのものをも只一言にして再び生き還らしめたり。』

黄泉曰ひけるは『此人は斯く唯一言にて此の如き大なる事を爲す程能力強くあるや。若し彼れその如きものならば、汝は彼に抵抗することを得るや。若し彼れその如きものならば、誰れか能く彼れに抵抗し得るものあらんやと思はるゝなり。若し汝は彼の恐るべき死を聞けりと言はゞ彼れは汝を嘲けり、且つ笑ひながら且つ强き手にて汝を捕へんと欲して斯く曰へるならん。噫、汝禍なる哉、未來永劫禍なる哉。』

サタン曰ひけるは、『吁、凡てを呑み盡し且つ飽くことなき黄泉よ、汝は我等の共同敵のことを聞て斯くも恐るゝや。我は彼を恐れざれど、ユダヤ人の中に働くが故に、ユダヤ人は彼れを磔刑にして而して醋と膽とを混ぜて彼に飲しめたり。されば彼れ來らんとき、汝は彼れを捕へて放さ

さざるやう準備せよ。』

黄泉答へけるは『暗黒の相續者、破滅の子なる惡魔よ、汝はいま、汝が葬らんと準備したる多くのものが彼の只一言にて再び甦れることを我に語りぬ。若し彼れ墓より他の者を救ひたらんには、我等は如何なる能力に因り如何にして彼を捕へ得可きや。そは先頃、我れ既にラザロと名けられたる一の死人を呑み下ろしたるに、直ちに生けるものゝ一人、只一言にてわが腹より強ひて彼れを引き出したればなり。我れ汝が語るものは則ちそれなりしと思ふ。故に我等若しこゝに彼れを受けなば、或は他のものにも危險の起るなからんを恐る。視よ我が永遠より呑みたる凡ての人々が騷動せるが如く、我れ我腹中に苦痛を覺ゆ。曩にラザロを取られしは我には香ばしきことにあらずと思はる。そは彼れは死したる體の如くならず、鷲の如く我より飛び出で、地は忽ち彼れを投げ出したり。故に我れ、汝の利益と我利益の爲めに、こゝに彼を連れ來らざるやう汝に懇願す。そは我れ、彼が此處に來るは全ての死者を甦らせん爲めなりと思ふ。而して我れ汝に告ぐ、若し汝こゝに彼を連れ來らば、我れ我等が住居する暗黒により誓つて曰はん、死者の一人だに其あとに殘さるもの斷じてなかるべし。』

五(三一) 惡魔と黄泉とは互にかく語り居りしに、雷の如き大なる聲ありて曰ひけるは、『汝司た

ちよ汝等の門を上げよ、永遠の門よ開け、榮光の王入來し給ふ。』黄泉は之を聞きて惡魔に曰ひけるは『若し汝爲し得れば出で行きて彼に抵抗せよ。』茲に惡魔は外に出で行きたり。その時黄泉その惡鬼等に曰ひけるは『能く强く眞鍮の門を閉し、鐵の閂を堅ふして我が鐵栓を警戒し、汝等直立して萬事休すべし。』

列祖等は之を聞き、凡て彼れを誹謗して曰ひけるは『凡てを呑み盡くして飽くことなきものよ、榮光の王の入り給ふやう開け。』豫言者ダギデ曰ひけるは『吁(ああ)盲目なるものよ、われ世に在りし時豫言して「汝司たちよ、汝等の門を上げよ。」と曰ひたるを知らざるか。』イザヤ曰ひたるを知らざるか。』

そのとき亦聲ありて曰ふ『門を上げよ。』黄泉は再びその聲を聞き、彼れは恰も知らざりしが如く答へて曰ひけるは『榮光の王とは誰れなるか。』主の使たち曰ひけるは『强く力ある主、戰に力ある主なり。』此等の語にて直ちに眞鍮の門は破碎し、鐵栓は折れ、縛られ居りし凡ての死人は獄中より出で來り、我等も彼等と共に出でぬ。榮光の王は人の像にて入り給ひ、黄泉の凡ての暗黑の場所は光明輝りわたりぬ。

六(二二) 黄泉は直ちに呼びぬ、『我等は打ち破られたり、我等は禍なる哉。されど此の勢とを持てる汝は誰なるや、罪を犯さずしてこゝに來り、小さく見ゆれども尚ほ大なる力あり、卑く見ゆれども高められ、奴隷にして主たるもの、死者と生者を支配する汝は誰なるや。汝は十字架に釘附けられて墓の中に置れ、而かも今汝は自由になりて凡て我等の權能を亡せり。されば汝は十字架と死に由りて全世界を受け闢ぐ可きものにして、頭目惡魔がイエスなるか。』

そのとき榮光の王は、頭目惡魔の頭を捕へて己れの使にわたして曰ひ給ひける は『鐵鏈を以て彼の手と足と首とを縛めよ。』斯くて彼れ黄泉に之をわたして曰ひける は『彼れを取り、彼れを守りて我が再び現はるゝ時まで固め置けよ。』と。

七(二三) 黄泉惡魔を受取り曰ひけるは『火と刑罰の相續者、聖徒の敵なるベルゼブルよ、如何なる必要ありて汝は榮光の王を十字架につけ、彼を此處に來らせて我等の能力を奪ふに至らしめしや。歸りて只汝が智慧の木に依りて得たる凡てのものゝ外は、一人の死者もわれに遺されざることを視よ、而して凡て汝の悦びは悲に變らん、榮光の王をさんと欲したる汝は却つて自ら死するに至る可し。そは我れ汝を禁錮すべく汝を得たるが故に、

汝は經驗によりて我が幾多の惡事を汝に加ふるを知るべければなり。吁、惡魔の首、死の始にして、罪惡の根本、一切惡事の終局よ、汝はイエスが如何なる惡事を、汝に行ひたればとて、彼の破滅を計畫せしや。加何にして汝はかく惡事を敢行せんと決心するに至りしや。如何にして汝はかく惡事を敢行せんと決心するに至りしぞ。加何にして汝は此暗黑の中に下さんとて自ら努力し、而かも彼によりて永遠よりの總ての死者を奪はれしぞ。』

八（二四） 黃泉かく惡魔と論じける間に、榮光の王はその右の手を伸べて吾等の始祖アダムを扶け起し、又た他の人に向ひて曰ひ給ひけるは『彼れが觸れし木に因りて死したるものは凡て我と共に來れ、視よ我れ再び十字架の木に因りて凡て汝等を甦らすべければなり。』斯くて彼れ凡て彼等を救ひ出しけるに、我等の始祖アダムは悅びに充ち溢れたが如く見へしが、彼曰ひけるは『主よ我を最も下なる黃泉より救ひ出し給へることを感謝す。凡ての豫言者と聖徒等も亦た等しく曰ひけるは『世の救主なる基督よ、滅亡より我等の生命を救ひ給へることを謝す。』

彼等かく語りて後ち、救主はアダムの前額に十字の章を畫して彼を祝福し、又た族長豫言者殉教者先祖等にもかく爲し給ひて、彼等を引き連れ、黃泉より脫出し給へり。救主進み給ふほどに聖なる列祖たちは頌榮を歌ひ彼に從ひつゝ曰ひけるは『主の名によりて來るものは福なる哉、アレルイヤ、凡ての聖徒等の榮光彼れにあれ。』

九(二五) 救主樂園に行き、我等の始祖アダムの手を取りて彼及び凡ての正しきものを大天使ミカエルに渡し給へり。彼等は樂園の門に進みけるに二人の老人に遇ひ、聖なる列祖等曰ひけるは『死を視ず黄泉に下らずして汝等の肉體と魂とを以て樂園に住む汝等は誰れなるや。』彼等の中一人答へて曰ひけるは『我れはエノクと云ひ神の聖旨に適ひしものにて彼によりてこゝに移されし者なり。又た是れなるはテスビテ人なるエリアなり。我等は世の終まで生き、その後ち我等は反(アンチ)基督(クリスト)に抵抗すべく神に遣され、彼に殺され、三日目に再び甦り、主に遭はんとて雲の中へ取り去らるべきものなり。』

一〇(二六) 彼等かく語りし中に、その肩に十字架を荷ひたる又一人の卑しき人來りければ、聖なる列祖等彼に曰ひけるは『盜人の如くに見ゆる汝はそも誰れにして、汝が其肩に荷ひたる十字架は何ぞや。』彼答へけるは『汝が曰ふ如く我は世の盜人にして盜賊なりしが、ユダヤ人是等の事に因りて我を捕へ、主イエス基督と共に我を磔刑に處せり。我れ十字架に懸られ、其時行れたる奇跡を見て彼を信じ、彼れに願ひて「主よ汝が王たりしとき我れを覺へ給へ。」と曰ひたり。彼れ直ちに我に曰ひ給ひけるは「誠に誠に我れ汝に曰はん、今日汝我と共に樂園にあるべし。」故に我れは我が十字架を負ふて樂園に來れるなり。我れ大天使ミカエルに遭ひて曰ひけるは「十字架に附

たる我等の主イエスは我をこゝに遣し給へり、故にエデンの門に我を連れよ。」十字の章を見て、焰の劍は我が爲めに開かれ我は内に入りぬ。そのとき大天使我に曰ひけるは「暫時待てそは人類の先祖なるアダムも正しき者等と共に内に入らんとて來る。」故に今我れ汝を見ては汝に遭んとて來りぬ。』聖徒等は此等の事を聽て凡て大聲を以て『我等の主は大なる哉、主の能力は大なる哉。』と叫べり。

一一（二七） 我等凡て此等の事を見聞せしが、大天使ミカエルによりて遣されたる我等二人の兄弟は主の復活を宣べ傳ふるやう命せられぬ。されど先づヨルダン河に行きて授洗さるべしとのことなりし故、我等は亦その處に行きて、甦れる總て他の死人と共に授洗せられたり。その後我等はエルサレムに行きて復活の過越を守りぬ。さりながら今我等はこゝに止まるを得ざるに由り去らんとす。父なる神の愛、我等の主耶蘇基督の恵、聖靈の交、汝等凡てのものと共にあれ。

是等の事を記し、卷物を閉ぢて一半を祭司長に與へ、他の一半をヨセフとニコデモに與へたる後ち、直ちに彼等は視えずなりぬ。我等の主耶蘇基督の榮光に。アメーン。

保羅及提苦拉行傳

保羅（パウロ）アンテオケより逃れ、イコニオムに上りしに、僞善なるデマスとエルモゲネス彼の道連れとなり、恰も保羅を愛する如く強ひて彼と伴ならんことを願へり。されど保羅はただ基督の善行に做はんとて彼等を害せず、寧ろいたく彼等を愛し、耶蘇の誕生と復活のことを教へて彼等をして主の聖言（みことば）を喜ばしめ、基督に關する大なる事柄の如何に彼に啓示せられしかを悉く彼等に語りぬ。

時にオネシフォラスなる者、保羅がイコニオムに向ひ來りしを聞き、其子シラスとゼノー及び其妻レクトラを伴ひて保羅を歡迎せんとて行けり。そは彼未だ肉に於て保羅を見しことなく、ただ靈にて彼を知れるのみなりしが、既にテトスより保羅の如何なる風采なりしかを聞き居たればなり。

彼ルストラ街道を行き、立ちて保羅の來るを待ち、テトスの述べし人相によりて通行者を視てあるに、短軀禿頭にして彎脚なれども强健、兩眉相接し、鼻は寧ろ長くして溫情溢るゝ如き容貌な

る保羅の來るを見たり。保羅は或は人間の如くに見え、また天使の如くにも思はれたり。保羅オネシフォラスを見て微笑しければ、彼曰く、『願(ほ)むべき神の僕よ平安(やすし)かれ。』デマスとエルモゲネス之を見て妬み、更に甚しく僞善を現はし、デマス曰ひけるは、『我等は神の者ならずとて同じく我等には挨拶せざるか。』オネシフォラスも曰ふ。『我等は汝に正義の實を見ず、されど汝等果して然りとするも、汝等も亦た我家に來りて休息せよ。』

保羅(パウロ)オネシフォラスの家に入りしに大なる喜ありき。彼跪きてパンを割き、また克己と復活に關する神の言を教へて曰ひけるは、『心の清き者は福なり、神の宮となるべければなり。潔く持する者は福なり、神を見ることを得べければなり。軀體を潔くて審判の苦き日を見ざるべければなり。此世に親まざる者は福なり、正直者と呼ばるべければなり。自ら制御する者は福なり、神その人と語るが如き者は福なり、神を受くべければなり。妻を有ちて有たざる洗禮を領したる者は福なり、聖父と聖子の側に息ふべければなり。矜恤(あはれみ)ある者は福なり。矜恤ある者は福なり、神の喜び給ふ處にして其貞潔の酬を失はざるべし。そは聖父の御言、聖子の日に於て救拯となり、彼等は久遠の休息を得べければなり。』

保羅（パウロ）此等のことをオネシフォラスの家にある教會の中にて語りしに、テオクレアの娘にて、タムリスと名くる男に約婚したる、テクラと稱ふる處女、その近くにありし窓の處に坐し、晝夜童貞と祈禱に關する保羅の教に耳を傾け、窓より脇目もふらず、專ら信仰の道に思を寄せて、いたく喜び居たり。斯くて多くの女が保羅の側に行くを見て、己れも亦た保羅の前に立ちて基督の教を聽聞するに適せる者と認められんことの熱き望を有したり。そは彼れ保羅の貌（すがた）を見ずただその言を聞くのみなりければなり。

彼れ少しも窓側を離れざりしが故 其母タムリスを呼びに遣しゝに、彼はや女を嫁に迎ふるが如くに喜び來れり。テオクレア曰ひけるは、『タムリスよ、われ汝に語るべき不思議なる話あり、三日三夜飲食をもなさでテクラは其窓を離れず、面白きものある如くに熱心に眺め、かの異人がなす僞りの教と奇（く）しき説教に熱注し居れり、われ如何にして此愼み深き處女が斯くも痛ましく變更せるかを知らず。タムリスよ、此人イコニオムの市を顚覆せん、又た汝のテクラを惑はさん。そは全ての女等と青年は彼の許に行きて神を畏ることと童貞を守ることを教へらるゝなり。加之、我娘は蜘蛛の如くに窓に附著して、不思議なる熱心と恐るべき情興もて保羅の語る處のことに沈酔せり。かれ保羅の言ふことを堅く信じ、これに魅せられたり。されど汝往きて彼れに語れ、そは

彼女は汝に約婚したるものなればなり。』

タムリス其側に行きて彼女に接吻し、されど又た其情緒の激昂せるを恐れつゝ語りて曰ふ、『我が許婚テクラよ、何とて汝は斯く坐せるや、また汝如何なる情に堪へられたるか。汝のタムリスの方を向きて恥ぢよ。』其母も亦た同じ事を言つて曰ふ、『我兒よ、汝如何なればとて斯く坐して俯し、狂女の如くに、何も答へざるや。』斯くて彼等、タムリスは其妻を失ひ、テオクレアは其兒を失ひ、また侍女はその主人を失へるが故に甚だしく嘆き、熱心に保羅の説教に耳を傾け居りしに、テクラは尚も振向かず、此等の悲嘆の中に、テクラは立ちて表に出で、人々の保羅の許へ往き又た出で來るを見居りしに、二人の人、互に烈しく言ひ爭ふを見たり。彼曰ひけるは、『友よ、汝等の内にありて、青年の魂を迷はし、處女を偽き、彼等が結婚することなく、獨身たらしめんとする此人は何者ぞや我に告げよ。汝等もし彼に就て我に告ぐる處あらば、我必ず汝等に充分の金を與へん、予は此市の首長なればなり。』於是、デマスとエルモゲネス彼に曰ひけるは、『此人の誰なるかは我等之を知らず、されど彼は妻女達より若者を奪ひ良人等より娘等を奪ひて曰ふ、「汝等童貞を守りて其體を汚さず貞潔を保つにあらざれば、復活し得るの途決してあることなし」と。』斯くてタムリス曰ひけるは、汝等我家に來りて

息へ。』と。彼等豐かなる食事と多くの酒と大なる富と美はしき卓に着きしが、タムリスはテクラを愛し彼を其妻とせんことを願ふにより彼等に飲ましめたり。宴酣にしてタムリス曰ひけるは、『客人たちよ、彼人の教ゆる處は果して如何なることぞや、我も亦た之を知り得んがために我に告げよ、そはテクラが此異人を愛して我は彼女を娶ること能はざるが故に、我れ甚だ彼女に就て悲めばなり。』デマスとエルモゲネス曰ひけるは、『彼は基督者の新らしき教に入るやう衆人を勸誘すとの訴を以て彼を知事カステリオスの前に引出せよ、されば知事は速かに彼を亡ぼし、汝はテクラを汝の妻とすることを得ん。また我等此人の謂ふ復活なることが、既に我等の有する小供等にありしが故に、そのありしことを汝に教へん、我等は眞の神を知るに至りて復活せり。』と。

タムリスは此等の事を聞きて甚しく憤激し、朝晨く起きて、奉行や役人また棒を持てる群集をつれてオネシフォラスの家に往き保羅に向ひ曰ふ、『汝はイコニオムの市を腐敗せしめ、又た我と許婚せる女を蠱し彼をして我を厭ふに至らしめたり、汝宜しく我と共に和事カステリオスの處に來るべし。』と。群集もみな曰ふ、『魔術師を引き去れ、彼等は我等の妻女を毒し、民衆は彼のために惑はされたり。』と。

タムリス法廷に立ちて大聲に叫び曰ひけるは、『總督閣下、我等は此男の何者たるかを知らざれ

ど、彼は娘等をして婚姻を嫉はしむ、願くは彼が如何なる理由にて此の如き事を教ゆるかを告白せしめよ。』と。デマスとエルモゲネス彼に曰ひけるは、『此者が基督者たることを告げよ、斯くて汝は彼と無關係たるべし。』と。されど總督その企圖を止め保羅に向ひて曰ふ、『汝は如何なる者ぞ、又た汝何事を教ゆるや、彼等が汝を訴ふる處は輕少なるとにあらず。』と。『保羅(パウロ)聲を揚げて曰ふ。『我れ今日我教ゆる處に關して査問されたる以上、總督閣下よく聽かれよ、活ける神、應報の神、嫉妬の神、人間救助の爲めに圖りて何物をも要せざる神、汚穢と不淨と凡ての快樂と死より萬民を挽回して罪なきものたらしめんが爲め我を遣せり。神は其子を此世に遣せり、我れ彼を說き、人々の彼に望を置くべきことと、迷へる世界に對して慈悲あるものはただ此神のみなることを教ゆるとも、我に何の惡事かあらゆなり。總督閣下、斯くて民は初めて天罰を逃れ、聖事を知り、眞理を愛することを得べし。故に、我れ神の我に啓示し給へることを教ゆるとも、我に何の惡事かあんや。』と。總督之を聞き、『我れ餘暇ある時に更に深く彼に聽く處あらんまで、彼を縛して獄に置け。』と命じぬ。

テクラは夜に入り其腕環を取りて之を門番に與へければ、門はそのために開かれ、彼は獄に行きぬ。テクラまた銀の鏡を牢番に與へて、保羅の傍に行き、其足下に坐して、神につき大なる事

を聽けり。保羅も亦た何等恐る所なく、堅く神を信じて其生を處せり。テクラの信仰いや增し、彼は保羅の縲紲（なはめ）に接吻し居たり。

テクラの友かれを尋ね、タムリスは彼が失はれたらんかとて町々を走り廻りし時、門番の友僕に往きて、かの外國人の許に至れりと彼等に告げぬ。於是、彼等往きて見たるに、テクラが恰も愛情に繫がれたる如きものなりしかば、彼等また其處より往きて群衆を集め、知事に此狀を具申せり。彼は命じて保羅を法廷へ出さしめたり。されどテクラは獄中にて保羅が坐して彼に敎へ居たりし所の地上に伏して嘆き居たりしが、彼また勇みて出で來れり。保羅の出廷せる時群衆はげしく叫びて、『彼は魔術師なり、彼を黜けよ。』と曰へり。されど總督は悅びて彼より基督の聖業に就て聽けり。また會議を開き、テクラを召し、彼に曰ひけるは、『汝何故にイコニオムの法に從ひてタムリスに服從せざるや。』と。されどテクラは立ちて熱心に保羅を眺め居たり。かれ何事も答へざるを見、其母叫びて曰ふ、『此阿魔を燒き殺せよ、嫁入らざらん如き彼は劇場の眞中に出して燒け、而して彼男の敎を受けたる女共をして戰慄せしめよ。』

知事は大に感動し、保羅を笞ちて市より放逐し、テクラには火刑を宣告せり。斯くて知事は直ちに劇場に赴き、群衆もみなテクラを見んとて往けり。されどテクラは、小羊が荒野にて其牧者を尋ぬるが如く保羅を索め居たりしが、不圖群衆を眺めしに、主が保羅の容貌にて坐し給へるを見て曰ひけるは、『我れ我運に堪へ得ざるが故に保羅われを見んとて來れり。』斯くて彼れ非常なる熱情を以て主を見しが、彼は天に昇り往きぬ。此時下婢たちや乙女等はテクラを燒く薪を運び來れり。テクラ裸にて入場せし時知事涙を落し、且つその有てる力を驚けり。役人共彼女が上ぼり得るやう薪の堆積を竝べしに、テクラは十字の章を劃して其上にあがり、彼等は之に火を點ぜり。猛火は忽ち燃え上りしかど、而かも焔は少しも彼に觸れず。これ、神テクラを憐み、地下を鳴動せしめ、水と雹の充ちたる雲を起して彼等を覆ほひ、其中にありしものを皆な多くのもの死なんばかりになり、火は消え、テクラは救はれぬ。

保羅はイコニオムよりダフネに行く道すがらオネシフォラス夫妻及びその兒等と共に一つの新らしき墓場に入りて斷食し居たり。數日過ぎて、斷食せる兒等保羅に曰ひけるは、『我等空腹なれども、パンを買ふと能はず。』そはオネシフォラス悉く此世を棄て、其一家を以て保羅に從ひ居れば なり。保羅その外衣を脫ぎて曰ひけるは、『行け、我兒よ、多くのパンを購ひて持ち來れ。』斯くて

此童子パンを買ひ居りし時、其隣人なるテクラの居るを見て驚き曰ひけるは、『テクラよ何處に往くや。』テクラ曰ふ、『われ火中より救はれ、保羅のあとを行くなり。』童子曰ふ、『來れ、我れ汝を彼の許に連れ行かん、彼れ汝の爲めに悲み、六日間禱り居れり。』と。斯くてテクラ慕邊へ行きしに保羅は跪き、『嗚呼(ああ)救主基督、願くは主テクラの傍にありて火焰をして彼に觸れざらしめ給へ、そは彼は汝のものなればなり。』と禱り居たり。テクラ其後方に立ちつゝ叫びて曰ひけるは、『嗚呼(ああ)、天と地を造り給ひし神、汝の聖子の父なる神よ、我が保羅を見ることを得ん爲めに我を焰より救ひ給ひしを讃め奉る。』保羅(パウロ)立ち上り彼を見て曰ひけるは、『我等の主耶蘇基督の父にして人の心を知り給ふ神よ、我れ汝が我に聽きて我が願ふ處を速かに爲し給ひしことを讃揚す。』と。

斯くて彼等五つのパンと野菜と水とを得、また基督の聖業を喜べり。テクラ保羅に曰ふ、『此世は恥を知らず、而して汝は容姿(すがた)美はし、我れ恐る或は前よりも更に大なる誘惑の汝に來り、而かも汝は怯れて抵抗するを得ざらんことを。』テクラ曰ふ、『只だ我に基督にある印を與へよ、されば誘惑は我に觸れざるべし。』『保羅曰ふ、『テクラよ忍耐して待て、さらば汝洗禮を受くべし。』と。

保羅(パウロ)オネシフォラスと其全家をイコニオムへ歸し、己はテクラを伴ないてアンテオケに往けり。

彼等市に入らんとせし時、アレキサンドルと名くる或る叙利亞人、テクラを見て之に懸想し、先づ保羅の甘心を得んとて種々なる物を贈れり。されど保羅曰ひけるは、『我れ汝の云ふ女と情交なし、又た彼は我がものにもあらず。』と。於是、彼れ大力なるが故に、途上にてテクラを抱擁せり。テクラは之を認容せず、保羅を索めて四方を眺め、且つ烈しく叫びて曰ふ、『旅人を強ゆるなかれ、神婢を犯かすべからず、我はイコニオムの首たる者の一人なれど、タムリスに嫁するを肯せざりしが故に放逐せられたるなり。』斯く曰ひてテクラ、アレキサンドルを捕へ、其外衣を引き裂き、其冕を挽ぎ取り、衆人の笑物となせり。彼はテクラを戀すれど、また此あらし事を耻ぢて、彼女の事を自ら爲せしを告げければ、彼れは猛獣刑に宣めける寡婦にてトルファエナとて、其娘を亡へる者、テクラを預かり、また自らの慰安となせり。

扱て彼等野獣を出し、テクラを猛き牝獅子に縛れり。トルファエナ彼れに伴なへり。されど獅子はテクラを其背に乗せ、彼れの足を嘗め居りしかば、群衆皆な驚きあへり。テクラの罪標は瀆神者と記されありしが、婦人たち上席より叫びて、『此處に下されたる裁判は不敬虔なるものなり。』

と曰へり。獣闘終りてトルファエナ再びテクラを迎へぬ。そは彼の死したる娘フ彼に告げて、『母よ、汝此異人テクラが我がために禱り我れ義人の往く所に往き得んがために、我が代りとして彼を迎へよ。』と曰ひたればなり。

獣闘終りてトルファエナはテクラを迎へしが、彼が復た翌日も猛獣と闘はざるべからざるを想ひて悲めり。されど又た其娘ファルコニラの如くに彼を愛して曰ふ、『我が第二の女テクラよ、來りて我兒が久遠に亡びざる様に禱れ、我れ斯く夢に見たればなり。』と。テクラ少しも躊躇せず、聲をあげて曰ひけるは、『いと高き神、此婦人の願を聽き給ふて其娘ファルコニラを永遠に活かし給へ。』と。テクラ斯く曰へる時、トルファエナは此の如き美しき者の野獣に投げ與へらるかを想ひて悲めり。

翌朝になりて、此獣闘を催したるアレキサンドル彼を連れに來りて曰ふ、『知事は既に臨場あり、群衆も我等に對し喧噪しあへり、野獣と闘ふべき此女を連れ行くことを許せ。』と。トルファエナは彼が逃げしほど大聲に叫びて曰ふ、『ファルコニラの悲哀再たび我家に臨む、而かも今や我を援くる者なし、我娘は死してあらず、又た我れ寡婦にして緣者もなし。願くはテクラの神よ彼を助け給へ。』と。

斯くするうち間もなく知事はテクラを連れ來るべき命を下せり。トルファエナ其手を取りて曰ひけるは、『我れ實に娘ファルコニラを墓に送りたり、テクラよ、今また汝を獸鬪に送らざるべからざるか。』テクラ甚しく泣きて曰ふ、『嗚、主、我信ずる神、我避難の所にして火中より我を救ひ給ひし神よ、汝の婢に同情して其貞潔を保持せしめたる此トルファエナに善報を與へ給へ。』と。此時喧騷起り、人々叫びぬ。女たちは一所に坐し、その一人曰ひけるは、『瀆神者を逐ひ拂へよ。』また或者は曰ふ、『全市この惡業に責を負ふべし。』『嗚、總督よ、我等みな罰せらるべし。』『あゝ視るに堪へず。』『何たる惡裁判ぞ。』

テクラはトルファエナの手より離され、裸體にせられ、ただ腰卷のみにて鬪場に入れられ、而して數多の獅子、熊、及び一疋の猛き牡獅子放たれぬ。然るに牡獅子はテクラの足下に走り行きて横になりければ、婦人達聲高に叫べり。次に一疋の熊テクラに躍びかゝりしが、牡獅子出遇ひて之を引き裂きたり。然るに又たアレキサンドルの所有なる、人にかゝることに馴されある牡獅子テクラに向ひしが、牡獅子また之と鬪ひて、双方共に死せり。テクラの護衛たりし牡獅子の死せるを見て、婦人等大に悲めり。

斯くて又た數多の野獸放たれ、テクラは其兩手を延べて禱り居たり。彼れ禱り終りて、傍に水

の滿てる壕あるを見て曰ひけるは、『今やこれ自ら洗ふの時なり。』斯くて、『耶蘇基督の御名(みな)により我れ我が最終日に自ら聖洗す。』と曰ひつゝ水中に投ぜり、之を見し婦人等、又た群衆、涕きて曰ひけるは、『入水する勿れ。』と。知事も亦た涙を零(こぼ)せり、そは海豹此の如き美人を喰ふべければなり。テクラは耶蘇の名に於て入水せしかど、海豹は電光の如き火の輝を見て皆な死して水面に浮べり。一片の火の雲、裸體なりし彼の身邊に現はれ、野獸も彼に觸るゝこと能はず、彼の裸體も亦た見ることを得ざりき。

更に多くの野獸入れられし時に婦人たちは號泣せり、その或者は香しき草を投げ、或は甘松、或は肉桂、或は白堊蔻(はくあてう)を投じて芳香馥郁たりき。ために入場したる野獸は眠るが如くになりてテクラに觸れず。於是、アレキサンドル知事に曰ふ、『我れ實に恐るべき數頭の牡牛を有す、鬪獸すべき此女を此等の牛に縛しては如何。』知事は憂ふる如きも尙ほ顧みて、『汝の欲する處をなせ』と曰ひければ、彼等テクラを二頭の牛の間に置きて其足を兩方の牛に縛し、斯くて赤く燒けたる鏝(こて)を牛の陰部に當て、之を激せしめて女を殺さしめんとせり。牛は驅け出せり。されど燃ゆる焰、綱を燒き、テクラは少しも縛せざりしが如かりき。然れども此時トルファエナ鬪場の傍に立ちつゝ昏倒し、群集叫びて、『女王トルファエナ薨ぜり。』と曰へり。知事は茲に獸鬪の停止を命じ、全市狼狽せ

り。アレキサンドルは知事に懇願して曰ふ、『願くは我と此市を憐み、此女を放免せよ、若し皇帝此事を聞かば、彼の親戚たるトルファエナ女王が競技場にて死せる故を以て必ず我等諸共此市を亡さん。』

於是、知事は野獣の居る所よりテクラを召して彼に曰ひけるは、『汝は何人ぞ、又た野獣をして一頭だも汝に觸れざらしむる如く汝の身邊にあるものは抑も何物ぞや。』テクラ曰ひけるは、『我は是れ活ける神の婢なり、我身邊にあるものとは、われ神の子卽ち神の嘉みし給ふ其子を信ずるが故に野獣は一頭も我に觸れざるなり、彼は救に到るの唯一の途にして、永生の基礎、彼は暴風雨に惱む者の匿所、悲み痛む者の慰安、絶望せる者の庇護者なり、又た彼を信ぜざる者は遂に永遠に生くることなかるべし。』

知事この事を聽きて、其衣裳を持ち來らしめ之を看るべく命ぜり。而してテクラ曰ひけるは、『野獣の間にありて裸體なりし我に被物を與へし者、審判の日にまた汝に救拯を給ふべし。』と。テクラ乃ち衣を取りて之を著けたり。知事は直ちに布告を發して曰く、『我れ神の婢なる信心者テクラを放免す。』女達大聲に叫び、聲を和して神に感謝して曰ふ、『眞神一とり在ます、卽ちテクラの神なり。』と。此聲獸鬪場の土臺をも搖がんばかりなりき。トルファエナは此喜ばしき通知に接し、

聖者テクラに遇はんとて行き、曰ひけるは、『今我れ死者の甦ることを信じ、我家へ來れ、全て我物を汝に讓らん、』と。テクラ乃ち彼れと共に往きて八日休養し、神の言葉を彼れに教へ、最も卑しき家婢まで信ずるに至り、全家大に悦びぬ。

此後ちテクラは保羅を尋ねて止まず、遂に彼がルシアのムラに在ることを聞き、護衛として數人の若き男女を連れ、又た男子の外衣を作る如く其著物を縫ひ、遂にムラに到り、保羅が神の言葉を説くを見出せり。保羅は彼と其一群の者を見て、また彼に就きて新らしき裁判事件の起りしかと思ひて驚きたり。テクラ彼に會して曰ひけるは、『保羅よ我れ洗禮を領せんと欲す、汝と共に働き給ひたればなり。』保羅こゝに彼を携へてヘルマェオスの家に到り、彼に關する凡ての事を聽きたり。之を聞きたる者みな大に驚き、又た慰を得、トルファエナの爲めに禱れり。斯くてテクラ立ち上り、曰ふ、『我れイコニオムに往かん。』保羅曰ふ、『往け而して神の言葉を教へよ。』と。而してトルファエナ彼に多くの衣類と黄金を送りしかば、彼れ貧民の爲めとして多くの物を保羅に殘して往けり。

テクラ、イコニオムに往き、オネシフェラスの家に到り、曾て保羅が坐して彼に教を説きたる舖(しき)牀(とこ)に伏して嘆きて曰ふ、『我神また曾て汝が我に光明を與へたる此家の神、おゝ基督耶蘇、活ける

神の子、火中に於ける我救ひよ、榮光永遠に汝に在り。アメーン。』テクラはタムリス既に死したれど、其母の尚ほ生存するを聞き、之を迎へて曰ひけるは、『我母テオクレア、汝は天に活ける神あるを信じ得るや、若し汝が富を願はゞ、神われにより汝に給はらん、汝の兒なる我れ汝の傍に立てり。』と。而して此證言をなせし後、彼れセレュシアに去り、洞穴に入りて七十二年間草を食ひ水を飲みて活き、神の言を以て數多のものを啓發したり。

此市の人々にて、希臘の宗教を信じ、醫を業とせる者等テクラを汚さんとて無賴漢なる若者共を遣はせり。彼等曰ふ、『彼女は童貞にしてアルテミスにつかへ、之によりて治療の力を有す。』と。されどテクラは神の冥助により活きながら岩の中に入り、地の下を潜りて行けり。彼れ保羅に會はんとて羅馬へ行きしが、既にその永眠せるを見たり。羅馬に居ること久しからず、彼も亦た榮光の眠に入りぬ。斯くて其師保羅の墓より二三里程ある處に葬られたり。

テクラは齡十七歳にして火刑にせられ、十八歳にして猛獸に投げられ、而して七十二年間洞穴の内に隱者たりしと傳へらる。故にその壽命九十歳なりき。多くの病患を治療し、我等の主基督耶蘇にありて九月の二十四日その眠に入り、彼れ今は聖徒等の居る處に息へり、願くは榮光と能力は世々久遠に主にあらんことを、アメーン。

クレメンス書

ローマに寓（やど）る神の教會よりコリントに寓る神の教會、神意により我等の主イエス・キリストを通じ召されて潔められたる者へ。願はくは全能なる神よりの恩惠と平安イエス・キリストを通して汝等に彌益（いやまし）さんことを。

一

近頃我等のうちに俄かに又た度々起れる不幸と災禍のため、汝等のうちに起れる問題に對して、特に神に選ばれたる者にあるべからざる、忌まはしき且つ不淨なる騷擾に對して、我等の注意を拂ふことの少しく遲延したるを遺憾とす。此事件たるや察する輕卒にして強情なる小數者が煽動によりて斯く大事となりたるものにして、爲めに萬人の敬慕に値する汝等の尊崇すべき名譽は毀

損せられたり。そは、汝等のうちに寄寓したるものにして誰か汝等の信仰の堅くして徳あることを證言せざるものあらんや。何人か汝等の敬虔の謹直にして又た穏健なることを稱讃せざるものあらんや。何人か汝等が人を遇して最も懇切なることを評判せざるものあらんや。而してまた何人か汝等の圓滿にして堅實なる知識を有することを祝せざるものあらんや。蓋し汝等事を處するに人に依るにあらず、神の道を歩み、また汝等を支配する者に服從し、汝等のうちにて長者を敬ひたればなり。又た幼者に對しては適當なる注意を與へ、女には咎なく清き良心を以て事を處し其夫に忠實なる愛を捧ぐべきことを教へ、彼等が服從の道を守り、又た穏當に家事を整理すべきことを教へたればなり。

二

汝等また萬事に謙遜にして少しも傲慢なることなく、事を要求するよりも寧ろ譲歩し、受くるよりも寧ろ與ふるを樂み、キリストの賜を以て滿足し、其言に注意して固く心に之を藏め、また常に其受苦の樣を眼中に保持して忘れざりき。斯くて汝等すべて深甚豊富なる平和を得、善を欲して飽くことなく、優(ゆた)かなる聖靈の賜物すべて汝等の上に注がれたり。汝等常に聖き企圖を抱き、

敬虔なる確信を以て善を爲さんと欲して全能なる神の援助を求め、また識らずしらば之を赦されんことを哀願したり。汝等全兄弟のために、凡て選ばれたる者の救はれんために晝夜奮闘したり。汝等誠實にして邪念なく、互に何等の害心を抱きたることなし。凡ての分裂凡ての分派は汝等の蛇蝎視したる所、汝等他人の過失のために嘆き、その缺點を視ること自家のものゝ如く、汝等人に親切をなして悔ゆることなく、恒に凡ての善き業を爲すの覺悟ありき。汝等みな有德廉恥の士にして、神を畏るの心を以て總ての事を處せり。主の戒と律は汝等の心の牌に銘(しる)されたりき。

三

凡ての榮光と頌揚(あがめ)は汝等に與へられ、錄されたることと適應せり。卽ち曰ふ『我が愛する者飲み且つ食ひ、彼れ大きくなり肥(こ)へて踢(け)ることをなせり。』然るに嫉妬と猜忌、爭鬪と騷擾、迫害と紛亂、戰爭と擒縛、みな之より生ず。斯くて下賤なる者名譽ある者に對し、愚なるもの智慮ある者に對し、若き者老いたる者に對して起れり。此故に正義と平和は遠く去り、各々神を畏る心を失ひ、その信仰の眼はくもり、人々神の戒を守らず、又たキリストの徒

たるに値する生活をなさずして、却つて其惡心の慾に從ひ、死が此世に來れる原因たる不義不信の猜忌心を再燃せしめたり。

四

そは錄して曰く、『日を經て後カイン土より出づる果を携へ來りて神に供物となし、アベルも亦た其羊の初生と其肥たるものを捧げぬ。而してアベルと其供物は之を眷み給はざりしかば、カインいたく愁ひ汝の面何故に伏すや、若し汝正しく供物を捧げ正しく分たざりせば、汝は罪を犯さざりしや、靜かにすべし、彼汝に向ひ汝は彼を治めん。」於是カイン其弟アベルに曰ひけるは、「我等野に行くべし。」斯くて彼等野に居たる時、カイン其弟アベルに起ちかゝりて之を殺せり。』讀者よ視よ、嫉妬と猜疑は弟殺となりぬ。我等の祖先ヤコブも亦た嫉妬のために其兄エサウの面前より逃げたり。ヨセフも嫉妬のために殆んど殺さるゝまでに窘迫せられて遂に奴隷となれり。嫉妬またモーセをしてバラオー卽ち埃及國王の許より逃亡するの已むなきに至らしめぬ。卽ち此時彼の同國人彼に向ひて『誰が汝を立てゝ我等を裁判し又は支配するものとしたるや、汝昨日埃及人を殺せ

し如く我を殺さんとするや。』と曰ひぬ。又たアアロンとミリアムも嫉妬のために天幕地以外に宿どり、ダタンとアビラムは嫉妬のため神僕モーセに叛きたるにより活きながら地獄に下りたり。而してダギデも亦た嫉妬のため啻に異邦人よりのみならずイスラエル王サウルより迫害を受けぬ。

五

然れども今昔時の例を引くことを止めて、我等に最も近き時代に奮闘したるものを見、我等の時代に於ける尊き例を見んに、嫉妬と猜疑のために教會の最も偉大にして最も正義なる柱石は迫害せられて死に到るまで力爭したり。我等の眼前に善き使徒たちを見るべし、不正なる嫉妬の故に一再ならず數度患難に遇へるペテロは、其證言を立てて往くべき榮光の所にゆきたり。嫉妬と爭によりてパウロは堪忍の遂に克ち得べき實例を示したり。彼は七度桎梏の下に置かれ追放せられ、而かも彼れ東國にも西國にも宣教して、其信仰の貴き榮譽を獲たり。彼は正義を全世界に教へて、西國の極にまで到りし時、有司の前にて其證言を與へ、遂に此世を去りて聖所へ往きぬ。是れ實に堪忍の最大實例と謂ふべし。

此等の聖き生涯を送りたるものと共に尠數多の選ばれたる者集れり、彼等は嫉妬の犧牲となりしものにて多くの辱めと苛責の下に於て我等のうちに其堪忍の美はしき模範を與へたり。嫉妬の故によりて女等はダナイドやデルカイの如く迫害せられ、殘忍にして不潔なる凌辱を受け、而かも其身の纖弱なるにもかゝはらず、確乎不拔以て信仰の道を終り、遂に貴き酬を受けたり。嫉妬によりて妻は其夫より離され、『これこそ我骨の骨、我肉の肉なれ。』との我等の始祖アダムの言は無意義となれり。嫉妬と爭鬪が大都會を顚覆し强國を滅亡せしめたるもの少からず。

六

七

愛する者よ、我等いま此等の事を汝等に書き送るは唯徒らに汝等に諫言せんとするのみにあらず、また我等自らの注意のためなり。それは我等も亦た同樣の境遇にありて同一の苦鬪我等の前にあるなり。故に我等みな空しき無益の思慮を捨て、我等が傳へられたる榮ある尊き規律に據らしめよ。而して我等の造主の眼中に於て如何なる事の善にしてまた嘉納せらるべきかを見るべし。

我等よくキリストの血を視て其の如何に天父にとりて貴きものたるかを領會せしめよ、
我等の救拯のために注がたるものにして、又た之によりて全世界に悔悟の恩惠を來たしたれば
り。我等をして古來の各時代を檢し、主は常に彼に復歸せんとするものには悔悟するの機を與へ
給ひしことを知らしめよ。ノア悔悟を說きて之に從ひたる者は救はれたり。ヨナはニネベの民に
其滅亡を豫告し、而して彼等が異敎のものたりしにかゝはらず、悔悛したる者は其祈禱を聽かれ
て罪の赦を得たり。

八

神の僕聖靈によりて悔悟を語り、また天地の主自ら誓ひて悔悟に就て語り給ふ。主曰ひ給ふ、
『我は活く、我れ惡人の死ぬるを悅ばず其悔悟するを悅ぶなり。』と。尙ほ有り難きことを宣ふて曰
ふ、『イスラエルの全家よ、汝等の罪より悔悟せよ。汝等の罪惡は地より天に達すと雖、汝等誠意を以て我に向ひ「父」と呼んばんには、我汝を聖
惡は緋よりも赤く喪服よりも黑しと雖、汝等の罪惡は地より天に達すと雖、汝等誠意を以て我に向ひ「父」と呼んばんには、我汝を聖
民として耳を傾けん。』また他の所に主曰ひ給ふ、『汝等己を洗ひ、己を潔くし、我眼前にて汝等の
魂より其惡業をさり、惡を行ふことを止め、善を行ふことを習ひ、公平を求め、虐げらるゝ者を

救ひ孤兒に公平を與へ、寡婦の訟を正大にし、而して來り我等あげつらはんと主曰ひ給ふ。汝等の罪は緋の如くなるも、我れ之を雪の如く白くし、紅の如くなるも羊の毛の如く白くせん。若し汝等肯ひて我に聽かば、地の美產を食ふことを得べし。されど若し汝等肯がはず又た我に聽かざれば、劍汝等を呑まん。此は主の口より語り給へるなり。』斯の如く、神その全能の意にて定め給へるなり。

九

故に我等をして神の尊き榮光ある御意に服從せしめよ。我等をして神の尊き榮光ある御意に平伏し慈惠と嘉賜を請ふべし。我等神の慈悲にかへり、無益の勞苦と奮鬪と嫉妬とを棄つべし、此等は死に到るの途なり。我等をして神の至上の榮光のために缺なく奉仕したる者に倣はしめよ。我をしてエノクに倣はしめよ。彼は其服從を嘉せられて天上に移され、死は彼に臨まざりき。ノアは世界に一新紀元の來るべきを豫告して其奉仕の誠實なるを認められ、其言に從ひて方舟に入りたる生物は主之を救ひ給へり。

「神の友」と呼ばれたるアブラハムは、御言に服従して其誠實を認められたり。彼れ御言に從ひ其國を出で親族を離れ其父の家を去り、神の約束を受けんが爲めに貧弱なる國と親族と家とを棄てたり。神彼に曰ひ給ふ、『汝の國を出で、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて、我が汝に示さん其地に至れ。我れ汝を大なる國民となし、汝を祝し、汝の名を大ならしめ、汝は祝福さるべし。我れ汝を祝する者を祝し汝を詛ふ者を詛ひ、地上の諸族汝によりて福禔を獲ん。』彼また曰ひ給ける時神彼れに曰ひ給けるは、『汝の目を擧げて汝の今在る處より北南東又た西を瞻望せよ、凡そ汝が觀る所の地は我れ之を永く汝の裔に與ふべし。我れ汝の裔を地の砂の如くなさん。人もし地の砂を數ふることを得ば汝の裔をも數へ得べし。』復た曰ひ給ふ、『神アブラハムを外に連れ出して言ひ給ひけるは、「天を仰ぎて星を數へ得るかを見よ、汝の子孫は斯の如くなるべし。」と。斯くてアブラハム神を信じ、其信仰彼に義とせられたり。』彼れ其信仰と親切のために老年に及びて一子を授かり、而かも神意に從ひて其の示されたる山上にて之を神に捧げたり。

ロトは其欺待と敬虔のために、全國火と硫黄の罰を受くる時に救出され、
神者を赦し背神者を罰し、又た苛責すべきことを明かにし給へり。即ち是には一の徴證の與へら
れたるあり。ロトの妻彼と偕に行きたるも、其心を變じて彼に同意せざりしかば、彼女は今尚ほ
鹽の柱となりて存し、貳心ある者また神の力を疑ふ者は罰せらるべきことを萬民に示さんため後
世の訓戒となりぬ。

一一

妓婦ラハブも其信仰と欺待とによりて救はれたり。ヌンの子ヨシュア、間者をエリコに遣しける
時、其地の王、彼等が其國を探らんとて來れる知り、人を遣はして之を捕へ且つ殺さんとせり。
ラハブ乃ち彼等を階上の麻の中に匿くし、國王の捕吏來りて、『此地を窺ふ間者汝の許に來れり、
之を曳出だせ、國王の命なり。』と曰ひけるに答へて、『げに汝の尋ぬる人は我許に來れり、されど彼
等は既に去り、今は其の旅行を續け居るなり。』と曰ひて、間違ひたる方角を指示し、而して間者

等に告げて曰ひけるは、『我れ慥かに主たる神が汝等に此地を賜へるを知る、何となれば此地に住ふ者汝等を恐れ怖る、願くは汝等此地を取らん時我と我父の家を救へ。』と。彼等曰ふ、『汝の我等に求むる如くなるべし、故に汝我等が近づくを知らば、汝の眷族を悉く汝の家に聚めよ、さらば其等のもの皆な安全なるべく、而して其家にあらざるものは亡ぼさるべし。』と。斯くて彼等、神を信じ神に望をおくものは主の血によりて救はるべしとのことを示して、一條の赤き紐を其家に懸け置きて信號とすべきを彼女に教へたり。愛する者よ、此女は曾に良き信仰の一例たるのみならず、また豫言を啓示せり。

一三

故に兄弟よ、我等すべての傲慢と自負と痴愚と憤怒とをすて、謙遜なる心をもち、御書に錄せる所のことをなすべし。聖靈曰ひ給ふ、『智慧ある者は其智慧を誇る勿れ、富める者は其富を誇る勿れ、誇る者は主に在りて誇るべし、即ち彼を求めて公道と正義を行ひ、特に主イエスが柔和と堪忍とを教へ給ひし言を記憶すべし。』主曰ひ給ひけるは、『汝等憐憫まれんがために人を憫憐むべし。汝等赦免されかがために人を赦免すべし。汝等人にする如

くまた汝等にも爲さるべし。汝等人に施す如く汝等にも與へられん。汝等人を審く如く汝等に親切ならん。汝等人また汝等に親切ならん。汝等人を審く如く

尙ほ我等、篤信にして平和なる者に與みし、僞りて平和を好む如きものと偕なるべからず。或處に曰ふ、『此民は唇にて我を敬ふ、されど其心は我に遠ざかる。』と。又曰ふ、『彼等は其口にて祝へど、其心は咀へり。』又曰く、彼等は其口もて彼を愛し、其舌もて彼に僞を言ひ、其心は神にむかひて正しからず、その契約に忠實ならざりき。』と。故に、正義者にむかひ妄りに罵る僞の唇をつぐましめよ。』また『主、すべて僞る唇と大なる言をかたる舌とを亡ぼし給へ。』彼等は曰ふ、『我舌をもて主たらんや。主のたまはく、苦む者掠められ、貧き者歎くが故に、我いま起ちて彼を安寧におき自由に彼と語らん。』と

一六

そはキリスト、心の謙遜なる者と偕にありて、彼の群よりも自ら高しとする者とともならず、主なる神イエス・キリストの大なることの權標は、その力に對する驕傲或は自尊の威風と共に來りしに非ず、寧ろ聖靈彼に關して曰へる如く謙讓なりしなり。曰く、『主よ、我等が述ぶることを信

ぜし者は誰そや、主の手は誰にあらはれしや。我等主の前に小供の如く、燥ける土中の根の如く宣せり。彼に容姿なく、美色なく、而かも我等彼れを見たり、彼に容姿なく、榮光なく、而かも我等彼の容姿は尊嚴なく、勞働者の容姿よりも少なり。そは彼の顏そむけられて、彼れ尊まれず又た重んぜられざりき。彼は我等の罪を負ひ、我等のために苦めり。然るに我等思へらく、彼は苦められ神にうたれ責めらるゝなりと。されど彼は我等の愆のために傷けられ、我等の不義のために受難せり。かれ懲罪をうけて我等平安を得、其痍によりて我等癒されたり。我等みな羊の如く迷ひて各己が道に向ひ行けり。然るに主は我等の罪のために彼をわたせり。而かも彼は苦められて口を開かず、羊の如く彼は屠場にひかれ、毛を切る者の前に默する羊の如く其口を開かざりき。屈辱のうちに其審判は取られたり。誰か其時代を言明するものぞ。そは其生は地より絶たれたればなり、かれ我民の不義のためにその死にあひぬ。われ其葬式のために惡人を與へ、其死のために富者を與へん。そは彼れ少しも不義をなさず、また其口に詐なかりき。されど主の聖意は笞痕より彼を淨むるにありき。汝もし罪のために供物をなさば汝の靈魂は永生の種子を見るべし、主の聖意は彼の靈魂の煩勞を去り、彼に光明を示し、知識を以て彼に被せ、よく多くの者に奉仕する正しき人を義とするにありき。而して彼自ら其罪を負はん。此故に彼は多くの物を繼承し、强き者の

掠物をわかたん、そは靈魂は死にわたされ、彼は徒(あやまち)あるものと共に數へらるべければなり。彼れ衆くの人の愆を負ひて其愆のために渡されぬ。』又曰く、『然かはあれど我は蟲にして人にあらず、世に誹(そし)られ人に卑めらる。凡て我を見る者は我を嘲(あざ)み笑ひ、口唇をそらし首をふりて曰ふ、「彼は主に依り頼めり、主彼を救ふべし、主彼を喜すが故に彼を助くべし。」と。』故に我愛する者よ、汝等如何なる龜鑑の我等に與へられたるかを見たり。そは、若し主にして斯くも謙讓なりしとせば、彼により其恩惠の下にきたれる我等の如きは抑も如何になすべきぞや。

一七

我等また、キリストを宣傳して、山羊と綿羊の皮を被りて經歩(へあるき)きたる者に倣ふべし。即ち、エリジャ、又たエゼキエル、豫言者たち、その外か古への名ある人々のことなり。アブラハム大なる名聲を得、彼は神の友と稱せられ、彼は人性に於て神の榮光を凝視して曰ふ、『我は塵を灰に過ぎず。』と。又たヨブに就て錄して曰ふ、『ヨブは正しくして瑕瑾なく神を信じ萬惡に遠かる。』と。されど彼自ら責めて曰ふ、『汚れなきもの一人もなし、人生たゞ一日たりとも此の如き者なし。』と。モーセは其全家中にて忠實なる者と呼ばれ、其奉事によりて神は鞭撻と苛責を以て挨(エヂ)

及を審判せり。然るに彼は大なる光榮を受けたるに關はらず、少しも大言することなく、柴の中より神言を給はりたる時に自ら曰ふ、『如何なる者なればとて我を遣し給ふやと、否、我言辭は敏からず我舌は重し。』彼また曰ふ、『我は鍋より上る烟の如きものなり。』と。

一八

名あるダギデに就て何を言はんか。神彼に就て曰ひ給ひけるは、『我心にかなう者一人を得て我れ之に永遠の惠を與へたり、卽ちエセの子ダギデなり。』と。されど彼れ亦た神に向ひて曰ふ。『あゝ汝の大慈によりて我を憐み、汝の大悲によりて我愆を消し給へ。我不義を洗ひ、我罪を清め給へ。そは我れ我不義を知り我罪恒に我前に在り。我はたゞ汝に向ひてのみ罪を犯し御前に惡事を行へり、されば汝その言に於て義とせられ鞫かる時咎めなしとせられ給ふ。視よ、汝は眞を愛し、汝の智慧の秘密と隱れたるものを我に明かし給へり。汝ヒソプを我に灑ぎて我は淨められ、汝われを洗ひて我れ雪より も白からん。汝我に喜と樂を聞かせ、卑下せられたる骨を悦ばせ給ふ。願くは聖顏を我すべての罪よりそむけ、我すべての不義を消し給へ。あゝ神よ、わが裡に清き心をつくり、わが衷に直き

靈を新たになし給へ。汝の聖前より我を棄て給ふ勿れ、汝の聖靈を我より取り給ふ勿れ。汝の救の喜を我に返へし、汝の力ある靈を以て我を強め給へ。われ惡き者に汝の道を教へ、罪人は汝に復歸すべし。あゝ神よ、我救の神よ、血を流す罪より我を助け給へ。我舌は汝の正義をうたはん。あゝ主よ、我口を開き給へ、我口唇汝の頌美をあらはさん。そは若し汝犧牲を好みたらんには我れ之を捧げたらんに、汝は如何なる燔祭をも悦び給はず。神の求め給ふ祭物は碎けたる心靈なり、碎けたる悔いし心は神之を藐め給はず。』

一九

斯く多くの名ある人々の謙遜と服從は、啻に我等を向上せしむるのみならず、敬畏と眞實を以てその言を受けたる前代の人々を益したり。而して我等速かに始より我等に與へられたる平安を目標として進むべし、我等既に多くの大なる榮光ある事に與かるを得たれば、我等全世界の父また造主に眼を定め、我等に對するその善き業と平和の優秀なる賜物を固守すべし。心に彼のことを想ひ、心の眼を以て彼が永く忍び給ひし企圖を見つめ、彼が其被造物に對して如何に寛大にして怒り給はざるかを考ふべし。

彼の指圖によりて動く天は平和に於ても彼に服從す。晝と夜は彼の定めたる途を進みて互に妨げず。日月星辰はその定められたる方向に回轉し、一定の途を行きて調和を保ち少しも其途より離ることなし。地は彼の意志に從ひて各期節に生產し、少しも嫌ふことなく、其上に棲息する人獸及び其他の生物に豐かなる食物を供して彼の命に背くことなし。水中の深淵も、下界の測るべからざる處もみな同じ命令に支配され、大海の水も彼の業にて其の定められたる所に集り、恰かも其所に縛せられたる如く、少しも其境を越へて移ることなし。そは彼曰ひ給ひけるは『此處まで來るべし、此處を越ゆべからず、汝の高浪は此處に止まるべし。』と。人の越ゆべからざる大洋と其彼方の世界も、此君の同じ命令にて支配せらる。春夏秋冬、互に爭ふことなくして交代し、四方の風も障なく時宜に應じて其任を務め、喜樂と健康の爲めに作られたる永恒の泉は人生の扶養をなして誤ることなく、最微の動物すら穩かに集りて平和を保てり。宇宙の大君に在す造物主は總て此等の物に平和と一致を命じ給ひ、萬物に善をなし、特に我等の主イエス・キリストにより、その慈悲の下に集る我等に善をなし給ふ。願くは榮光と尊嚴永久に彼にあらんことを、アメーン。

二一

愛する者よ、我等一致して主の前に善良なる業をなし其民と稱するに足るにあらざれば、主の我等に賜ふ多くの善き事がみな我等に對する審判となるに至らざる樣、注意すべし。又た我等の思ひ給ふ、『神の靈は人の內心を探照する燈火なり。』と。我等、彼が如何に近く在り、又た我等の思想、或は我等がなす計畫の一も彼の目を逃るべからざることを見るべし。故に我等その聖意より去らざるは良し。我等は寧ろ、大言壯語する愚なる思慮なき者に背くべし。主イエス・キリストを崇め、我等を支配する者を敬し、老人を尊び、幼き者に神を畏るゝことを教ゆべし。我等の妻女を善導し、彼等をして貞潔の美はしき習はしを示さしめ、其血を與へ給へる主を畏るゝものを平等に聖く愛せしめよ。我等の兒女をして誠實に溫和なるを欲することを證せしめ、沈默を守りて其寡言を示さしめ、私情によらず凡て神の前に謙讓なることが強きこと、神を畏るゝことの如何に美はしく且つ偉なるか、又た淸き心を以て神を畏るゝ生涯を送る者はすべて救はるゝことを教ゆべし。そは彼れ我等の心の思ひと望を探り、其生氣われらの內にあるも、思ひのまゝに之を取り給

ふべければなり。

二一

凡そ此等のことは、キリストに於ける信念之を證す。卽ち彼自ら聖靈により我等を招きて曰く、『子よ來りて我に聞け、我れ主の畏るべきことを汝等に敎へん。福祉を見んが爲に生を望む者は誰ぞや。汝の舌をおさへて惡につかしめず、汝の唇をおさへて虛僞をいはざらしめよ。惡を離れて善を行ひ、平和を求めて切に之を勉めよ。主の眼は正しき者を顧み、其耳は彼等の號呼に傾く。主の御顏は惡をなす者に反して、其跡を地より斷絶し給ふ。正義者叫びたれば主は之を聞き、その總ての患難より彼を助け給へり。惡人の悲は多けれど、主に依り賴む者は憐憫にて包まれん。』

二二

萬事に哀憐あり、又た仁慈なる天父は彼を畏るゝ者を憫み、質朴なる心を以て彼に近づく者に其恩惠を授け給ふ。故に我等貳心あるべからず、又たその優秀にして赫々たる賜物について空想にふけるべからず。我等は斷じて彼が此聖書に言ひ給ふ如きものなるべからず、曰く、『貳心ある者は

醜劣なり、彼等は其魂の内に疑ひし曰ふ、『此等のことは祖父たちの時代にありしと我等聞けり、見よ、我等既に老ひたるに、其一つだに現代に起りたることなし。』と。あゝ愚なる者よ、汝自ら樹に較べ見よ、葡萄を見よ、先づ其葉を出し、次に芽出で、次に又た一葉、次に花、斯くて後に未熟の葡萄出で、終に成熟したる房となるなり。』と。如何に少時にして木の實が熟するかを見よ。眞誠に神意なるものは實に急速に實行せらるものなり、即ち聖書にも之を證して曰く、『彼速かに來りて躊躇せず、主忽ち其宮に來り給はん、即ち汝の期待する聖者なり。』

二四

愛する者よ、我等をして、如何に神が復活のあるべきことを絶へず教へ給ひしかを考へしよ、即ち死人のうちより主イエス・キリストを甦らしめて其の初穂たらしめ給ひしを考ふべし。日と夜は是れ一の復活を見るべし。日は眠りて日は醒む、日は去りて夜また來る。また作物を以て例せんか、播種は如何に行はるぞ。種蒔く者出て行き、種を地に蒔き、種は乾き曝されたる地に落ちて朽つ、而かも此の朽ちたるものより造化の妙あらはれ、一粒の種子より多くのものの生じて實を結ぶに至る。

我等また東方即ちアラビヤに近き地方にある不思議なることを考ふべし。鳳と云ふ鳥あり。他に其類なく、五百年の壽命を有す。其壽命の盡きなんとするや、自ら返魂香と沒藥と其他の香料を以て其墓を作り、時到らば自ら其内に入りて死す。然るに其肉の腐敗せるものより一疋の蟲いで、死したる鳥の汁にて養はれ翼を生ず。其成長するに及むで、前者の屍のある墓をとり、之をアラビヤより遠くエヂプトまで運び、ヘリオポリスと云ふ市に到る。此處にて晝間人々の視る所にて飛むで日輪の祭壇に進み、携へ來れるものを其處に置き、而して元の產地へ歸る。祭司その記錄を檢するに、五百年の經過するごとに此事ありと云ふ。

二五

二六

天地の造物主が、清淨にまた熱き信仰もて己に奉仕したる者を復活せしめ、且つ其約束の大なるものを一鳥類によりて表示するとも、何すれぞ異として驚くに足らんや。或處に曰へるあり『汝われを起し、われ汝を讃めん。』又曰ふ、『我臥して寢ね、我れまた起きたり、汝われと共に在ませば

なり。』ヨブも亦た曰ふ、『汝此等の事に堪へたる我肉を起し給はん。』

二七

故に我等此冀望を以て、凡て約束に信あり又た審判に正しき彼に、我等の魂を寄すべし。僞る勿れと命じたる彼自ら僞ることなし、そは能はざることなき神も僞ることは能はざるなり。故に我等の彼に對する信仰を再燃し、萬物彼に近きことを思ふべし。その威嚴の言を以て彼れ萬事を起し、また其一言にて之を破壞することを得るなり。『誰か彼に汝何を爲せしやと曰ふ者あらんや、誰か彼の力に抗する者あらんや。』彼れ何事にても思ふ時に其思ふ如く爲し、其命の一だに亡ぶことなし。彼が見ざるものなく、又た其意圖によらざるものなし。卽ち、『諸の天は神の榮光を現し、穹蒼は其手工を示す。此日は言を彼日に傳へ、此夜は知識を彼夜に送る。而かも語らず言はず、聲の聞ゆるなし。』

二八

既に萬事彼の見また聞かざる所なしとせば、我等彼を畏れて惡き事の思を去り、以て來らんと

する審判に於て其慈悲にあづかるべきなり。そは誰にても彼の手より逃れんとして何處に飛び行き得るものぞ。書に曰ふ『我れ何處に往き、何處に匿れて、汝の御前をのがれんや。我れ地のはてに去るも、汝の右の手其處に在り。我れ我楊を九地の下に置くも汝の靈また其處に在り、我れ地のはてに去るも、如何にして萬物を包容する彼より離るゝことを得んや。

二九

然らば我等、魂を聖め、清き汚れざる手を擧げ、その自ら選びたるものゝ内に我等を加へし難有き慈悲ある天父を愛して彼に近づくべし。聖書に記して曰ふ『至高者、アダムの子等を四方に散らして萬の民を分ち給ひし時、彼れ神の使の數に照して諸民の境界を定め給へり。其民ヤコブは主の分にしてイスラエルは其産業の分前なり。』又た他の所に曰ふ、『看よ、主は諸民のうちより自ら一民をとること禾場より初穗を取るが如く、至聖者この民より出でん。』

我等既に聖きものゝうちなるが故に、惡き言を曰はず、不淨の思をなさず、飲酒と青春の淫慾と下劣なる情慾と、忌はしき姦淫と、憎むべき高慢とを去り、すべての清淨なる業をなすべし。彼曰ふ、『神は高ふる者を退け、謙る者に恩惠を與へ給ふ。』と。故に我等は神より恩惠を受けたる者に交り、謙遜にして溫和なるべく、自ら無益の言と惡き言を避け、言語によらず行爲によりて義とせられんことを努むべきなり。そは彼曰ひ給ふ『言語多き者また多く聞かせらるべく、よく言ふ者自ら正しとするや。女より生れて命短かき者は福なるかな。贅辯なるべからず。』と。我等自ら譽めず、寧ろ神を讃美すべし、神は自ら譽むる者を憎み給ふ。我等のなせる善行に關することは他人をして之を語らしめよ、我等の祖先が世に義人と稱せらるが如かるべし。强情、倨傲、厚顏は神の呪ひ給ふところ、柔和、謙遜、溫順は神の祝し給ふところなり。

三一

故に我等固く神の祝福を求め、又た其途の如何なるものたるかを考へしめよ。我等の先祖アブラハムは何故に祝福されしか。彼は信仰によりて正義と眞理を認めし故にあらずや。イサクは將來のことを確知して喜びて生贄たらんとせり。ヤコブは其兄弟の故に、溫順に故國を離れ、ラバン

の許に往きて彼に事へ、斯くてイスラエル十二族の主權は彼に與へられたり。

三一

若し誰にても公平に此事の詳細を考んには、彼が受けたる此賜の如何に大なるかを知るべし。卽ち祭司とレギ族の者はみな彼より出でて神の聖壇に奉仕し、肉體によれば主イエスも彼より出で、ユダに繼承せる諸王侯伯また彼より出でたり。而して神彼に示して『汝の裔（すゑ）は天の星の如くあるべし。』と曰ひしを見れば、蓋し諸族の他の主權も亦た大に有名なるものなり。總て彼等が有名にして崇敬せられしは、彼等自らの價値、若くは其爲せる業、又は正しき行爲によるにあらず、たゞ神意によるものなり。故に神意によりてキリスト・イエスに召されたるものは、自ら義とせらるゝに非ず、或は其智慧、知識、敬虔、また其心の聖きによりて爲せる行業（わざ）などによりて義（ぎ）とせらるゝに非ず、たゞ信仰によるものなり、卽ち人は信仰によりて世の始より全能の神に義とせられたるなり。願くは榮光世々限なく彼に在らんことを、アメーン。

三一一

兄弟よ、然らば我等何を爲さんか。我等怠りて善事をなさず愛の業を捨つべきか。神は少くとも我等には斯かることを許さゝらんを願ふ。我等は寧ろ常に熱心に凡ての善事に勵むべきなり。世界を造りまた之を支配する主は、自ら其作業を喜び給ふ。彼はその無限の力を以て天を造り、不可測の智慧を以て之に秩序を與へ、彼はまた地と其周圍の水とを分ち、之を其意の堅き基礎にすへ、又た之に棲息する動物は其命にて生存せしめ、海と其内のものも之を準備し其力にて之を包み給へり。就中造られたるものにて最も優れ、其智慧により最も偉なる人類は、神その聖き且つ完き自らの手にて己の像に似せて造り給ひぬ。卽ち神曰ひ給ひけるは『我等に象どりて我等の像の如く我等人を造らんと。』神乃ち人を造り之を男と女に造り給へり。』斯くて神其業を了り給ひし時、神彼等を讃め之を祝して曰ひ給ひけるは『生めよ繁殖へよ。』と。我等義人がみな善行を以て自ら飾れるを見るべし、主も亦た自ら善き業を以て自ら飾りて悦べり。故に我等も之に則り、直ちに彼の意志に從ひ正義の行をなすに努力すべし。

三四

良き職人は其勞働の賃金を受けて恐るゝことなし。されど怠惰なるもの又た疎忽なる者は、其

傭主を正視する能はざるなり。故に我等善行をなすに遅々たるべからず、そは萬の事は神より來れば我等を戒めて曰ふ、『看よ、主來る、各人の作業によりて與ふべき神の報酬その前に在り。』と。彼れ我等が全心を以て彼を信仰し、善行をなすに懶け、又た不注意なるべからざるを我等に告ぐ、我等は彼を讃揚し彼に信賴し、我等天使の全群が如何に鋭意に彼の意志に奉ずるかを思ふべし。そは聖書に曰ふ、『彼に侍べる者は千々、彼に仕ふる者は萬々、叫びて曰ふ、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、萬軍の主、其榮光は全地に充てり。」』故に我等も亦た良心の協同を以て集合團結し、異口同音に熱心に彼に向ひて叫び、我等彼の大なる榮ある約束に與かるべきことを言はん。そは彼曰ひ給ふ、『神の己を愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心にいまだ浮ばざりし所なり。』

三五

愛する者よ、神の賜はいかに目出度く又た不思議なるかな。不死の生、正義の光輝、大膽の眞理、信賴の信念、清淨の自制、すべて此等は皆な我等の領會する所となれり。されば、彼を待つ者の爲めに供せらるものは何ぞ。造物主にして萬世の父、卽ち全聖者自ら此等のものゝ偉にして

且つ美しきを知り給へり。故に我等も約束せられたる賜を分與せられんが爲めに、彼を待つ者の中に數へられんため努力すべし。然れども愛する者よ、我等如何にせば斯くなり得るや。若し我等の領會かたく神に定められんか、若し彼が嘉納し給ふものを求めんか、若し我等彼の誤なき聖意に違はざることを爲し、眞の道を歩み、凡て罪、惡、貪慾、紛爭、殺意、詭計、多辯と惡口、神を嫌ふこと、自負と傲慢、虚榮と不愛相とを捨てなば則ちよし。此等のことは神の惡み給ふ所にして、神は常に此等のことを爲す者のみならず、之を見て喜ぶ者をも惡み給ふ。聖書に曰ふ『然かはあれど神惡き者に言ひ給はく、「何故に汝わが律法を宣言し、我契約を口にとりしや。汝敎訓を嫌ひ我が言を放棄せり。汝盜人を見れば之が仲間となり、姦淫をなす者の伴侶となれり。汝の口惡を重ね、汝の舌は詭計をくみなせり。汝坐りて兄弟を謗り、汝の母の子の途に妨碍を置けり。汝此等のことを爲しゝを我れ默しぬれば、汝われを己に似たるものと思へり。されど我れ汝を責めて其の罪を汝の眼前に列ぬべし。汝神を忘るゝ者よ、今此等の事を念へ、恐らくは彼れ獅子の如く汝を攫み、他に救を示すの途こゝに在り。」』

愛する者よ、我等が我等の救拯イエス・キリスト、卽ち我等が捧ぐる供物の大祭司、我等の弱きを護りて扶助する者を見出すの道は是なり。我等彼によりて眼を天の高處に置き、彼によりて我その瑕なき崇高なる容貌の反影を眺め、彼によりて我等の心の目は開かれ、彼によりて我等の愚なる蒙き智慧は光明を受け、彼によりて神は我等も永生を味ふべく御意ありたり。彼は神の榮光の輝き、其受け給ひし名の勝れる如く御使よりは更に勝れる者なり。そは錄して曰ふ『神は其使たちを風となし、其仕丁を焰となす。』されど御子につきては『汝は我子なり、今日われ汝を生めり。我に求めよ、さらば諸々の國を嗣業として汝に與へ、地の極を汝の產として與へん。』と宣へり。彼また曰ひ給ひけるは『われ汝の仇を汝の足臺となすまでは、我右に坐せよ。』と。此仇とは誰ぞ。

三六

三七

兄弟よ、我等彼の缺なき命を守り、誠意を以て奉仕すべし。我等よき秩序と用意と服從とを以て

將軍の命令を行ひたる兵卒を思ふべし。總ての者總督にあらず、奉行にあらず、また五十人の長の如きものにもあらず。各自その階級にありて皇帝又た將軍の命令に從ふなり。小なる者あらざれば大なるものなく、大なる者なければ小なる者立つこと能はず。萬事此種の混和ありて、利益また玆に存す。我等の身體を見よ、足なければ頭は無用なり、頭なければ足は無用なり。如何に小なる部分と雖、全身に必要にして又た貴重なり、皆な互に談合して動き、共に全體を保存する爲に協力す。

三八

故に我等全體としてキリスト・イエスに在りて救はれ、各自その與へられたる地位によりて隣人の爲めに盡力すべし。强者は弱者を助け、弱者は强者を尊敬すべし。富者は貧者に援助を與へ、貧者は己の必要なるものを給與する者を與へ給ひしことを神に感謝すべし。賢者は其智慧を言語にあらはさず善行に現はすべし。謙遜なる心の者は自ら其謙遜なることを證言せず、之を證明することは他人にまかすべし、肉體の貞潔を保てる者は、その自制力を賜りたるは神なるを思ふて、自ら誇るべからず。故に兄弟よ、我等何にて造られたるか、我等は抑も何者なるか、又た如何な

る性質のものにて此世に來れるか、我等を像どり我等を造りし者が墓の暗中より我等を
て此世に生れしめ且つ我等の生れざる前に我等に便益あるものを準備し給へるかを思ふべし。故
に我等何事によらず彼より受くるが故に、我等は何事によらず彼に感謝すべし。願くは榮光世々
彼にあらんことを。アメーン。

三九

愚かにして淺慮、阿呆、且つ無教育なる人々は我等を嘲り笑ひ、自負の餘り以て自ら偉なりと
す。されど死すべき人間が遂に何事を爲し得るものぞ、地より出でたる者に何程の力かある。錄
して曰はずや、『我目の前に何の象もなく、われ一の音と聲あるを聞けり。何ぞや。人いかで神の
前に潔からんや。人の作業いかで瑕瑾あらざらんや。彼は其僕をさへ信じ給はず、其使者をさへ邪
まなる者と見做し給ふ。天も彼の前には清からざるなり。已ぬる哉、泥の家に住ひ、同じ泥にて造
られたる者。神蛾の如く彼等を打ち給へば、其命は朝より夕に迨ばず、彼等何事も爲す能はずし
て亡ぶ。彼れ息を入れ給ふも、彼等智慧なきが故に死す。されど今試みに顧べ、誰か汝に應ふる
ものありや。或は聖き天使の中にて汝に向はんとするものありや。夫れ愚なる者は憤恨のために

身を殺し、痴(つたな)き者は嫉娼のために己を死なしむ。我れ自ら愚なる者の其根を張るを見たりしが、其家速かに消へ失せたり。其子等は甚だ危く、扶助を得るとなくして自らより劣れる者の門にて侮辱せらる。そは其爲め準備せられたる者は義人之を食ひ、彼等は遂に惡より救はるゝとなし。」

四〇

此等の事われらに明にして、我等既に神智の奥を見たれば、我等は神が適時に爲せと我等に命じ給ひし事をなすに秩序を守らざるべからず。彼れ供物を捧げ禮拜を行ふを我等に命じ、之をなすに不注意に又た不秩序にすべからず、必ず一定の時と時間にすべしとし給へり。彼自ら至高意志もて其の何時何人によりて之が執行さるべきかを定め給ひぬ、即ち萬事その好みに從つて敬虔に行はれ聖意に合はんためなり。故に一定の時期に於て供物を奉獻せんとする者は、之を嘉納せられて又た祝福せらる。これ神の法を守るものにして罪を犯す所なし。そは、祭司長には其適當なる職分あり、祭司にも亦た之に與へられたる任務ありて其所を得、レヰ職にも其適當なる職分あり、而して俗人は俗人の規定によりて制定せらる。

兄弟よ、汝等各その處に在りて神意に適ひ、善き良心を得有して、注意して勤行の規定を破るべからす。兄弟よ、たゞエルサレムのほか、如何なる處にも、毎日犠牲を捧げず、また自由供物、犯罪供物、違法供物をも捧ぐるとなし。且つ供物は神龕(みつし)前の祭壇のほか如何なる處にても捧ぐるに非ず、又た供物は先づ祭司と其他前に記せる聖職の檢査を受くべし。故に聖意に悖る事を爲さん者は死に處せらる。兄弟よ、我等多くの知識を賜りし者は益々危險なる位置に在るを見るべし。

使徒たちは我等のために福音を主イエス・キリストより受け、キリストは神よりのものの、使徒等はキリストよりのものなれたり。故に使徒たちは、其命を受け、我等の主イエス・キリストを信じて定められたる秩序によるものなり。故に使徒たちは、其命を受け、我等の主イエス・キリストの復活にて證明せられ、神言にて確められたる信仰を以て、且つ聖靈に保證せられて神の國は近づけりとの福音を宣べんとて行けり。彼等、國より國へ、市より市へと傳へて、その初の改宗者のうちより靈にて試めし、將來の信者のために監督と執事を擧げたり。これ新しきことに非ず、

監督及び執事なる者が記錄せられたるより永き以前に然かりしなり。即ち或處に『われ正義なる者の中より監督（エピスコポ）を任命し、信仰ある者の中より執事（デアコノ）を任命せん。』とあるが如し。

四三

且つキリストに在り、又た此の如き務を神に命ぜられたる者が、右の如き職を制定したりとも何の驚くべきことかあらん。其全家中にて誠實なる僕（しもべ）モーセも亦た與へられたる命令を聖書に錄し、其後の豫言者たちも彼が與へたる律法につきて立證せり。即ち祭司職につきて互に嫉妬心を起し、何人が此榮譽ある職に就かんかと民族中に爭論ありし時、モーセ十二支族の牧伯（つかさ）等におの〳〵其族名を記せる杖を持ち來らしめ、之を取りて束ね、牧伯等の指環にて之に封印し、之を神の聖卓の上にある律法の幕屋の中に納めぬ。彼れ幕屋を閉ぢ、杖を封じたる如くまた鍵をも封じ、斯くて彼等に曰ひけるは、『兄弟たちよ、誰にても其杖が芽を出さん者、これ神が祭司職と教職に選び給ふものなるべし。』と。翌朝になりてイスラエル全民六十萬を招集し、牧伯等に封印を示し、律法の幕屋を開きて杖を取出し見たるに、アロンの杖は芽ざし居りたるのみならず、又た實を結び居たり。愛する者よ、汝等如何に考ふるや。モーセは此の如きとの成るべきを前より知り居たるに

あらずと思ふや。彼慥に知り居たり、されど斯く爲せるはイスラエル民間に騷擾の起らざらん爲め、また唯一の眞の神の名を頌榮せんが爲めなり。願くは榮光世々彼にあらんことを。アメーン。

四四

我等の使徒たちも、主イエス・キリストによりて、監督職に關し爭のあるべきを知りたり。故に、彼等は完全なる先見の明を受けて、既に擧げられたる人々を指名し、且つ附言して曰ふ、『若し彼等が永眠したる時は他の認可されたる者その後を繼承すし。』と。斯るが故に、使徒たちの指名者又は其後全教會の協贊を得、責むべきことなく謙遜に平和に公平にキリストの群に奉仕して、多年一般より頌德されたる者を、共職より去らしむるは正しきことに非ずと思ふ。何等責むべきなく聖く其供物を捧げ居たる者を監督職より黜(しりぞ)くるは、其罪決して小ならず。既にその往くべき途を進み、其作業を完うして好き果を結び、有終の美くしき休息に入れる長老たちは幸福なるかな。然れど汝等は、汝等の間にあるものの恐なければなり。然れど汝等は、汝等の間に在りて何等責むべき所なく汝等によく奉仕したるものを其教職より黜けたり。

兄弟よ、汝等爭を好み、救拯にいたることに鋭意なり。汝等聖靈によりて與へられ、眞理を示す聖書を研究し、其中には何等不正また僞りの記されざるを知れり。汝等聖き者が義人を斥けたることを見ず。義人が迫害されたることあれど、そは惡人の手にてなされたり。彼等は無法者に石にてうたれ、穢れたることゝ正しからざる嫉妬をいだくものに殺されたり。彼等は此等の事を忍び、其堪忍によりて榮光を得たり。そは兄弟よ、我等何を曰はんか。ダニエルは神を畏るゝ者の爲めに獅子の穴に入れられたりや。或はアナニヤ、アザリヤ、ミサエルは至高者の榮への爲めに爐の火中に投げられたりや。此の如きと斷じてなし。然らば此等の事をなせる者は誰ぞ。憎むべき者、凡ての邪惡に充てる者ども、激して怒り、缺なき聖き目的を以て神に奉ふる者を困め、しかも清き心を以て奉仕する者を守護するは至高者たることを知らざりき。願くは榮光世々彼にあらんことを。アメーン。然れど確信ありて此等のことに堪へたる者は、神より榮光と名譽の嗣業を承け稱揚せられ、世々限なく其名は錄せられて紀念せらるるなり。アメーン。

兄弟よ、我等も此等の例に倣ふべきなり。そは錄して曰ふ、『聖者に倣へ、そは汝選ばれたる者となり、僻む者と伴ならば汝僻む者となるべし。』と。又た別の所に曰ふ、『罪なき者と伴ならば汝罪なき者となり、選ばれたる者と伴ならば汝選ばれたる者となり、僻む者と伴ならば汝僻む者となるべし。』と。故に我等罪なき者また正しき者の例に倣ふべし。彼等は神の選ばれたる者なればなり。何故に汝等の間に爭と激情と分派と分裂と不和ありや。等しくキリストに召されたるに非ずや。何とてキリストの肢を引き裂き、己の體に對して爭鬪を惹起し、我等互に同一團體たることを忘るゝまでに狂ふに至るや。主イエスの言を記憶せよ、曰く、『我選ばれたる者の一人にても躓かす者は禍なるかな、其人は生れざりし方よかりしなり。わが選ばれたる者を躓かすよりも、寧ろ碾臼石を頸に懸けられて海に投げ入れられんかなり。』汝等の分裂は多くの者を躓かせり、多くの者を沮喪せしめたり、多くの者を疑はしめ、我等すべてを憂慮せしむ、而かも汝等の擾亂なほ止まず。

福なる使徒パウロの書簡を見よ、彼が最初汝等に道を傳へたる時に何と書き送りしや。彼時既に汝等黨派を作りしが故に、彼は己とケパとアポロに關して、眞の靈感を以て汝等に訓戒を與へたり。されど彼時には、汝等轟名ある使徒たち及びその喜尙する人の黨を作りたりしが故に、汝等の罪も重からざりしが、今回の分派は汝等何人の爲めに誘はれて邪道に入りしか、また世の評判たりし汝の兄弟に對する愛を滅するに至りしかを思へ。愛する者よ、一二の人の爲めに篤信なる年ふるコリントの敎會が其長老に不實なりとは恥べきことなり、キリストにある汝等の訓練にふさはしからざることなり。且つ此評判は、啻に我等に聞へたるのみならず、我等を離れて去りたる異端者の耳にも入り、爲めに汝等はその愚なることを爲して主の聖名をも褻瀆し、又た汝等自らも危險に陷りつゝあるなり。

四八

故に我等速に之を止め、神前に伏して淚を以て憐みを乞ひ、其赦を願ひ、兄弟を愛する我等の聖く又た信徒たるにふさはしき行狀にかへるべし。これ卽ち生に入る正義の門にして、錄して曰ふ『わがために正義の門を開け、我その內に入りて主を讃美せん、こは主の門なり、義人はそれよ

クレメンス書

り入らん。』と。然らば、開かるゝ多くの門あれど、正義の門はキリストのそれなり。是より入りて直ちに聖と義に進み、萬事秩序よくなさん者は皆な祝福さるべし。我等信仰を保ち、靈智を語るの能力を得べく、論議の辨識に聰明なるべく、其行爲に清淨なるべきなり。そは人は偉となるに従ひ益々謙讓なるべく、又たその益を顧慮するとなく、萬人の共通善を求むべきなり。

四九

キリストに在りて愛ある者キリストの戒を守るべし。誰か神の愛の羈絆（きづな）を説明し得るや。その大なる美しさを語るに足るものは誰ぞや。愛は如何なる高さにまで我等を擧ぐるか得て言ふべからず。愛は我等を神に結合せしむ。愛は多くの罪を隱くし、愛は萬の事に堪へ、また萬の事に和合統一す。愛ありて凡て神の選ばれたる者完く、愛なければ神に喜ばるることなし。愛は分派を許さず、愛は騷擾を爲さず、愛は萬の事に下劣なる事なく、愛に倨傲（きたかう）なることなし。愛は分派を許さず、愛は騷擾を爲さず、愛は萬の事に和合統一す。愛ありて凡て神の選ばれたる者完く、愛なければ神に喜ばるることなし。愛あり て神我等を嘉納し、我等に對する愛の故に我等の主イエス・キリスト神意によりて其血を流し、我等の肉の爲めに其肉を與へ、我等の靈の爲めに其靈を與へ給へり。

愛する者よ、愛の如何に偉にして驚くべきものたるかを見よ、其完全なることは得て言ふべからず。神之をゆるし給ふにあらざれば誰か之を有することを得んや。我等宜く責むべき所なく、人の黨派を避けて、愛を賜はらんことを神に祈願すべきなり。アダムより今日に至るまで、世々代々過ぎ去りぬ、されど神恩によりて愛にて完美せられたる者は、篤信者のうちに在りてキリストの國の來らん時顯揚せらるべし。そは錄して曰ふ、『汝の室にゆき汝の忿恚の過ぎゆくまで暫しか、るべし、我よき日を記憶し汝の墓より汝を起たしめん。』と。愛するものよ、若し我等愛の和合によりて神の訓戒を守り、愛によりて我等の罪赦さることを得ば我等幸福なる哉。錄して曰ふ、『不法を免され、罪を蔽はれたる者は幸福なるかな、主が罪を認め給ず、又た其口に譎詐なき人は幸福なるかな。』と。此祝福は我等の主イエス・キリストによりて神に撰ばれたる者に賜ふなり。願くは榮光世々限りなくキリストにあらんことを。アメーン。

五一

然らば我等の過失のため、また敵なる惡魔の攻撃によりて爲せることのため、罪の赦さるゝやう

禱るべし。而して分派と不和の首唱者たりしものは冀望の共通點を求むべし。そは怖と愛に生くる者は其隣人を困むるよりも寧ろ進むで自ら困むべく、我等に傳へられたる尊く正しき調和に其罪を嫁するよりも寧ろ自ら其責を負ふべし。そは人その罪を自白するは、神僕モーセに反きし者の如く其心を頑にするに優る。その罰は直ちに示され、彼等は生きながら地獄に下り、死これが牧者となりぬ。パラオと其軍、エヂプトの諸王と軍車と其騎士、みな紅海に沈みて亡びたるは、神僕モーセが徴兆と驚異をエヂプトの地にて行ひし後ち尚ほ其愚なる心を頑にしたるが故のみ。

五二

兄弟よ、神は何物をも要し給はず、何物をも何人にも需め給はず、只だ懺悔を需め給ふ。そは撰民ダギデ曰ふ、『われ主に懺悔せん、こは角と蹄を生したる若き犢にまさりて主の喜び給ふ所なり。貧者之を見て喜ぶべし。』又曰ふ、『感謝の供物を神に捧げよ、汝の誓を至上者につぐのへ。悩みの日に我を呼べよ、我れ汝を援け汝我を崇むべし。そは神の需め給ふ供物は砕けたる心なり。』

五三

汝悟性あり、兄弟よ、汝等よく聖書を解し、神の言を學べり。此故に我等手紙を書きて此等のことを汝等に思ひ出さしめんとす。モーセ山に登り四十日四十夜斷食と謙遜して過ぎし時、神彼に曰ひ給ひけるは、『汝起ち上りて速に此處より下れ、汝がエヂプトの地より導き出せし民は惡を行ふなり、彼等は早くも汝が彼等に命ぜし道を離れて己の爲めに偶像を鑄造したり。』と。主また彼に曰ひ給ひけるは、『我一二回汝に告げたり「われ此民を見たり、視よ是は項の强き民なり、我が彼等を滅ぼすを阻む勿れ、われ其名を天が下より拭ひ去り、汝をして彼等よりも偉大にて驚異すべき國と成らしめん。」』と。モーセ曰ひけるは、『主よ然らず、彼等の罪を赦し給へ、然らずば願くは生者の名簿より我をも抹し給へ。』と。嗚呼、大なる愛なる哉、人の及ばざる完美、此神僕は面を犯して斯民の赦罪を乞ひ、然らざれば彼等と共に彼も亦た掃滅されんことを願ひぬ。

五四

然らば汝のうちにて高潔なる心を有し、人に同情あり、愛に充てる者は誰ぞ。若しこれあらば叫ぶべし、『若し我ために分派、爭鬪、分裂など起りしならば、我れ去らん。我れ何處にても汝等の思ふ處へ往き、民の命するまゝに從はん。只だキリストの群をして其上に置かれたる長老と爭ふ

ことなからしめよ。』と。此の如きことを爲さん者はキリストにありて大なる榮光を得、到る處に歡迎せらるべし、そは『地とそれに充てるものは主のもの』なればなり。過去に於て既に此の將來に在りても亦た然らん。神の都に其民として悔ゆる所なく住ふ者の行はみな斯の如し。

五五

我等また天よりの例を擧ぐべし。多くの王侯多くの惡疫起りし時、神託に從ひて己の血にて其臣民を救ひ得んが爲めに自ら死に就けり。また多くの者は擾亂の止まん爲めに自ら其市を去れり。我等の間にも他の人を購ひ得んが爲めに其身を賣りし者少からざるを知る。自ら奴隷となり、其身の代を以て人に食物を給したる者も少からず。多くの女も神の恩惠により力を得、勇壯なる多くのことを爲せり。ユヂト其市の攻圍せられたる時長老たちに願ひて出でゝ、陣營に行き、自ら危險を冒して、其攻圍されたる國と人民を愛するが故に往けり。而して主は一婦人の手にてはオロフェルネ人を渡し給ひぬ。エステルも亦た此の如し。かれ完き信仰を有し、自ら危險に入り、イスラエルの國民に迫れる滅亡を除きたり。彼れ斷食と謙遜を以て萬事を觀たまふ萬代の神に願ひ、神は其魂の溫順なるを見て、彼は其爲に危きを冒せる民を救ひ給へり。

故に我等、罪に陷りし者の爲めに禱り、彼に歸順せんことを敎ふべし。愛する者よ、我等懲戒を甘受すべし、これ神と聖徒に十分記憶せられて其慈悲にあづかるべきものにて又た極めて有益なり、そは之によりて我等神意に合すべし。聖言に斯く曰ふ、『主いたく我を懲しめ給ひしかど死には付し給はざりき。』彼曰ふ、『そは義なる者慈悲を以て我を懲らし、我を咎め給ふ、されど我頭に罪人の膏を塗るべからず。』又た曰ふ、『神の懲しめて、後ち復た之を善癒し給ふ人は幸福なり。されば汝全能者の儆責を拒むなかれ。彼は痛を治し給ふ。六度彼れ汝を難艱の中より救ひて死を免れしめ、七度災禍なんぢに臨まず、饑饉の時に汝を救ひて死を給ふ。汝は舌にて鞭たるゝ時にも隱るゝことを得、戰爭の時には劍の中を免れしめて、惡禍の來る時にも懼るゝことあらじ。汝は不義なる者と惡人を笑ひ、猛獸をも懼るゝこと無かるべし。そは猛獸すら汝に溫和なるべければなり、汝は己が家の平安なるを知らん、汝の齋の地の草の如くになるを知らん。斯くて汝ひて安泰なるべし。汝また汝の子の多くなり、汝の裔の地の草の如くになるを知らん。斯くて汝

は時至りて熟せる穀類の如く、また定まれる時に收められたる禾場の堆積の如くに墓に納められん。』兄弟よ、看よ、神の懲め給ふ者に與へらるゝ擁護の如何に大なるかを。そは彼は善き父にして、我等を懲らし給ふは我等之によりて憐哀を受け得んが爲めなり。

五七

故に汝等擾亂の源をなしたる者は、長老の許に至り、その心の膝を屈して悔悛の懲戒を受けよ。汝の舌の高慢にして倨傲なる自尊を去りて柔順なることを學べ。そは汝等世評高く、而かも何等の希望なきに至らんよりも、小なりと雖キリストの群中に名譽ある者たるは、寧ろ汝等の爲めに宜しければなり。そは優れたる智慧の書に曰ふ、『視よ我れ我靈の辭を出し、我言を汝に示さん、われ呼べども汝等從はず、われ叫べど汝等顧ることなし。却つて我がすべての勸告をすて、我督戒を受けざりき。故に我れ汝が禍災に遇ふ時之を笑ひ、滅亡來らん時之を悦ぶべし。これ混亂颶風の如く來り、艱難と攻圍汝等に來らんなり。其時汝等我れを呼べども我れ耳をかさず、惡き者我を求むれども我を見ざるべし。そは彼等知識を憎み、又た主を畏るゝことを悦ばず我勸告に從はずして却つて我督戒を嘲りたり。故に彼等は己の途の果を食ひ、己の惡策に飽く

べし。彼等罪なき者を害ひたるが故に殺され、糺問によりて惡き者は亡ぼさるべし。されど我に聞く者は堅く望もて住ひ、かつ禍害にあふ恐怖なくして安らかならん。』

五八

故に我等かの至聖至榮の名に從ひ、古來不順者に示されたる恐嚇を逃れしめよ。これ至尊の名を確信して安住し得んが爲めなり。我等の勸告を受けよ、さらば汝等悔ゆることなかるべし。それは神活き給ふ如く、また撰ばれたる者の信仰にして冀望たる、主イエス・キリストと聖靈の活き給ふ如く、謙遜なる心をもち鋭意溫厚なる者、神が與へ給ひし訓示と命令とを守りて再たび罪に陷ることなけんか、彼等は必ずイエス・キリストによりて救はれたるものゝうちに加へられて撰ばるべし。願くは榮光世々限りなくキリストに在らんことを。アメーン。

五九

然れども若し誰にても、彼が我等によりて語り給ひし訓言に從はざる者あらば、これ自ら罪に陷るものにして其危險小ならず。されど我等は此の如き罪に全く關與せず、其愛子イエス・キリスト

によりて全世界に擧げ給ひし多くの撰ばれたる者を守護して害なからしめ給はんことを、天地の造主に切に懇請祈願すべし。彼はキリストによりて我等を暗黒より光明へ招き、無識の我等に其名の榮光を知らしめ給へり。

願くは我等をして萬物の源なる汝の聖名を有たしめ、我等の心の眼を開きて、汝のほか至高者中の至高者、聖者中の聖者なきことを知らしめ給へ。汝は傲慢なる者の誇を卑ふし、諸民の妄想を破り、微賤なるもの擧げて高からしめ、富者と貧者を作り。或は殺し或は活かし、汝は靈を福し又たすべての肉の神なり、人の作業を見、危き者を援け、絶望者を救ひ、一切の靈を造りて守り、諸民を地に繁殖せしめて、其内より汝の愛子イエス・キリストにより汝を愛する者を撰み、また彼によりて我等を敎へ、我等を聖とし我等に譽れを授け給へり。神よ願くは我等を援け我等を救ひ給へ。惱める者を救ひ、卑き者を憐み、倒れたるを起こし、需むる者に與へ、病めるを癒し、汝が民の迷へるを還らしめ、餓へたるを養ひ、捕はれたる者を贖ひ、弱者を立たしめ、氣弱き者を慰め給へ。萬國みな汝を知り、汝のほかに神なく、またイエス・キリストは汝の子にして、我等は汝の民、その牧場の羊たることを知らしめ給へ。

蓋し汝はその働きによりて世界の久遠なる組織を示し、主よ、汝は地を造り給へり。汝は忠實にして、正しき審判を行ひ、その能力と威嚴は驚異に値し、汝は物を造るに智あり、なすに慮あり、見ゆるものに於て善く汝に信賴する者に惠あり、あゝ大慈大悲の主よ、願くは我等の邪曲と不正と犯罪と過失とを赦し給へ。汝の眞理を以て我等を潔め、我等の支配者の前に嘉さるべく、又た善き事を爲さしめ給へ。然り主よ、願くは汝の面を我等に照らして安らかに善を爲さしめ、汝と我等の支配者の前に嘉さるべくして我等を救ひ給へ。我等と地に住むすべての者に協和と平安を與へ、我等の列祖が信仰と眞理を以て呼びたる時にし給ひし如く我等にも爲し給へ。我等汝の全能にして榮光ある名に服し、また地上の君主と太守たちに從はせ給へ。

六一

神よ、汝はその勝れたる妙へなる力により、彼等に宗主權を授け、我等をして汝が榮光と名譽を彼等に與へ給へることと知らしめ、何事にも我等は汝の聖意に從ひて彼等に服從すべきことを示

し給へり。主よ願くは彼等をして健やかに、和合しまた堅く立ち、汝が心安く彼等に與へ給ひし支配をなし得ることを得せしめ給へ。在天の神、久遠の王、主は人の子等に榮光と名譽と地上の物を支配をなし得ることを得せしめ給へ。願くは汝の前に嘉しと見ゆる如く彼等に智慧を授け、その賜りたる力を平穩に優和に用ひさせ給ひて、汝の憐みに與ることを得さしめ給へ。神よ汝のほか に我等の爲めに此等のもの、また其よりよきものを爲し得る者なし、我等、我等の魂の守護者なる祭司長イエス・キリストにより主を讃めまつる。願くは榮光と威嚴彼により、今後も千代八千代に限りなく汝に歸せんことを。アメーン。

六二

兄弟よ、以上我等、禮拜に最も適することと、敬虔と正義の道を步まんと欲する者に、最も有益と思はることに關して充分に認めたり。卽ち信仰と悔悛の各方面、眞の愛と克己、節制と堪忍に關して記したり。また汝等、正義と眞理と永く忍ぶこととにより聖き心を以て全能の神に仕へ、互に協力一致し、惡心を抱かず、銳意溫順に愛と平和を以て、前に列擧せる如く祖先たちが造物主たる父なる神と萬人に對して謙讓にして愛好されたるが如くに生活すべきことを汝等に注意せり。而

して我等此事を汝等に注意するにあたつて、殊に愉快を覺ゆるは、我等は今ま誠實にして卓越せる性格を有し、且つ神の敎訓を學びたる人々に書を送りつゝあるを知ればなり。

六三

故に我等斯く多くの、又た斯く大なる實例に鑑み、首をたれて服從の態度をとり、無益なる黨派を立つることを廢めて、眞理に於て我等の前に置かれたる目標に、過失なく到達せんとするは正しきことなり。汝等、我等が聖靈によりて認めたる事に服し、また此書に於て汝等に平和と一致を懇請したる所に從ひて、汝等互の惡き嫉妬心を拔き去らば、我等が喜悅如何ばかりぞや。我等は我等の間に永く住し、其幼時より老年に至るまで何等責むべき所なき、誠實にして思慮ある人々をに平和に復らんことを冀望して已まざるを汝等が知らん爲めなり。彼等、汝等と我等の間に證人たるべし。我等斯くするは、我等は赤心汝等が速か

願くは全てを視たまふ神、諸靈の君、諸肉の主、イエス・キリストを撰び、また彼によりて「特

六四

「選民」として我等を選び給ひしもの、信仰、
凡てその榮光ある聖き御名を呼ぶ者に授け、我等の大祭司にして守護者なるイエス・キリストによりて、御前に嘉みすべきものと成らしめ給はらんことを。アメーン。
りて今も後も久遠に彼に歸せんことを。

六五

我等の使者、クラウヂウス・エフェブス、及びウアレリウス・ピトー、及びフォルツナッスを安全に喜ばしき音信を齎らせて速かに歸へし、我等が神に禱り汝等に願ひし平和と一致が速かに汝等の間に成るを報告し得、又た我等も汝等の好狀況を聞きて一刻も早く喜ぶことを得せしめよ。
願くは、我等の主イエス・キリストの恩惠、汝等及び凡て何處にありても彼によりて神に召されたる者と共ならんことを。榮光と崇敬と權力と偉大と永遠の支配、キリストにより世々限りなくあらんことを、アメーン。

ローマ人よりコリント人へ送れる書

パルナバ書

一

めでたし、息子息女等よ、我等を愛せし主(しゅ)の御名に於て、平安に。

汝等に對する神の命令の大にして豐かなることの爲に、汝等の靈の祝され且つ榮光あるを見て喜ぶこと甚大なり。汝等が受けたる靈の賜は内心まで深く植ゑられぬ。われ實に、恵み深き主は其靈を汝等に注ぎ給へるを見て、我救拯の望を抱き益々自ら慶賀に堪へず。爲に我が渇望せし如く汝等を見ることを得て大に感動せり。我れ堅く之を信じ、また我れ屢々汝等に語れる如く、主は正義の道に於て我と伴なりしが故に我れ多くの事を知れりと自覺するを以て、生命の望に從ひて汝等にやどる大なる信仰と愛の故に、我が命よりも汝等を愛するやうになれり。斯くて我もし我受けたるものを幾許にても汝に與ふるを我務とせば、かくの如き靈に仕へるの酬なきにあらざ

るべく、我また急ぎ汝等に短かき書簡を書き送りて汝等の知識も亦た汝等の信仰と共に完全ならんことを望む。

抑も主の教は三つなり。即ち、生命の望は我等が信仰の始にしてまた終、正義は審判の始にして過にし事と今在る事とを我等に示し、また後に來らんとする事の味の初穗を我等に賜ひたり。我等此等の事の一々成就すを見るや、彼の曰ひ給へる如く、我等は彼を敬畏するが爲に豐富にして深大なる供物をなすべきなり。されど我れ汝等に一二の示すべき事あり。これ教師としてに非ず、寧ろ汝等の仲間の一人として示すものにして、汝等特に此際之を聞きて喜ぶべきなり。

二

時は惡く、また惡を爲す者權勢あるが故に、我等は自ら愼み、主の訓を求むべし。神を畏れよ、忍耐は我等の信仰を扶け、永く忍ぶことゝ慾を制することは我等の味方たるべし。此等のこと主に對して聖からん限り、智慧、分別、理解、知識など、これに從ふべし。そは豫言者たちにより て、犧牲、燔祭、供物を要し給はざることを我等に明示し給ひし彼れ或處に曰ひ給ふ、『主曰ひた

まはく、「汝等が捧ぐる多くの犠牲は我に何の益あらんや、我は燔祭に厭き、小羊の血を悦ばず、汝等我前に來る時にも喜ばず。抑も何人が此等のものを汝等に求めしぞや。今より汝等徒らに我庭をふむべからず。汝等麥粉を持ち來るとも無益なり。燻物は我が惡むところ、新月と安息とに堪へず。」』と。されば、主は此等の事を廢し、我等の主イエス・キリストの必然の束縛なき新しき律法により、人によらずして供物を立て得るやうなし給へり。彼また告げて曰ひ給はく、『我れ汝等の先祖が埃及國より出で來りし時、燔祭の犠牲を我に捧ぐるやう命じたることありや、否、われ寧ろ彼等に命じて、「汝等誰も隣人に對し其心に惡念を抱き、また僞りの誓言を好むこと勿れ。」と曰へり。』されば我等愚ならざる限り、天父の慈悲ある御心を會得すべきなり、そは彼れ、我等が彼等の如くに誤解することなく、如何にして我等の供物をなすべきかを我等に語り給へばなり。かれ我等に曰ひ給はく、『主に捧ぐべき犠牲は碎けたる心なり。』と。故に兄弟よ、我等は救拯のことを心して尋ね、惡者が僞りて我等のうちに入り、我等の永生を奪はざるやう努むべきなり。

彼また此等のことに就て告げて曰ひ給はく、『主曰ひ給ふ、汝等何故に此日汝等の聲が叫絶して聞ゆるやう我ために斷食するや、是れわが好む斷食にあらず、主曰ひ給ふ、一人だに謙遜なるなし、汝等其頸を輪の如くに曲げ、麁服を着け、灰床に寢ね、之を以て嘉納さるべき斷食と稱すとも然らず。』彼我等に曰ひ給はく、『主曰ひ給ふ、看よ、是れ我が悦ぶ斷食なり、惡の繩目を解き、苛酷なる約束の束縛を緩め、虐げられたるを赦して去らしめ、悪く不正の契約を破棄し、餓へたる者に汝のパンを與へ、裸なる者を見れば之に衣せ、家なき者を汝の内に連れ、賤き者を見るとも之を卑まず、汝も亦た汝の家族の者も然かすべからず。さらば汝の光は曉の如くに輝き、汝の衣は速かに上り、汝の義は汝の前に進み、神の榮光汝を圍まん。斯くて汝呼ぶ時神汝に聞き、汝なほ語る時神は視よわれ此處にありと曰ひ給はん。若し汝その束縛と暴行と嘯の言をやめ、喜びて汝のパンを貧き者に與へ、貶黜されたる者を憐まば則ち佳し。』故に兄弟よ、永く忍ぶ者は、神その愛者により て準備し給ひし人々が彼の罪なきことを信じ、また我等その律法に改宗して破滅せざるや う、此等の事を以前より我等に明かになし給へり。

然らば我等今ある物を探究し、我等を救ふに足るものを求めざるべからず。我等は不法なる業に勝たれざる爲め、全くかくの如き業を避け、また來らんとする時に愛せらるやう現時の錯誤を遠くべし。我等は罪ある者また惡き人に化せらるやう、彼等の侶伴たらんとする我等の魂に自由を與ふべからず。終りの蹉跌物目前に在り、エノク之に就て記して曰ふ、『主この目的に對しその愛する者が彼の産業を承けんとて急ぎ來らんが爲め、其時日を短かくし給へり。』豫言者も亦曰ふ、『十の國この地上を支配せん、其後また一人の小王興りて三人の王を征服統轄すべし。』と。ダニエルも同じく曰ふ、『斯くて我れ第四の獸を見たり、彼は獰惡にして力强く海の全ての獸より恐ろしく、尙ほ十の角これより生ずるを見たり。尙ほ是より一の小さき立派なる角出でて、その大なる角を征服せり。』と。故に汝よく領會すべし。我また、汝等の一人として、殊に汝等よりも愛する者として、汝等に要求す。汝等いま留意して、汝等の罪を重ね、契約は彼等と我等のものなりと言ふ或者共の如くなる勿れ。これ我等のものなり、されど斯の如くしてモーセは之を受けたるばかりなりしに之を失ひたり。聖書に曰ふ、『モーセ山に在りて四十日四十夜斷食し、主より契約卽ち主の手にて書ける石牌を受けたり。』されど彼等偶像に轉じて之を失へり。卽ち主曰ひ給ひけるは、『モーセ、モーセ、速かに下れ、汝がエジプトの國より導き出せし民は律法を破り

たり。』而してモーセ之を領會して其手より二枚の牌を投げ、彼等の契約は破れぬ。これ被愛者イエスの契約彼れの信仰の望により我等の心に封ぜられんためなり。且つ我れ多く認めんと思へど、われ教師としてに非ず、ただ我等が有するものを悉く與へんとする愛人として、汝等に執着し急ぎ記す。此故に我等終りの日に愼むべし、そは我等、此惡き現代に於て神の子たるにふさはしきやう、黒き者が侵入するの機を與へざらんため、來らんとする犯罪に對して抵抗するにあらざれば我等の生涯も信仰も何の益あらざるべし。我等悉く虛榮を去り、全然惡き道の業より離るべし。汝等既に義とせられたる如く、個別に隱退して生活せず、互に結束して共同善を求むべし。そは聖書に曰ふ、『禍なる哉、彼等は己を見て賢しとし自ら顧て聰しとす。』我等靈的なるべく、神に奉献せられたる者の如く思ひて安心し罪の中に眠るべからず、されば惡き者我等を其權力の下に服して主の國より投出すべし。我兄弟よ、イスラエルに大なる徴兆と驚異の爲されたる後ち尙ほ彼等は終に乘てられたることをも見よ。『招かるゝ者は多かれど選ばる者は少し。』と錄されたる如きことの

我等になきやう愼むべし。

五

蓋し我等が罪の赦免卽ち彼の濺血によりて潔められんが爲め、主が其肉を腐ちはてさせ給ひしは此故によれり。卽ち聖書に彼に就て半ばイスラエルに關し、半ば我等に關して謂つて曰ふ、『彼は我等の愆のために傷けられ、我等の不義の爲に碎かれ給ひ、其うたれし痍によりて我等は癒されたり。彼は屠場にひかるゝ羊の如く牽かれ、毛をきる者の前に默だす羔の如く默だしぬ。』故に我等、彼が過ぎにし事を我等に示し、行く末の事を悟らしめ給ひしことを主に感謝すべきなり。聖書に曰ふ、『鳥を捕へんとて羅を張るは必しも不正にはあらず。』と。これ正しき道を知りつゝも、暗き邪道に入る者は正さに亡ぶべきなりとの義なり。加之、兄弟よ、主もし我等の生命の爲に苦みを忍び、而かも彼は全世界の主にして、世の基礎を置かざる前に神彼に告げて『我等に象どりて我等の像の如く我等人を造らん。』と曰ひ給ひしとせば、人の手にかゝりて受け給ひし其苦みは果して幾許ぞや。聽け、彼の恩惠を受けし豫言者たちは彼に就て豫言し、彼れ肉體を以て現る必要ありしが故に、彼は死を亡ぼし、又た死ぬる者のうちより甦るとを示さんが爲

め、列祖たちに爲し給ひし約束を實行し、己の爲に自ら新しき民を備へ、且つ彼れ此世に在りし時自ら死者を復活せしめて之を審判することを示し給ひぬ。尚ほ彼れイスラエルを教へ大なる徴兆と驚異を行ひつゝ、彼等に道を示し、又た大に彼等を愛し給へり。されど彼の福音を宣傳すべき使徒たちを選び給ひし時、彼は正しき者を招かんとにあらで、罪ある者を招かんとて來り給ひしことを示さんとて、罪ある者のうちにて最も罪ある者を選び、斯て自ら神子たることを顯し給ひたり。そは彼もし肉體もて來らざりしとせば、人は如何にするも彼を看て救はるゝこと能はざるべし、卽ち日輪は滅亡すべきものにして又た彼の手にて造れるものなるに、人之を正視する時は視力を失ふべきのなり。此故に神の子は肉體を以て此世に來り、斯くて豫言者たちを迫害して死に致らめたる者等の罪惡を極めしめ給ひぬ。彼は此ために受難せり。神彼れの肉體の膺懲が彼等より來ることを曰ひ給ふ、『彼等牧者を擊たん時、其群羊また亡ぶべし。』と。斯くて彼れ木の上に受苦するの必要ありしが故に自ら進みて受苦せり。そは豫言者彼に就て曰ふ、『我魂魄を劍より免れしめ、我肉を釘つけにせよ、惡人の會衆われに反して起りたればなり。』又た曰ふ、『看よ、我れ撻つ者に我頰をまかせ、我を打つ者に我背をまかせ、我を嚴として我面を動さゞりき。』

六

されば彼れ戒を與ふる時何と曰ひ給ふや。『我と共に法廷に來る者は誰ぞや。我を訴ふる者は誰ぞや。主の僕に近づき來れ。汝等禍なるかな、皆な衣の如く古び、蠹(しみ)の爲に食ひ盡さるれん。』豫言者また彼が碎く石を置ける事を謂つて曰ふ、『看よ、われ一の貴き石をシオンの礎に置かん、之に信頼する者は永遠に活くべし。』と。而して曰ふ、『之に選ばれたる主なる隅石にして榮あるものなり。』と。されば、我等の望は石にありや。決して然らず。主彼の肉を強くし給へるを謂ふなり。卽ち彼曰ひ給ふ、『而して彼我を巖の如くなし給へり』と。豫言者復た曰ふ、『工師の捨てたる石は是れ隅の首石と成りたるものなり。』而して『是れ主の成し給へる大なる驚くべき日なり。』と。我れ汝等に平易に書き送るは汝等が理解し得んが爲なり、我は汝等の愛に献身せり。豫言者また何と曰ふや、『罪人の群衆われを圍み、蜂巢の周に集る蜂の如くに我を圍めり。』而して『彼等は衣を鬮(くじ)にせり。』と。然らば彼既に肉體にて顯はれ且つ受難すべく定まり居たるが故に其苦死の事は豫告せられたるなり。そは豫言者イスラエルに就て曰ふ、『彼等の靈魂は禍なるかな、彼は我等に不利なればなり』と。『我等義人を縛せん、彼は我等の爲す惡事を謀りて曰ふ「我等義人を縛

豫言者モーセは彼等に何と曰へるや、『看よ、主なる神かく曰ひ給ふ、彼がアブラハム、イサク、ヤコブに與へんと誓ひ給ひし、その善き國に入りて之を相續すべし、これ乳と蜜の流るゝ地なり、と。』されど智(グノシス)が曰ふ所を聽くべし。曰く、『冀望をイエスに置くべし、彼は肉體もて汝等の眼前に示さるべし』と。蓋し人は土にして受苦すべきなり、何となればアダムは地の面より創造せられたればなり。茲に『善き國、乳と蜜の流るゝ地』とは何の義ぞや。兄弟よ、我等の主は讃むべき哉、彼は其祕密を悟る智慧と理會とを我等に賜へり。豫言者主の譬を語りて曰ふ『智慧あり知識あり其主を愛する者にあらずして誰か能く領會(がいくわい)せんや』と。彼れ罪の赦免によりて我等を新たにし、以て我等を改造し給へり。これ我等が全く新たに造られたる如く、小兒の靈魂を得んが爲なり。聖書に彼が其子に告げて曰ひ給ひしと記すものは蓋し我等に關すべき所なり、曰く、『我儕に象(かたど)りて我等の像の如く我等人を造り、之に地の獸と天の鳥と海の魚とを治めしめん。』斯くて其美はしき創造を見給ひし時、主曰ひ給ふ、『生めよ繁殖(ふえ)よ地に滿(みて)よ。』と。これ神が其子に語り給ひし言なり。更に我れ汝等に神が如何に我等に語り給ふかを示さん。彼れ最終日に第二創造をなして曰ひ給ひけるは、『看よ、われ最後のものを最初のものゝ如くに造る。』と。且つ豫言者之に言及して曰へり、『乳と蜜の流るゝ地に入りて之を統治せよ。』と。故に我等は新たに造られたるものたること

を見るべし、即ち他の豫言に曰ひ給ふ、『主曰ひ給ひけるは、看よ、我れ彼等（即ち主の靈が先見せる者）より石の如き心を取り去りて肉の如き心を入れん。』と。そは彼自ら肉を以て現れ我等の間に住まんとし給ひければなり。蓋し兄弟よ、我等の心の住居は神聖なる神龕（みつし）なり。主曰ひ給ふ、『われ何を以て主たる我神に出で、榮光を受くることを得んや。』彼曰ひ給ふ『われ兄弟等の集合にて汝に告白し、聖徒の集會の中にて汝に歌はん。』と。されば我等は則ち彼の良き地に連れ給ひし民なり。而して乳と蜜とは何物の謂ぞやと云ふに、小兒には先づ初め蜜を與へ、後ち乳にて育（そだ）つ如く、我等も亦た約束の信用と言葉にて養はれ、地に住ひて之を有（も）つに至るなり。而して上に曰ふ如く、『生み殖ゑ魚や、天の鳥を治め得る者は誰ぞ。凡そ統治するには權威なかるべからず、之ありて初めて他を命令し又た支配することを得るなり。而して此の如き事未だ之れなしとするも、我等はその何時あるべきかを聞けり、即ち我等自ら主の約束の相續人として完くならん時なり。

七

故に喜びの兒よ、善き主が全（すべ）ての事を豫め我等に明かし給へることを傾會（うくわい）すべし。これ我等萬

事につきて感謝と讃美を歸すべきものを知り得んがためなり。神の子は主にして又た活ける者と死しゝ者を審判すべき者なるに、尙ほ其傷によりて我等を活かしめんがために、受難し給ひしとせば、我等は、神の子たる者は我等の爲にする所あるにあらざれば決して難を受く能はざることを我等は信ずべきなり。且つ彼れ磔に上りし時、彼は酢と膽を飲まされぬ。神殿の祭司等が如何に此事を豫告したるかを聽け。戒に錄すらく、『何人と雖も斷食をせざる者は死すべし。』と。而して主が此戒を下し給へるは、祭壇上に捧げられたるイサクの豫型が實現せらるゝ爲に自ら犧牲として靈魂の容器を捧げんとし給ひしが故なり。されば豫言書に何と曰ひ給へるや、曰く『全ての罪の爲に斷食に捧げられたる山羊を食はしめよ。』と。尙ほ『總ての祭司たちのみにて殘物を洗はずして酢にて食ふべし。』とあるに注意すべし。これ何が故ぞや。他なし、我れ我新しき民の爲に將に我肉を供せんとする時に、汝等我に膽と酢を與へて之を飲ませんとするが故に、民が悲服を着け灰を被りて哀み斷食する間に、汝等のみ之を食ふべし。これ彼が彼等の爲に受難すべきを示さんとてなり。訓にある處を注意せよ、『佳良にして相似たる山羊二頭をとりて供せよ、祭司は其一をとりて罪のための燔祭とすべし。』と。されど他の一頭は如何にすべきや。曰く、『他の一は呪はれたる者なり。』と。茲にイエスの型の示されあるを見よ、『汝等すべて之に唾きし、

之を驅り、其頭に赤き毛を結びて、之を荒野に放つべし。』とあり。斯くしたる時之を荒野に行く者、之を驅り行きて、其赤毛を除き、之をラケルと稱ふる灌木の上に置くべし、即ち其嫩芽はよく人の食料とする木なり。故にラケルのみにても佳き收得なり。これ何の謂ひぞ。聞け、『第一の山羊は祭壇用にして、他の一は呪はれたる者とす。』、而して此呪はれる一頭が冠飾を加へらるるは、彼等は其日に彼が足まで垂るゝ長き緋の衣を纏へるを見るべく、而して彼等、『これ我等が一たび礫にし拒み突刺し唾したる者にあらずや。』と曰ひ、其時彼誠に自ら神の子たるを宜ぶべきが故なり。然れど、如何にして彼が山羊の如きやと云ふに、『山羊は一双にして互によく似て且つ美はしかるべく』、彼等其時彼が來るを見て山羊のよく似たるに驚かん。故にイエスの豫型が受苦すべき筈なりしを見るべし。されど、荊蘇の中に毛を置くは何故なりやと云ふに、これイエスが救會に於ける型なり、卽ち荊蘇は刺あるものにして、其赤毛を取らんと欲する者は苦痛を受けざるべからざる如く、イエスも亦た只だ苦痛によりてのみ到達し得べし。彼曰ひ給ふ、『我を視て我國に到らん者は痛みと苦みによりて我をとらへ得べし。』と。

イスラエルに命じて、全く罪を犯せる者は、牝の犢を捧ぐべく、之を焼き、若者等その灰をとり、器物に入れ、赤き毛を捧と牛膝草に結び（十字架と赤毛の豫型をまた見るなり）、而して民皆な其罪を潔めらるやう若者等は各人に滌ぐべしとせるは、これ果して何を表示するや。彼如何に明かに汝等に語るかを見よ。犢はイエスなり、之を捧ぐる罪ある人々は屠らんとて之を連れ來れる者なり。されば既に人なく、罪人の榮光なし。滌ぐ若者は罪の赦免と心の潔めを宣ぶる人にして、福音を宣傳すべき權を給はり、イスラエルの十二支族に對する證として其數十二名。されど滌ぐ若者の數三名とは如何、之れ神前に大なるアブラハム、イサク、ヤコブに對する立證なり。また何故に毛を木に結ぶやと云ふに、イエスの國は木の上に在りて、彼に信頼する者は永遠に活くべきなり。また木と牛膝草を共にせるは、これ彼の國には惡き又た汚れたる日ありて、我等の救はるゝは其時なり、そは彼も亦た肉體もて苦を受け、牛膝草の汚れにて癒されたればなり。この故に斯く爲されたる事は我等には明かなるも、彼等には然らず、彼等は主の聲に聞かざればなり。

九

彼また耳に就て語り、我等の心に割禮せることを言ひ給ふ。主豫言書に曰ひ給はく、『彼等耳に聞きて我に從ふ。』又た曰ひ給ふ、『遠くにある者は明かに聞き、我行ひし事を知らん。』『主曰ひ給ふ、汝等の心に割禮を行へ。』と。又た曰ひ給はく、『イエスラエルよ聞け、主たる汝等の神かく曰ひ給ふ。』主の靈また豫言すらく、『永遠に活きん者は誰ぞ、我僕の聲に聞け。』と。又た曰ひ給はく、『天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主證明のために此等の事を言ひ給へり。』と。又曰ひ給ふ、『聞け、兒等よ、荒野に叫ぶ者の聲を。』『主曰ひ給ふ、民を治むる者、主の言を聞け。』されば彼は我等が其言を聞きて信ぜんがため我等の聽聞に割禮を施し給へるにて、彼等が信賴したる割禮は廢せられたるなり。そは彼れ割禮は肉體に關するものにあらずと宣し給へり。惡き天使彼等を誤らしめたる故に彼等は誤解せるなり。彼れ彼等に告げて曰ひ給ふ、『主なる汝等の神かく言ひ給ふ。』（予は此處に一の命令を見るなり）『荊蕀の間に種播く勿れ、割禮を行ひて汝の主に屬けよと。』彼また何と曰ひ給ふや、『汝等の心の頑固を割禮し、汝の項を強くする勿れ。』また聞け、『主曰ひ給ふ、看よ、凡て異邦人は前の皮に割禮を受け居らず、されど斯民は心に割禮を受け居らず。』と。されど汝等曰はん、『斯の民は確かに印として割禮を受けたり。』と。然り、シリヤ人もアラビヤ人も、其他偶像の祭司等みな、割禮を受け居れり。されば此等の者はその契約の內に在る者なりや、實に

エヂプト人さへ割禮を受け居れり。愛の兒等よ萬事につきてよく知るべし、初めて割禮を受けたるアブラハムが斯くせるはイエスの精神を以て前を望みてなり、而して三字の教を受けたり。即ち曰ふ、『アブラハムは其家の者十八と三百人に割禮を行へり。』と。斯くて彼は如何なる知識を得たりや。此處に彼先づ十八と曰ひ、而して少しく息を停めたる後ちに三百と曰ふに注意すべし。十八なる數字はIH（イオタ・エータ）にして、即ちイエスを意味す、而して十字架はT（タウ）なる記號にて神惠を表すものなるが故に、彼は次に三百と曰へるなり。即ち彼れイエスを二字にて表し、十字架を一字にて表示す。彼れ此事を辨へて我等の心に其教の賜を置けり。何人も未だ我より此れ以上の優れる教を受けたるものなし、されど我れ汝等は之を受くるに値すと思ふ。

一〇

モーセが『汝等豚、鷲、鷹、鴉、また鱗なき魚を食すべからず。』と曰へるには、三つの教を含むなり。而して彼れ申命記に記して『われ我民と我法度の契約をなさん。』と彼等に曰へり。されば神のモーセは其精神を謂ふなり。彼が豚の事を曰ふは此故なり、即ち、汝等豚の如き人々と交る勿れとの謂ひなり、蓋し彼等が豐富なる時に主を忘れ貧しき時に

主を認むると、恰かも豚が食ふ時に其飼主を知らざるも、空腹になりて叫び出し、而して食を得れば復た靜かになるが如し。『汝また鷲、鷹、鳶、鴉を食ふべからず。』と曰へるは、自ら労働と汗して其食を得ることを知らず、惡心を以て他人の財産を劫奪せんと欲し、無邪氣なる様しても、即ち此等の鳥欲心もて何人を劫かさんかと見張り居る如き者と交り又之に似る勿れとのことなり、即ち此等の鳥は自ら食を求めず、徒らに坐して如何にして他者の肉を啖ひ得るかを考へ、而して遂に惡病にかゝるなり。『汝、八目鰻また水蟲また烏賊を食ふ勿れ。』と曰ふは、全く不信神にて且つ既に死に宣告せられたる如き人と交り又その如く成る勿れとの謂にして、即ち此等の魚は呪はれたる者にて深き水中に住し、他の魚の如く游泳することなく、海底に居る者なり。『汝また兎を食ふ勿れ。』とあるは、男色又は類似の事をする勿れとの義なり。そは兎は毎年肛門を生ずる者にして、その孔の數は年齢に相當するなり。『汝また鼠狗を食ふ勿れ。』とあるは、姦夫または色魔の如き者となる勿れとの義なり、そは此等の獸は毎年其性を更へて直ちに牡となり或は牝となるなり。彼また甚く惡めり。これ汝等、口もて惡きことを犯すと云はる者、或は口もて罪を犯すかの不潔なる女と交る勿れとのことなり。そは鼬は口より受胎すればなり。モーセは此等食物に關する教訓を受け、之を其精神に於て曰へり。然るに彼等は其肉慾强きが故に、實に食物に關する者とせり。ダギデも亦た

同じ三ヶ條の教に關する智慧を授けられて曰ふ、『魚が深き水中の暗黒を行く如く、惡き者の謀略に歩まず、主を畏る者の如く、而かも罪を犯すと豚の如くに罪人の途に立たず、又た唯坐して其獲物を待つ鳥の如く、嘲る者の座にすわらぬ者は福なり。』此等食物に關する教訓をよく會得すべし。モーセ復た曰ふ、『蹄の分たれたる獣と反芻む獣は汝等之を食ふべし。』と。これ何の謂ぞや。

食物を受くる者は之を與ふる者を知り、其人に信頼し、之を悦ぶが如し。而して其訓戒に關する所如何と云ふに、汝等神を畏るゝ者、其心にて受けたる 神言の意のある所を考ふる者、神の法令を語り又た之を守る者、默想は喜悦の業たるを知り神の言を反芻する者どもと交るべしとなり。又蹄の分れたる者とは、義人は此世をも渉り、又同時に聖代をも展望するとのことなり。如何に巧みにモーセが立法せしかを見よ。されど彼等は如何にして此等の事を解しまた悟了し得たりしや。されど我等は正しき理解を有し、主の聖意として此等の訓戒を見る者なり。此爲に彼れ我等の耳と我等の心に割禮を授け給ひ、我等はよく此等の事を了解し得るなり。

一一

されど我等の研究すべきは、主が洗禮の水と十字架に關して豫告し給ひしことありや否やのこ

となり。先づ水に關しては、イスラエルが罪の赦となる洗禮を愛くるよりも、寧ろ自ら建設せんと記されたり。豫言者の曰ふ『天よ驚け、地よ更に慄け、此民は二つの惡事をなせり。彼等は活ける水の泉なる我をすて、自ら死の水槽を掘れり。我聖山シナイは砂漠の一岩石なりや。汝等は巢を離れて羽ばたき廻る雛の如くなるべし。』と。又曰ふ『われ汝の前に往きて崎嶇をたひらかにし、銅の門をこぼち、鐵の閂をたちきるべし。われ汝に暗き祕かなる處に遷せる見へざる財寶を與へん、我れ主たる神なるを知らしめんとてなり。』また『汝かたき磐の高き洞に住はん。』『その水は乏しきことなく、汝の目は美はしき狀なる王を見、汝の魂は主の畏るべきことを想はん。』彼また他の豫言に曰ひ給はく、『此等のことを爲す人は水流の分岐點に植えたる木の、期に至りて實を結び、葉も亦凋まざる如く、その作す所みな榮へん。惡き人は然らず、粃糠の如く、風地の面より之を吹き去らん。されば惡き者は審判にたへず、罪人は義人の評議に立つことを得ざるなり。そは主、義人の途を知り給ふ、されど惡人の途は亡びん。』と。汝等水と木とを共に記し給へるを注意せよ。希望を十字架に置きて水に下れる者は福なりとの謂なり。そは彼其時に報を與ふることを語り給ふ、曰ひ給はく、『其時至らば我之に償還せん。』と。されど今、『其葉も凋まざるなり。』あるは、信仰と愛を以て汝等の口より出づる言は多くの者の發心と期望に益あらんとの謂なり。

更に他の豫言に曰ふ、『ヤコブの地は何れの地よりも讃へられん。』と。蓋し其靈魂の容器を讃揚し給ふの謂なり。次に何と曰ひ給ふや。曰く『右の方に川ありて流る、美はしき樹木その中より生ひ立てり、其實を食はん者は永遠に活くべし。』と。我等罪と僞に充ちて水に下り、而かも我等の是より出づる時心中敬神の實を結び、靈にイエスの希望を抱きて來るとの謂なり。『其實を食ふ者は永遠に活くべし。』とは、此等の言を聞きて信ずる者は永遠に活くとのことなり。

一一

彼また等しく他の豫言に十字架に就て記して曰ひ給ふ、『主曰ひ給ふ、「何時此等の事の成るべきや。木の倒れて又た立たん時、血の木より流れん時ぞ其時なる、」これ卽ち十字架と及び磔せらるべき彼に關する言なり。彼またイスラエルが外寇を受けたる時モーセに

彼等もし彼に信頼せざれば救はるること能はざることを彼等に知らしめんとてなり。
に於て曰ひ給はく、『われ不從順の民、我正道を拒む者に終日我手を延べたり。』と。
エスの豫型を示し、彼は受難すべきこと、又た彼等が殺されたる者と思へるに、イ
きし時に與へられたる表徴（しるし）によりて自ら生を與ふるものたることを示せり。そは主は蛇をして彼
等を咬ましめ給ひて彼等は亡びたり（卽ち、エヴの墮落は蛇によりて起りしなり）。
て其罪の故に死の苦に交付さるべきことを確信せしめん爲なり。然り、モーセ自ら
の神として刻みまたは鑄たる像を作るべからず。』と命じ、而かも自らイエスの豫型を示さんとて
一像を作れり。モーセ蛇の像を刻み、之を榮譽の處に置き、民に宣して之を招集せ
集合し來りて、彼等が治療の爲めに之に祈禱を捧げんことをモーセに請求せり。於是彼等
等に曰ひけるは、『汝等誰にても蛇に咬まれたる時、木の上に置きたる蛇の下に來り、その死せる
ものなるに尙ほ生を與へ得べしとの信を以て之を仰げば、其人必ず直ちに救はるべし。』と。而し
て彼等斯くしたり。汝等茲にも亦たイエスの榮光を見るなり、そは凡てのもの彼に在りて又た彼
に歸すべきなり。またモーセ、豫言者として、ナウェの子イエスに其名を與ふる時、何故に全民
ただ彼にのみ聽くべしと曰へりや。何となれば天父は其子イエスに關することをみな啓示し給ひ

たればなり。故にモーセ、ナウエの子イエスに其名を與へて後に其地を窺はしめんとて彼を派遣せんとして曰ふ、『汝手に書を取りて主の曰ひ給ふことを記せ、終りの日に神の子アマレク人の全家を其根底より破らん。』と。人の子ならざる神の子イエス茲に復た肉の型にて表はされたるを見るべし。彼等キリストはダギデの子なりと言はんとするが故に、ダギデ罪人等の誤解を恐れ又た之を悟りて、自ら豫言すらく、『主我主に曰ひたまふ、我汝の仇を汝の足臺とするまでは我右に坐すべしと。』イザヤ又た曰ふ、『主我主キリストに曰ひたまふ、われ其右の手をとりて、諸の國を其前に從はしめ、諸の王の力を破碎せん。』と。ダギデ彼を主と呼びて、子と曰はざるを見るべし。

一三

されば、相續人たるべき者は斯の民なるか或は前の民なるか、又た契約は我等にせられたるか、或は彼等にせられたるか、我等をして其孰れなるかを見せしめよ。先づ聖書の其民に就て曰ふ所を聞け、『イサク其妻リベカの子なきに因りて之が爲に祈願を立てたれば、かれ孕みたり。是に於てリベカ行きて主に伺ひしに、主曰ひ給はく、二つの國民汝の胎に在り、二つの民族汝の腹に在り、一の民は一の民に勝ち、大は小に事へん。』と。汝等イサクが誰なるか、リベカが誰なるか、又た此民

其民より大なりとは誰のことなるかを解せざるべからず。他の豫言にヤコブ其子ヨセフに更に明かに語りて曰はく、『看よ、主我を汝の許より取り給はず、汝の兒等を連れ來れ、我彼等を祝せん。』と。彼れ乃ちエフライムとマナセを連れ來り、マナセは兄なるが故にその祝せられんことを欲してヨセフは彼を其父ヤコブの右方に連れ來れり。されど、ヤコブは靈に於て茲に未來の民の豫型を見たり。而して彼何と曰ひしや。ヤコブ其兩手を交叉して、右手を季子エフライムの頭に按き彼を祝せり。ヨセフ、ヤコブに曰ひけるは、『汝の右手をマナセの頭に按き變へよ、彼は我長子なり。』ヤコブ、ヨセフに曰ひけるは、『我兒よ、我之を知れり。我之を知れり。されど大は小に事へん、而して此者こそ祝せらるべきなり。』と。此民が第一者にして契約の相續人たりと彼が定め給ひし者は何者たるかを見よ。啻に此のみならず、彼またアブラハムの時にも之を記臆し給ひしとせば、我等の知識は完全なり。卽ち彼獨り信あり又た正義なりとせられたる時、アブラハム、見よ我汝を割禮せずして神を信仰する異邦人の先祖となせり。』と。

夫れ然り。されど我等いま彼が民に與へんとて列祖に誓ひ給ひし契約を見るべし。彼果して

を與へ給ひぬ。然れども民其罪惡の故に之を受くるの價値なかりき。豫言者の曰ふ、『モーセ民のために主の契約を受けんとてシナイの山にて四十日四十夜斷食したり。斯くてモーセ、靈にて主の手もて書き給へる二枚の石牌(いしぶみ)を主より受けぬ。』モーセ之を取り、山を下りて民の居りし處へ持ち行けり。此時主モーセに曰ひ給ひけるは、『モーセよ、モーセよ、速かに此處より下れ、汝がエヂプトの地より導き出せし汝の民は法を破れり。』と。モーセ彼等が復た鑄像を造りたるを見て、石牌を其手より擲ち、主の契約の牌は玆に碎けたり。即ちモーセは之を受けたれど、民はその價値なかりき。されど我等は如何にして之を受けたるかを見よ、モーセは之を受けたるも其時彼は神の僕なりき。然るに主は我等のために受難し給ひ、以てその相續民とし給ふ。主イエスにより我等之を受くること明かになれり、即ち彼れ現れし時、既に死に拂はれ誤の罪に渡されたる我等の心を暗きより救ひ出し、且つ其言によりて我等と契約をなさんとの目的のために準備ひ給ひたればなり。そは、彼れ暗黑より我等を救ひ、以て自らの爲めに聖民を備ふべし召したり、我れ汝の手をとり、汝に力を授け、汝を民の契約とし、異邦人の光となし、而して瞽(めしひ)の

目を開き、俘囚を獄より出だし、暗にすめるものを檻のうちより出さしめん。』と。我等何處より救はれたるかを知るべし。豫言者また曰ふ、『看よ、われ汝を異邦人の光とし、地の極にまで救拯たらむ、汝を救へる主たる神かく曰ひ給ふ。』豫言者また曰ふ、『主の靈われに臨めり、こは主我に膏を注ぎて貧き者に恩恵の福音を宣傳せしめ、我を遣して心の傷める者を癒し、俘虜に赦しを告げ、盲者に視を授け、主のめぐみの年と賠償の日とを告げ、又凡て哀むものを慰め給ふべければなり。』

一五

尙ほ安息に就ては、主がシナイ山上にて、モーセと對面して語り給ひし十言中に記されたり。『潔き手と潔き心を以て主の安息を聖別すべし。』とあり。又他の所に曰ひ給はく、『我子等もし安息を守らば我れ之に慈悲を加へん。』と。安息に關しては彼れ創世の始に曰ひ給ふ、『神六日のうちに其手の作業をなし、七日目に終りて息ひ之を聖(きよ)めたまへり。』小供等よ、『六日のうちに終り。』とは何の謂なるやを想へ。主は六千年間に萬事を終るとの義なり、そは主の一日は千年に等し。』とある彼の言自ら之を證す。故に小供等よ、六日卽ち六千年にて萬物完成すべし。而して『彼第七日に安息し給へり。』卽ち其子來らん時、惡き者の時を亡くし、不

信の徒を審判し、而して第七日に全く息ひ給ふべし。又た『汝潔き手と潔き心を以て之を聖別すべし。若し誰にても其心の潔きことによりて、神が聖とし給ひし日を聖として守るの力を今日有すとせば、我等が之を聖く保ち得るは我が眞に休息し得る其時にして、其時には我等自ら義とせられて約束せられたるものを受くるが故に斯く爲し得るなり、其時にはもはや罪なく、主全ての物を新たになし給へるなり。其時には我等自ら先づ聖とせらるべきが故に、其日を聖として守り得べきなり。』とあり。主また彼等に曰ひ給ふ、『汝等の朔と安息は我が堪へざる所なり。』と。汝等此意を知れるや。現代の安息は我意に適ふものに非ず、我が作せるそれ、我が萬物に休息を與へて第八日の初となせしもの、それぞ別世界の初なり。此故に我等も亦た歡喜を以て第八日を祝す、而して是れイエスが死者のうちより甦り給ひし日にして、それより人に現れ、天に昇り給へり。

一六

我また神殿に就て語り、且つ愚かなる人々が誤りて建築物に信頼し、神が之を作り、又た自ら神の宮たるに彼に信頼せざりしかを示さん。彼等は殆んど異教人の如くに神殿にて彼を聖とせり。さ

れど主は之を無益ならしめて如何に語り給ひしかを知るべし、『誰か指を張りて天を測り、手を延ばして地を測りたりや、主曰ひ給ふ、我之をなせるにあらずや。天は我寶座、地は我足台なり、汝等我ために如何なる家を建てんとするか、又た如何なる所これ我休處なりや。』と。汝等彼等の望の無益なるを知るべし。又た更に進むで曰ひ給はく、『見よ、此殿を毀つ者復た自ら之を建つべし。』と。是れ現にあることなり。即ち戰爭に際して敵軍之を破壞し、而して今や敵の奴僕また之を建築せんとす。又た市も神殿もイスラエルの民も敵にわたさるべきと明かされたりき。即ち聖書に曰ふ、『終りの日に主その收場の群羊、その羊小舍、またその番塔を破滅せしめ給はん。』と。而して果して主の言の如くになれり。されど神の聖殿は存在するや。然り、神之を造りて完美し給ひし所に存す。錄して曰ふ、『一週の終らん時主の御名によりて莊嚴なる神殿は建たん。』と。我れその在るを見る。如何にして主の御名によりて建てらるかを知るべし。我等未だ神を信ぜざりし前に、我等の心の住(すまひ)は眞に手にて造れる殿堂の如く、偶像を以て満され、神に逆らふことを爲して鬼の家たりしが故に、全く腐れて脆きものなりき。されど主の御名によりて建立されんとす。謹みて莊嚴なる神殿の建立さるゝやうすべし。如何にしてすべきやと云ふに、我等罪の赦免を得て御名に頼りたる時、我等は初より造り更へられて新らしくなり、神は其住居たる我等の中に宿り給ふなり。

卽ち信仰の其言、約束の其叫び、法令の智慧、教訓の命、而して彼自ら我等の衷に居住し、我等に殿の戸（卽ち口）を聞き、我等に改悛を與へ、斯くて、奴隷となりて死すべかりし我等を導きて不朽の殿堂たらしめ給ふなり。故に救はれんと欲する者は、其人を見ることなく、其人の中にありて言ふ者を視て驚くべし、そは彼その口を以て此の如き言を發したるを聞きたることなく、又た彼自らも此の如きことを聞かすことを欲したることもなきものなり。靈の神殿なれ。

一七

以上述べ來りたる種々なる說明は簡略なりと雖、また最善を盡くしたるものにて、救拯に關する要件は一も閑却せられたるとなしとは我魂の願ひなり。若し夫れ現世の事未來の事に至りては、我文を汝等に書き送らんも、喩訓に匿れたるものにて汝等之を悟ることを得ず。故に茲に擱筆す。

一八

却說、更に他の教訓に移らんに、抑も教と權力に二途あり、一は光明の途にして他は暗黑のそ

れなり。而して此等兩者の間には大なる差あり。一は神の光りの天使之を守り、他はサタナの使之を守る。一は永遠より永遠にいたる主にして、他は罪ある現代を支配するものなり。

一九

光明の途は是なり。若し人あり或所に旅行せんと欲せば、其事に熱心なるべし。故に我等が其途に歩まんため、我等に示されたる知識は下の如し。汝、汝を造りし者を愛すべし、汝の創造主を畏れ、汝を死より救ひし者を讃揚し、汝の心を純朴にして靈を豊かにすべし。汝死の途を步む者と交るべからず、凡て神の喜び給はざるものを惡み、僞善を惡むべく、而して主の訓戒を棄つべからず。汝何事にも高ぶらずして謙遜なるべく、自負すべからず。汝隣人に對して惡きことを謀り、また汝の魂を片意地にすべからず。汝淫し姦しまた鷄姦すべからず。汝如何なる人の不潔なることの間にあつても神の言より離るべからず。汝人の罪過を譴責する時に其人を顧慮する勿れ。汝常に柔和にして、穩かに、また汝の聞ける言を恐るべし。汝その兄弟に對して惡をなすべからず。汝すべきかすべからざるか二心なるべからず。『汝主の名を漫りに口にすべからず。』汝己の生よりも其隣人を愛すべし。汝墮胎をなし、また嬰兒を殺すべからず。汝その息子息女を放棄すると

なく、之に神を畏るゝことを教へて養育すべし。汝
驕慢なる人と交るとなく、謙遜にして正しき人と語るべし。汝
汝裁判せらる時之を善として受くべし。汝何事にても神より來ることを知り、
謹愼と敬畏を以て之に從ふべし。汝は主人を神の型とし
の信仰を失ふに至らん、そは彼が人を召し給ふは其人によるにあらず、靈の準備ある者を召さんと
て來り給ひたればなり。汝全ての物を隣人と共にし、其所有權を主張する勿れ、そは汝等互に不朽
のものを共にするとせば、況んや朽つべき物をや。汝事を語るに出過ぎる勿れ、口は死の窠臼な
ればなり。能ふ限り汝の魂を潔く保つべし。他より受くる時に手を延ばし、與るに手を屈がむる
如き者たる勿れ。汝主の御言を汝に語る者を眸子の如くに愛すべし。汝日夜審判の日を記臆し、

聖徒と交ることを求め、或は言語を以て働き、或は勸告に出で、言葉にて靈魂を救ふに努め、或は
汝の罪の贖の爲めに汝の手にて働くべし。汝人に與ふに躊躇し、或は與ふるに當りて呟やく勿れ、
之が報酬を拂ふ良き支拂者の誰なるかを記臆すべし。汝の受けたる教訓を守り、何ものも其より
取捨すべからず。汝は絶對に惡を憎むべし。汝正しき判斷を與ふべし。汝爭鬪を起すべからず、
寧ろ互に爭ふものを仲裁して和せしむべし。汝自らの罪惡を懺悔すべし。汝曲りたる良心を以て

祈禱に出づるべからず。以上は是れ光明の途なり。

二〇

然れども黒者（くろきもの）の途は曲りて呪に充てり、是れ刑罰を伴ふ永遠の死の途にして、霊魂を亡ぼす者其中に在り、卽ち偶像禮拜、剛情、倨驕、僞善、貳心、姦淫、殺人、盜奪、自負、背令、詐僞、惡意、自足、妖術、魔法、强慾、神を畏れざる事、善人を迫害する者、眞理を嫌ふ者、正義の報を知らず、善に親しまず、正しき裁判に與（くみ）せず、寡婦孤兒の爲を計らず、神を畏れず、惡事の追求に徹宵し、虚榮を愛し、報酬を求め、貧者を憐まず、勞働に苦む者のために一臂をかさず、惡口するの癖あり、自らの造主を知らず、小兒を殺し、神の造りし物を腐敗せしめ、乏しき者を追ひかへし、惱める者を壓迫し、富者の辯護をなし、貧者に不當の裁判を行ふ、全然罪ある事のみなり。

二一

故に錄せられたる主の法令を知りたる者は、之を守ること肝要なり。其等の事を爲す者は神の國にて榮光を受け、然らざる者は己の爲せることと共に滅亡すべし。此故に復活あり、此故に報

償あり。我れ高地位にある者に願ふ、若し汝等我好意より出づる忠告を受けば、汝等のうちに汝等が善を爲し得るものを有すべし、決して誤る勿れ。萬の物魔王と共に滅亡するの時は近し、主と其應報近し。我れ一再ならず汝等に願ふ、汝等互に忠實なる顧問たれ、而して汝等の間より全く僞善を去るべし。願くは全世界の主たる神、汝等に智慧と理會と分別と法令の知識と忍耐とを賜はらんことを。神のことを學び、主が汝等に求め給ふ所を尋ね、汝等審判の日まで信仰を失はざるやう力むべし。善き事の記臆あらば之を想ひ、又た我を覺え忘る勿れ、我警戒の好果を結ばんためなり。我れ汝のために之を願ふ。汝肉の良き器にある間此等の事を爲すに誤るなく、勉めて之を求め、悉く戒律を守るべし、之れ價値あることなり。故に我れ汝等に喜悦を得させんが爲め、特に我が能ふ限り書かけり。愛と平和の兒等、冀くは汝等救拯に入らんことを、榮光と全て恩惠の主汝等の靈と供ならんことを。

バルナバの書簡

十二使徒の教訓

十二使徒に傳へられて異教徒に與へられたる主の教訓

一

道に二つありて、共差大なり。生の道と死の道これなり。

生の道は是なり、『第一、汝を造り給ひし神を愛し、第二、己れの如く汝の隣人を受すべし、また汝のせられんと欲せざる所、之を人に爲す勿れ。』

此意下の如し。汝等を詛ふ者を祝し、汝等の敵の爲めに禱り、汝等を責むる者の爲めに斷食せよ。汝等己を愛する者を愛せばとて、何の嘉みすべきことあらん。異教徒と雖もしかせざらんや。されど汝等としては、汝を憎む者を愛せよ、さすれば汝等に敵する者なし。汝等肉と體の慾を愼め。『人もし汝の右の頬をうたば左をも向けよ。』さすれば汝は全からん。人もし汝に一里ゆくことを強ひなば共に二里行け、人もし汝の有てる物を取らんとせば、能ふべくんば拒まざれ。汝に求むる

者に與へて拒む勿れ、そは我等が受くるものゝうちより萬の人に與ふるは父の御意なればなり。
我等に委任せられたる處に從ひて與ふる者は幸福なり、其人は無罪なればなり。他より受くる者
は禍なる哉、そは、必要に迫られて人の施を受くる者は罪なしと雖、必要なくして受くる者は何
故にまた何が爲に取れるかを糺され、獄にて其所業を審問せられ、一厘も殘りなく償ふまで其處
を出づること能はざるべし。されど此事に就てまた曰へるあり、『誰に與ふべきかを知り得るま
で汝の拾物が手のうちにて汗になるも放すなかれ。』と。

二

教の第二の戒は下の如し。『汝殺す勿れ、汝姦淫する勿れ、汝雞姦する勿れ、汝私通する勿れ、汝盜
む勿れ、汝魔術を用ゐる勿れ、汝媚藥を用ゐる勿れ、汝墮胎する勿れ、汝嬰兒を殺す勿れ、汝隣人の
物を貪る勿れ。汝僞誓する勿れ、汝虛證する勿れ、汝惡口する勿れ、汝惡心を起す勿れ。汝貳心なる
勿れ又二言する勿れ、そは二枚舌は死の縄なればなり。汝が言ふ所のことは僞り又た空しかるべか
らず、必ず之を實行すべし。汝、貪慾、無法、僞善、惡心、驕慢なるなく、隣人に對して惡事を企つべ
からず。汝人を憎む勿れ、寧ろ或人は之を諫め、或者の爲には禱り、或者は己の命よりも愛すべし。

我兒よ、惡人と及び惡人を好む者より逃げよ。汝高慢なる勿れ、高慢は人を殺すに至る。又なる勿れ、爭を好む勿れ、事に激する勿れ、殺人は凡て此等のより起るものなり。貪る勿れ、淫慾は私通の源なり。又淫猥なる言を放ち、眼波を弄ぶ勿れ、姦通は凡て此等の事より起る。我兒よ、事の卦兆を論ずる勿れ、是れ偶像禮拜に至るの門なり。又妖術を使ひ、星を占ひ、魔法を用ひ、又此等の事を見んとする勿れ、偶像禮拜は凡て此等の事より初まるものなり。我兒よ、詐る勿れ、虚言は盜の初めなり。又金錢を愛し、虚榮に憧る勿れ、窃盜は凡て此等の事より釀すものなり。我兒よ、吃くこと勿れ、不平は瀆神の原なり。强情なる勿れ、惡意なる勿れ、瀆神は凡て此等の事より來る。只だ柔和なるべし、そは柔和なる者は地を嗣ぐべければなり。汝、長く忍び、人を隣み、僞なく、靜穩に、善良に、且つ常に汝の耳にする言語を恐れよ。汝自らを稱揚することなく、又潜越なる勿れ。汝の心、高貴なる者と交を求むることなく、寧ろ正しくして謙遜なる者と偕に行くべし。凡ての事神より來らざるなきを知らば、如何なる災難も善き者と思ひて之を受くべし。

我兒よ、晝夜汝に神の言を語る者を思ひ、又た主の如く彼を尊敬すべし、そは主の事の語らるゝ所には主も亦た倶に在ませばなり。汝また日々聖徒に接近することを求むべし、汝彼等の語ることによりて慰安を得べし、尊ろ分れ爭ふ者と和すべし。汝事を處するに正義を以てし、罪過を責むるに人によりて偏することを望まず、尊ろ分れ爭ふ者と和すべし。汝事を處するに正義を以てし、罪過を責むるに人によりて偏すること勿れ。汝事あるべしとし或はあるべからずとして二つの心なる勿れ。

物を受けんとて手を伸ばすこと勿れ、尊ろ與へられんとする時には手を引くべし。何にても汝の手にて獲ることあらば、罪業の爲めに贖償を出すべし。汝物を與ふに吝なる勿れ、又た與へんとして呟く勿れ。それに對する報償を拂ふ者の誰なるかは汝知れるべし。汝貧しき者を遂ふことなく、汝の兄弟と凡ての物を分ち、何物も汝のものなりと曰ふ勿れ。そは汝等互に朽ちざるものを共有すべしとせば、朽つべき物を共有するに何かあらん。

汝汝の息子の若き時より神を敬畏することを教ゆべし。汝の奴隷また家婢にして汝と同じ神を拜む者を苛役することなく、その息子また息女を放棄することなく、彼等神を崇敬せざるに至るべし。神が人を召し給ふは、身分によるに非ず、聖靈の準備を得たる者なり。されど奴隷たる者はその主人を神の代表者と心得、敬と恐を以て服　すべし。

汝僞善と又た神の嘉し給はざるものを憎むべし。汝主の戒を棄つるとなく、汝が之を受けたるまゝに、之を增し又は減らすことなくして守るべし。汝會衆の中にて汝の愆を懺悔し、惡き心もて祈禱に出づべからず。生の道は是なり。

五

然れども死の道は次の如し。第一に、惡と呪に充つると、殺人、姦通、淫慾、私通、窃盜、迷信、妖術、巫呪、盜奪、僞證、僞善、貳心、詐僞、高慢、害心、強情、貪慾、惡言、嫉妬、破廉耻、倨傲、虚誇。善人を迫害し、眞理を嫌ひ、虚言を好み、正義の報を知らず、善人に與みせず、正しき裁判に左袒せず、惡事に夜を更かして善の爲めにせず、柔和と忍堪より離れ、浮華を愛し、報酬を遂求し、貧者を隣まず、勞働にて壓迫せらるゝ者の爲めを計らず、己を造り給ひし者を知らず、嬰兒を殺し、神の造り給ひし者を賊し、乏しき者を逐ひやり、不幸なる人を虚げ、富める者を辯護し、貧しき者に不正の裁判を與へ、全然邪惡なる事。我兒よ、我れ汝等が此等の事より免れんことを祈る。

汝教訓の此道より惑はざるやう心せよ、彼等の教は神による所なし。若し汝主の軛を全て堪へ得だ完たし、されど若し能はざれば汝の爲し得る最善をなせ。食物に就ては汝の能ふ限りを堪ゆべしと雖、偶像に供へし物は斷じて手を觸るべからず、之れ死せる神を崇拜するとなればなり。

七

洗禮を施すには斯くすべし。先づ凡て此等のことを豫習して後ち、聖靈の名によりて洗禮を施すべし。『されど若し流水なき時は他の水を以てし、又た冷水を以てすることを能はざる時は、溫湯にてするも妨げず。されど又た其孰れもなき時は、父と子と聖靈の名に於て三たび頂に水を灌ぐも可なり。而して洗禮式執行前に、洗者も受洗者も斷食すべく、其他の者も爲し得る者はすべし。受洗せんとする者は式前一日若くは二日斷食するやう訓示すべし。

汝等僞善者の如く斷食する勿れ。彼等は月曜日と木曜日に斷食すれど、汝等は水曜日と金曜日に斷食すべし。又た汝等僞善者の如く祈禱する勿れ。主が其福音書に命じ給ひし如く祈るべし、

即ち『天にいます我等の父よ、願くは、御名の崇められん事を、御國の來らんことを、御意の天に於ける如く地上にも行はれん事を、我等の日々の糧を今日も與へ給へ、我等に負債ある者を我等が免すが如く我等の負債をも赦し給へ、我等を試練に遇はせず惡魔より救ひ給へ、そは權能と榮光は久遠に汝のものなればなり。』汝等斯く一日に三度祈るべし。

九

聖餐禮の執行には斯く感謝すべし。先づ杯に關し『我等の父よ、汝の兒イエスによりて我等に示し給ひし汝の兒なるダギデの聖なる葡萄の爲に感謝し奉る、願くは榮光限なく汝にあらんことを。』又た擘きたる麪包に關して『我等の父よ、我等汝の兒イエスによりて示し給ひし生と知識の爲めに感謝し奉る。願くは榮光限りなく汝にあらんことを。此擘かれたる麪包が山々に散り後ち復た集められて一となりし如く、汝の教會も亦た地の極より御國に集め給へ、榮光と權能はイエス・キリストにより代々限なく汝のものなればなり。』されど主の名に於て受洗せし者にあらざれば一切何人も汝等の聖餐を飲食せしむべからず。主また之に就て宜はく、『聖物を犬に投げ與ふ勿れ。』と。

一〇

汝等食に満腹したる後ち斯く感謝すべし、『おゝ聖き父よ、我等の心の中に入れ給ひし汝の聖子イエスによりて我等に示し給ひし知識と信仰と永生の爲めに、我等主に感謝し奉る。願くは榮光限りなく主にあらんことを。全能の主よ、主は御名の故に萬物を造り、又た人類に飲食を與へて樂ましめ給ひ、人は汝に感謝す、然るに特に我等には汝の兒によりて靈の飲食と永遠の光明とを授けて祝福し給へり。我等は汝が力あることの爲めに殊に感謝し奉る、願くは榮光限りなく汝にあらんことを。主よ、汝の教會を忘れ給ふことなく、凡ての惡より之を救ひ、主を愛することに於て全からしめ、地の四隅より聖く瑾なく之を集めて、其爲に備へ給ひし汝の御國に來さしめ給へ。權能と榮光は限なく主のものなればなり。恩惠は來り、此世は過ぎ去らしめ給へ。ダギデの神に讃揚す。人聖からば來れ、然らざれば改悔めよ。我等の主よ來り給へ。アーメン。』

然れども、豫言者が聖餐を其爲すること儘に執行すとも、之を責むる勿れ。

何人にても來りて汝等に上記の如きことを教ゆる者ある時は之を觀迎せよ　然れども教ゆる者自ら邪道に入りて他の事を教へ、此等の事を破る者あらば之に聽く勿れ、されど主の知識と正義

を増すために教へば、主の如くに彼を迎ゆべし。

使徒（アポストロス）及び豫言者（プロフェーテス）たちに關しては福音書の教に從ひて斯くすべし。汝等の所に來る使徒たちは皆な主の如くに歡迎すべし。されど一日以上永く留まらしむる勿れ、若し已を得ずむば二日間は尚ほ可なり、三日止まらんとする者は僞豫言者なり。又た使徒が去らんとするに臨みては、其夜の宿泊に達するの迄の食のほか何物をも與ふる勿れ。金錢を請ふ者あらば、そは僞豫言者なり。

靈にて語る豫言者を試（こゝろ）み或は驗（ため）すべからず。そは各種の罪は赦さるべきも此罪のみは赦されず。然れど主の行爲あるにあらざれば、靈にて語る者皆豫言者にはあらず。僞豫言者と眞の豫言者とは要するに其擧動にて知り得なり。又豫言者は靈語中に食を命ずるとあるも決して之を食はず、若し食へば彼は僞豫言者なり。又豫言者眞理を教へ而かも自ら之を爲さゞれば、そは僞豫言者なり。然れども審査せられて眞正なる豫言者、教會の此世の奥義を制定するとも、自ら爲す處の者を他人に教へざれば、彼は汝等に審判さるべきに非ず。そは其審判は神の御前に有るべければなり、蓋し古への豫言者も斯く爲せり。されど靈語中に『我に金錢或は他の物を與へよ。』と曰ふ者あらば、之に聽く勿れ。但し他の困窮せる人の爲めに與へよと曰へば、何人も俄かに彼を判べからず。

主の御名に於て來る者を歡迎すべし、其者を試みれば直ちに之を知り得べし、そは汝等眞僞を
領會し居ればなり。旅の者は汝等能ふ限り援助すべきも、二日以上、或は已を得ざるも三日以上滯
在せしむべからず。若し其者汝等の間に定住せんことを欲し、且つ其人に職業あれば、自らの食の
ために働かしむべし。されど若し何の職も有せざれば、汝等の了解に從つて仕事を與へ、何人と
雖も唯だ基督者たるの故を以て無爲に汝等の間に飮食せしむべからず。若し然か爲すを欲せざれ
ば其人はキリストを食ひ物とする者なり。此の如き者を警戒すべし。

然れども眞の豫言者にして汝等の間に定住せんと欲する者あらば其は給養に値する者なり。眞
の教師も亦た工職ある者と同じく其食を得べきものとす。故に汝、酒槽、また禾場、また牛と羊
の生產の初穗を取りて、之を豫言者に贈るべし。そは彼等は汝等の大祭司なればなり。然れども
若し汝等のうちに豫言者あらざれば、之を貧民に施し、律法に從ひて與ふべし。又た汝葡萄酒ま

たは油の甕を口あけたる時も豫言者に初穗を呈すべし。金錢衣類、其他凡て汝等の有てるものみな、汝等の最も善しと思ふ程に初穗をとり律法に從ひて贈呈すべし。

一四

主(しゅ)の主日には汝等集り、汝等の供物が清淨ならん爲め先づ懺悔したる後、麪包(パン)を擘き聖餐禮を行ふべし。されど其友と爭へる者は互に相和するまでは之に與からしむべからず。然らざれば汝等の供物は汚さるべし。そは主の曰ひ給ひし所は此の如し、『何時如何なる處にても、我に潔き供物を捧げよ、我は大なる王にして我名は列國の中に驚異たるなりと、主曰ひ給ふ。』

一五

汝等の監督(エピスコポス)及び執事(デアコノス)として、主に値する柔和なる男にして、金錢を愛せず、誠實にして世評よき者を選ぶべし。そは彼等また豫言者(プロフェーテス)及び敎師(デダスカロス)の務に於て汝等に奉仕すべければなり。彼等も亦た豫言者と共に汝等の尊敬すべき人にして、決して互に諫言すべし。若し其隣人に害を加へたる者あ

らば、何人も彼と語るべからず、又た其人悔改むまで汝等より言ふべからず。然れども汝等の祈禱と信施、其他凡て汝等の動作は主の福音書に見ゆる如くなすべし。

汝等の生動を警戒すべし。汝等の燈火の消へざるやうにし、腰の帶を解かず、用意しあるべし、そは汝等主の來り給ふ時を知らざればなり。汝等屢々集會し、靈魂の利益となることを求むべし、そは汝等最後の時に完たからざれば、汝等の信仰の全生涯も無益となるべければなり。汝等の世には僞豫言者と人を誘惑する者增加し、羊は狼になり、愛は憎に變ずべし。そは不法なると增して彼等互に嫌惡し迫害し背信し、斯くて全世界を欺く者神の子の如くして現れ、徴兆と不思議をなし、世の始より未だ見ざりし程の大罪を犯すべし。斯くて人類の造られたる者畑の試煉を受け、多くの者罪を犯して亡ぶべし、されど其信仰によりて忍ぶ者は、咒によりて救はるべし。それより眞正の徴兆あらはれん。先づ天に異象展開し、次に喇叭の響の徴兆あり、又た次に死者の復活あり、されど此は死者一般の復活にあらず、『主來り給ふと共に凡て其聖徒も來るべし。』とある其而して後ち全世界は天の雲に乘りて來り給ふ主を見るべし。

彼得默示錄

一　アクミーム斷片

……彼等の多くは僞の豫言者にして、默示の異樣の道と敎義を敎ゆ。されど此等は滅亡の兒となるべし。斯くて神、飢へ渴き且つ惱む我が篤信者に來り給ふて、此生にある彼等の靈魂を潔め、また不法の兒等を審判し給ふべし。

主尙ほ曰ひ給ひけるは、『我等山へ行き、禱るべし。』と。我等十二弟子は彼等と共に行き、我等の兄弟の一人にて義人なりしが既に此世を去りし者を示し給へと主に求めぬ、これ我等、彼等が如何なる樣態にてあるかを見て、自ら勇氣を得、また我等に聞く者を奬勵し得んが爲めなり。

斯くて我等禱りしに、二人の人忽然として主の前に現れしが、我等は之を視る能はざりき。その光は彼等の面貌より日輪の如き後光出で、其衣は人未だ見たることなき程に輝き、彼等の有てる其

榮光と美はしき様は、口之を言ふ能はず、心之を想ふ能はざるばかりなり。我等之を視たるに其體は如何なる薔薇よりも紅くして、全く驚きぬ。其紅は白と混じ、我れ其美さを言ふ能はず。其頭髪に波うちて黄金の如く、よく其顔と肩とに似合ひて、甘松香と各種の色の花もて組みたる華冠の如く、又た空の蜺の如く、恰好のものなりき。此美を眺めて我等は呆然たりき。そは彼等の現れたるは全く突然なりければなり。我れ主に近よりて曰ひけるは、『此等は誰なるか。』彼れ我に曰ひ給ふ、『此等は我等の篤信なる兄弟にして、汝等が見んことを願へる者なり。』我れ彼に曰ふ、『此等の篤信者は皆な何處に居るや、彼等が此榮光を有するは何處の世界なるや。』と。此に於て、主我に此世の外なる巨大なる國を示し給へり。光明輝き、空は日の光にて明かに、地には決して凋まざる花さき、香科と、美しき朽ちざる花と、めでたき果を結ぶ木にて充てり。其馨甚だしくして我等の在りし所まで香ひする程なりき。

此地の住民は天使の輝く衣を被り、其衣は其國の加くなりき。天使其上に舞へり。住民の榮光は互に相等しく、喜びて交互に同音にて主たる神を讃頌せり。主我等に曰ひ給ひけるは、『是れ汝等の大祭司等義人の住ふ處なり。』と。

我また之と相對して甚だ暗き所を見たり、即ち刑罰の所にして、罰せらるる者彼處に居り　刑罰

に當る天使は其地の空氣の如く黒き衣を着け居たり。或者は舌にて吊され、其下に火を焚かれて罰せられたりしが、此等は正義の道を瀆したるものなり。又た燃ゆる泥の大なる湖水ありて、正義を曲けたる者その中に入れられ、掛りの天使彼等を責め居たり。

又た他に女あり、其頭髪にて此湖より昇る火焔の上に吊されたり。彼は姦淫にて自ら汚したる者なり。此等の女と醜交ありたる者は足にて吊され、其首は火泥中に入り、聲を擧げて曰ふ、『我等は如此處に來るを期せざりき。』と。

我また殺人者と其共犯者が、惡蟲の滿てる狹隘なる處に入れられ、其等の害蟲に咬まれて轉々反側して罰せらるるを見たり。蛆蟲黒雲の如くに彼等を惱ませり。殺されし人の靈魂その傍に立ちて此等殺人者の罰せらるるを眺めて曰ふ、『噫神よ、汝の裁判は正しきかな。』と。

又た其附近に、他の狹き所ありて、其中に凝血と罰せらるゝ人の汚物流れて湖の如くに溜まれり。此處にその血の海より首を出して女の坐せるあり。不自然に出でたる多くの嬰兒之に對し坐して叫べり。火花彼等より射出して女共の眼を擊てり。此等は未だ結婚せざるに姙娠して胎墮せる者なり。

又た他の男女は中央にて燒かれ、暗中に投出され、惡靈に打たれ、其内臟は休まざる蛆に食は

れ居たり。此等は義人を迫害し又た之を役人に引渡したるなり。

又た其近くに、己等の唇を咬み居る男女あり、罰せられて其眼に赤熱の鐵片を入れられ居り。彼等は神を瀆し正道を惡口せる者なり。

又た之と對して、己の舌を噛み、其口中に燃ゆる火を入れられ居るものあり。此等は僞證したるものなり。

又た他の處に、劍或は鐵釵よりも鋭き小石原の赤熱に燒けたるあり、汚れたる襤褸を纏へる男女の罰せられて其上に轉れるあり。此等は其財産に信賴し居りたる富有なりし人々にて、寡婦や弧兒を憐まず、神の誡を蔑みしたる者なり。

又た他に大なる池あり、膿と血と沸騰せる泥とにて滿され、男も女も其中に膝まで入れて立てり。此等は高利と重利を取れる者なり。

又た他の男女は大なる懸崖より拋げられて下に落ち、又た之を番する者に驅はれて崖を攀登り、登りては拋げられ、此罰に休む時なし。此等の男は女の代用として其身を汚したる者、また其等の女共は互に男女のする如くして寢ねたる者なり。

此崖と竝びて多量の火の滿つる處あり、自ら其手にて神の代りに偶像を刻みたる人立てり。又

た其傍に男女の者互に火の棒にて打ち合ひ、此刑の停まざるものあり。
又た其近くに男女のもの自ら焼きては裏返しつゝ燔き居れり。此等は神の道を捨てたる者なり
き。……

二　他書中に保存されたる殘片

地は審判の日に全ての人を神の台前に差出すべし、地も亦た之を蓋ふ天と共に審判を受くべけ
ればなり。〔マカリウス・マグネスの「アポクリチカ」〕

天の諸力みな滅へ、天は巻物の如くに巻き上げられ、星は葡萄の葉の如く　また無花果の木よ
り落つる其葉の如くに落ちん。〔同上〕

其等の小兒より火花發射して女等の眼を撃てり。〔歴山市クレメントの『抜萃集（エクロガイ）』四十一〕

月足らずして生れたる兒は却つて良かりしならん。彼は守護する天使に交付せられ、肉體にて
ありたらんには其受くべかりし苦と同じ苦を受けて、知識と又た好き住居を與へらるべし。され

と他の者は只だ憐を受くべき傷ある者として救拯を得るに過ぎず。只だ罰なく終るのみ。されど女の乳は其胸より流れて凝結し、肉を喰ふ小さき動物之より生れ、這ひ上りて彼等を啖ひ盡すべし。〔同上、四十八以下〕

姦淫の結果にて生るは守護天使に交付せらるべし。そは、彼等、神の祝する自然の意義と秩序に反して生れたりとするも、彼等が最大休息と慰安を受け得んが爲めに如何にして天使にわたされ得べきや、如何にして彼等は公然其兩親をキリストの審判に連れ來り、之を訟へて、『おゝ主よ、汝は寛大にして此光明を我等に授くるを妨げ給はざりしに、此等の者は汝の誡を破りて我等を曝らし遂に死に至らしめたり。』と曰ふことを得べきや。〔メソヂウス、『論集』六〕

ヘルマスの牧者

異象篇

異象第一

一　我を養育せし人、ローマにて我をローダと云ふ婦人に賣り渡したり。多くの年を經し後ち我れ再び此婦人を知り、姉妹の如く彼を愛するに至れり。其後ち我れ彼が手を取りて彼を河より引きあげたり。我れ其美貌を見て、心竊かに想ひめぐらしぬ、『斯くも美はしく又た淑かなる婦を妻とするを得ば、我幸福如何ばかりぞ。』と。我れ只管に此を思ひて少しも餘念なかりき。程經て後ち我れクマエへ往く途上、神の造り給ひし天地を頌め、その如何に雄大にして壯嚴に而かも勁力あるかを思ひ居けるに、いつしか眠に入りぬ。其時我れ靈に捕へられ、人の歩み得ざる路なき地を通りて連れ行かれぬ。其地は嶮惡にして且つ水流縱横に通ぜり。我れ河を越へて平野に出で、跪きて、主に禱り又た罪を懺悔し初めたり。我禱れる時、天開け、わが

戀ひ慕ふ婦人天より我に『ヘルマ、御機嫌よう。』と挨拶するを見たり。我れ仰ぎ見て『婦人よ、汝は此所に何をなし給ふや。』と曰ひしに、彼答へて曰ひけるは、『我れ主の前に汝の罪を訴んが爲に此處に携へ揚げられたり。』と。我曰ひぬ、『汝いま我を訴ふるか。』彼曰ふ、『否、我が汝に曰はんとする所を聽け、無より有を造り、萬の物を以て世界を滿たし、其聖なる教會のために之を增加し給ふ天に在ます神は、汝が我に向ひして罪を犯せし故に汝を怒り給ふなり。』我れ彼に答へて曰ふ、『我れ汝に向ひて罪を犯せしや、何時何處にて我れ汝に惡き言を曰ひしや、我れ常に汝を女神の如く見しに非ずや、我れ常に汝を姉妹として尊ばざりしや、婦人よ、如何なればとて此惡き汚れたることを以て我を詐り訴ふるや。』彼れ笑ひて我に曰ふ、『惡き念汝の心に起れり、惡念の其心に起る時も尚ほ義人は罪なしと汝思ふや。然り是れ罪なり、大なる罪なり。』彼尚ほ曰ふ、『蓋し義人は義を思ふ之によりて其榮譽天上に直ほく、如何なる業にも主の援助彼に與へらるべし。されど其心に惡を思ふ者は己が身に死と囚れを招く、殊に此世と其富の榮えに愛着し、來らんとする世の祝福を望まざる者に甚し。彼等の心悔ゆべし。希望なくして唯己と己が生命を蔑みするもののみなればなり。されど汝は神に祈れ、彼れ汝と汝の全家及び凡ての聖徒の罪を醫し給ふべし。』

二 彼此等の言を語りし後ち、天閉されたり。我れ全く悲哀と恐怖に滿たされ、自ら心に曰ひぬ。

『若し我れ此罪を負はゝ如何にして救はるべき、如何なる言を以て我れ主の哀憐を乞はん。』我れ此等の事を考へ心に思ひめぐらし居けるに、我前に雪の如く白き毛の大なる椅子を見たり。眩ゆき衣を身に纏ひ、手に書巻を持てる老ひたる婦人來りて之に坐し、我に向ひて曰ふ、『ヘルマよ。』我答へて曰ふ『婦人よ。』彼れ我に曰ふ、『如何なれば汝の心うなだるゝや、ヘルマよ、汝は忍びて心を柔らげ、常に微笑しあるべきなり。如何なれば汝かく心沈みて喜ばざるや。』我彼に答へぬ、『いとも善き一婦人、我れ彼に罪を犯したりとて我を強ゆ。』と。彼曰ひけるは、『かゝる事の神僕にあるべからず。されど汝の心に其女を慕ふの情起りしにあらざるか、斯かる情念は神の僕を罪に陥る。かゝる惡念を抱くは、潔く煉へられたる人、特に凡ての惡慾を避くる純なる僞なきヘルマに取りて、最も惡くして狂へることなり。

三　『されど神は此故によりて汝を怒り給はず、却りて主及び親なる汝等に對して罪を犯したる汝の家をして汝が悔改めしめんことを望み給ふ。汝は汝の子等を愛せど汝の家を戒めず、彼等の腐敗するが儘にせり。此故に主汝を怒り給も、汝の家の内なる凡ての惡を醫し給ふべし。彼等の罪と不法の故に、汝は此世の物によりて腐敗せしめられたるなり。されど今、主の慈悲は汝と汝の家の上に在りて汝を強め、その榮光をもて汝の德を建て給ふべし。汝は唯だ氣を弛めず、善き

意を以て汝の家を慰めよ。鍛冶其槌を取りて己が思ふまゝに物を鍛ゆるが如く、日々の正しき言語は凡ての惡に打勝つべし。されば汝の子等を勵ますことを中止する勿れ。そは彼等もし誠意もて悔改めなば、我れ其名が聖徒と倶に命の書に錄さるゝを知る。此等のことを曰ひ終りて彼れ更に我に曰ふ、『汝我が讀むを聽かんことを願ふや。』と。我れ彼に曰ふ『婦人よ我れ之を願ふ。』彼曰ふ、『さらば耳を傾け神の榮光を聽くべし。』其時我れ我心に記憶し得ざる大なる驚くべきことを聽けり。其語は恐るべくして、人之に堪へ能はざる程なり。されど其終の語は穩かにして、我等の益となれば、我れ之を心にとめぬ。『看よ、諸の力の神、その見へざる强き力と大なる智慧を以て世界を造り、その光榮の意匠により美を以て其被造物を包み、其强き言によりて天を据へ、地の基を水の上に横たへ、その智慧と攝理により聖なる教會を造りて之を祝し給ひし神、看よ、彼れ天と山、丘と海とを動かし給へば、凡ての事その被選者に明かとなる。それ彼等その大なる信仰をもて受けたる神の誡を只管に守らば、多くの榮光と喜びを以て主は其約し給ひし祝福を彼等に與へ給はんが爲めなり。』

四　彼之を讀み終りし時、其椅子より立ちしに、四人の青年來りて椅子を取り東方に去りぬ。彼れ我を呼び、我胸に觸れて曰ひけるは、『汝は我が讀し所を喜びしや。』我彼に曰ふ、『婦人よ、終の

語は我に快きも始の語は酷にして厳し。』彼れ我に曰ひけるは、『終は義人の為にして、始は異教者と脱教者のためなり。』と。彼れ我に語り居りし時、二人の人現れて彼を其肩に擧げ、東方椅子の置かれし所に去れり。彼喜びの顔貌にて去りけるが、往く時我に曰へり、『ヘルマよ、男らしかれ。』

異象第二

一　前の年と同じ頃、我クマエへ行かんとして歩みけるに、我前年の異象を思ひ出しぬ。聖靈再たび我を捕へて前と同じ所へ伴ひぬ。其處に來りて我れ跪き、主に禱り、其聖名を崇めたり。そは彼れ我を見そなはし我が前の罪を我に知らしめ給ひたればなり。我れ祈禱より立あがりしに、前年見たる彼の老婦人、一冊の小さき書を讀みつゝ歩みて我に向ひ來るを見る。彼やがて我に曰ふ、『汝は此等の使命を神の被選者に致し得るや。』我れ彼に曰ふ、『婦人よ、我は斯くも多くを心にとむる能はず、さればとて其を再び我に與へ給はゞ我之を寫し記すべし。』彼曰ふ、『取りて其を返せよ。』と。斯くて我れ之を取り或る田舍へ行き、而して我れ其語句を解し得ざれば、只だ其文字を一字一字に寫したり。やがて我が寫し終りし時、其書忽ち我手より奪ひ取られたり。されど之を奪取りし者の何人なりしかは、我れ之を見ざりき。

二

錄されし十五日の後ち我れ斷食して只管主に禱り居りしに、彼書の知識われに啓示せられたり。其を裏切れし所次の如し。『ヘルマよ、汝の裔は神に罪を犯し、主を瀆し、其大なる惡によりて父祖たちの子供と、汝の姉妹なる汝の妻に告げ知らせよ。そは彼れ其舌に轡をかけずして罪を犯せども、此等の語を聽きて己を制し、斯くて憐みを受くべし。主が汝に示せと我に命じ給ひし此等の語を汝彼等に告し後、彼等が前に犯せる凡ての罪は赦され、全き心をもて悔改め、其心より凡ての疑を取り去りなば、此日に至るまで罪を犯せし凡ての聖徒にも赦しあるべし。主は其榮光に由り、其被選者について誓ひ給ふ、彼等のうち、定められたる日の後ち罪を犯す者は救を得ざるべしと。蓋し義人の改心に限りあり。凡ての聖徒の爲に改心の日は既に滿たされたれど、異教人には終末の日まで改心の機あるべし。されば汝、教會を司る人々に告げて、彼等が大なる榮光を以て聖約を十分に受け得んが爲に正義に於て其道を改めと告げよ。されば義を行ふ汝等堅く立ち、汝等の過ぎ往く所に聖なる天使の伴ふを疑ふ勿れ。來らんとする大なる迫害は堪ゆる汝等及び其生命を拒まざる人々は幸福なる哉。そは主その聖子によりて誓ひ給へり。其キリストを否認せし者は其

命より斷たれたり、卽ち今は來らんとする日に否認せんとする者なり。されど以前に否認せしことある者は主の大なる慈悲によりて赦免を得べし。

三　されど、ヘルマよ、汝は汝の子等を厭ふ勿れ。又た汝の姉妹を等閑にする勿れ。これ彼等が以前の罪より潔められんが爲めなり。そは汝もし彼等を厭はずば、彼等は義しき教を以て教へらるべければなり。厭氣は人を殺す。されどヘルマよ、汝は汝の家の愆の故に己が身に大なる苦難を負へり。これ汝が彼等に留意せず只管に己が惡業に耽りたるが爲めなり。されど汝は活ける神を離れず、能く汝の單純と自制を保ちしが故に救はる。斯くて汝確く立ちて動かずば其救を全ふすべし。又た此の如く行ひて心に僞なく單純なる者は凡て救はるべし。斯かる德を有てる者は凡ての惡に向ひて强くなり、遂に永遠の生命に到るべし。凡て義を行ふ人々は幸福なるかな、彼等は永遠に滅ぶることなし。されば汝之をマクシモスに告げよ。看よ、迫害來る。汝もし可しと思はゞ再び否認せよ。主は彼に歸する者に近く在し給はん。荒野に豫言せしエルダデとメダテの書に記されたるが如し。』

四　兄弟よ、我眠れる時、美貌の青年によりて默示せられたり。彼曰ふ、『汝誰と思ふや。』と。我答ふ、『シブラならん。』彼曰ふ、『汝誤れり、然らず。』我曰ふ、『然ら

ば何人なりや。』彼曰ふ、『敎會なり。』我彼に曰ひぬ、『然らば何故に彼は老ひたる婦人なりや。』彼答へて曰ふ、『そは彼萬物の始に造られたればなり。彼の老たるは此故にして、此世は彼の爲に造られたるなり。』此後我れ我家にて異象を見たり。彼の老婦人來りて彼書を我れ與へざりしと曰ひしに、彼曰ふ、『却つて可し、我更に加ふべき語あり。されど我が記し終る時、凡て選ばれたる者は汝によりて之を知るに至らん。されば汝二つの書を記して、一をクレメンスに、他をグラプテに送るべし。クレメンスは之を外國に送るべし。彼は其許可を得たり。グラプテは寡婦と孤兒を慰むべし。されど汝は敎會を司る長老等と共に此市にて此等の話を讀むべし。』

異象第三

一　兄弟よ、我が觀たる第三の異象は下の如し。我れ長く斷食し、主が彼の老婦人によりて我に示さんと約し給ひし默示を明かし給はらんことを禱りしに、其夜彼の老婦人我に現れて斯く曰へり、『汝凡ての事を知らんとてかくも切望し斯くも熱心なれば、暫し汝の耕作する田舍に行け、第五時頃我れ汝に現れて汝の見るべきものを汝に示さん。』我れ彼に問ひて曰ふ、『婦人よ、耕地の

何れの處にか。』彼曰ふ、『何處にても汝の欲する處に。』我れ靜かなる處を選び、之を彼に告げんとせしに先ち、彼我に曰ふ、『我も汝の欲する所に到るべし。』と。故に、兄弟よ、我れ田舍に行き、時を計りつゝ、彼に會はんと約せし所に來りしに、其處に象牙の椅子のあるを見たり。美はしき布もて蔽はれし廊の蒲團其上に置かれありき。斯かる物あるのみにて誰も其邊りに居らざりければ、我れ恐怖して戰慄し、身の毛のよだつを覺へたり。我獨りなりしが故に憶病風に襲はれたるなり。されど我れ氣を取直ほして神の榮光を思ひ、勇氣を以て其處に跪き、再び前の如く我罪を主に告白したり。其時我が前に見し六人の青年を隨へし彼の老婦人我に近づき、我後に來りて我祈禱と懺悔に耳を傾けぬ。やがて彼れ我に觸れて曰ふ、『ヘルマよ、汝の罪の爲にのみ禱るを止め、汝の家に幾分の義を受け得るやう、義のために禱れ。』かくて彼れ手にて我をとり、椅子の側に伴ひ來り、彼青年等に曰ひけるは、『往きて建てよ。』青年等去りて我等二人となりし時、彼れ我に曰ひけるは、『此處に坐せよ。』我彼に曰ふ、『婦人よ、先づ長者より。』彼曰、『我が汝に曰ふ如くなせよ、此處に坐せ。』我れ彼の右方に坐せんとせしに、彼之を許さず。手にて指さし其左に坐せしめたり。我れ之に就て考へ、彼が我を右に坐せしめざりし故に氣沈みてありけるに、彼れ我に曰ひぬ、『ヘルマよ、如何なれば汝うなだるゝや。右の座は既に神を喜ばしめ、其名のために受難せし人々のためなり、

り。彼等と共に坐する前に汝の尙ほ成すべき多くの事あり。故に汝は今の儘の單純を持續せよ。されば汝は彼等と共に坐し、凡て其爲すべきをなし忍ぶべきを忍びし者みな倶に坐するを得ん。』

二　我問て曰ふ、『彼は何を堪へ忍びしや。』彼答て曰ふ、『聽け、神の御名のために受けたる鞭撻と獄舍と大なる苦難と十字架と猛獸なり。此故に聖座の右方は彼等と凡て御名のために受難する者に與へられ、其他の者は左側とす。されど、右に坐する者にも左に坐する者にも同じ賜物と約束あり。右に坐する者には唯だ更に幾分の榮光伴はん。汝は切に彼等と共に右の座を欲するも、汝の愆ちは大なり。されど汝は其愆より潔めらるべし、而して凡て疑を懷かざる者は今日に至るまでの罪より悉く潔めらるべし。』斯く曰ひて去らんとせしかば、我その足下に平伏し、彼の我に示さんと約せし異象を示さんことを主によりて彼に請ひぬ。彼其時再び我を捕へ我を起して左の座に着かしめ、自は右に坐し、輝く杖を取り上げて我に曰ふ、『大なる何物かを見るや。』我曰ふ『婦人よ我何をも見ず。』彼曰ふ、『看よ、汝の前に水上に築かれたる四角の眩ゆき石の大なる塔を見ずや。』塔は四角にて、彼と倶に來れる六人の青年が建てたるものなり。されど幾千萬の人々、或は海の深きより、或は乾ける陸より、石を運び來りて之を六人の青年に渡し、彼等之を取りて築き居たり。深き海より堀出せし石を其儘建築に用ひしが、其等の石は他の石の如く研かれてあり

ければ、各一つに繼ぎ合はされて其繼目を認め得ざりき。斯くて塔の建築は恰も一箇の石より成れるが如く見へたり。されど乾ける陸より取來れる石は之と異なり、青年は其若干を捨て若干を用ひ、又若干を打碎きて塔の外に拋げ棄てたり。されど尙ほ多くの石、塔の周圍にありしも、青年等は之を建築に用ひざりき。そは或石は粗く、或石は縛あり、或は短かく、或石は白く圓けれども塔の建物に適せざればなり。更に我れ塔より投げ棄てられて、路に落し他の石を見しが、路に止まらず、粗き地に轉げ行きぬ。又或石は火に落ちて燒かれ、或石は水際に落ち、人その水中に轉び入らんことを欲すれど轉び入る能はざりき。

三　此等の異象を我に示して彼れ去らんとしければ、我れ彼に曰ふ、『婦人よ、我れ其意を解せざらんとするか。』我曰ふ『然り婦人よ、我之を我兄弟に告げんとす、之を聽きて彼等主を知り益々主を崇めん爲なり。』彼曰ひけるは、『實に多くの人々之を聽くべし。聽きて或者は泣くべし。されど此等の人々もし悔改めなば喜ぶべし。されば塔の比喩を聽け。我れ汝に萬事を示すべければ汝默示につきて復た我を煩す勿れ。そは此等の默示は終り、既に成就されたるなり。されど、汝は默示の爲に禱ることを止むる勿れ。そは汝は恥を知らざればなり。汝の觀る築かれたる塔は、

我れ卽ち教會、今も前にも汝に現れたる所のものなり。されば塔につきて汝の欲する所を尋ねよ。我れ之を汝に示さん。これ汝聖徒等と共に喜ばんが爲めなり。』我れ彼に曰ふ、『婦人よ、汝曾つて我に示し給へ。』彼れ我に曰ふ、『示さるべきものは何にても示し給へ。』彼曰ふ、『我が前に汝に告げし如く、汝は尙ほ心して之を押し尋ねつゝやがて眞理を發見すべし。何故に塔が水の上に築かれたるやを聽け。是れ汝が命、水によりて救はれんが爲めなり。そは塔は、全能にして榮光ある御名の言の上に建てられ、主の見へざる力に由りて保たるべければなり。』

四　我れ彼に答へて曰ふ、『婦人よ、此は大にして驚くべきとなり。されど彼の築き居る六人の青年はそも何人ぞや。』彼曰ふ、『彼等は始めに造られたる神の使にして、主彼等に其一切の被造物を付し給へり、これ彼等之を增し加へ、築き建てゝ凡の被造物を司らんが爲めなり。』『されば石を運搬する他の人々は誰ぞ、』『此等も主の聖なる使なれど、先の六人は此等よりも勝れり。塔の建築やがて完成し、凡ての者塔の周圍にて共に喜び、塔の完成の故に神を頌むべし。』我れ彼に問ふて曰ふ、『婦人よ、諸の石は如何になりしか。又た石に多くの種類あるは何の意なるかを我れ知るを

得んか。』彼答へて我に曰ふ、『此默示の汝に與へらるゝは汝他の者に勝りて適するが故にあらず。汝の前に汝よりも勝りて此等の默示を受くべかりし人々ありき。されど、神の名の崇められんが爲めに此等の異象は汝に示さるゝなり。此は又た此等の事のありや否を思ひめぐらす疑ひ深き人のためなり。されば、凡て此等の事の眞實なることを彼等に告げよ。此等はすべて確かにして動かず、固き基礎の上に建てられたるなり。』

五 建築に用ひたる諸の石に就て聽け。互に能く繼ぎ合はされたる四角なる白き石は、神を畏れ潔き生活をなしたる使徒、監督、執事にして、彼等は神の選民に對して潔く恭しく、使徒、監督、教師、執事としてふさわしく行へり。彼等のうち或者は既に眠に就き、或者は尙ほ生存し、彼等は常に互に相一致し、睦じく互に相聽けり。此故に彼等はよく塔の建築に繼合ひたるなり。』『然らば深き海より堀り出され、さきに塔に用ひられたる他の石は誰なるか。』『彼等は主の爲に苦難を受けたる人々なり。』『されば婦人よ、乾ける陸より運ばれたる他の石は誰なるかを我れ知らんことを願ふ。』彼曰ふ、『研かれずして 建築に用ひらるゝ其等の石は主の道を直く歩み、其誡をを守れるが故に神に承けられたる人々なり。』『さらば之を運び來りて建物に用ひる人々は誰なるか。』『彼等は信仰に若くして而かも信仰篤き人々なれど、彼等のうち

に惡の見られしが故に善をなせと天使に訓められたるなり。』『然らば彼の却けられ、抛げ棄てられたる人々は誰なるか。』『此等は罪を犯して改心せんと願ふ人々なり。さればは抛げられず。そは若し改心だにせば建築に有用なるべければなり。さればは改心せ

人々なり。』斯くて彼れ塔に關する説明を終れり。されど我れ、耻をも顧みず、再び彼に問ひぬ。『拋げ出されて塔の建物には適せざりし凡ての石は改心をなし、此塔の用となり得べきか。』彼曰ふ、『改心は爲し得んも、此塔には用ひられず。是よりも劣れる所に置かるべし、且つ其とて苦業を完ふし罪の日の滿されたる後のことなり。斯くて彼等義の言に與かりなば、其身の樣態變へらるべし。其心に犯せる惡業を悔改めんとの念起る時のみ、彼等は其罰より免れ得べし。されど若し其念の起らざる時は、其心頑なるが故に救はれざるべし。

八 我れ此等の事につき問ふことを止めし時、彼れ我に曰ふ、『此のほか何物をか見んことを願ふや。』我いとも熱心に更に何物か見んことを欲したる時なりければ、我喜び面に輝きぬ。彼れ微笑しつゝ我を見て曰ふ、『汝は塔の邊りに居る七人の女を見るや。』我曰ふ、『婦人よ、我これを見る。』『此塔は主の命によりて此等の女によつて維持せらる。されば今彼等の働につきて聽け。彼等のうち、手を握り合せ居る第一のものは「信仰」と名けられ、彼により神の選民は救はる。腰に帶して男の如く見ゆる第二の者は「自制」と呼ばれ、信仰の娘なり。誰にても彼に從ふ者は其生活幸福なるべし。そは彼もし凡ての惡慾を却けなば永遠の生命を贏ぐことを得んことを信じて自ら諸の惡より制すればなり。』『されど婦人よ、其他の人々は誰ぞや。』『彼等は互に皆な娘なり。彼等の

名は「單純」、「知識」、「潔白」、「崇敬」、「愛」と呼ばる。されば、汝其母のなす業を爲さば生くべし。』我曰ふ、『聽け、彼等の婦人よ、我れ彼等が各如何なる力を有つかを知んことを願ふ。』彼曰ふ、『聽け、彼等の如何なる力を有つかを。彼等の力は互に相維持せられ、其出生の順に從ふ。信仰より自制生れ、自制より單純、單純より潔白、潔白より崇敬、崇敬より知識、知識より愛うまる。故に彼等の行は清くして汚れなく又た神々し。何人にても此等に奉仕して固く其業を取る者は、神の聖徒と共に此塔の內に其居住を得べし。』其時我れ時期につきて尋ね、『未だ終ならずや。』と曰ひしに、彼大聲に叫びて曰ふ、『痴け者、汝塔の今尚ほ建築されつゝあるを見ずや。建築完了する時に終末來る。而して我れ汝に其の速かに建築さるべきを告ぐ。此以上何事も我に問ふ勿れ。汝及び諸聖徒等は、此注意と汝の精神を更新せしことを以て滿足すべきなり。然れども默示が與へられたるは、唯だ汝の爲めのみに非ず、汝先づ之を傾會して、三日の後ち之を萬人に說かん爲めなるを忘るべからず。されど、ヘルマよ、我れ汝に命ず、我れ汝に語る此等の言を聖徒等の耳に告げよ。彼等之を聽き、之を行ひて、其罪惡より潔められ、且つ汝も彼等と共にせんためなり。

九 『聽けよ子等、我れ主の慈悲によりて、汝等を、單純と、潔白と、崇敬のうちに養育し、神は、汝等が凡ての罪惡と凡ての邪曲より義とせられ又聖められんが爲め、汝等のうちに其美義を注ぎ給ひ

ぬ。然るに汝等は罪業を休むことを欲せざりき。されば今我に聽き、互に相和し、互に愛顧し、互に扶助し、又神の造り給ひし物を一人にて占むることなく、乏しき人にも分配すべし。そは或者は其食物餘りに多量にして己が身體に病を起し居る程なるに、或者は食物不足にして身體の營養不良、ために其體を害ひ居れり。斯く人と俱にせざる汝等に取りてかく害となるなり。將に來らんとする審判を思慮すべし。有り餘れる者は塔の建築の終らざるうちに飢え渴ける人を尋ね出せよ。其塔完成後は汝善をなさんと欲するも其機會なかるべし。されば汝等は其所有物と共に塔の門外に締出さるやう注意すべし。貧者呻きて其聲主の御許に聞えなば、汝又其首座を占む者に告ぐ、汝等魔法師の如くなる勿れ、彼等は魔藥と毒藥とを心の中に携帶し居れり。汝等頑なにして其心を潔めんとはせず、又潔き心を以て其目的を統一せんともせざれば汝等は大王の慈悲を受け得ざるべし。されば子等よ、此等の不和にて汝等の生命が奪はれざるやう注意せよ。汝もし自ら正し得ずば如何にして主の選民を正すことを得んや。故に汝等は我も天父の前に立ちて汝等のことを主に報告し得べきなり。』

一〇　彼れ我に語るを止めたる時、塔を築きつゝありし六人の青年來りて彼を塔に伴ひ行き、又

た四人の者來りて其座を取りて塔に運び去りぬ。此等の人の顏は彼方を向き居りて我之を見るを得ざりき。されど彼去らんとせし時、我れ彼が三樣の體形にて我に現れし意を尋ねたり。彼答へて曰ひけるは、『之に就ては汝他の人に其意を汝に說明せん事を求むべし。』と。其は皮膚と毛髮は齡を語り、且つ立ちて我に語れり。また彼れ第一の時よりも更に欣ばしげに見へたり。されど第二の異象には、彼れいと若やぎて美はしく、只だ其毛髮のみ老人の如くありき。其顏は喜びに輝き、また座に着き居たり。我れ此等のことによりて甚しく心を痛め、此意を知らんことを願ひしが、夜の異象ありて老ひたる婦人を見たりしに、彼我に曰ふ、『請願は宜く謙遜しと爲さざるべからず、されば汝斷食せよ、而して汝の願ひ主に聽かるべし。』と。故に我れ一日斷食しけるに、其夜一人の靑年我に現れて曰ふ、『如何なれば汝かく屢々禱りて默示を乞ふや。多く事を願ひて汝の體を害はざるやう注意せよ、此等の默示は既に汝に充分なり。汝が見たる默示よりも更に大なるものを見得ると思ふや。』我答へて曰ふ、『君よ、我は唯だ老婦人の三樣の形態に就て默示の完うせられんとを願ふのみ。』彼答へて曰ふ、『汝何時まで愚かなるや。汝は疑心あり且つ汝の心を主に向けざるが故に愚かになれるなり。我再び答へて彼に曰ひけるは、『さ

れど君よ、我等汝より之に關して更に明確に聽くことを得んか。』

一一 彼曰ひけるは、『さらば汝の知らんと欲する三形態につきて聽け。初めの異象には椅子に坐せる老婦人として汝に現れしか。これ汝の精神老ひ萎れて弱きと疑の爲めに力を失ひたればなり。そはその力を新たにする望みなく唯だ終りの眠を待つ老人の如くに、汝は此世の業に弱められ、自ら思ひ惱みて主に其憂慮を委ねんとはせざるなり。さらば汝の精神は破れ、汝は悲哀の裡に老ひぬ。』『さらば君よ、彼何故に椅子に坐せしかを知るを得んか。』『病人は其病氣の故により其軀體の弱きを支持せられんが爲めに椅子に坐するが常なり。以上、汝は第一異象の形態に關する説明を得たり。

一二 彼曰ふ、『第二の異象にて汝彼の立てるを見たり、其顏は若くして欣ばしげなれど、其皮膚と毛髮は老年のそれなり。又た此比喩を聞け。人老ひぬれば、其弱きと乏きとの故に落膽し、唯其生命の終りを豫期するのほか何事をも爲し得ず。されど想はざる遺産の彼に來る如きあらば、之を聞きて立ちあがり、雀躍して力を增し、既に屈める腰も立ち、先の行により失はれし精神も更新し、椅子に倚らず、元氣よし。神が汝に與へ給ひし默示を聞ける時、汝も斯くありき。そは主汝を憐み、汝の精神を新たにし給ひければ、汝その弱きを捨て、汝に力つき、汝の信仰强くな

り、斯くて主汝の強健になれるを見て悦び給ひぬ。此故に彼れ汝に搭の建築を示し給へり。若し汝等心を盡くして互に相和してあらんには、主は汝等に更に他の事をも示し給ふべし。

一三　第三の異象に於て、汝は彼が尚ほ若やぎて氣高く欣ばしげに其形態も甚だ美しきを見たり。そは悲む人に想はざる福音ありて、彼其前の悲哀を忘れ、其聽きし福音の外何物をも望まず、以來善に向ひて強くなり、其受けし喜の故に其精神新たになれるなり。此の如く汝も此等の善き事を見て其精神を新たにせり。汝の見たる彼の着坐は其力の位を示す。座には四つの脚ありて確立し此の如く世は四元素によりて其安きを保つ。されば誠心悔悛する者は若やぎて確立すべし。汝今默示を完く與へられたれば更に默示に就て何事をも尋ぬると勿れ。若し要あれば又汝に示さるべし。』

異象第四

一　兄弟よ、前の異象より十二日の後ち、我が見たる第四の異象は、來らんとする迫害の型なり。我れカムバナ街道に近き田舍に赴けり。其處は街道より二里程の處にて、容易に往き得るなる教會によりて我に示し給へる默示を完了し給はんことや、我を强め給はんことや、躓づきし凡ての僕等を改心せしめ給はんことや、又た主が其驚異

り、斯くて主汝の強健になれるを見て悦び給ひぬ。此故に彼れ汝に塔の建築を示し給へり。若し汝等心を盡くして互に相和してあらんには、主は汝等に更に他の事をも示し給ふべし。

一三　第三の異象に於て、汝は彼が尚ほ若やぎて氣高く欣ばしげに其形態も甚だ美しきを見たり。そは悲む人に想はざる福音ありて、彼其前の悲哀を忘れ、其聽きし福音の外何物をも望まず、以來善に向ひて強くなり、其受けし喜の故に其精神新たになれるなり。此の如く汝も此等の善き事を見て其精神を新たにせり。汝の見たる彼の着坐は其力の位を示す。座には四つの脚ありて確立し此の如く世は四元素によりて其安きを保つ。されば誠心悔悛する者は若やぎて確立す。汝今默示を完く與へられれば更に默示に就て何事をも尋ぬると勿れ。若し要あれば又汝に示さるべし。』

異象第四

一　兄弟よ、前の異象より十二日の後ち、我が見たる第四の異象は、來らんとする迫害の型なり。我れカムバナ街道に近き田舍に赴けり。其處は街道より二里程の處にて、容易に往き得るなり。我れ獨り步みつゝ主に禱り、主が其聖なる教會によりて我に示し給へる默示を完了し給はんことや、我を強め給はんことや、躓づきし凡ての僕等を改心せしめ給はんことや、又た主が其驚異

を我に示すことを許し給へるが故に、其偉大にして榮光ある聖名の崇められんことを願へり。而して我れ主を讃揚し主に感謝し居りしに、我聲の反響の如く聲ありて我に答へて曰ふ、『ヘルマよ、貳心なる勿れ。』と。我れ心窃かに考へぬ、『我れ主より基礎を給はり、且つかゝる榮光の業を見しに、如何なればとて我れ貳心なるを要せんや。』兄弟よ、斯くて我れ尚少しく進みしに、看よ、我れ塵埃の天に冲するを見たり。我自ら問ひぬ。『或は牛羊の群が塵を揚げつゝ近み來るならんか。』と。其は我が在りし處より六七丁の所なりき。塵益々甚しくなりし時、我れ其何等かの靈驗ならんと想へり。日は少し輝くのみなりしが、見よ、我れ大鯨の如き巨大なる獸を見たり、火の蝗の如き其口より飛び出し居れり。獸は凡そ百尺ばかりの大さにして、甕の如き頭あり。我れ呟き叫びて我を救助し給はらんことを主に禱れり。其時我れ『ヘルマよ、貳心なる勿れ。』との聲を思ひ出せり。斯くて兄弟よ、我れ主の信仰を衣とし、又主我に教へ給ひし大なる事どもを思ひつゝ、我勇を鼓して獸に向ひぬ。獸また突進し來るに、町を破壊し得る程の勢なりき。我之に近づきしに、怪獸は其巨大なる體を延ばして地に横たはり、我が其側を通り過ぐる迄、舌を出し居たる外に何も爲さゞりき。其頭に四つの色あり。卽ち黒色と、火の如き血の如き色と、黄金色と白色なり。

二　我れ其獸を行き過ぎて三十尺ばかり進みしに、看よ、我れ一人の處女に遇へり。恰かも婚

禮の場より來れる如き裝にて、白き衣を纏ひ白き履物を穿ち、頂まで覆面を蒙り、頭には頭巾を載きたり、されど其頭髪は白かりき。前に見たる異象により、我れ其の「教會」なるを知りて大に喜びしに、彼我に挨拶して『人よ安きか。』と曰へり。我も之に應へて『婦人よ安きか。』と曰ふ、『何物にも遇はざりしや。』我曰ふ、『婦人よ、諸民を亡ぼし得る程の巨獸に遇へり、されど主の力と其大なる慈悲とによりて、我之を逃れたり。』彼曰ふ、『汝は初の大なる榮光ある名によるのほか救拯の途なきを信じ、己の憂慮を悉く彼に委ね、心を打開きて主に向ひしが故に、逃れたるなり。此故に主其獸を制し得るテグリと名くる天使を遣し、其口を噤(つぐ)ましめ汝を害さゞらしめ給ひしなり。汝は信仰によりて、又たかゝる巨獸の出現にも貳心をいだかざりしかば、大なる苦難より免ることを得たるなり。されば往きて主の選民に主の大なる業を語り、此獸は來らんとする大迫害の型なることを告げよ。若し汝自ら豫め準備し、誠意悔改めて主に歸り、心を純潔に保ちて非難すべき所なく、汝の餘生を責むべき所なく主に奉仕せば、此迫害を免るゝことを得ん。汝の憂慮を主に一任せよ、さらば主は之を正しく處理し給ふべし。汝等貳心なる者よ。主に信賴せよ。主は力あり、その怒を汝等より取り去り給ふ。されど疑ふ人には鞭を下す。此等の言を聞きて之を輕蔑する者は禍なる哉。彼等は寧ろ此世に生れざりし方よかりしならん。』

三　我れ怪獣の頭上なる四つの色につきて彼に問ひぬ。彼答へて我に曰ふ、『汝又たかゝる事に就て尋ぬるや。』我曰ふ、『然り婦人よ、是れ果して何なるかを我に示し給へ。』彼曰ふ、『聽け、黒き色は我等が棲む世界なり。されど次の如く血の如き色は此世が血と火にて滅亡すべきを示す。又た黄金色の部分は汝等が此世より逃る所なり。そは黄金は火によりて鍛へられて有用となる如く此世に棲む汝等は試煉さるべし。されば確く立ちて動かず、火焔を通る人は之によりて潔められる黄金の其渣を吹分くる如く、汝等も凡ての悲哀と困難とを去られて塔の建築に適するやう潔くせらるべし。されど白き色の部分は來らんとする世にして、神の選民は其處に棲むべし。永遠の生命のために選ばれたる人は汚れなく純潔なるべければなり。されば此等の事を聖徒の耳に傳ふるを止むる勿れ。此は來らんとする大迫害の型なり。汝もし斯くなさば、其は汝に何事にてもあらざるべし。』彼れ斯く曰ひて去りぬ。されど我れ其何處に行きしかを見ざりき。其時大なる音響起りたれば、我れ彼の獣の來れるならんと思ひ、驚きてあたりを見廻せりき。

啓示第五

我れ家に在りて祈禱し且つ椅子に坐し居けるに、牧羊者の如く白き裘を被り、旅嚢を肩にし、

杖を手にせる榮光ある顔の人入り來りて我に挨拶せしかば、我之に應へぬ。彼直ちに我側に坐して我に曰ひけるは、『我れ汝と倶に汝の餘生を住まんため、いと貴き天使より遣はされたり。』彼れ我を試みんが爲めに來れりと思ひて、我れ彼に曰ひぬ、『汝は何人なるや、我は己が身を委ぬべき人を知る。』彼れ我に曰ふ、『汝は我を知らざるか。』我曰ふ、『我は汝が身を委ぬべき彼の牧者なり。』而して 彼尚ほ語り居る間に其姿變りぬ。其時我は我身を委ぬべき者なるを知れり。我忽ち心亂れて恐れ、我がかくも下劣に又た愚劣に彼に答へたるを深く悲みたり。されど彼れ我に答へて曰ふ、『心を亂す勿れ、我が汝に與ふる誠律より力を受けよ。我は汝が曩きに見たる凡てのものを再たび汝に示さんがために遣はされたり。そは此等の事は汝に有用なる要點なり。汝先づ我が誡めと他の事は我が汝に示す時に記すべし。此れ我が先づ汝に誡と比喩とを記錄せよ。されど他の事は我が汝に示す時に記すべし。』

と。故に我れ彼が示せる如く誡律と比喩とを記錄せり。されば汝もし之を聞きて守り、之を行ひ、誠心之をなさば、汝は主が汝に約束し給ひし凡てのものを受くべし。されど若し汝、之を聞くも心を改めず、依然己が罪を增すのみなる時は、主より其反對のものを受くべし。凡て此等の言は牧者が我に斯く記せと命じたる所のものなり。そは彼は悔悛の天使なりき。

誡律篇

誡律第一

汝先づ唯一の神を信ぜよ。彼は萬物を創造し、整理し又無より萬物を存在せしめ給へり。彼は萬物を包容すれども彼れ自らは其中に包容せられず。されば彼を信じ、彼を畏れよ。彼れを畏れつゝ自らを制せよ。汝此等の誡律を守れ、されば已れよりすべての惡を去りて義の力を着るを得ん。汝もし此誡律を守らば神に生くべし。

誡律第二

彼れ我にいふ『單純にして潔白なれ、されば汝は人の生命を滅ぼす惡てふものを知らざる幼兒の如くなるべし。されば先づ、汝他人の惡事をいふ勿れ、もし之に聽かば汝は惡事をいふ人の罪に與(あづか)るべし。そは汝もし其の聽く誹謗を信ぜば、之を信じて汝自らも汝の兄弟に向ひて何事をかいふに到り、かくして汝は他人の惡事をいふ人の罪に

與る者となる。誹謗は惡なり、定まりなき惡鬼なり、曾つて平和を保たず、常に爭鬪の中に在り。汝これに遠かれ、さらば汝は常にすべての人と相和すべし。汝崇敬を着よ、これ其中に惡の躓きとなるものなく、すべての平等と喜びの源なり。善を行へ、神の汝に與へ給ひし勞働の果より、すべて乏しき人々に單純に施し、誰に與ふべきか、誰に與ふべきかたんことを欲し給へばなり。受くの人に與へよ。そは神は其賜物を諸人の間に分かに受くるかを神に告げよ。そは苦む人々にして之れを受くる者は罰せられざるも、詐僞をもてこれを受くる者は罰を受くべし。されば與ふる者は罪なし。そは彼れ主より受けて單純に其奉仕を盡し、誰に與へざるべきか、誰に與へざるべきかと躊躇せざればなり。さればもし單純に此奉仕を盡さば神の前に譽れあるべし。而してかく單純に仕ふる者は神に生くべし。されば我が汝に與へし如く此誡律を守れ。これ汝と汝の家の改心が單純に認められ、汝の心潔く汚なくならんためなり。』

誡律第三

彼れ又我に曰ふ『眞理を愛し、眞理のほか何をも汝の口より出でしむる勿れ。これ神が汝の肉體の中に置き給へる靈、すべての人の前に眞と見られんがためにして、これに由りて汝の中に住

み給ふ主光榮を受くべし。そは總て主のいひ給ふ所は眞にして、彼の中に僞りなければなり。されば僞る人々は、其託されたるものを主に返へさず、これ主を盜む者なり。そは彼等は主より僞りに陷らぬ靈を與へられたればなり。若し彼等此靈を眞ならざるものとして彼に返さば、彼等は主の誡律を瀆して盜人となるべし。』此等の語を聽きて我いたく泣きしに、彼れ我が泣くを見て我に曰ふ『何故泣くや。』我れ曰ふ『君よ、我れ果して救はるべきやを知らざればなり。』彼れいふ『何故なるか。』我れいふ『君よ、我れ生れてより未だ曾つて眞を語らず、すべての人を巧みに欺きて、僞を眞とし來りしに、何人も我に逆はず、我が語を信じたればなり。我れ斯く行ひしに如何にして生くるを得んや。』彼れいふ『汝は神の僕として眞理に歩み、惡しき良心と眞理の靈とを結び合するが如きことをせず、又嚴かにして眞なる聖靈を悲ましむべからざりしなり。』我れいふ『君よ、我れ曾つてかゝる語を聽きしことなかりき。』彼れいふ『今汝これを聽きて守れ、さらば汝がさきに汝の取引にて語りし僞りすら、汝の現在の言が眞として認められゝが故に、信用を得るに到るべし。そは其等の言は信用に價すればなり。若し汝此等を守り、今より後眞理のほか何ものをも語らざらば、汝は生命を得べし。而して何人にても此誡律を守りて、此の大なる惡、卽ち詐僞より遠かりなば神に生くべし。』

誡律第四

一　彼れ曰ふ『我れ汝に命ず、汝の純潔を守れ、他人の妻への戀慕、若くは私通、すべて此種の惡情を汝の心に入らしむる勿れ。そはこれを行ふに由りて汝大なる罪を犯すべければなり。されど汝もし常に汝の妻を想はゝ必ず罪を犯さゝるべし。そは若しかゝる情慾汝の心に入らば汝罪を犯すべし。而して又かくの如く他の惡慾について考ふるも汝罪を行ふなり。そはかゝる情慾は神の僕に取りて大なる罪なり。而してもし何人にても此惡業を行ふ者は自らのために死を招くなり。されば注意してかゝる情慾より遠かれ。そは純潔の在る所に、不法は義人の心に入るべきにあらざればなり。』我れ彼にいふ『君よ、少しく汝に問ふことを許給へ。』彼れ『言へ』といひければ、我れ彼れにいふ『君よ、人若し主を信ずる妻を有ち、其妻の姦淫を犯すを見て、其人猶ほ彼女との同棲を續けなば罪なるか。』彼れ我れにいふ『其妻の罪を悟らざる中は、共に棲むとも夫には罪なし。されど若し夫この妻の迷ひ行きしを知るも、婦尚ほ改心せずして邪淫を續け、夫も亦其婦との同棲を續けなば、彼も其罪に與(あづか)り、其婦と共に姦淫を犯す者となるべし。』我れ又彼にいふ『さらば君よ、若し妻其の邪惡の行を續けなば夫は如何にすべきか。』彼れいふ『夫は其婦を離縁

して獨身となるべし。されどもし彼れ其妻を離緣して他の婦と婚姻せば彼も亦姦淫を犯すなり。』

我れ彼にいふ『離緣されたる婦もし改心し、その夫に歸らんことを願はゞ如何。其婦復歸せらるべきにあらずや。』彼いふ『然り、若し夫其婦を歸らしめずば罪を犯すなり。其は彼に取りて大なる罪となるべし。蓋彼改心したる罪人を復歸せしむるの義務あればなり。されど此は幾度もすべきにあらず、そは神の僕に取りては唯一回の改心あるのみなればなり。されば改心の場合のために夫は他の婦と婚姻すべきにあらず。此は婦にも男にも同等のことなり。加之、姦淫は其肉體を瀆す人々のみならず、其行爲にて異教徒を眞似る人々に由りても犯さるゝなり。されば若し何人にても改心せざる行を續けて改心せずば、其人を離れ、共に棲むことを止めよ。然らざれば汝は其罪に與(くみ)する者となるべし。されば男にもせよ婦にもせよ、此命令を汝等の上に止まらしむべし。そはかゝれど我れ此等の行爲のための機會を與ふるにあらず、既に罰せられたためなり。其前の罪過については之れを醫し得る者一人あり、卽ち萬物の上に權威を有つ所の者是なり。』

二　我れ再び彼に問ひて言ひぬ『主汝の常に我と共にあることを許し給ひたれば、我が少しく物いふ間此處に居給へ。そは我れ何事をも悟らず、又我が心は我が以前の行爲に由りて頑になり

たればなり。我いと鈍く、何事をも全く知り得ざれば、我に理解を與へ給へ。』彼れ我に答へていふ、『我が來れるは改心を促すためにして、改心する者には我れ悟りを與ふ。汝は改心は悟りなりと思はずや。げに改心は大なる悟りなり。そは罪を犯せる者、主の前に惡を爲せしを悟り、己がなせる行爲を憶ふ時は、改心してもはや惡をなさず、却つて多くの善をなし、且つ謙(へりくだ)りて其犯せる罪の故に其靈を懊ますべし。されば汝改心は大なる悟りなるを見るべし。』而していふ『君よ、我が萬事に意を用ゐて尋ぬるはこのためなり。我は實に罪人なれば、生きんがために何の業をなすべきかを知らんことを願ふ。それ我が罪は多數にして多樣なればなり。』彼いふ『汝もし我が誡律を守り、これを行はゞ生くべし。何人にても此等の誡律を聽きて守らば神に生くべきなり。』

三　我れいふ『君よ我れ尚ほ質問を續けん』。彼れ『語れ』といひければ我いふ『君よ、我れ或敎師等より聽けり。我等が水の中に降り行きてさきの罪の赦しを受けし時になせしそれの他には改心なしと。』彼れ我にいふ『汝が聽ける敎は正し。そは確かに然り、一度罪の赦しを得たる者は又罪を犯さずして潔く生くべき筈なり。されど汝すべての事に就きて細かに尋ねる故、主を信ぜんと欲する人々若くは今信ぜし人々を誤らざらんがため、これをも汝に示さん。今信ぜし人々及び

信ぜんと欲する人々は、罪の悔改を有たざるも、其以前の罪に對する赦しを有つ。主はさきに召されたる人々に改心を與へ給へり。主は人の心を讀み又萬事を豫知し給ふが故に、人の弱きと、惡魔が多くの奸計を以て神の僕等に何等かの惡を蒙らせ、彼等に向ひて惡を行ふを知り給へり。されば主憐みに富み給ひて、その被造者の上に慈悲を垂れてこれに改心を與へ給へり。されば我れ汝にいふ。彼の大にして嚴かなる召の後は我に此改心についての權威を與へ給へり。されども、かゝる人には其改心は何等の效なし。恐くは彼れ生き得ざるべし。』我れ彼にいふ『我れ意して此等の誡律を聽き、生の我が中に歸れるを覺ゆ。そは我もし將來罪を犯さずば救はるべきを知ればなり。』彼いふ『汝のみならず、何人にてもすべて此を守る者は救はるべし。』

四 我れ又彼に問うていひぬ『君よ、汝はかくも忍びて我れに聽き給ひしが故に、之をも亦我に示し給ふや。』彼れ『語れ』といひければ、我いふ『もし妻又は夫死して鰥夫若くは寡婦婚姻しなば、その人は罪を犯せるなりや。』彼いふ『罪にあらず。されどもし彼等獨身にて居らば主に對して大なる名譽と光榮を得べし。さあれ、彼等婚姻するとも罪を犯すにはあらざるなり。汝の純潔と聖淨とを守らば汝は神に生くべし。我が汝に語る所、又語らんとする所を、今、汝が我に委ね

られたるこの日よりして守らば、我は汝の家に住まん。而してもし汝此等の誡律を守らば汝のきの過失も赦さるべし。この我が誡律を守り、此純潔に歩む者はすべて赦さるべし。」

誡律第五

一　彼いふ『忍耐強くなり、且つ深慮なるべし。さらば汝すべての惡業を制して義を行ふを得ん。そは若し汝忍耐強くなりて、他の惡靈に暗まさるゝことなく、却つて廣き所に住みて樂み喜びて神に仕へ、己が内に大なる平和をもつべし。されど若し憤怒を起す時は、穩かなる聖靈潔くなりて、其住む器をもて直ちに打ち懊まされ、潔き場所なければ其處を去らんことを求む。そは彼れ惡靈に妨げられ、怒彼を汚すが故にその願ふ如く主に仕ふる能はざればなり。主は忍耐の中に住み給へど惡魔は怒の中に住む。されば此等の二つの靈同じ所に住む時は、互に一致なく、その住む所の人を懊ますなり。若し苦艾（にがよもぎ）の小片蜂蜜の壺の中に入らんに蜂蜜悉く害されその苦艾の小片蜂蜜の甘味を全く取り去りて、その蜜は所有者に少しの滿足を與へず、却つて苦くなりて其用を失ふにあらずや。されど若し苦艾蜜の中に入れられずば蜜は甘味を保ちその所有者の用となるべし。されば忍耐は蜜よりも甘くして、神の用に供せられ、主その中

に住み給ふことを汝見ん。されど怒は苦くして用なし。若し憤怒、忍耐と混る時は、忍耐は汚がされ、その祈は神に取りて不用となるべし。』我いふ『君よ、我れ自らを守らんがため怒の力を知らんこと、汝の家は救のすべての望を失ふ。されば汝自らを守れ。そは我れ汝と共に在るべければなり。すべて其全心を以て悔改をなすことを願ふ。』彼いふ『若し汝怒に對して自らを守らずば、汝と汝の人々は皆怒に對して自らを守るべし。我れ彼等と共にありて悉く彼等を救はん。かくて皆いと聖なる使に由り義として受けらるべし。』

二

彼いふ『されば聽け、如何にして神の僕等を投倒し、彼等を義に背かしむるかを。されど其は信仰に滿てる人々を惑はさず、又彼等に向ひては何をもなさず。蓋主の力彼等と共にあればなり。その惑はすは思慮なく、疑を懷く人々なり。かゝる人の確く立てりと見る時、怒其等の人々の心に入り、男も女もその日々の生活の取るに足らぬ出來事に其心を苦くす。例へばその食物について、若くは輕々しき語について、若くは貫物か負債について、その他すべてかゝる意味なき事どもについてなり。すべて此等は愚かにして空しく、神の僕等に取りて相應しからざるなり。されど忍耐は大にして強く且力あり、大なる自由の中にありて榮え、喜び樂み、憂慮なく、常に神を頌榮し、苦きを抱かず、すべての事

に常に柔和にして静かなり。此忍耐は完き信仰の人々と共に在り。されど怒は愚にして軽々しく且鈍し。愚より苦き、苦きより怒、怒より憤生る。此憤は多くの悪の果にして終には醫し得ざる大罪となる。そはすべて此等の霊、聖霊の住む同一の器に入る時は、その器此等を容るゝ能はずして溢れ出づべし。穏かなる霊は、悪の霊又は頑(かたく)なの霊と共に住む能はざれば、かゝる人を去りて柔和及び静穏と共に住まんとを求む。されば彼その住む人より去る時、其人は義の霊を失ひ、後は悪霊に満たされて、すべての業統治なく、悪霊のために其処此処と引き回はされ、すべての暗黒となる。すべて憤怒の結果此の如し。されば汝彼の最も悪しき霊なる憤怒より遠かりて忍耐を着、怒と苦きを防ぐべし。さらば汝、主によりて愛せらるゝ所の純潔と共にあるを得ん。されば注意して此誡律を等閑に附する勿れ。若し汝この誡律に従はゞ、汝は我が汝に與へんとする他の總ての誡律をも守るを得べし。されば此等の誡律に於て強くなりて力を得よ。又此等を行はんと欲する人々をして皆力を得せしめよ。」

一　彼曰ふ、「我れ第一の誡律に於て、汝に信仰と畏敬と自制を守るべきことを命じたり。」我れ

「然り、君よ』といひけるに彼いふ『我れ汝が此等のもの各如何なる力を有し且つ動作するかを知り得んがため、此等の諸の力を示さんとす。此等の力は二樣に作用して等しく義と不義に關係あり。されば義に賴り、不義に賴る勿れ。義の路は眞直なれども不義の路は屈曲多し。されば眞直にして平かなる路を步み、曲れる路を顧る勿れ。曲れる路は行先塞がりて、足を踏み入るゝ所なく、蹟きの石ありて、平かならず、荊蕀は繁茂し、其所に入る者は傷を受けん。されど眞直の路を步むことの更によきを見るべし。されば汝は此路を人々は蹟かず平かに步むを得べし。それは凹凸なく荊蕀も生へ茂らざればなり。されど眞直の路を行くべし。又何人にても誠意主に歸る者はその路に步まん。』

二 彼曰ふ『汝先づ信仰について聽け。一人の人に二人の天使伴ふ——一は義の天使にして他は惡の使者なり。』我れ彼にいふ『君よ、二人の使者我と共に居らば、我れ何に由りて其働きを知るを得んや。』彼いふ『聽きて悟れ。義の使者は優しく、穩かに、柔和に、靜かなり。されば彼れ汝の心に入る時、直ちに汝に向ひて義と聖と莊嚴と滿足及びあらゆる義の行と光榮の德について語らん。すべて此等のもの汝の心に入る時、義の使者汝と共にありと知れ。此等は義の使者の所業を見よ。何よりも彼はそのわざに賴れ。次ぎに汝惡の使者の所業を見よ。何よりも彼は怒り易く、其心苦く、

愚かにして、その行惡しく、神の僕等を滅ぼす。されば彼れ汝の心に入る時その行によりてこれを知れ。』我れ彼にいふ『君よ、我れ如何にして彼を認むべきかを知らず。』彼いふ『聽け、怒若くは苦き心汝に臨む時、彼れ汝と倶に在り。汝又多くの取引と、豐かなる美食と、盛なる遊宴と、種々の奢侈に對する慾望をもつ時、又不正の行、婦に對する情慾、瞞着、高慢、自負、すべて此の如き情の汝を襲ふ時、彼れ汝と共に在るを知るべし。此等のもの汝の中に入らば惡の使者汝の中に在りと知れ。今汝彼れの行を知れば彼より遠かれ。その行惡にして神の僕等にふさはしからざれば、決して彼に賴る勿れ。此等は二人の使者の業なり。此を悟りて義の使者に賴れ。而して汝惡の使者を遠かれ。彼の教は事毎に惡し。假令人信仰いと篤くとも、此使者の情その心に入らば、男も婦も、假令惡人にても若し義の使者の行その人の心に入らば、彼何等かの善をなすに到るべじ。されば汝義の使者に從ひて、惡の使者と別るゝの善きを見る。此誡律は信仰の働きを示す。これ汝義の使者の業に信賴し、また其業によりて神に生きんがためなり。されど惡の使者の業の危きを信ぜよ。若し汝其等を行はずば神に生くべし。』

誡律第七

彼いふ『主を畏れて其誡律を守れ。もし神の誡律を守らば汝すべての事を正く行ふを得べし。此は汝が救はれんが爲は双びなかるべし。そは主を畏るゝ時汝すべての動作に力強くなり、汝のために有つべき畏怖なり。されど惡魔を恐るゝ勿れ。そは主を畏るゝ時汝惡魔を支配し、惡魔は汝に對して無力とならん。力のなき者は恐るゝに足らず、崇められるべき力ある者のみ恐るべきなり。すべて力をもつ者は恐られ、力をもたぬ者はすべての人に由りて蔑視さるべし。されど惡魔の業は惡なれば之を恐れよ。主を畏れなば汝は此等の業をなさず、これを却くべし。畏怖に二種あり。汝もし惡をなさんとの念起らば主を畏れよ、さらば汝これをなさゞるべし。又汝善をなさんとの念起らば主を畏れよ、さらば汝これをなさんと。げに主の畏れは強く、大にして、且榮あり。故に主を畏れよ、斯くて汝彼れにありて生きん。凡て彼を畏れ、其誡律を守る者は神に生きん。』彼いふ『如何なれば君よ、其誡律を守る人々は神に生くべしといひ給ふや。』『彼いふ『そは凡ての被造物は主を畏るとも其誡律を守らざればなり。誡律を守る人々のみ神に在りて生命を有てど、其誡律を守らざる人々は己れの中に生命を有たざるなり。』

誡律第八

彼いふ『我れ汝に神の被造物の二重なることを告げたり。自制も亦二重なり。時には自制の要あれど、他の場合にはその要なし。』我いふ『君よ、如何なる場合にその要なきかを我に知らしめ給へ。』彼いふ『聽け。惡については汝己れを制して、これをなすべからず。されど善については自制の要なし、之を爲すべきなり。汝若し善をなす時これを制せば大なる罪を犯すなり。されど惡をなさいらんがために自制を行はゞ、汝は大なる義をなしつゝあるなり。されば汝すべての惡を却けて善を行へ。』我いふ『君よ、我等の自らを制すべき惡とは何なるか。』彼いふ『姦淫、私通、豪飲、贅澤、過食、富の浪費、高慢、自負、非禮、詐欺、讒謗、僞善、惡意、及びすべての褻瀆(けがれ)是なり。此等は人の一生に於ける最も惡しき所爲なり。されば神の僕はすべて、此等より自制し能はぬ者は神に生くるを得ず。されば尚ほ此等に伴ふ行を聽け。』我曰ふ『君よ、此他にも尚ほ惡業ありや。』彼いふ『然り、多くあり、神の僕は此を却けざるべからず。卽ち竊盜、嘘言、强奪、僞證、貪慾、惡慾、詭計、虚榮、誇張、及びこの種類の惡なり。汝は此等を惡と思はずや。神の僕はすべて此等より自制すべきなり。されば汝すべて此等より自制せよ。さらば汝は神に生き、此等より自制せし人々と共に其名を記錄さるべし。然り、汝は此等より自制すべきなり。』彼いふ『さ

れど己れを制することなくして行ふべき事について聽け。善なるものに對しては自制せずして之を行へ。』我曰ふ『君よ、我れ其中に歩み、其に仕へ、其を行ひて救はれんがために我に善行の力を示し給へ。』彼いふ『自制の要なき、汝のなすべき善行について聽け。其第一は信仰にして、次ぎは主の畏怖、愛、和合、義の語、眞理、忍耐なり。人の一生に於て此等より善きものなし。若し何人にても意を用ゐて、此等より己れを制せざれば、其人は一生の間幸福なるべし。尚ほ次に此等のことを聞け。寡婦を助ること、孤兒及び乏しき人を顧ること、神の僕を貧困より救ふこと、人を欺待すること——そは欺待の中に善の行を見るべし——無抵抗なること、べての人よりも需要せざること、老人を敬ふこと、正義を實行すること、同胞主義を守ること、温柔なること、を忍ぶこと、忍耐深きこと、靈魂の壓迫せらる人を勵ますこと、信仰上の罪に陷りし人を見捨てず、却つて之を改心せしめて奬勵すること、罪人を誡め勵ますこと、貧しき債務者を虐げざること、其他すべて此種の行爲皆然り。此等は皆善しと汝に見ゆるか。』我いふ『君よ、何ものか此等より善からん。』彼いふ『されば汝此等の中に歩み、自らこれより遠かる勿れ、斯くて汝は神に生くべし。若し汝善をなし、善より己れを制するとなくば汝は神に生くべし。若し又、汝惡をなすことを拒み、惡より自制せば汝は神に生くべし。すべてかく行ふ者は神に生くべし。すべて

此等の誡律を守り、此等の中に歩む者は皆神に生くべし。』

誡律第九

彼れ我に曰ふ『汝の中より疑心を取り去れ、』我れ主に逆ひてかくも多くの罪を犯し居るにいかで主に向ひて何ものかを乞ふを躊躇する勿れ。かゝる事を心に推量することなく、疑ふことなく願へ。さらば汝主の慈悲の多きを知るを得ん。主は必ず汝を捨てず、却つて汝の心の願ひを聽き給はん。そは神は己れに向ひてなされたる惡を思はず、その被造物に慈悲を垂れ給ふ。されば汝の心をすべて此の世の空しき物、及び既に汝に語られたる所のものより潔め、如何なる物にても主に求めなば汝これを受くべし。疑ふことなく主にさゝぐる汝の願は拒まるゝことなかるべし。されど汝もし心に疑あらば、汝はその願ふ何物をも得ざるべし。そは神について疑ふ人々は二心にして、その願ひの一つをも得ざるべければなり。されど信仰に於て完き人々は主に賴りてすべてのものを求む。彼等は疑ひを懷きて求めず、又二心にもあらざれば、その求むるものを得。されば汝の心をすべての疑よ

り潔めて、信仰を着よ。そは信仰は強ければなり。而して汝その願ふすべてのものを得んがため神に信頼せよ。汝主に求むる時、その求むるものを得ること或は遲かるべし。されど汝の心の願ひ速かに遂げられざればとて疑ふ勿れ。汝がこれを得るに遲きは、汝が識らざる種々の誘惑と罪の故なり。故に汝の心の願ひを止むる勿れ。さらば汝これを得ん。然れども若し汝願をなす時倦み疲るゝことあらば、自らを責め、汝に與へざる主を責むる勿れ。此懷疑心に意せよ、こは惡くして愚なるとなり。多くの人、如何に篤信にして強くとも、是によりて信仰より離る。此懷疑心は惡魔の女にして、神の僕に向ひて大なる惡を行ふ。されば汝、强健なる信仰を着、懷疑心を賤み、凡ての事に於て之に打ち勝て。そは信仰は凡ての事を約束し、凡ての事を完成すれども、懷疑は其中完き信頼なきを以て、その企圖する處みな失敗するなり。されば汝、信仰は上よりするを見るべし、卽ち主より來り、大なる方を有てども、懷疑は惡魔より來れる地に屬ける靈にして力なきことを見るべし。されば汝、力を有つ信仰に事へ、力を有たぬ懷疑より遠ざからば、神に生くべし。凡て此等の事に心を寄する人々は神に生くべし。』

誡律第十

一　彼いふ『汝より悲を去れ、そは悲は疑と怒の姉妹なればなり。』我曰ふ『君よ、如何にして悲は其等のものゝ姉妹なるか。怒と疑と悲とは各全く別物と見ゆるなり。』『人よ。汝は愚かなり。悲は全ての靈よりも尚ほ惡しくして、神の僕等に取りては最も恐るべく、全て他の諸靈に勝りて人を滅ぼし、聖靈を絶つ、されど又これを救ふことあるをも汝知らずや。』我いふ『君よ、我は愚かにして此等の比喩を悟らず。如何にしてその滅し、又救ふかを知り得ざるなり。』彼いふ『聽け。眞理を探らず、神の性を究めず、唯單純に信ずる人々は、此世の事業と財寶、及び異教者との交際、又全て此世の多くの行爲に接し、此等に熱中する時、神の性質の比喩を悟り得ざるなり。此れ彼等の心かゝる業に由りて暗くなり、腐敗し、荒れ乾けばなり。よき葡萄の樹なりとも、手入れせざれば、荊蕀と他の雜草のために實のらざらん。此の如く人は信者となるとも、後に種々の惡しき行に陷り、その心迷ひて、義に關はる悟りを悉く失ふことあらん、彼等假令神と眞理について聽くとも、其心は此世の事業に奪はれ、何等正當に領會することなし。されど、神を畏れし、彼等心に神を畏るればなり。主の在し給ふ所に多くの悟りあり。故に主に從へ。さらば汝すべてのことを悟り知るべし。』

ヘルマスの牧者　誡律篇

二　彼いふ『愚かなる人よ。されば聽け、如何にして悲が聖靈を斷ち切り、又人を救ふかを。疑を懷く人、事を始めて、その疑の故に、これに失敗する時、悲その人の中に入りて、聖靈を悲ましめ、これを絶ち去る。されど、これに反し、怒り何等かの事に由りて人に入り、其人の心を苦くする時、悲その苦くなれる心に入れば、彼そのなせし行を悲みて、惡き行をなせしことを懺悔す。されば此悲には救の伴ふことを見るを得べし。其人惡しき行をなせる後改心すればなり。此等の行は双方とも聖靈を悲ましむ。疑はその目的を果たさゞるが故に、又怒は惡しきを行ふが故に聖靈を悲ましむ。疑と怒り、兩者ともに聖靈を悲ましむ。されば汝の中より悲みを取り去れ汝の中に宿る聖靈を絶ち去る勿れ、聖靈汝に逆ひて神に求め、自ら汝の中より離れ去るべければなり。そは我等の此身體に宿ることを許されたる神の靈は能く悲と困難を忍ばざればなり。

三　『されば、常に神の御心にかなひ、その嘉し給ふ所の歡喜をもて身を裝ひ、これに由りて悅びをなせ。凡て喜悅ある人は善を行ひ、善を思ひて、悲を蔑むなり。されど悲ある人は常に惡を行ふ。第一に彼は歡喜の靈として人に與へらるゝ聖靈を悲ましむるが故に惡をなす。又第二に彼は聖靈を悲ましめて、神に祈りもせず、懺悔もせずして不法を行ふ。悲む人の祈願は神前の祭壇まで達するの力なきなり。』我いふ、『如何なれば悲む人の祈願は祭壇に達せざるや。』彼いふ、『悲み

彼の心の中に入り込めばなり。悲は彼の祈願に混入し、その祈願の純にして神の許さず。そは酢と葡萄酒と一つの器に混入せらるゝ時、同じ喜びを與へざる如く、悲と聖靈と混る時は同じ祈願をなし得ざるなり。故に己れをこの惡しき悲みより潔めよ。さらば汝神に生くるを得ん。凡て悲みを、己が中より取り去り諸の歡喜を以て身を裝ふ人は神に生くべし。』

誡律第十一

彼れ腰掛に着ける人々と、椅子に坐せる一人の人を我に示し、且つ我に曰ふ『汝は腰掛に着く人々を見るか。』『君よ我れ見る。』と答へしに、彼いふ『此等は信仰篤き人々にして、彼の椅子に坐せるは神の僕等の心を滅ぼさんとする僞豫言者なり。されど彼の滅ぼすは懷疑の人々にして信仰ある人々にはあらず。懷疑の人々は卜者に向ふが如くに彼に行き、その身に何事の起るかを彼に尋ぬ。されど彼は僞豫言者なれば、自ら神の靈の力を持たず、彼等の間に從ひ、彼等の惡しき慾望に對して答へ、彼等の心に其慾望にふさはしき期待を滿たす。彼は自ら虛しきが故に、虛しき問に虛しき答を與ふ。そは凡て問はるゝことは人の虛しきに對して答へらるゝなり。時に彼は眞實の言を口にすることあり。そは惡魔或は彼が義しき人々に勝つことあらんかと己が靈

をもて彼を滿たせばなり。されば主の信仰に强くして、眞理を身に纏ふ者は、かゝる靈と關係なく、却つて彼等より遠ざかるなり。されど疑ひ增して屢々悔改むる人々は、異敎徒の如く占卜を信じ、その偶像禮拜に由りて大なる罪を己が身に招くなり。そは眞理にもせよ愚にもせよ、僞豫言者の許に往きて何事にても尋ぬる人は偶像禮拜者なればなり。神の與へ給ふ靈は問ひ尋ねらるゝことなく、神よりの力を有すれば、自らすべての事を語るなり。そは上なる神靈の力より出づればなり。されど問ひ尋ねられ、人の慾望に從ひて語る靈は地に屬し、輕く、力なく、尋ねらるゝことなくば自ら全く何事をも言はず。』我いふ『さらば君よ。如何にして人は、彼等の何れが豫言者にして、何れが僞豫言者なるかを知り得べきや。』彼いふ『我れ双方の豫言者に就いて汝に語るべければ、汝は我が指導に由りて、眞豫言者と僞豫言者とを試みるを得べし。神靈を有つ人を其生活に由りて試みよ。上より出づる神靈を有つ人は何れも先づ柔和にして、平和を愛し、且つ謙遜にして凡ての惡と此世の空しき慾望に遠かり、他の人々よりも乏しきものを以て自ら滿足し、又問ひ尋ねらるゝことありとも答へをなさず。さればとて私かに語るにはあらず。聖靈は人の欲する時語らず、神の欲し給ふ時のみ語るなり。されば神靈を有てる人、神靈を信ずる義しき人々の集會に來る時、此集會神に祈りを捧げんに、其時、彼のために定められたる豫言の靈の御使其

人に宿り、其人は聖靈に滿たされて、主の欲し給ふ如く多くの人々に語るべし。されば神よりの靈に關する主の力は此の如し。』彼また曰ふ、『されば地に屬ける空しくして力なく且つ愚なる靈について聽け。かゝる人は靈を有てりと思ひて自らを高うし、首座を好み、躁急にして輕々しく、言語多く、又多くの奢侈多くの他の眩惑の中に住みて、其豫言の報酬を受く。神の靈は豈に報酬を受けて豫言せんや。神の豫言者はかゝることをなし得ず。此類の豫言者は地に屬ける靈を有てる者なり。彼は決して義人の集會に近寄らず、却つて彼等を避く。彼は懷疑者及び虚榮者と交り、片隅に立ちて彼等に豫言し、彼等の歡心を買はんとて、全ての空しき言を以て彼等を欺く。そは彼れの答ふる人々は虚榮者なればなり。空しき器は空しき人と共に置かるゝ時は、破らるゝことなく互に相調和す。彼れ神の靈を持てる義人との集會に來る時、彼等祈願を捧げなば、其人空うせられ、地に屬ける靈、恐怖に由りて彼より逃れ、其人全く打ち碎かれて、物いふこと能はず、唖者の如くなりはてん。汝若し葡萄酒か橄欖油を倉に納むる時空しき土器を其等の容器の間に置かんに、再びその倉を取り片附けんと思ふ時、汝の置きし空しき土器は空しきまま尚ほ其處にあるを見出すべし。此の如く空しき豫言者等は、假令義しき人々の靈と共に在るとも、その歸り行く時には、來りし時と同じ情態にあらん。汝斯く二種の豫言者の生活を見る。汝

自ら靈感を受けたりと稱する人をば、その行爲と生活に由りて判斷せよ。さ
靈に賴りて力を受けよ。決して地に屬ける空しき靈に賴る勿れ。かゝる靈に
り來る靈なり。されば我が汝に語らんとする比喩を聽け。石を取りてこれを大空に向ひて投げ、
汝其石が天に觸れ得るや否を見よ。或は又喞筒を取りて水を空に注ぎ上げ、空を貫き得るや否を
見よ。』我いふ『君よ、如何にしてこれをなし得んや、此は双方とも不能のことなり。』彼いふ『此
等の事不能なる如く地に屬ける靈も能なく、力なし。されど今、上より來る力を見よ。霰は小さき
穀粒程の大さに過ぎざれど、人の頭上に落ちては如何に彼を惱ますぞ。或は又瓶より地に落つる
滴のなほ石を凹ますを考へよ。さらば汝は上より來る最小きものにても、地に落つる時は大なる
力を有つを見ん。かく上より來る神の靈は力あるなり。されば汝他の何者よりも離れて、その靈
に賴れ。』

誡律第十二

一　彼れ我に曰ふ『汝の中より全ての惡しき情念を取り去り、善にして旦純なる情念を着よ。
そは汝此情念を着なば、惡しき情念を憎みて、汝の欲する如く己れを治むるを得べければなり。

悪しき情念は荒々しくして馴らし難し。此は恐ろしく、且つその甚しき野性をもて人々を喰み盡さんとす。ことに神の僕、これに陷りてその理解を失はゞ、これに由りて喰み盡されん。且こは善き情念の衣を着ずして、此世と縺れ混り居る全ての人々を喰み盡さん。此等のもの終に皆死に付さるべし。』我いふ『さらば君よ、人々を死に付す惡しき情念の行は何なるか。我に示し給はゝ我れ其等より離れ去るを得ん。』『さらば神の僕等を殺す惡しき情念の行について聽け。』

二　『先づ最初に置かるべきは他人の妻若くは夫に對する情念にして、次ぎは浪費、多くの用なき飲食、及び他の多くの愚かなる奢りなり。そは神の僕にとりては全ての奢りは愚かにして空しければなり。此等は神の僕等を殺す惡しき情念なり。そはこの惡しき情念は惡魔の女なり。汝は惡しき情念より遠ざからざるべからず、是より遠からば神に生くべし。されど此等に支配せられ、これより遠ざからざる人々は終に滅びん。そは此等の情念は死に到らしむればなり。されば汝、義の情念を着、主の畏れをもて己が身を甲ひつゝ其等を妨ぐべし。神の畏れは善き情念の中に在り。されどもし惡しき情念は汝が神の畏れをもて甲ひつゝ妨ぎ守るを見なば、汝より遠く逃れて、再び汝に現はれざるべし。そは汝の武具を懼るればなり。故に汝これに勝ちて得たる冕を戴きつゝ義の情念に至り、汝の得たる分捕物をこれに捧げて、その欲する如くこれに仕へよ。汝若し善

き情念に仕へて、これに從はゞ、惡しき情念を支配して、汝の欲する如くこれを汝に從はしむるを得べし。』

三　我れいふ『主よ、如何にして善き情念に仕ふべきか。』彼曰ふ『聽け、汝は主の畏敬、信仰と柔和、すべてかゝる勝れたるものを行ふべし。此等を行ふことに由りて、汝は神の聖旨にかなふ僕となり、神に向ひて生くる者とならん。何人にても善き情念に仕へなば神に向ひて生くる得べし。』

彼れ十二の誡律を結論して我にいふ『汝既に此等の誡律を有す。されば汝之れを行ひ、又汝に聽く人々をして其改心を彼等の餘生の間純ならしめよ。汝意して我が汝に與ふる使命を盡しなば、汝更に多くを成し得べし。そは汝改心せんとする人々に顧みられ、彼等は汝の言に意を留むるに到るべし。そは我れ汝と共にありて、彼等をして強いて汝に從はしむべければなり。』我れ彼に曰ふ『君よ、此等の誡律は大にして善に、旦つ榮あり、此れを行ひ得る人々に取りては心の喜びとなるべし。されど我れ此等の誡律の果して人々に行はれ得るや否やを知らず、これ餘りに困難なるべし。』彼れ答へて我に曰ふ『汝若しこれを己が前に置きて、守り得るやうなし置かば、容易に守るを得て、何の困難もなかるべし。されど若し汝守り得ずと考へなば、汝はこれを守り得ざる

べし。我れ汝に曰ふ、若し汝此等を守らずして、等閑にしなば、汝も、汝の子等も、はれざるべし。そは汝自ら此等の誡律は人に由りて守られ得ずと定むればなり。』

四　彼れ甚しき怒りの調子もて此等のことを我に曰へり。人其怒りに堪え得ぬ程、彼の面貌變りければ、我が心亂れて我いたく彼を恐れたり。されど我が心の亂れ騷ぐを見て、彼れ穩かなる調子もて我に語りて曰ふ『嗚呼、愚かにして悟りなく、疑ひ深きものよ。汝は、人類のために世界を造り、全てその被造物をこれに從はせ、これに天が下なるすべてのものを支配する力を與へ給へる神の榮光の、如何に大にして驚くべきかを認め能はざるか。若し人、神の造り給ひしものに主となり、全てこれを支配すとせば、彼は此等の誡律に對しても主となり得べきにあらずや。そは其心に主を宿す人は全てのものゝ主となり、此等の誡律に對しても悉く主となるを得べければなり。されど唯その唇に主を宿すのみにて、心硬く、主より遠ざかり居る者には、此等の誡律は困難にて行ひがたし。さればその信仰空くして定りなき汝等、心に主を宿し奉れ、さらば汝等此等の誡律の如く易く、美はしく、取り扱はるべきものなきを知らん。歸れ。汝等惡魔の誡律に歩み、硬く、苦がく、放縱なる慾望を專らにし、惡魔を恐れざる者。そは悔悛の天使にして惡魔の上に權力を有する我れ、汝等と共に在るべし。惡魔は人をして恐れしむ。されどその恐れは力な

し。されば彼れを恐るゝ勿れ。彼れ汝より逃れ去らん。』

五 我れ彼に曰ふ『君よ、暫く我に聽き給へ。』彼『汝の欲する所を言へ。』と曰ひければ我いふ『君よ、人は熱心に神の誡律を守らんとし、此等の誡律のために力の支へられ、これに從ひ得んことを主に乞はぬものなしと雖も、惡魔は頑(かたく)なにして彼等を支配するなり。』彼いふ『惡魔は誠意主に望みを置く神の僕等を支配する能はず。惡魔は彼等に對して戰ひ得んも彼等を仆すを得ず。されば若し汝彼れを防がば、彼れ打ち敗られ、恥を蒙りて汝より逃れ去るべし。されど力ある者として惡魔を恐るゝは空しき人々のみなり。』

六 『されど悔悛の天使なる我れ汝等にいふ。惡魔を恐るゝ勿れ。我れ誠意悔改むる汝等と共に彼等は遂に彼の僕となる。

數多の瓶に良き葡萄酒を滿し、其中の幾個か半ば滿たし置かんに、やがて其等の瓶を見る時、滿たされたる瓶を顧みざるなり。そは滿され居ることを知ればなり。されど半ば空しき瓶は酸敗の恐れあれば之れを見る。そは空しき瓶は速かに酸敗して、葡萄酒の香り消ゆべければなり。かく惡魔は彼等を試みんとて神の僕等に到る。

心信仰に滿ちたる人々は强くこれを防げば、彼れ彼等に入るべき道を得ずして彼等より退き去るべし。されば彼れ空しき人々に行き、道を見出して彼等に入り、彼等の中に其欲する事を行ひ、

ありて、汝等をして信仰に強くならしめんがために遣はされたり。されば汝等、罪の故に生に失望し、罪に罪を重ねて生の重荷を負ふ汝等、神に信頼せよ。そは若し汝等誠意主に歸り、汝等の餘生を以て義を行ひ、聖旨に從ひて主に仕へなば、主は汝等の前の罪を醫し給ひて、汝等は惡魔の働きを支配する力を有つに到らん。されど惡魔の威嚇を恐るゝ勿れ。彼は死人の筋肉の如く力なければなり。故に我に聽き、救ひと滅びの一切の力を有つ主を恐れて、その誡律を守れ。されば汝等神に生くるを得べし。』我れ彼に曰ふ『君よ、我は今、主の全ての御告に由りて強くなれり。汝我れと共に在まし給へばなり。我れ汝が惡魔の全ての力を碎きて、我等は彼を支配し、彼の全ての働きに打ち勝つを知る。而して君よ、我は主の力に由りて、汝が我に命じ給ひし此等の誡律を守り得んことを希望す。』彼曰ふ『若し汝の心主に向ひて潔からば汝は其等を守るを得べし。而して全て此世の空しき慾望より其心を潔むる人々はこれを守るを得て、神に生くるを得べし。』

比喩篇

比喩第一

彼れ我に曰ふ『汝等は知る、神の僕なる汝等は他國に住み居ることを。そは汝等の町は此町より遠く離れ居ればなり。さればもし汝等、己が住むべき町を知らば、何故此地上に費多き準備をなし、居宅と無用の建物を造り重ぬるや。此町にかゝる準備をなす者は己が町に歸ることを得ず。嗚呼愚にして落ち着きなき、憐むべき人よ。すべて此等のものは他人に屬し、他人の力の下にあることを悟らざるか。此町の主いひ給ふべし「我れ汝の我が町に住ふことを欲せず。この町より去れ。汝は我が律法に從はざればなり」と。されば汝、假令田地と家屋、及び他の多くの物を持つとも、彼のために追放せられなば。汝の田地と家屋、及び汝が己のために積み重ねたる他の持物を以て何をなさんとするか。そは此國の主が曰ふ處は正し、「我が律法に從へ、然らざれば我が領内を去れ。」と。されば、己が町に律法を持ちつゝ汝は何をなさんとするか。汝の律法を全く拒み此町の律法に歩むか。汝の律法を拒むことの汝に不利益

なるを思へ。そは若し汝、己が町に歸らんことを欲するとも、受け入れられざるべし。汝は汝の町の律法を拒みたれば其處より放逐せらるべければなり。されば汝意せよ、他國に住む者の如く、必要なるもののほか準備をなす勿れ。何時にても、この町の主、其律法に不從順なりとて汝を追放せん時、其町を去りて己が町に赴き、恥づることなく、大なる喜びをもて己が律法に從ひ得るやう準備しあるべし。されば主に仕へ、其心に主を宿す汝等注意せよ。汝等主の誡律と其なし給ひし約束を憶え、神の業を行ひ、且つ其誡律を守りなば、主は約束を遂げ給ふことを信ぜよ。されば田地の代りに、各々其力に從ひて、懌む靈魂を買へ。寡婦と孤兒を見舞ひて、彼等を輕蔑する勿れ、汝の富と、凡て汝が主より受けたる田地及び家屋の如き財產を其ために用ゐよ。そは此目的のため、卽ち汝が主に此等の奉仕をなさんがためなり。而して汝が住まんとて行く時、汝の町の中に見出すかゝる土地と家屋を購ふは最善きことなり。此は悲哀も恐怖もなく、唯喜悅の伴ふ、貴くして聖なる用途なり。異敎人の用途に從ふ勿れ。これは神の僕なる汝等に取りては害なり。汝等は己が喜ぶ所の用途に從へ。他人のものを汚し、又はこれを貪るが如きことを爲す勿れ。他人の所有物を貪るは惡しきことなり。唯汝自らの業を行へ、さらば汝は救はれん。』

比喩第二

一　我れ農園の中を歩みつゝ、楡（にれ）と葡萄の樹を見て、己が心に其果（み）の事を考へ居けるに、牧羊者我れに現はれていふ『汝は楡と葡萄の樹につきて何を考へ居るや。』と。我答ふ『我は其等の樹がいづれも甚だ善きことを考へ居たり。』彼いふ『此等の二本の樹は神の僕等に取りての模範として在るなり。』我いふ『我は汝がいふ此等の樹の敎ふる模範を知らんことを願ふ。』彼れ『汝は楡と葡萄の樹を見るか。』と曰ひければ、我れ『君よ、我れこれを見る。』と答へぬ。彼いふ『此葡萄の樹は果を結べども、楡は果を結ばざる樹なり。されど葡萄は地の上に伸び擴がる時、楡の樹に寄らでは多くの果を結ぶこと能はず。よし果を結ぶとも、其幹楡の樹に支へられざれば、其果腐れ落つべし。されば葡萄、楡の樹に纏ふ時は其葡萄の樹よりのみならず楡の樹よりも果を取るを得べし。加之、汝は楡の樹が多くの果を、葡萄の樹より少からず、却つて多くの果を結ぶを見ん。葡萄の樹は楡の樹に支へらるゝ時は多くの善き果を結べども、地の上を這ふ時は小くして而かも腐れたる果を結ぶべし。されば此比喩は、貧富にかゝはらず神の僕等のためなり。』『如何にして然るや、君よ、我にこれを說き明し給へ。』と我いひしに、彼答へていふ『聽け、富める人は多くの富を持てども

主に關はる事については貧し。これ其富について心惑へばなり。彼はいと少き犠悔と祈願を主に捧ぐれども、而かもその捧ぐるものは小くして弱く、且つ上よりの力なし。されど、貧しき人は祈願と犠悔に富み、且つ其祈願は神に對して大なる力あるが故に、もし富める人、己が貧しき人に向ひてなすことは神よりの報いを得べしと信じて、貧しき人を賑はし、その乏きに從ひてこれを助けなば、その時富める人は凡ての事に躊躇なく貧しき人は、富める人に助けられたれば、其人のために仲保（とりなし）の祈願をなし、己れに物を送れる人のために神に感謝すべし。かくて富める人は貧しき人のためを思ひて斷えずその乏しきを補はんと力む。そは彼れ、貧しき人の祈願は受け入れられ、且つ神の前に力あることを知ればなり。かくて双方相扶けて其業を完ふす。貧しき人は己が豊かに有つ仲保の祈願をなす。彼はこれを主より受け、これを以て己れを助くる主人に報ゆ。又富める人も同じく躊躇せずに、彼が主より受けたる富を貧しき人に與ふ。此は大なる業にして神の前に受け入れらる。彼は其富の目的を理解し、主の賜物を貧しき人に與へて、正しく主に對する己が奉仕を行ひたればなり。されど人々の間に檢の樹は果を結ぶと見えず。彼等は旱魃の來る時、中に水を有つ檢の樹が葡萄の樹を養ひ、葡萄の樹は盡きざる水の供給を得て、己れのためと檢の樹のために、二重の果を結ぶことを知らざるなり。かく貧

しき人は富める人のために神に執り成して其富を増し、又富める人は乏しきに居る貧しき人を助けて己が祈禱の足らざるを補ふ。されば双方とも義しき業に於ける伴侶なり。此等の事をなす人は神に捨てられず、生命の書に其の名を錄せらるべし。幸福なる哉、富を有ち、其富の主より與へられたるとを悟る人々。そはかゝる心を持つ人々は何等かの善を行ふを得べければなり。』

比喩第三

彼れ、葉なくして、皆等しく枯れて見ゆる多くの樹を我に示して、『汝其等の樹を見るか。』と我に曰へり。我答ふ『其等は皆等しく、且つ枯れたり。』彼れ我に答へて曰ふ『汝が見る此等の樹は此世に住む人々なり。』我曰ふ『然らば君よ、何故かくは枯れて且つ皆等しきや。』彼曰ふ『此世に於ては義人も罪人も判明せず、共に等しければなり。此世は義人にとりては冬なり。彼等は罪人と共に住むが故に現はされざるなり。そは冬のうちは葉を有たぬ樹は皆互に相等しく、いづれが死し、いづれが活き居るか見分け難きが如く、此世に於ては義人も罪人も共に己れを現はさず、皆等しければなり。』

彼れ又我に、或は發芽せる、或は枯死せる、多くの樹を示していふ『汝は此等の樹を見るか』我答ふ『然り君よ、或ものは芽を吹き出し、或ものは枯れたり。』彼曰ふ『其等の芽を吹き出し居るは、來らんとする世に生くる義人なり。來らんとする世は義人にとりては夏なれども、罪人にとりては冬なり。されば主の慈悲輝き出づる時、神の僕等は現はされ、又た凡ての人も現はさるべし。そは夏には各の樹の果現はれ、その如何なる種類なるかの明かになるが如く、義人の果現はされど異教人及び罪人は汝の見る枯れたる樹の如く、枯れて彼の世に果を結ばざる人々として現はされ、薪の如く燒かるべし。彼等の行其生涯の間惡しかりければなり。罪人は罪を犯かして悔改めざれば滅ばされ、異教人は彼等を造り給へる主を知らざれば燒き盡されん。されば汝は、彼の夏に汝の果の知られんがため果を結べ。而して多くの俗務より遠かれ。さらば汝は決して罪を犯かさゞるべし。そは多くの俗務に沒頭する人々は、己が業について惑ひ、少しも其主を知らざれば、多くの罪を犯すなり。されば主に仕へざるに、いかで主に乞ひて何物かを主より受くるを得んや。主

に仕ふる人々は其乞ふものを得べけれど、主の業の實行に由りてすら人は主に仕ふを得。そは其心主より背き去らず、潔き思ひをもて主に仕ふべければなり。されば汝もし此等の事を行はゝ、來らんとする世に於て果を結ぶを得ん。而し何人にても果を結ぶべし。』

比喩第五

一　我れ斷食しつゝ、とある山上に坐して、主が我になし給へる凡ての事につきて主に感謝し居るに、『汝如何なればかくも朝早く此處に來れるか。』といひつゝ、牧者の我が傍に坐するを見たり。『君よ、齋日を守り居ればなり。』と我答ふ。彼れ『齋日とは何ぞや。』と問ひければ、我答へぬ、『我は斷食し居るなり、君よ。』と。彼いふ『汝の守りつゝある此斷食は何なるか。』我答ふ『君よ、我が斷食には何の價値もなし。』『君よ、如何なれば爾かいひ給ふか。』と我問ひしに、彼答ふ『我れ汝に告ぐ、汝が守り居ると思ふ其斷食は斷食にはあらず。されど我れ汝に主にとりて十分にして其聖旨に合ふ斷食とは何なるかを教へん。聽け。神はかゝる空

しき斷食を欲し給はず。そはかゝる方法にてなす神への斷食は義の生活にとりて何の效なければなり。されど汝は次の如き斷食を神に捧げよ。汝の生活にて惡をなさず、潔き心を以て主に仕へよ。主の敎へに步みて其誡律を守り、惡しき慾情を汝の心に入らしむる勿れ。且つ神を信ぜよ。若し汝此等の事をなして主を畏れ、凡ての惡事より遠ざかりなば、汝は神に生きん。而してもし汝此等の事をなさば、汝は神の前に其御心に合ふ大なる斷食をなすべし。

二　『我が汝に語らんとしつゝある斷食についての比喩を聽け。或人農園と多くの奴隸を持ちけるが、其農園の一部に葡萄畑を造り、忠實にて喜ばれ、且つ倘ばれたる一人の奴隸を己れの許に呼びていふ「我が植え付けたる此葡萄畑に到り、我が來る迄に此れに杙を樹てよ。他に何をもなすに及ばず、唯此命令のみを守れ、さらば我れ汝に自由を與へん。」と。かくて其奴隸の主は他國へ旅立ちせり。彼の行ける時、その奴隸葡萄畑に到りて杙を樹てけるが、杙を樹て終れる時、その葡萄畑の雜草もて蔽はれたるを見たり。其時、彼れ考へて曰ひぬ「我は我が主の此命令を守りぬ。我は尙ほ此葡萄畑の他の部分を堀り起さん。堀り起されなば畑は一層美はしくなり、雜草を拔き取らば、これに蹇がることなく、更に多くの果を結ぶに到らん。」と。されば彼れ葡萄畑の中の雜草を悉く拔き取りぬ。かくて葡萄畑はこれを妨ぐる雜草なければ、いと

美はしく、且つ多く果を結ぶやうになれり。程經て後ち奴隷と農園の主人歸り來りて、其葡萄畑に入りぬ。而して彼、葡萄の皆よく杙に支へられたるのみならず、地の面堀り起され、雜草も拔き取られたるを見て、その奴隷の業をいたく喜びたり。彼れ己が嗣子なる愛する子と、相談役なる友を呼びて、彼が其奴隷に如何なる命令を與へしか、又如何なる事の成されたるを見しかを彼等に語りぬ。彼等は主人がなせる證明をきゝて其奴隷を喜びぬ。而して主人彼等にいひぬ「我れ此奴隷に我が與ふる命令を守らば自由を與へんと約束せしに、彼は我が命令を守れるのみならず、葡萄畑のために更に善き業をなしていたく我を喜ばしめたり。されば彼がなせる働きの報いとして、我れ彼を我が子と共に財產を相續せしめんとす。そは彼れ善き考への起りし時、それを無視せず直ちに實行したればなり。」主人の此決心を聽きて其子奴隷が己と共に相續人となるべきことに同意せり。數日の後主人宴を開きて、其奴隷に己が食卓より多くの食物を贈りぬ。其奴隷已れに贈られたる食物を受けて、其中より己れに必要なる分を取り、殘りを悉く其同僚なる奴隷等に分け與へぬ。其同僚なる奴隷等食物を受けて喜び、彼が己等になしたる事のために、彼が主人より更に大なる寵愛を受けんことを彼のために祈り初めぬ。其主人凡て其等のなされたる事を聽きて、又々其行ひをいたく喜びぬ。而して主人再び其友等と其子を

呼びて奴隷がその贈られたる食物についてなせしことを告げぬ。されば彼等其奴隷が子と共に相續人たるべきことを更に喜びぬ。』

三　我れ彼にいふ『君よ、汝我に說き明し給ふにあらざれば、我れ此等の比喩の意味を知らず、又これを悟る能はず。』彼いふ『我れ汝にこれを說き明さん、又汝と共に語る所のものを何にても汝に示さん。「主の誡律を守れ、さらば汝は神の御心に合ひて、其誡律を守る人々の數に加へ記さるべし。」若し汝、神に命ぜられたる事のほかに尙ほ善をなさば、汝は汝自らのために更に豐かなる光榮を得、他の事に由りて得るよりも更に多く神よりの譽を得べし。されば若し汝神の誡律を守る時、それに加へて此等の奉仕をなし、我が命に從ひてこれを守らば喜びを得べし』我れ彼に曰ふ『君よ、汝が我に命じ給ふことは何にても我これを守らん。そは我に汝の我れと共にあるを知ればなり。』彼曰ふ『汝は善をなさんとの望を持つが故、我れ汝と共に在るべし。又我れ凡てゝる願望を持つ人々と共に在るべし。主の誡律の守られなば、この斷食は甚だよし。されどかく汝が守らんと企つる斷食を守るべし。先づ第一に凡ての惡しき語及び凡ての惡しき欲望に對して警戒をなし、汝の心を凡べて此世の虛榮より潔めよ。汝もし此等のものに對して警戒をなさば、汝の斷食全からん。而して汝は又次の如くなすべし。前に記されたる所を行ひて、汝は汝の斷食

の日パンと水のほかに何ものをも味ふ勿れ。且つ汝の食はんと企てし其日の食物の價を見積りてこれを寡婦若くは孤兒、若くは他の必要なる人に與へ、かくて汝は其心の謙遜を表はすべし。これ汝の謙遜より益を受くる人、己が靈魂を滿たして、汝のために主に祈らんがためなり。若し汝、我が汝に命ぜし如く斷食を守らば、汝の犧牲神に喜ばれ、この斷食は記錄せらるべし。かく行はれたる奉仕は貴くして聖く、且つ主の聖意に合ふ。されば汝かく此等の事を汝の子等及び汝の全家と共に守るべし。これを守らば汝は祝福されん。又何事にても主に乞はゞ彼等これを受くべし。』

四　我れ彼れに農園の比喩、卽ち葡萄畑の主人についてこれを說き明し給はんことを切に乞へり。そは我れ凡て此等のものは何かの比喩なることを知りたればなり。彼れ我に答へて曰ふ『汝は汝の質問をもなすべきにあらず。そは若し何事にても說き明しの必要あらば、汝に示さるべければなり。』我れ彼にいふ『君よ、汝が我に示して、而も說き明し給はざるものは、我これを見るも意味を解せず、又その何なるかを悟る能はざるなり。此の如く汝若し比喩を我に語りて、其れを說き明

し給はずば、我れ唯汝の御語を空しく聽くに到らん。』彼再び我に答へて曰ふ『其心に保つ持つ者は、何人も悟りを主に乞ひてこれを受け、凡ての比喩を解釋し、而して比喩にて語られたる主の聖語を知るべし。されど主は憐み深くして、凡て求むる人には必ずこれを與ふ。然るに汝は聖なる御使より力を得主よりかゝる仲保を得て、而かも怠らざるに、如何なればとて主に悟りを乞ひて、これを主より受けざるか。』我れ彼に曰ふ『君よ、汝我と共にありて、我と物語り居れば、我れ汝に問はでもあるべからず。されどもし我れ汝と共に在らずして此等の事を見聞きせば、其時は我れ主にこれを説き明し給はんことを求むべし。』

五 彼答ふ『今ま我、汝は恰しくして比喩の説き明しを乞ふに執拗なりといへり。されど汝は爾く執拗なれば、我れ汝に、汝が凡ての人にこれを知らしめんがため、農園と其れに關はる比喩の意味を説き明かさん。今聽きてこれを悟れ。農園はこの世界なり。農園の主は凡ての物を創造し、完成し、強むる主なり。〔子は聖靈なり。〕奴隷は神の子なり。葡萄は主自ら植え給へる此民なり。杙は其民を共に支へ給ふ主の聖なる使なり。葡萄畑より抜き取られたる雜草は神の僕等の罪過なり。主が其食卓より贈れる食物は、主が其子を通ほして其民に與へたる誡律なり。相談役

なる友等は始めに造られたる聖なる使なり。又主人の不在は主の現はれ給ふ迄の殘りの時なり。』
我れ彼にいふ『君よ、此等は凡て大にして驚くべく光榮ある事どもなり。されば我これを悟り得んや。否、いかに慧くとも何人かこれを悟り得ん。且つ願くは我に何を汝に問ふべきかを示し給へ。』彼れ『汝の欲する所をいへ。』といひければ、我れ問ひぬ『如何なれば君よ、比喩の神の子は奴隷の形にて在ますか。』

六　彼答ふ『聽け、神の子は奴隷の形にて在まさず、大なる權威と能力の形にて在ます。』我曰ふ『如何にして然るか君よ、我れ悟るを得ず。』彼答へぬ『神は葡萄畑を植え付け給ひたればなり。卽ち主は其民を造り、又彼等に其子を與へ給へり。而して子は其使を彼等に送りて彼等を保ち給へり。子は自ら多くの勞働と辛苦を忍びて、彼等の罪を潔め給ひたればなり

活をなし、其靈と共に働き共に力め、凡ての事聖靈と共に快く勇しく行ひて、之れを其同勞者と
す。此肉體の行ひ主を喜ばしめぬ、そは聖靈と共に地上に在る時濟されざりければなり。されば
彼れ其子と榮光ある御使等を其相談役とし給へり。これ過ちなく靈に服せし此肉體、何處にか其
居住の場所を持ち、其〔勞役の〕報い〔失はれたりと〕見えざらんがためなり。そは汚と濟なしと見
られたる聖靈の宿れる肉體は〔報いを得べければなり。』。茲に汝は此比喩の説明を得たり。』

七　『君よ、我れこの説き明しを聽きて喜ぶ。』と我曰ひしに、彼再び答へぬ『聽け此肉體を潔く
汚れなく保て。其中に宿る靈之が證しをなし、汝の肉體義とせられんがためなり。この汝の肉體
は朽ち果つとの思想汝の心に起りて、汝濟れの行ひを以てこれを汚すとのなきやう意せよ。若し
汝、汝の肉體を汚さば汝は聖靈をも汚さん。而してもし汝の肉體〔と靈〕を汚さば汝は生きざるべ
し。』我曰ふ　若し何人か、君よ、此等の語を聽く前今に到る迄無知にて在りたらば、かゝる人其肉
體を汚さんに如何にかして救はるべきか。彼曰ふ『前の無知の罪について、神のみ彼等を醫し得、
そは凡ての力は主のものなればなり。〔されど今汝自ら防ぎ守れ。〕』汝もし來らんとする時のため
に汝の肉體と靈とを汚さずば、〔全能にして憐み深き神は前の罪過を醫し給ふべし。〕そは二つは
共にありて一つのみ汚さるゝ能はず。されば二つともに潔く守れ。さらば汝神に生くるを得ん。』

比喩第六

一　我れ家に坐して、我が見たる凡ての事について主を崇め、又誡律について思ひめぐらし、如何にその美はしく、力ありて、榮光に滿ち、人の靈魂を救ひ得るかを思ひて、自ら曰ひぬ『我れ若し此等の誡律に歩まば幸福ならん、又凡て此等の語を曰ひ居りしに、突然彼の我が傍に坐して曰ふを聽けり『いかなれば汝、我が汝に與へし誡律について疑ふや。此等の誡律は正し。汝少しもこれを疑はずして主に在る信仰を着よ。さらば汝此等に歩まん。我れ汝を此等に在りて強めん。此等の誡律は悔改めんと企てつゝある人々に取りて益あり。そはもし彼等此等に歩まずば、彼等の改心は空し。されば悔改むる汝等、己れを疲らす此世の惡を投げ棄てよ。而して聖なる生活の凡ての德を着ることに由りて、汝等は此等の誡律を守るを得、汝等の罪の數を增さゞるべし。されば我が與ふる此等の語をいひて 後我にいひぬ『いざ我等野に往かん。』『我等往くべし君よ。』と我答ふ。而して我等、ある野に來りしに、彼れ黃色の衣を着たる牧羊者なる青年を我に示しぬ。彼は甚だ多く

の羊を牧し居けるが、其等の羊は皆奢りて飽き足らひたるが如く、樂げに其處此處を跳び歩けり。牧羊者自らも其群の故に由りて樂み、其牧羊者の顏喜ばしげにて、群の間を走り廻れり。〔我れ又一の處に居りて飽き足らひ、奢り樂む他の羊を見しが、其等は跳び廻り居らざりき。〕

二　彼れ我に曰ふ『汝は此牧羊者を見るか。』と。『我れこれを見る、君よ。』と。『我れこれに曰ふ『此は奢りと僞りの使なり。彼は神の僕等の靈魂を疲らし、彼等を滅ぼす惡しき情慾もて彼等を欺き、眞理より彼等を逆行せしむ。そは彼等は活ける神の誡律を忘れて僞りと空しき奢りに歩む。或者は死に付され、或者は腐敗に付されて彼等は皆その使のために滅ぼさるる。』我れ彼に曰へり『君よ、我れ「死と腐敗」といふ此等の語の意味を知らず。』彼曰ふ『聽け、汝が見る樂げに跳び廻る羊は己れを永久に神より引き裂きて、〔此世の〕奢りと僞りに付せる人々なり。〔彼等の中には改心に由る生への復歸なし。そは彼等は他の罪に又罪を重ね、且つ主の御名を瀆せばなり。されば腐敗は死に定められる。又た汝が見る跳び廻らず一つ處にて草を食ふは己れを奢りと僞りばかゝる人々は死に定めらる。又た汝が見る跳び廻らず一つ處にて草を食ふは己れを奢りと僞りに付したる人々なり。〕されど彼等は主に向ひて瀆濆（けがし）を犯さず。此等は眞理より腐敗したりと雖も、彼等の中には生に到り得る改心の希望あり。されば腐敗は或種の革新の望を有てど、死は永遠の滅亡を有す。』我れ又少しく進み行きしに、彼れ、白き山羊の皮を着、その肩に佩囊を負ひ、

枝ある堅き牧杖と、大なる鞭を持てる、粗野なる面貌の丈高き牧羊者を我に示せり。彼は甚だ澁き顔を持てり。我これを恐れし程其顔は意地惡しく見えたり。この牧羊者は彼の若き牧羊者より、飽き足らひて奢り樂み而かも跳び廻らざる其等の羊を受け、これを薊と荊蕀に滿てる嶮しき所に投入れたり。其荊蕀と薊より羊を引き出すこと能はず。羊その間に縺れ込めばなり。されば此等の羊かく縺れ込みて荊蕀と薊の間に草を求め、彼に打たれていと慘めなり。彼はその羊等を其處此處と追ひ廻はして休みを與へず。されば此等の羊は全く不幸の狀態にありき。

三　されば我れ、我れと語れる牧者にいひぬ『君よ、はかくも打たれ、かくも虐げらるゝ彼等を見て、我れ彼等のために悲みぬ。そは彼等かくも全く憐みなき此牧羊者は何人なるか。』彼答ふ『此は刑罰の天使なり。彼は義しき使等に屬し、刑罰のために定め置かる。されば彼は神より迷ひ離れ、此世の慾情と虛僞に步みたる人々を取りて、彼等にふさはしき恐しき樣々の刑罰をもて支等を試煉す。』『君よ、我此等の種々なる責苦と刑罰は如何なる性質なるかを知らんとを願ふ。』といひしに、彼れ曰ふ『聽け、種々なる責苦と刑罰のことを。此等の責苦はこの世の生活に起るそれなり。そは或者に損失をもて、或者は缺亡をもて、或者は種々なる病氣をもて、或はあらゆる

不秩序と混雑をもて罰せらる。或者は取るに足らぬ人々のために侮辱せられ、又多くの他の方法にて苦難に逢はせらる。そは多くの人々は其企て動揺して多くの事を試みれど、何事にも成功せはず、而して自ら其事業栄えずといふ。而かも彼等は其心に、己等が悪しき行ひをなせしことを思はず、却つて主を涜す。されば彼等はあらゆる懊みをもて懊む時、善き試煉を受けんがため我に付され、主の信仰に在りて強くなる。かくてその餘生に於て潔き心を以て主に従ひ、その求むるものを主より得て、その凡ての事業に成功す。而して彼等は、我に付されてもはや何の悪をも受けざるが故に主に榮光を歸す。』

四 我れ彼にいふ『君よ、我にこれを説き明し給へ。』『汝の問ふは何なるか。』と彼曰ひけれぱ、我れ曰ひぬ『君よ、奢りと虚僞に耽りたる人々は、その奢りと虚僞に耽りしと同じ時期の間、責苦を受くべきか。』彼れ我に曰ふ『彼等は同じ時間の間責苦を受く。』〔我答ふ『彼等は甚だ小き苦みを受く、君よ、かくも奢り樂みて神を忘れたる人々は、七倍の苦みを受くべき筈なり。』彼曰ふ『然り君よ、我れ若しこれを悟らば我に示し給へと汝に乞はじ。彼曰ふ『聽け、双方の力を。奢りと虚僞の一時は一時なれど、苦罰の一時はされぱもし人一日奢りと虚僞に耽りて、一日の責苦を受けんに、その責苦は全一

年に相當し奢り樂める凡ての日に對して受くべき苦罰の多くの年あり。かくて汝は奢りと虛僞の時はいと短くとも、刑罰と責苦の時の永きを見る。』

五 我れ曰ふ『我れ尙ほ、虛僞と奢りと責苦の時について全く悟る能はざれば、更に明かにこれを我に說き明し給へ。』彼答へて 我に曰ひぬ『汝の愚は甚し。汝は己が心を潔めて 神に仕へんとはせず。時滿つるに及びて汝は愚と認められざるやう意せよ。聽け、汝の欲する如く、汝は此等のことを悟るべし。奢りと虛僞に一日を送り、其欲する事をなす人は甚しき愚を着、己がなす行を翌朝に到るも悟らず。そは彼れ前日なせることを忘るればなり。そは奢りと虛僞は、其着る所の愚の故に記憶を有たず。されど一日の刑罰と責苦人に附き纏ふ時、彼は一年の刑罰と責苦を感ず。そは刑罰と責苦は力ある記憶を有てばなり。されば一年の間責苦と刑罰を受け居らんに、彼は遂に己が奢りと虛僞を思ひ起し、そのために己れの苦むを知る。されば誰にても奢りと虛僞の人はかく苦罰を受く。そは生命を有てども己れを死に付せばなり。』我問ふ『君よ、如何なる種類の奢が有害なるや。』彼答ふ『人の樂みてなす所の行は皆奢りなり。怒り易き人己が滿足を求むる時は奢りに耽るなり。邪淫者も、飮酒者も、讒謗者も、虛言者も、貪婪者も、竊盜者も、凡て此の如くすることに由りて奢りに耽るなり。凡て此等の

奢りの行は神の僕等に取りて有害なり。されば此等の虚僞の故に、彼の刑罰と責苦を受くる人々は苦むなり。そは善をなす多くの人々は、己れの快樂に運ばれて奢りに耽る。されど人を救ふ奢りの行もあり。べたる有害なる奢りは神の僕にとりて益あり、かゝる人に生命を得しむ。されど此奢りの行は責苦と刑罰を彼等に與ふ。而してもし彼等これを續けて改心せずば、遂に己が身に死を招くに到るべし。』

比喩第七

數日の後我れ彼の牧羊者等を見たるに、彼れ我に言ひぬ『汝は何を求むるか。』我れ彼にいふ『君よ、汝彼の刑罰の天使を我が家より去らしめ給はんことを願ふ。そは彼いたく我を懊(なや)ませばなり。』彼答ふ『汝は苦難を受くる要あり。そは榮光の天使汝を試煉せんとして、汝に關はる命令を發したるたり。我曰ふ『君よ、我れ此天使に付(わた)さるゝ程にかくも惡しき何事をなしたるか。』彼曰ふ『聽け、汝の罪は多し、されど此天使に付さるゝことを求めらる程大にはあらず。然るに汝の家大なる不法と罪を犯したれば、榮光の天使彼等の行の故に彼等を怒り、暫くの間汝を苦ましむ。これ彼等改心をなして凡て此世の欲情より己れを潔めんがためなり。さ

れば彼等悔改めて潔められるゝ時、刑罰の御使離れ去るべし。』我れ彼にいふ『家の長なる汝苦められ使を怒らすが如きことをなせしとするも、我れは何をたゝせしや。』彼答ふ『君よ、汝は其全心を以て悔改めたり。』彼答へね『我も亦彼等がその誠意悔改めたるを知る。されば汝は悔改めたる彼等の罪は取り去られたりと思ふか。決して然らず、悔改むる者は其靈魂を苦ましめ、その行凡ていたく謙り、多くの苦みを以て苦むべし。而して若し彼れ己が上に來る苦みを忍ばゞ萬物を造りてこれに力を與へ給ひし主は、憐みを垂れて彼を醫し給ふべし。凡て悔改者の心があらゆる惡事より潔められるゝを見ば、主はかくなし給ふべし。されば今苦みを受くるは汝と汝の家のためにて益あり。されど我れいかで汝に多くを言はんや。我を汝に付したる主の御使の命ぜし如く、汝は苦みを受けざるべからず。汝主に感謝せよ。そは主汝を、豫め汝に此の苦みを示すに足るものと認め、汝をして其來る前にこれを知り勇氣をもて之に堪えしめんがためなり。』我れ彼に曰ふ『君よ、汝我れと共に在るべし。且つ我れ刑罰の天使に更に輕く汝を苦しめんことを乞ふべし。されど汝は暫く

の間苦みを受けて、再び汝の家に歸り住むべし。汝も、汝の子等も、汝の家も、只管に謙り、全く潔き心を以て主に仕へ、我が汝に命ずる我が誡律に歩めよ。さらば汝の悔改め深く且つ潔くあるべし。而して汝、汝の家と共に此等のことを守らば、凡ての苦み汝より離れ去らん。凡て此等の我が誡律に歩む者より苦み離れ去るべし。』

比喩第八

一　彼れ我に野と山々に陰影を投げたる大なる柳の樹を示す。而して此柳の蔭には主の名に由りて呼ばれたる凡ての人々集へり。丈高き、主の榮光の天使、柳の側に立ち、大なる刈込鋏を以て柳の小枝を剪り取り、柳の陰に蔽はれたる人々にこれを分け與へぬ。彼等に與へし枝は小くして其長さ一尺五寸許りなり。彼等皆枝を受けたる後、天使刈込鋏を下に置きしに、其樹我が初めに見たる如く完かりき。我れ心の中に驚きていふ『かく多くの枝剪り取られたるに樹は如何にして完きか。』牧者我にいふ『樹爾く多くの枝を剪り取られたるに尚ほ完きとて驚く勿れ。されど待て。』汝すべてのものを見ん時、其意味汝に說き明さるべし。』人々に枝を分け與へし天使再び其枝を彼等より求めたるに、彼等はこれを受けたる順序にて彼の許に到り、各其枝を返しぬ。主の御

使其等を取りて見たり。彼れ或者より枯れて蟲喰ひたる枝を受けしが、かゝる枝を返したる人々に、離れて立てと命じたり。或者は半ば枯れたれど蟲喰はぬを返しけるに、彼等にも離れて立てと命じたり。或者は半ば枯れたるを返し、彼等も離れて蕾あるを返して離れ立ちぬ。〔或者は綠なれども蕾あるを返して離れ立ちぬ。〕或者は三分の二枯れて三分の一綠なるを返して離れ立ちぬ。或者は三分の二綠にして、その殘り枯れたるを返して、此等も離れ立ちぬ。或者は其枝を天使より受けたるまゝに綠なるのみにて他は悉く枯れたるを返して離れ立ちぬ。或者はいと僅かの部分綠なるを返して離れ立ちぬ。或者は殆んど皆綠にて、先の少しく枯れたるに天使いたく喜び、彼等は離れて立ちぬ。〔或者は其枝の綠にて蕾あるを返して離れ立ちぬ。〕或者は綠にて葉あり、且つ其葉に果を結べるが如き枝を返したり。天使は彼等のために喜び跳り、牧者も亦彼等の故に大なる喜びをなしぬ。

二 主の天使冠を持ち來れと命じけるに、棕梠にて造られしが如き冠持ち來られたり。而して彼れ葉ありて果を結べる枝を返したる人々にこれを冠らしめて、彼等を塔に送りぬ。他の人々、卽

ち綠にて蘗(ひこばえ)あれども果なき枝を返したる人々には印を與へて、塔に送りぬ。凡て塔には皆同じく雪の如き衣を着けぬ。受けたる時の如く綠なる枝を返したる人々には彼れ衣と印を與へて自由の身となしぬ。天使此等のことを終りし後牧者にいひぬ『我れ去り行かん、されば汝此等の人々を城壁の内に、各ふさはしき住居に送るべし。彼等の枝を意(こゝろ)して檢べ、彼等を去らしむべし、意して檢べよ。一人も汝の許を逃れぬやう意せよ。もし汝の許を逃るゝものあらば、我れ祭壇にて彼等を誡むべし。』此等のことを牧者にいひて彼れ去りぬ。天使去りし後、牧者我にいふ『我等すべて此等の枝を取りて植え、そのいづれかの生くるやを見ん。』我れ彼に曰ふ『君よ、如何にして此等の枯れたる枝生くべきや。』彼答へていふ『此樹は柳にして、生命強き樹なり。されば若し枝植えられて、少しの濕氣を受けなば其多くは生きん。されば今我等これを試み、其上に水灌がん。而してもし彼等のいづれか生きなば我れ彼等と共に喜び、若し彼等生きずとも我れは等閑にしたりとは見られざるべし。』牧者我に命じて、彼等をその各立たしめられし如く呼ばしむ。彼等隊をなして來り、其枝を牧者に付したり。牧者枝を受けてこれを列に植えぬ。植え終りて彼れ多くの水をこれに灌ぎしが、枝、水のために見えぬ程となれり。枝水を吸ひし後、彼れ我に曰ふ『我等往きて又數日の後に歸り、凡ての枝を檢べん。そは此樹の造主は枝を受けたる人々の

皆生きんことを欲し給へばなり。我も亦た、濕氣を受け、水を飲みし此等の枝の多く生きんことを望む。』

三　我れ彼にいふ『君よ、此の樹は何を意味するかを我れに說き明し給へ、かくも多くの枝剪り取られぬかの如く見ゆる故、我これについて惑ふ。』彼れ曰ふ『此野と山々及び全地に陰影を投じる大なる樹は、全世界に與へられたる神の律法なり。其陰影の下に在る人々は宣傳を聽きて彼を信じたる人々なり。而して大にして榮光ある天使ミカエルは此民の上に權威を持ちて彼等を治むる者なり。そは彼は信者等の心に律法を與へられをる人々が、館くこれを守るかを檢す。汝は各人の枝を見るべし。』我れ彼に曰ふ『君よ、何故彼は或者を塔に去らしめ、或者を汝に托したるか。』彼答ふ『凡て多くの枝を見る。そは枝は律法なればなり。されば汝は無用となりたる者なり。されど凡て律法を滿たしこれを守りたる人々をば彼れ自らの權威の下に置く。』我曰ふ『然らば冠を受け、塔に行く人々は何人なるか。』彼いふ『惡魔と鬪ひて彼に勝ちたる人々は冠を與へ

らる。此等は律法の故に受苦せし人々なり。されど他の人々、卽ち綠にて蘗(ひこばえ)あれど果なき枝を返したる人々は、律法の故に受苦して而かも其律法に懲まず、又これを拒まぬ人々なり。其枝を受けたるまゝの綠にて返したる人々は敬虔にして義(ただ)しく意(こゝろ)して潔き心にて歩み、主の律法を守りたる人々なり。而して其他は、我が植えて水灌ぎたる其等の枝を檢(しら)ぶる時に汝これを知らん。』

四 數日の後我等その場所に來り、牧者は天使のにいふ『飾りなき麻を着て我に事へよ。』と。我れ粗き布にて作れる飾りなき清き麻を着ぬ。我が身づくろひして彼に事ふる準備なれるを見て彼曰ふ『植えられたる枝を持てる人々を、各其れを渡したる順序に從ひて呼び出せ。』と。されば我れ野に行きて彼等を呼び出せしに、彼等は凡て其順序にて立ちぬ。彼其等の人々にいふ『各己が枝を抜き取りて我が許に持ち來れ。』第一は枯れて切られたる枝を渡したる人々なり。彼等はかく枯れて切られ居りしかば、彼れ彼等に離れて立てと命じぬ。次ぎは枯れたれど切られざるを渡したる人々なり。彼等の或者は其枝の綠なるを、或者は枯れて蟲に喰まれたるを渡しぬ。されば彼れ綠なるを渡したる人々に離れて立てと命じぬ。次ぎは半ば枯れて而して乾きて切られたるを渡したる人々に第一の人々の側に立てと命じたり。次ぎは綠にて蘗あり、且つ綻(ひゞ)あるを渡したる人々なり。彼等の多くは綠にて綻なきを渡したれど、或者は綠にて蘗あり、

つ蘗（ひこばえ）に果あり、冠を受けて塔に入りし人々の持てるが如きを渡したり。或者は枯れて蟲に喰まれたるを、或者は枯れたれど喰まれざるを、又或者は半ば枯れて罅（ひび）ある如きを渡したり。而して彼等各に或者は己が列に、或者はこれと離れて立つべしと命じぬ。

五　その時、緑なれど罅あるを持ちたりし人々其枝を渡しぬ。彼等は皆緑なるを渡して己が列に立ちぬ。其等は皆變化して其罅を失ひ居たれば、牧者これを喜びたり。半ば枯れたるを持ちたりし人々其れを渡したるに、牧者は其枝全く緑となり、或者は半ば枯れ或者は緑にして半ば枯れたるを持ちたりし人々其れを渡したるに、或者は半ば枯れたるを渡しぬ。次ぎに三分の二緑にして三分の一枯れたるを渡したり。彼等は凡て各、己が列に送られぬ。彼等の多くは半ば枯れて朽ちたるを、或者は半ば枯れたるを渡し、或者は枯れて蟲あるを、又少數の人々は緑なるを渡したり。此等も凡て己が列に立ちぬ。又緑なれど少しばかり枯れて罅あるを持ちたりし人々其れを渡したるに、彼等の或者は緑なるを、又或者は緑にして蘗あるを渡したり。此等は大部分緑にして蘗あり、又或者は全く緑なりき。此等の枝のかゝる有樣にあるを見て牧者はいたく喜びぬ。彼等も亦各、己が列に去りぬ。

六　牧者此等の枝を悉く檢べて後我に曰ふ『我れ汝に此樹は生命に根強きことを語りぬ。汝は如何に多くの人々悔改めて救はれしかを見る。』我答へぬ『君よ、我れ見る。』と。彼曰ふ『これ汝

主の大なる慈愛と、如何に甚大にして榮光あるか、又如何に主は其靈を改心するに足る人々に與へしかを見んがためなり。』我曰ふ『然らば君よ、何故彼等は悉く改心せざるか。』彼答ふ『然らばくなり、主に從順になり得と見し人々に誠意悔改むる力を與へ給へり。されど主が其虛僞と惡を認め、僞善の悔改めを企つと見し人々には、彼等が再び其御名を瀆さんことを恐れて、これに改心を與へ給はず。』我れ彼に曰ふ『君よ、今、枝を渡したる人々について、彼等は如何なる性格の人なるか又は彼等の住居の何處なるかとを示し給へ。これ信者となりて印を受けしも、これを破りこれを正しく守らざりし人々聽かん時、彼等己が行ひを語り、悔改めて汝より印を受け、主が彼等の上に憐みを垂れ、彼等の精神を新たにせんがために汝を遣はし給へることの故に、主に榮光を歸せんがためなり。』彼曰ふ『聽け、其枝枯れて蟲に喰まれたりと見られたるは敎會の背敎者、反逆者にして、彼等は其罪を以て主を瀆し、且つ主の御名に由りて召されたるに其御名を恥ぢぬ。されば此等結局は神にとりての損失なり。汝は、彼等は我が彼等に語りたる、汝に命ぜし語を聽きても一人だに悔改めざるを見ん。生命かゝる人より離れたり。又枯れたれど朽ち果てざるを渡したる人々もこれに近し。そは彼等は僞善者、奇怪なる敎理の紹介者、又神の僕等の惑亂者なり。ことに彼等は罪を犯せる人々に改心をなさしめず、愚なる敎理をもて彼等を說き伏するなり。さ

れど彼等に改心の希望あり。而して汝は、我が彼等に語りし以來、彼等の多くは悔改めたるを見る。彼等の中尚ほ悔改むる者あらん。されど悔改めざる人々は凡て其生命を失ふ。而して悔改めたる人々は善となり、彼等の住居は第一の壁の内に定められる。彼等の或者は塔にまで上りぬ。されども、悔改めざるは死するを見ん。

七　『又半ば枯れて罅（ひび）ある枝を渡したる人々のことをも聽け。同じ樣に半ば枯れたる枝をもてる人々は懷疑ある人々なり。そは彼等は生きもせず又死にもせざればなり。又半ば枯れて罅ある枝をもてるは逡巡者にして且つ讒謗者なり。彼等は互に和睦することなく常に行違をなす。而かも彼等の中には尚ほ改心の機る、彼等の或者の悔改めたるを。彼等の中にては悔改めたる人々は塔の中に住居を得ん。彼等のうち悔改むるべし。綠なれど罅のある枝を渡したる人々は、常に忠信にして善良なりしと雖、上座を競ひ名聲を求むる人々なり。凡てかゝる競爭に耽る此等の人々は愚なり。而かも彼等は本來は善なれば、我が誡律を聽きて、自らを潔め、直ちに悔改めたり。されば彼等の住居は塔の中に在り。されど若し何人にても爭ひに逆行するものは塔の外に投げ出されて其生命を失ふべし。生命は凡て主の誡律

を守る人々の所有なり。されど其等の誡律の中には上座に關する爭ひ又高慢なく、唯忍耐と謙遜あり。さればかゝる人々の間には主の生命あれど、爭ひを好みて罪過を犯す人々の間には死あり。

八 『その枝の半ば綠にて枯れたるを渡したる人々は俗務に沒頭して、聖徒の交りをなさゐる人々なり。この故に其半ばは生きて、半ばは枯れたるなり。我が誡律を聽きたる多くの人々悔改めたり。悔改めたる人々は塔の中に其住居を持ちぬ。されど彼等の或者は終に墮落したり。されば此等の人々は改心をなさず、其俗務の故に主を瀆し主を拒みぬ。されば彼等は己が犯したる惡の故に其生命を失ひぬ。而して彼等の多くは疑ひたり。而かも若し速かに悔ゐなば、其力にて改心をなすを得、其住居を塔の中に持つべし。されど若し彼等悔改を躊躇しなば壁の中に住居を持つべし。而して若し悔改めずば、彼等も生命を失ふ。又三分の二枯れて三分の一綠なる枝を渡したるは、種々なる方法にて主を拒みたる人々なり。されど多くの人悔改めたれども、彼等の或者は躊躇して疑ひに陷りぬ。されば此等の人々速かに悔ゐて、己が快樂に止まらずば改心を我がものとするを得ん。然れども彼等己が行ひに止まらば、此等の人々も亦自ら死を招くべし。

九 『その枝の三分の二枯れて三分の一綠なるを返したるは一時は眞に忠信なりし人々なり。されど富を得、異教人の間に名望を得て、自ら大なる誇りを着、高ぶれる心となりて、眞理を離

れ、義人と交らず異教人と交り、かゝる生活の道彼等に取りて心に適合するものとなれり。而かも彼等は神より離れず、假令信仰の業を行はざるも、尙ほ信仰に止る。されば彼等の多くは悔改めて其住居を塔の中に持ちぬ。或者は終りに異教人との生活を繼續して、其虛榮に由りて腐敗せしめられ、異教人の業と行ひに仕へて神より離れたり。此等の人々は異教人と數へらる。されど彼等の或者は己がなせる行ひの故に救はるゝことを望まず、又或者は疑に陷りて、自らの間に分裂を來たしたり。されば己が行ひの故に疑に陷りし人々のためには、猶改心の機會あり。されど彼等の住居を塔の中に藏んがためには其改心速かならざるべからず。悔改めずして己が快樂に止まる人々には死近し。

一〇　『綠なれど尖端の枯れて罅あるを渡したるは、常に善良、忠信にして、神の前に譽ある人々なりしが、小き慾望に耽り、又互に小き過ちを見出して、いと小き罪を犯したるなり。されど彼等の大部分は我が言を聽きて悔改め塔の中に其住居を得たり。而かも彼等の或者は疑に陷り、疑に陷りし人々の或者は更に大なる紛爭を行へり。此等の人々間にも改心の希望あり、これ彼等は常に善良なりしが故なり。彼等の何人も亡ぶること難かるべし。いと小き部分綠にて他は悉く枯れたる枝を渡したるは、信じたれども、而かも罪の業を行ふ人々なり。されど彼等は決して神

を離れず、喜びて其の名を保ち、喜びて主の僕等を其家に迎ふ。されば此の改心について聽くや躊躇せずに悔改め、凡ての德と義を行ふ。而して彼等の或者は、己がなせし行ひを知れば、苦しめられて喜んで苦みを受けぬ。さればすべて此等の人々のため塔の中に住居あるべし。』

一一　彼れ凡ての枝についての說明を終りし後ち我に曰ふ『往きて凡ての人にこれを語れ。これ彼等悔改めて神に生きんがためなり。主は凡ての人々の上に憐みを持ち給へば、或者は其行の故に之に價せざれども、悔改めを與ふるために我を遣はし給へり。主は忍耐深くましまして、其子に由りて召されたる人々の救はれんことを欲し給ふ。』我れ彼に曰ふ『君よ、我これを聽きたる人々の皆悔改めんことを望む。そは我れ、何人にても己が行についての悟りを得て、神を畏れなば悔改めなんことを知り得たればなり。』彼れ我に答へて曰ふ『凡て己が惡の數を增す前に、誠意自らを潔め、もはや何ものをもその罪に加へざる人々、もし此等の誡律について躊躇せずば、其前の罪過について主より醫療を受け、神に生くべし。〔されど己が罪に止まり、此世の慾に歩む者は、自ら死に定めらるべし。〕』されど汝は我が誡律に歩みて〔神に〕生きよ。〔此等に歩みて正しくこれを行ふ人々は神に生くべし。〕』此等の事を我に示し、此等の言を語りて彼れ我にいふ『其殘りをば我れ數日の後、汝に示すべし。』

比喩第九

一　我れ悔悛の天使なる牧者の誡律と比喩を書き記したる後、彼れ我に來りていふ『我れ汝に教會の形にて汝と語りし聖靈が汝に示せしことを說明せんとす。そは彼の靈は神の子なればなり。汝は肉體稍弱かりし故、御使これを汝に說明せざりき。されど汝靈によりて强められ、汝の力增されたれば、汝は御使を見るを得て、塔の建物敎會に由りて汝に示されたるなり。貴く嚴かなる樣にて、處女に由りて示されたるが如く、凡てのものを汝見たり。されど今汝は同じ靈を通ほして、御使に由りて示されたるが如くに〔これ等を〕見る。されば汝は凡ての事にいと精密に我より聽かざるべからず。そは我れ汝が以前の如き恐怖（おそれ）を持たず、力を以て凡ての事を見んがため、汝の家に住まんとの目的を以て榮光の天使に由りて遣はされたり。』かくて彼れ我を導きアルカデアの圓き小山に到り、其小山の頂に我を置きて、廣大なる野と野の周圍なる皆異れる形の十二の山々を我に示す。第一は煤の如く黑く、第二は禿げて樹なく、第三は荊蕀と薊に滿ち、第四は半ば枯れたる草ありて、其草の上の方綠なれど根のまはり枯れ、草の幾分は太陽の照りつけし時、枯れたり。第六は或は小く或は大なる罅隙（ひび）ありて、其等の罅隙には草あ

れど、草はいと生氣なく、むしろ枯れ死にたる如くなりき。第七の山は樂しげなる牧場ありて、全山花咲き、種々の家蓄と鳥、其山の上にて飼はれ、家蓄と鳥喰めば其山の草益々生へ繁れり。第八の山は、水少しもなく、全くの荒地にて、其泉滿ち、あらゆる主の被造物其山の泉より飲めり。第九の山は、水少しもなく、全くの荒處には人を殺す恐しき蛇あり。第十の山は大なる樹一面に影を投げ、其等の樹の陰に反芻し居れり。第十一の山は甚しく樹木繁りて、而かも其等の樹はあらゆる種類の果を結びこれを見るものは何人にても其果を食はんことを欲する程なり。又第十二の山は全く白くして、喜ばしげに見え、其山甚だ美しかりき。

二 野の中央にて、彼れ野より突出せる大なる白き岩を我に示しぬ。其岩は山よりも猶高く、形眞四角にて全世界を包み容れ得る程なり。其岩は古くして、切り開かれたる門あり。而して門の切り開かれたるは我には輓近のことと見えたり。門は太陽の光の下に眩く輝きて、我その門の光明に驚く程なりき。門の周圍に十二人の處女立ち居れり。隅に立てる四人は際立ちて榮光ある中間に立てり。彼等は麻の衣をもて、淑やかに其身を裝ひ、重荷にても負はんとする如く右の肩を露し居たり。彼等は甚だ快活にて且つ熱心なりき。我れ此等の者

を見し後我れ自ら驚きぬ。そは我れ大にして榮光ある光焔を見居たればなり。又我れ處女等について惑へり。そは彼等はかくも纖美なるに、天を動さんかと思はるゝばかり凛々しく立ち居ればなり。牧者我にいふ『何故汝は理を推して、汝の心を惑はし、自らを懊しつゝあるや。汝の理解し得ざることなるに、自ら賢人なるかの如く、悟らんと企つる勿れ。唯、汝悟りを與へられてこれを知り得んがため主に願ふべし。汝は前にある者を見るを得れども、後にあるものを見る能はず。されば何にても汝の見る能はざるものを拋ち、以て自らを苦むる勿れ、されど汝の見る所のものを善用し、他の事のために汝の勞力を費す勿れ。我れ汝に、我が汝に示すあらゆるものを說き明かすべし。されば猶殘れるものをも見よ。』

三

我れ丈高く、榮光ある六人の人、同じ有樣にて來り、多數の人々を呼ぶを見たり。來れるは同じく、丈高く、美はしく、力强き人々なりけるが、六人の人彼等に岩の上に塔を建てよと命ず。塔を建てんとて來れる其等の人々門の周圍を諸方に駈け廻りし時、其響大なりき。門の周圍に立てる處女等其等の人々より何物をか受くるかの如く、其の手を擴げたり。六人の人、石に命じて淵より上りて塔の建物に行けと曰ひぬ。而して切り出されたるにてあらざる十の輝く眞四角の石其處より上りぬ。六人の人處女等を呼びて、

建物に用ゐらるゝ凡ての石を運び、門を通りて、これを塔を建てんとしつゝある人々に與へよと命じぬ。處女等淵より上りし最初の十の石を積み重ねて恰かも一箇の石の如くに運びぬ。

四 彼等門の周圍に共に立ちし時、力强げに見る處女等これを運びぬ。或者は屈みて石の角を捉へ、又或者は屈みて石の側面を捉へぬ。かく彼等凡ての石を運びぬ。彼等これを其命ぜられし如く門を通りて運び、塔のために働く人々に與へたり。彼等石を取りて建築を進めぬ。さて塔は大なる岩の上に、門より高く建てられぬ。其等の十の石は塔の建物の基礎として据へられたり。岩と門とは塔全體の後に、淵より他の二十の石上り來れり。此等も處女等に由りて前の如く運ばれ、塔の建物に當てられたり。此の後更に三十五上りしが、此等も同じく塔にあてがはれぬ。此等の後又四十の石上り來りしが、これも亦塔の建物に投げ入れられぬ。〔塔の礎は四列ありき。〕石、淵より上ることを止めたる時、塔の建築も亦少時止められたり。六人の人又た群衆に塔の建物のため山より石を運べと命じぬ。かくて石は種々なる色の山より運ばれ、人々に由りて切られ、處女等に與へられぬ。處女等はこれを門を通りて運び、塔の建物のために渡しぬ。種々なる色の石、塔に置かれたる時、其等は皆等しく白くなり、その異れる特色を失ひぬ。建物のために人々の持ち來れる石の或ものは光輝を發せず、其のまゝにて其置かれた

る場所に殘れり。そは此等は處女等に由りて門を通りて運ばれざりしが故なり。さればこの石は、他の石と共に塔の建物に用ゐらるゝにふさはしからざりき。六人の人此等の建物からぬ石を見て、これを持ち去りて、これを取り來れる場所に置けと命じたり。『かくて其等の石一つづゝ取り去られて外に投げられぬ』。彼等石を持ち來りし人々にいひぬ、何の石をも運ぶ勿れ。處女等門を通りてこれを運び、これを建物に付(わた)すやう、其れを塔の傍に置け。此等は處女等の手に依り門を通りて運ばるゝにあらずば、其色を變へられず。されば目的(めあて)なき働きをなす勿れ。』

五 其日建築終りしも、塔は未だ完成せられざりき。そは附屬の建物增築せらるために建築に小憩みありたればなり。六人の人建築者等に皆少く離れて休むことを命じたれども、處女等には塔を去ることを命ぜざりき。處女等は塔を守るために殘されし如くに見えたり。皆退きて休みたる後、我れ牧者に曰ふ『塔の建築終らざりしは何のためぞ。』彼れ答ふ『塔は、其主來りて、石の中に朽ちたるあらばこれを換へんがため、建物を檢査する迄は終らず。そは塔は彼れの御心に從ひて建てられたればなり。』我いふ『君よ、我は此塔の建築の意の何なるかを知らんことを願ふ。又岩とそのまゝ砑磨(きりみが)かずして塔に用ゐられたる石は何なるか。

如何なれば十の石は初め基礎に据へられ、次ぎに二十、次ぎに三十五、次ぎに四十の石置かれたるや。又建物に行きしも取り去られ己が場所に返されたる石についても我れ知らんことを願ふ。君よ、凡て此等のことにつきて我心を安ぜしめ、これを我に説明し給へ。』彼答へぬ『若し汝、些々たる事を穿鑿せずば、汝は凡ての事を知らんこと能はず。そは數日の後〔我等こゝに來るべし。而して汝は此塔に起る他の事を見て凡ての比喩を明かに知らん。』數日の後ち」我等、さきに坐したりし所に來りしに、彼れ我に曰ふ『我等塔に往かん。そは塔の主人其れを檢べんがため來り給へばなり。』我等塔に來りしに、彼等は彼れ塔を檢べんがため來らざりき。牧者處女等に、或は塔の主人既に來りしかを問ひしに、彼等は彼れ塔を檢べんがため今將に來らんとすと答へぬ。

六 而して看よ、我れ、多くの人々列をなして來り、其中央に塔の如く、丈高き人の居るを見たり。彼の建築のために働きし六人の人彼と共にあり、多くの他の貴き人々も其周圍に居りぬ。塔を守り居たりし處女等前に走り出て彼に接吻し、彼に近く塔の周圍を歩み初めぬ。彼の人、各の石に別々に觸れ、意して建物を檢べたり。杖を手に持ち建物の各の石を三度打ちぬ。彼れ之を打ちしに、或は煤の如く黒くなり、或ものは皸を生じ、或は腐敗したるかの如くなり、或ものは黒くもなく、或は粗くして他の石と合はず、或ものは多くの汚點をもてり。此

等は建物に見出されたる朽ちたる石の種類なり。彼は、此等をすべて塔より取りて外に捨て、他の石を持ち來りて其代りに置けと命じたり。〔建築者等は、何處の山より取り來りて其所に置くを欲するかを彼に問ひぬ。〕然るに彼は山より取り來れと命じぬ。〔附近の或る野より持ち來れと命じぬ。〕かくて野を堀りしに輝く眞四角の石及び若干の圓形の石出でたり。其野にある凡ての石持ち來られ、處女等門を通りて之を運びぬ。而して眞四角の石は割られて、其等の取り除かれたる場所に置かれたれど、圓き石は建物には置かれざりき。そは此等は割り難くして、易く鑿を受けざればなり。されど此等は大なる輝あれば、割られて建物に用ゐんための準備の如く、塔の外に置かれたり。

七

此等の事を終りて後、全塔の主なる榮光の人、牧者を彼の許に招き、建物より却けられて塔の外に置かれたる凡ての石を彼に付していふ『意して凡て此等の石を潔め、他の石と合ふが如きを建物のために取り置き、合はざるをば塔の外に捨てよ。』〔彼は此等の命令を牧者に與へて〕、共に來りし人々と共に、〔塔より去りぬ。〕處女等は塔の周圍に立ちてこれを守りぬ。我れ牧、汝塔の建物に歸り得るか、』彼れ我に答へて曰ふ『汝は此等の石を見るか。』と。『我れこれを見る、君よ。』と我答へしに、彼曰ふ『此等の石の多くを我れ割り

て塔に置かん、其等は他の石と合ふべし。』我曰ふ『如何にして君よ、片々に割られたる其等の石は其同じ場所を滿たし得るか。』彼答へぬ『小さきは建物の中央に投げ入れられ、大なるは外側に置かれんに、其等は共に之を支持すべし。』此等のことをいひ終りて彼れ我に曰ふ、『我等往き、二日の後再び來りて、此等の石を潔め、これを建物に入れん。塔の周圍の凡ての物潔められざるべからず。そは主人不意に來り、塔の周圍の汚きを見て喜ばず、ために此等の石、塔の建物に歸るを得ずなり、我も亦主人に對して怠慢なりしと見られざらんためなり。』二日の後我等塔に來りしに彼れ我に曰ふ『我等凡ての石を檢べ、建物に歸り得ゃやを確かめん。』我曰ふ『君よ、我等これを檢べん。』

八 檢べ初めて我等先づ黑き石を檢べぬ。其等は建物より去られたる儘にてありければ、牧者命じて、これを塔の外に移さしめ、離して置かしめたり。次に彼れ其等の腐敗せる如きを檢べぬ。彼れ其多くを取りて削り、處女(おとめ)等に命じてこれを取り建物に入れしむ。處女等これを取りあげて塔の建物の中央に置けり。其殘りをば、彼れ命じて黑き石の側に橫へしむ。そは其等も黑かりければなり。次に彼れ罅(ひび)あるを檢べ、其多くを割り、命じて處女等にこれを建物に運ばしめたり。其等は他のものよりも完かりければ外側に置かれぬ。されど殘りは罅多くして割るを得ざれば、

このために塔の建物より却けられぬ。次に彼れ短かくなりたる石を檢べたるに、其中の多くは黒く、或ものは大なる破片なりき。此等をも彼れ却けられたると共に置けと命じたり。されど殘りをば命じて潔め割りたる後塔の建物の中央に接ぎ合はせ置けりき。處女等これを取りあげ塔の建物の中央に置かしむ。處女等これを取りあげ塔の建物の中央に接ぎ合はせ置けりき。そは其等は稍弱かりければなり。次に彼れ半ば白く半ば黒きを檢べしが、其多くは黒くなりてあり。彼れ此等を却けられたると共に置けと命じぬ。殘りは悉く處女等に由りて取り去られたり。そは其等は白かりければなり。其等も外側に置かれぬ。そは此等も完くして、中央に置かれたる石を支ふるに適したればなり。その何處も短かくあらざりき。次に彼れ粗くして固きを檢べたるに、其うちの少數は甚だ固くして割ること能はざりし故却けられぬ。されど殘りは割られ、處女等に運ばれて塔の建物の中央に接ぎ合はせられたり。そは此等は稍弱かりければなり。次に彼れ汚點あるを檢べしが、其うちの少數は、黒かりければ他の石と共に投げ捨てられたれど、多くは輝きてありければ處女等に由りて建物に接ぎ合はせられたり。さわど其等は強かりければ外側に置かれたり。

九 次に彼れ短かくなりたる石を檢べたるに、其中の多くは黒く、或ものは大なる破片なりき。此等をも彼れ却けられたると共に置けと命じたり。されど殘りをば命じて潔め割りたる後塔の建物の中央に接ぎ合はせ置けりき。處女等これを取りあげ塔の建物の中央に置かしむ。處女等これを取りあげ塔の建物の中央に接ぎ合はせ置けりき。そは其等は稍弱かりければなり。次に彼れ半ば白く半ば黒きを檢べしが、其多くは黒くなりてあり。彼れ此等を却けられたると共に置けと命じぬ。殘りは悉く處女等に由りて取り去られたり。そは其等は白かりければなり。其等も外側に置かれぬ。そは此等も完くして、中央に置かれたる石を支ふるに適したればなり。その何處も短かくあらざりき。次に彼れ粗くして固きを檢べたるに、其うちの少數は甚だ固くして割ること能はざりし故却けられぬ。されど殘りは割られ、處女等に運ばれて塔の建物の中央に接ぎ合はせられたり。そは此等は稍弱かりければなり。次に彼れ汚點あるを檢べしが、其うちの少數は、黒かりければ他の石と共に投げ捨てられたれど、多くは輝きてありければ處女等に由りて建物に接ぎ合はせられたり。さわど其等は強かりければ外側に置かれたり。

「如何にして我これを知らんや君よ、汝はこれについて何の企てをも持ち給はぬか。君よ、我は

かゝる工に慣れず、いかにして石工たるべきかをいひ得ざるなり。』彼曰ふ『汝は其等の甚だ圓きを見ざるか。もし我これを眞四角になさんとせば、其大部分を切り取らざるべからず。其等の幾分は是非とも用ゐらるべきなり。』我曰ふ『さらば若し其必要あらば何故汝は自らを苦ましむるか。何故直ちに汝の好むものを建物のために選び、之を其れに接ぎ合はせざるか。』於是彼れ其等の中の大なるものを選び、輝けるを選び、其を割りて、處女等に運ばしめ、これを建物の外側に接ぎ合はせぬ。かくて殘されたる餘りの石は運び去られ、其取り出されし元の野に置かられぬ。されど其等は却けられざりき。彼いふ『これ塔の附屬の少の建物殘り居ればなり。其等は皆甚だ輝きてあれば、塔の主人これを悉く塔の建物に用ゐんことを願ふ。』其時、いと美はしき容姿にて、黒衣を纏ひ、髪を亂したる十二人の婦呼び出されぬ。此等の婦我れには恐しく見えたり。されど牧者彼等に命じて、建物より却けられたる石を取りあげ、其持ち來られたる元の山にこれを運び去らしむ。彼等は皆喜ばしげに、石を悪く運びて、これを其取り出されたる場所に置きぬ。凡ての石移されて塔の周圍にはもはや一つも殘らずなりたる後、彼曰ひけるは『いざ我等住きて、塔を巡り、何の缺點もなきかを見ん。』と。されば我れ彼と共に塔の周圍に往きぬ。塔の美はしく建てられたるを見るに、全く接合せなき一つの石にて造られたら

ん如くにて、我れこれに見惚るゝ程に築かれたればなり。而して其石は岩より切り取られしが如く、我れには一本石の如くに見えたりき。

一〇　我れ彼と共に歩みし時、かくも多くの優れたるとを見たればは、喜びに満たされぬ。牧者我に曰ふ『往きて、沸化(わか)されぬ石灰と細き燒粘土を持ち來れ。我れ、取られて建物に投げ入れられたる石の形を直さん。塔のまはりのもの皆滑かにてあるべきなり。』我れ彼の命ぜし如く其を彼の許に持ち來りしに、彼曰ふ『我を助けよ。さらば此業直ちに終らんと。』かくて彼れ建物に返されたる石の形を整へ、塔の周圍を掃き潔めよと命じたり。處女等箒を取りて其處を掃除し、塵を塔の外に取り去りて水撒きければ、塔の周圍の地、心地よくいと美はしくなれり。牧者我に曰ふ『凡てのもの潔められたれば、塔の主來りて之を檢ぶるとも、我等には何の過失なかるべし。』かくいひて彼れ其處を去らんとしたり。されど我れ、彼の佩嚢を捉へ、彼が我に示したるとを説明し給へと主に由りて彼に誓願せしに、彼いふ『我は少時休むの要あり。休みて後汝にすべての事を説明すべければ、我が歸る迄此處に我れを待ちて居れ。』我彼にいふ『君よ、我れ一人にて此處に何をなし得んや。』彼いふ『汝は一人にあらず、此等の處女(おとめ)等汝と共にあり。』我答ふ『然らば我を彼等に付し給へ。』牧者彼等を己が許に呼びて、『我れ彼を汝等に我が來る迄托す。』といひて去りぬ。我れ

處女と共に在りしに、彼等は寧ろ樂しげにて、我に親切なりき。殊に其中の最も築光ある四人然り。

一一　處女等我に曰ふ、『牧者今日は此處に來らず。』と。『然らば我れ何をなすべきか。』と曰ひしに、彼等答ふ『彼れの來る迄彼れを待て。彼れ來らば汝と語らん。若し彼れ來らずば、汝は我等と共に彼れの來る迄こゝに止まれ。』我れ彼等に曰ふ『我れ晩くまで彼れを待たん。若し彼れ來ずば家に往きて、朝早くこゝに歸り來べし。』彼等答へて我に曰ふ『汝は我等に托されたれば、汝は我等を離れて往くを得ず。』我曰ふ『然らば我は何處に止まるべきか。』彼等答へぬ『汝は夫の如く我等と寢ぬべし。そは汝は我等の兄弟にして、將來我等は汝と共に住まはん。我等はいたく汝を愛せばなり。』されど我れ彼等と共に止まるを恥ぢたり。然るに彼等の中首なるが如きもの、我に接吻し抱擁したり。〔彼が我を抱けるを見て他のものも亦た我に接吻し、〕且つ彼等我を塔の周圍につれ行きて我れと遊び戲れ初めぬ。而して我れも青年の如く若返りて、彼等と共に遊び戲れ初めぬ。彼等の或者は踊り、或者は舞ひ、又或者は歌ひぬ。我は默して彼等と共に塔の周圍を步み、彼等と共に樂めり。晩くなりければ我れ家に往かんことを欲せしかど、彼等これを許さず、我れを引き止めぬ。されば我れ夜の間彼等と共に止まりて、塔のほとりに眠りぬ。處女等其麻の上衣を地に布きて、我を彼等の中間に横はらしめ、唯祈る外何事をもなさゞりき。

我も間斷なく、彼等に劣らず共に祈りぬ。我かく祈りたれば處女等いたく喜びぬ。我れ處女等と共に翌日の第二時迄其處に止まれり。其時牧者歸りて處女等にいふ『汝等彼に何も恥を與へざりしや。』彼等『彼に問へ。』といひければ、我れ彼に曰ふ『君よ、我れ彼等と共に在るを喜びぬ。』『汝は何を食物とせしか。』と彼れ問ひければ、我答へぬ『我は終夜主の聖語を食物とせり。』彼曰ふ『彼等は汝をよく饗應せしか。』と。我れ『然り、君よ。』と答へぬ。彼曰ふ『何を汝は第一に聽かんと願ふか。』我曰ふ『我は汝の示せし所を初めより順序を追うて聽かんことを願ふ。君よ。願くば我が汝に問ふ如く汝も我に説明を與へ給へ。』彼曰ふ『汝の願ふ如く、我れ汝に説明し、何事をも全く汝に隱さゞるべし。』

一二

我いふ『君よ、先づ第一これを説明し給へ。岩と門の意は何なるか。』彼答ふ『此の岩も此の門も共に神の子なり。』我れ『如何なれば君よ、岩は古く門は新しきか。』と問ひしに、彼答ふ『聽け、悟れ、嗚呼愚かなる人よ。神の子はすべての被造物よりも古く、創造の大業に於て父の相談役にて在まし給ひしなり。この故に彼れは古きなり。』我曰ふ『如何なれば門は新しきか。』彼答ふ『そは彼れ、御業の完成に於ける終末の日に現はれ給ひたればなり。此の故に門は新し。汝は見たり、門を通じて來れる石は塔

の建物に用ゐられ、これを通らざりしはその元の場所に投げられたるを。』『我れ見たり。』と答へしに、彼曰ふ『此の如く、其子の御名を受くるにあらざれば、何人も神の國に入らざるべし。そは若し汝とある町に入らんと思ふに、其町は壁に圍まれて一つの門あるのみならば、汝は其門を通らずして其町に入り得るか。』我いふ『いかで君よ、他の道あるべき。』彼曰ふ『汝其門を通るにあらずば其町に入り得ざる如く、此の如く、人も主の愛する子の御名に由るにあらざれば神の國に入る能はざるなり。』彼れ又『汝は塔を建てたる群衆を見しか。』と問ひければ、『我これを見たり、君よ。』と曰ひしに、彼曰ふ『此等は皆榮光の御使等にして、主は彼等に取り捲かれて在まし給ふなり。門は子なり。此は主へ到る唯一の入口なり。さればば何人も子によらざれば外の道によりては、主の中に入るを得ざるなり。』彼更に曰ふ『汝は六人の人と、塔の周圍を歩みて、建物より石を却けし、其中央なる、丈高く榮光ある人を見しか。』『我これを見たり、君よ。』と、我答ふ。彼曰ふ『此榮光の人は神の子にして、彼の六人の榮光の御使は左右に彼れを支ふるものなり。此等の御使は主へ到る唯一の入口なり。さればば何人も子によらざれば外の道によりては、主の中に入るを得ざるなり。』彼更に曰ふ『汝は六人の人と、塔の周圍を歩みて、建物より石を却けし、其中央なる、丈高く榮光ある人を見しか。』『我これを見たり、君よ。』と、我答ふ。彼曰ふ『此榮光の人は神の子にして、彼の六人の榮光の御使は左右に彼れを支ふるものなり。此等の御使の一人も彼なくしては神に入る能はず。其御名を受けざる人は何人にても神の國に入り得ざるべし。』

一三　『然らば塔は何の意なるか。』と、我問ひしに、彼れ答ふ　『塔は教會なり。』我問ふ『此等の處女は何人なるか。』彼いふ『此等は聖なる諸の靈にして、彼等が其衣を着せしむるにあらずば

人々は神の國に入るを得ず。そは若し汝只其名を受くるのみにて、彼等は汝にとりて何の益なきなり。此等の處女は神の子の諸(もろ〳〵)の力なり。若し汝其御名のみにて、其力をもたざれば、汝が其の御名を負ふことも無益なるべし。』彼又いふ『汝の見し却けられたる石は其御名をもてども處女等が着せしむる衣を有せざりき。』と『君よ、其の衣は如何なる質なるか。』我れ問ひしに、彼答へぬ『彼等の名こそ彼等の衣なれ。神の子の御名を負ふ者は何人にても、彼等の處女等の名をもてばなり。』彼又曰ふ『汝が見たる此等の石は彼等の力を着たるなり。そは神の子は此等の處女等の名をもつべきなり。』其等の石は彼等の力を着たるなり。塔は岩よりの一つ石にて造られたるかの如く汝の見たるは此の故なり。かくの如く子を通ほして主を信じ、此等の諸の靈を着たる人々は一つの靈、一つの體となり、彼等の衣の色も亦た皆一つなるべし。處女等の名を有つかゝる人々の住居は塔の中にあるべし。』我問ふ『君よ、此等の却けられたる石は何故に却けられたるか。』此等は門を通り行き、處女等の手に由りて塔の建物に置かれたり。』彼答ふ『されば、却けられたる石のことをも聽け。此等は凡て神の御名を受け、又處女等の力をも受けたり。されば此等の諸靈を受けて、彼等は強くなり、神の僕等とともに在りき。而して彼等は皆一つ靈、一つ體、一つ衣を持てり。そは彼等は同じ心にて、

義を行ひたればなり。されど幾時をも經ざるに、彼等は汝が見たる彼の黒衣を着、肩を露し、其髪を亂したる、美はしき容姿の婦等に説き伏せられぬ。此等の婦を見て彼等はこれを己がものとせんと思ひ、處女等の力を脱ぎ捨てゝ、彼等の衣をもて己が身を蔽ひぬ。されば彼等は神の家より却けられて、此等の婦等に付されたり。されど此等の婦の美に欺かれざりし人々は神の家に止まりぬ。これ却けられたる人々についての説明なり。』

一四　我れ曰ふ『されど君よ、若し此等の人々悔改めて、其等の婦に對するその情慾を去り、再び處女等に歸りて其力と其業に歩まば、彼等は神の家に入らざるか。』彼れ答ふ『若し彼等此等の婦の業を去りて、再び處女等の力を着、其わざに歩みなば、彼等入るべし。此ために建築に小休憩ありたるなり。即ち彼等もし悔改めなば塔の建物に行き得んが爲なり。されどもし彼等悔改めざれば、他の人彼等の場所に來り、彼等は終には外に投げ出さるべし。凡て此等の事の爲に我れ主に感謝す。そは主その御名を呼ぶ人々の上に憐みを垂れ、主に逆ひて罪を犯せし我等に改心の御使を送りて我等の靈を新たにし、又我等殆ど滅されて生命の望みなかりし時、我等を新しき生命に歸らしめ給ひたればなり。』我又曰ふ『君よ、今我に何故塔は地上に建てられずして、岩の上に又門の上に建てられたるかを示し給へ。』彼『汝は猶愚かにして悟りなきか。』といひければ、我いひぬ『君

よ、我あらゆる事を問はざるを得ず。そは我れ全くこれを悟る能はざればなり。凡て此等の事は大にして榮光あり、人にとりては理解困難なり。』彼曰ふ『聽け、神の子の御名は大にして包容され ず、却て全世界を支ふ。さればもし神の子に由りてすべての被造物支へられ居らば、主に召されて 神の子の御名を負ひ、其誡律に歩む人々につきて、汝何を考ふるか。汝は主が如何なる種類の人々 を支へ給ふかを見るか。即ち其全心をもて主の御名を負ふ人々なり。されば主は自ら彼等にとり ての基礎となり、喜びを以て彼等を支へ給ふ。そは彼等其御名を負ふことを恥ぢざればなり。』

一五 我曰ふ『君よ、此等の處女及び黒衣を着たる其等の婦の名を我れに示し給へ。』彼曰ふ 『隅に立てる強き處女等の名を聽け。第一は信仰、第二は自制、第三は力、第四は忍耐なり。而 して此等のものゝ中間に立てる他の者等は次の如き名を持つ。即ち單純、信實、純潔、快活、眞 理、理解、和合、愛なり。此等の名と共に神の子の御名を保つものは神の國に入るを得ん。』彼又 いふ『黒衣を着たる婦等の名をも聽け。此等の四人は他のものらよりも強し、第一は不信仰、第 二は不純潔、第三は不從順、第四は虚僞なり。而してこれに續くものは悲哀、邪惡、淫亂、憤怒、 迂愚、虚言、讒謗、憎惡なり。此等の名をもつ神の僕等は或は神の國を見んも、これに入ること 能はざるべし。』我曰ふ『君よ、淵より取り出され、建物に接合せられたる石は何なるか。』彼いふ

『最初の十、即ち基礎に置かれたるは義人の第一代にして、次の二十は其第二代なり。三十五は神の豫言者及び役者（えきしゃ）、四十は使徒及び神の子を宣傳する教師なり。』　我曰ふ『然らば何故處女等は門を通りて此等の石を運び塔の建物のために渡したるか。』彼答ふ『彼等は此等の諸靈を保ちたる最初の人々にして、靈は人より又人は靈より、互に離れず、靈は彼等の眠りに陷る迄彼等と共に在りたればなり。彼等もし此等の諸靈を持たざりしならば此塔の建物には用ゐられざりしならん。』

一六　我れ『君よ、更に少しく我れに說明を與へ給へ。』と曰ひしに、彼れ問ふて曰ふ『汝何を求むるか。』我れ答ふ『いかなれば君よ、此等の石は淵より上り、此等の靈をもちたる後ち塔の建築に用ゐられたるか。』彼れ曰ふ『此等は生かさんがためには水を通ほして上る必要ありたればなり。彼等其生活より死せるものを取り去るにあらざれば、神の國に入ることを得ず。されば其等の眠りに陷りたる人々も神の子の印を受けたり。そは人神の子の御名を負ふ前は死せるなれど、其印を受くる時は死せるものを去りて、生を得。印は水なり、死者水に入り、生きて上るべし。故に彼等に此印宣傳せられ、彼等は神の國に入り得んがためにこれを用ゐたり。』我問ふ『いかなれば君よ、四十の石は既に印を受けたるに、彼等と共に淵より上りたるか。』彼曰ふ『此等の使徒及び神の子の御名を宣傳する教師等は、神の子の力と信仰に在りて眠りたる後、眠りたる人々に

之を宣傳したるのみならず、彼等にも自ら宣傳の印を與へたればなり。されど此等の生きて下りて再び上りたるなり。〔さきに眠りに陷りたる人々は死して下り、生きて再び上りたり。〕されかされ、神の子の御名を知らしめられぬ。此故に彼等は其等のものと共に用ゐられたり。そは彼等は義と大なる純潔にありて眠りたれども、唯此印を受けずして彼等と共に上り、塔の建物に接合せられ、鑿を受けざりしが故なり。かく汝は此等の説明をも得たり。』

一七 『君よ、我れ悟れり。』と答へて、我れ更に曰ひぬ『さて君よ、山について我に説明を與へ給へ。いかなれば全世界に住む十二の支族は全世界に住む十二の國々なり。されば神の子は使徒等によりて彼等に宣傳せられ給へり。』我曰ふ『されど何故、山は様々の形にて、或ものは一つの形、又或ものは他の形を持つや、君よ、我れに説明を與へ給へ。』彼答ふ『聽け、全世界に住む此等の十二の支族は十二の國々なり。彼等は皆智慧と悟りを異にす。されば汝の見たる山の種類多きが如く、此等の國々の間に心と悟りの相違あり。我れ汝に各の行ひを説き明すべし。』我れいふ『君よ、先づこれを説き明し給へ。いかなれば山は斯く異り居るに其石建築物に置かれたる時、一つ色となり、淵より上りたる其等の如く輝きたるか。』彼曰ふ『天が下

に住む凡ての國人、神の〔子の〕御名を聽き、これを信ずるに由りて召されたればなり。
を受けて彼等一つ悟りと一つ心を持ちぬ。又其信仰一つとなり、御名と共に
處女等の靈をも持ちぬ。此故に塔の建物一つ色となり太陽の如く輝きしなり。されど彼等同じ所
に入り、同じ體となりし後、彼等の或ものは自らを汚して、義の民族より斷たれ、前と同じきもの、
若くは其より惡しきものとなりぬ。』

一八 我れ曰ふ『如何にして、君よ、彼等は神を知りたる後ち更に惡しくなりたるか。』彼れ答ふ
『神を知らず、惡を行ふ者は、其惡のために何かの懲罰を受くるも、神を知りし者は再び惡をな
さず、善をなすべきに、却つて惡をなさば、彼は神を知らざる者よりも更に大なる惡をなすと見えずや。 されば若し善をなすべきに神を知らずして惡をなす者は死に定められど、神を知りて惡をなさば、二重に懲罰を受けて永遠に死すべし。
されば、神の教會も此の如く潔められるべし。それは汝石の塔より却けられ、諸の惡靈に付され、又投
げ出されしを見たる如く、〔かく彼等も投げ出さるべし。而して〕其潔めの後、塔は一つの石より
成りたるかの如く、其處に潔められたる人々の一體あるべし。神の教會も、潔められて、惡をな
す者と僞善者と、褻瀆者と、逡巡者と、種々なる惡を行ふ者を却けたる後かくあるべし。此等のも

の皆投げ出されたる後、神の教會も一つ體、一つ心、一つ悟り、一つ信仰、一つ愛となるべし。其時神の子はいたく喜び、彼等の故に欣ぶべし。これ彼其潔められたる民を受けたればなり。』我れ曰ふ『君よ、此等のことはすべて大にして榮光あり。君よ、更に各の山の力と行ひをも我れに説明し給へ。』これ主に頼るすべての人、其れを聽きて、其大にて驚くべき榮光あるは御名を崇めんがためなり。』彼曰ふ『聽け、山の種類と、十二の國々のことを。』

一九 『第一の黒き山より出でたるはかゝる信者なり。即ち主に對する背教者と褻瀆者、及び神の僕を裏切る者なり。此等に對しては改心の機會なく、却つて死其前にあり。そは彼等の族は不法なればなり。第二の禿げたる山より出でたるはかゝる信者なり。即ち偽善者と邪惡を教ゆる者にして、前の人々の如く何等義の果を有たず。そは彼等の山は果なきが如く、其中に眞理の果なし。もし彼等速かに悔改めなば、改心は彼等のものとなるべし。されどもしこれをなすに遲からば、彼等は前の人々と共に死ぬべし。』我れ曰ふ『君よ、彼等の行ひ殆ど同じきに、何故に此等の人々は改心を得、前のものはこれを得ざるか。』彼いふ『彼等は其主を瀆さず、又神の僕等も裏切らざりしが故に、改心をもちしなり。されど財産の慾望の故に彼等は僞善者となり、各罪人の慾望に從ひて教へぬ。されどかゝる人々は

或る罰を受けん。而して改心は彼等の前にあり。そは彼等は褻瀆者にも反逆者にもあらざりしが故なり。

二〇 『第三の、荊蕀（いばら）と薊（あざみ）ある山より出でたるは、かゝる 信者なり。彼等の或者は富み、或者は多くの俗務に沒頭す。薊は富める人々にて、荊蕀は多くの俗務に沒頭したる人々なり。されば其等の〔あらゆる種類の俗務に沒頭せる人々は〕神の僕等と交らず、其商業の取引に妨げられて、さまよひ歩く。又富める人々は何ものかを求められんことを恐れて、神の僕等と交ることを喜ばず。さればかゝる人々は神の國に入ること難かるべし。素足（すあし）にて薊の中を歩むことの好ましからぬ如く、かゝる人々にとりては神の國に入ること難からん。されど凡てかゝる人々に取りて、速かに、改心の機會來るべし。これ彼等以前になさゞりしことを今補ひて何等かの善をなさんためなり。〔されば〕もし彼等悔改めて何等かの善をなさば〕神に生くべし。されど若し彼等其行ひに止らば、彼等を死なしむる其等の婦に付さるべし。

二一 多くの草ありて、その草、上の方緑なれど根は枯れ、中に太陽に焦されたるが混じ居る第四の山より出でたるはかゝる信者なり。卽ち疑深き人々及び其唇に主をもてどもその心にはこれをもたざる人々なり。此故に彼等の基礎は枯れて何の力なく、彼等の行ひは死し居るに其語のみは生く。

かゝる人々は〔生きもせず又〕死にもせず。されば彼等は逡巡者に似たり。そは逡巡者は生きもせず死にもせざれば、枯れもせず綠にもあらぬなり。そは其葉太陽を見て萎るゝ如く、逡巡者も苦しき事を聽けば、主の御名を耻づるなり。されば此等も、もし速かに悔改めなば、〔猶生くるを得べし。若し悔改めずば〕、せず〕又死にもせず。されど彼等は既に其生命を取り去る婦等に付さる。

二二 第五の、綠の草はあれど高低ある山より出でたるはかゝる信者なり。ばれど、痴鈍にして頑固に、自分を樂ましめ、あらゆる事を知らんと欲すと雖も、全く何事をも知らざるなり。彼等頑固なるを以て、悟りは彼等を離れ、甚しき愚昧彼等の中に入れり。かくて彼等は自ら喜びて己れを知慧ある者とし、智なきにかゝはらず教師とならんとを欲す。されば此心の高ぶりの故に多くは自らを高めて空となりぬ。そは我意と自負は大なる惡魔なればなり。されば彼等の多くは却けられしが、或者は悔改めて信じ、悟りありて己が愚を知る其等の人々にも改心の機會あり。それは彼等は惡にあらず、むしろ愚かにして悟りなければなり。されば此等の人々もし悔改めなば神に生きん。されど彼等は、彼等の間に惡を行ひし婦等と共に其住居を持つべし。

二三　『第六の、罅隙（ひび）ありて之に萎れたる草ある山より出でたるはかゝる信者なり。小き罅隙あるは、互に人を讒謗し、其讒謗の故に信仰消えたるなり。されど彼等の多くは悔改めたり。他のものも我が誡律を聽く時悔改むべし。そは彼等の讒謗は小くして彼等は速かに悔改むべければなり。されど大なる罅隙あるは其讒謗執拗にして各に對する其怒りに復讐の念伴ふ。されば此等は塔の外に投げ出され、其建物より却けられぬ。さればかゝる人々は生くることと難かるべし。萬物を治め、其全被造物の上に權を持ち給ふ我等の主なる神、其罪を告白する人々に向ひては其惡を思はず却て慈悲を垂れ給ふに、いかなればとて、朽つべくして罪に滿つる者、人を亡ぼし若くは救ふを得るかの如く、彼に向ひて惡心を抱くや。悔悛の天使なる我れ汝等に告ぐ、汝等の中何人にてもかゝる考を持たば、これを取り去りて悔改めよ。もし汝等自ら此惡魔より潔めなば、主は汝等の前の罪を赦し給ふべし。されどもしこれをなさざれば汝等は彼に付（わた）されて死に到るべし。

二四　『第七の、草綠に生ひ繁り、全山肥えて、あらゆる家蓄と空の鳥此山の草を喰（は）むに、その喰まれたる草益々生ひ繁る山より出でたるはかゝる信者なり。即ち彼等は常に單純にて惡をなさず、祝福に滿ち、互に讒謗をなさず、神の僕等の故に常に大に喜び、此等の處女等の聖なる靈を着、凡ての人に憐みを垂れ、非難或は躊躇することなく自らの勞働により人を助くるなり。されば主

は彼等の單純と、その柔和を見て、彼等の手の勞働の中に彼等の數を增し、すべて其なす所により て彼等を惠み給へり。故に悔悛の天使なる我れ汝等に告ぐ。かゝる人とならんために努力せよ。 さらば汝等の裔は永遠に捨てられざるべし。主は汝等を試みて、汝等を我等の數に加へ給へり。 されば汝等の裔（すゑ）は皆神の子と共に住むべし。そは汝等は其靈を受けたればなり。

二五 『第八の、多くの泉ありて、神のすべての被造物其泉より飲みたる山より出でたるは、かゝる信者なり。卽ち彼等は使徒等と教師等にして、全世界に福音を宣傳し、嚴かに又潔らかに、主の御語を教へて、決して惡慾に陷らず、聖靈を受けたれば、常に義と眞理に歩みたり。されば かゝる人々は御使者等と共に中に入るべし。

二六 『第九の、荒れはてゝ、人を亡ぼす地に這（は）ふものと、猛き獸の住む山より出でたるは、かゝる信者なり。卽ち彼等は汚點をもつ教役者にして、其の務めを惡用して、寡婦と孤兒より生活費を掠め、其受けたる職務に由りて自分のために財產を造れり。さればもし彼等其同じ慾望の中に止まらば、死せるものにして、彼等に生命の望みなし。されどもし彼等悔改めて其務めを淸く成就しなば生くべし。又其腐敗せる如きは主を拒みて再び彼に歸らざる人々なり。されど枯れて荒れはてたるが如くなり、神の僕等と交らず、寂しき所に住みて己が靈魂を滅す。そは葡萄、園ひ

の中に殘されて等閑に附せらゝる時は惡しくなり、雜草に荒され、やがて野葡萄に變じ、其主に取りて何の用をもなさゝるものとなる如く、かゝる人々も荒き習慣の故に自らを棄て、其主にとりて用なきものとなる。されば此等の人々は、心より拒みたるにあらざれば、改心の機會を得べし。然れども何人にても若し心より拒みたりとせば、我れ彼の生くべきやを知らず。我は此現代に向ひて、何人にても拒みたる人の改心を得んがために之をいふにあらず。そは今其主を拒まんとする者にとりては救はるゝ見込なければなり。されど永き前に主を拒みたる人々は改心の見込あり。されば若し何人にても悔改めんとせば、塔の完成する前に、速かにこれをなすべし。然らざれば彼れ、婦等のために全く亡ぼし盡さん。又纏ある石は虛僞者及び讒謗者にして、汝が第九の山にて見たる猛獸もこれに同じ。そは猛き獸は其毒をもて人を滅ぼし殺すが如く、かゝる人の語も人を滅ぼし殺せばなり。されば此等の人は、其自らなせる行ひの故に信仰より斷たれたり。而して此他尙ほかゝる人若し悔改めなば救はるべし。されど彼も又た或者は悔ゐて救はれたり。而して此他尙ほかゝる人若し悔改めなば救はるべし。彼等もし悔改めざれば、其等の婦の故に亡ぶべし。

二七　『第十の、其影、羊を宿せる樹ある山より出でたるはかゝる信者なり。即ち來客を愛する者及び監督（エピスコポス）にして、彼等は外面（うはべ）のみならず、喜びて神の僕等をもてなす。此等の監督は其奉仕を

もて、決して寡婦及び貧しき人々を怠らず、常に聖く生活したり。されば此等はすべて主に由りて永久に守らるべし。此等のことをなす人々は神の前に崇めを受く。もし彼等神に仕へて終り迄殘らば、彼等の往くべき場所は既に御使と共にあるなり。

二八 『第十一の、果の滿ちたる、あらゆる種類の果もて裝はれたる樹ある山より出でたるはかゝる信者なり。卽ち彼等は神の子の名の故に其苦難を受け、其全心をもて喜びて苦難を受け、其生命を捨てたるなり。此等の樹は皆果を結び、或ものは他のものよりも美はしき果を結ぶや』と我れ曰ひしに、彼答へぬ『聽け、凡て一度主の名のために苦難を受けたる人々は神の前に崇めを受く。凡て此等の人々の罪は赦されぬ。彼等は神の子の名の故に苦難を受けたれば也。又何故に其の果は樣々の種類ありて、其或ものの優れたるかを聽け。權威の前に審べらるゝも拒まず、喜びて苦難を受けたる凡ての人。此等は神の前に大なる崇めを受け、其果優れたり。されど凡て怯ち恐れて疑ひに陷り、否認すべきか告白すべきかと、其心に惑ひつゝも苦難を受けたる人々は其果少し。そは僕は其主を否認することを得との考彼等の心に殘り、ために汝等神に對して死せざるやう注意せよ。其名のために苦難を受くる汝等、此考汝等の心に起りたり、此れ惡なり。これ主汝等を其名を負ふに足るに榮光を歸すべきなり。これ

ものと認め、凡て汝等の罪の醫され得るやうなし給ひたればなり。〔さればむしろ〕自らを幸福と考へ、もし汝等何人にても神のために苦難を受けなば、汝等大なる事をなしたりと思へ。主は汝等に生命を與へ給ひしに汝等はこれを悟らず。そは汝等過重の罪を負ひたればなり。されど汝等もし主の名の故に苦難を受けざりしならば、汝等は己が罪の故に主に對して死にたりしならん。此等の事を、我れ、否認せんか告白せんかと躊躇しつゝある汝等に告ぐ。汝等主を持つことを告白せよ。そは彼を拒みて獄に入れられざらんがためなり。若し異教人、其奴隷の一人其主人を拒む時、彼等を懲らしめなば、凡ての人の上に權威を持ち給ふ汝等の主は如何になし給ふと、汝等思ふや。汝等の心より此等の考を去れ。これ汝等いつまでも神に生きんがためなり。

二九 『第十二の、起らざる乳兒（ちのみご）の如く、又惡とは何なるかを知らず常に幼兒の如き有樣にある人々なり。白き山より出でたるは、かゝる信者なり。即ち彼等は其心に一つの惡念だもなく、何事にも神の誡律を汚さず、其全生涯を同じ心にて幼兒の如く送りたればなり。故に汝等のうち、すべて幼兒の如き有樣にありて、惡をなさゞる人々は、前に告げられたる凡ての人々に勝りて崇めを受くべし。そは凡て幼兒は神の前に崇めを受け、主と共に在る第一のものたるべければなり。されば己れより惡を去りて無垢となれる汝

等は幸福なるかな。汝等はすべての人よりも最初に神に生きん。』

彼れ山の比喩を終りたる後、我れ彼に曰ふ『君よ、今我れに、野より取り去られたる石、及び其圓きまゝ殘りし石について説明を與へ給へ。』

三〇　彼れ曰ふ『凡て此等についても聽け。野より取り出されて、其等の却けられたる石の代りに塔の建物に置かれたる石は此白き山の根なり。されば白き山よりも出でたる信者、すべて僞りなしと見られたる時、塔の主彼等を此山の根より塔の建物に移し出さるゝやう命じぬ。そは主もし此等の石、塔の建物に用ゐられなば、いつまでも輝き殘りて、其一つだに黒くならざるべきを知り給へばなり。『されど若し彼れ他の山々につきてかく定め給ひたらば、再び塔を訪れてこれを潔むる要あるべし。さて凡て信ずるもの、將に信ぜんとする者は白と見らる。彼等は共に同じ族のものなり。此は幸福なる族なり、そは無垢なればなり。汝、猶此等の圓き石について聽け。此等もすべて白き山より出でたり。何故其等は圓きかをも聽け。これ其富彼等を暗まして彼等を眞理に對して暗くしたればなり。されど彼等は決して神より離れざれば、彼等の口よりは何の惡しき言語も出でず、唯正義と德と眞理のみ出でたり。されば主、此等の人々の心を見、彼等は本

來善に生れ、善となり得べきを見て、彼等の富を切り取ることを命じたれど、全く是をせず、彼等が其殘りをもて何等かの善をなし得るやうにし給へり。彼等は神に生きん。そは彼等善き族に屬せばなり。されば彼等は鑿をもて少しく削られて塔の建物に置かれたるなり。

三一　『されど他の圓き石の塔の建物に用ゐられず、又印を受けざるは、あまりに圓きが故に舊の場所に戻されたるなり。現代はすべて此等のものと、其空しき富を切り取られざるべからず。然らば彼等神の國に合ふべし。主は此無心の族を祝福し給ひたれば彼等は必ず神の國に入るべきなり。されば此族の何人も亡びざるべし。假令彼等の或ものいと惡しき惡魔に試みられて罪を犯すとも、彼れ速かに其主に歸るべければなり。我れ、悔悛の天使なる我れ、汝等の何人にても幼兒の如く無垢なる人々をば幸福と見る。そは汝等のもてるものは善にして神の前に崇めを受くればなり。且つ我れ神の子の印を受けたる汝等凡てに告ぐ。單純を着よ、人の罪を思ふ勿れ、又惡に止まる勿れ。汝等の受けたる罪の苦き記憶を取り去れ。さらば汝等一つ靈に形つくらるゝを得ん。汝等其等の惡しき企てより汝等を醫し、これを去るべし。これ群羊の主來り給ふ時汝等を見て喜ばんがためなり。」若し彼れ、凡ての事正しくして汝等の何人も亡びざるを知らば喜ばん。されどもし彼れ此等の羊の一匹にても迷ひ出でたるを見ば、其牧羊者は禍なるかな。又若し牧羊者等

自ら迷ひ出でなば、其群について何の語ありて彼れに答へんや。或は彼等其群のために惱まされたりといはんか。彼等は信ぜられざるべし。そは牧羊者は其群のために惱むこと訝しければなり。彼はむしろ其虚言の故に罰を受けん。〔而して我れは、自ら牧羊者なれば、特に汝等のことをいひ立つる必要に迫られ居るなり。

三一―三二　『されば汝等塔の猶建てられつゝある時自らを醫せ。主は平和を愛する人々と共に住み給はん。そは彼れ平和を愛し給へばなり。されど爭ひを好みて全く惡しき人々よりは遠く離れ給ふ。されば汝等、汝等が受けたると同じ正しき靈を主に返へすべし。そは汝等も晒屋に新しき衣を托し、完きものにてこれを受け取らんとし居たるに、晒屋汝等に裂けたる衣を返さば、汝等これを受け取るべきか。むしろ怒り、彼を辱しめていはずや「我れ汝に完き衣を托したり。何故に汝はこれを裂きて用なきものと爲せしぞ。」汝の造れる裂目のために此は無用になりたるにあらずや。」汝等はすべて己が衣に見出し得る裂目についてはかく晒屋にいはずや。されどもし汝等、己が衣の故に悲み、其を完きものとして受けざりしをつぶやかば、主は汝等に完き靈を與へ給ひしに、主は汝等に何をなし給ふと考ふるや。こは汝等に由りて腐らしめられ、不用となりたればな

り。されば主は其靈について汝等の行ひの故に、同じく汝等を死に付さざらんや。』我れ曰ふ、『凡て人の罪の記憶する人々には、主は慥かに同じ取扱ひをなし給ふべし。』彼曰ひけるは、『主の慈悲を足の下に蹂躙することなく、むしろ主を尊べ、そは主は汝等の罪に對して、汝等の如くならず、かくも忍び給へばなり。故に悔改めよ。これ汝等に取りて益なればなり。』

三三　『凡て此等上記のことは、我れ、悔悛の天使なる牧者が神の僕等に向ひて示し語るなり。されば汝等、もし信じて我が言を聽き、此等に歩みて汝等の道を繕ひなば、汝等は生くるを得べし。されどもし汝等、惡と人の罪の記憶に止まらば、かゝる罪人は神に生くるを得ざるべし。凡て此等の我が言はんと欲せし言を我れ汝等に告げたりと。』

牧者我れに向ひて『汝は凡ての事を我れに尋ねたるか』といひしかば、我れ『然り、君よ。』と答へたるに、彼曰ひぬ『何故汝は建物に置かれたる石の形について、何のために我等形の異れるを用ゐしかを我れに說き明すやう求めざりしか。』『君よ、我れ忘れたるなり。』と答へしに、彼曰ふ『されば此のことをも聽け。此等は今我が誡律を聽き、其全心をもて悔改めたる人々なり。主彼等の改心の善にして純に、且つ彼等これに止まり得ることを見し時、彼彼等の前の罪の消滅し去るやう命じ給ひぬ。此等の形は其諸の罪にして、外に表はれざるやう平かにせられたり。』

比喩第十

一　きけるが、牧者は彼の右に立ちぬ。其時、彼れ我を呼びてかくいへり『我れ汝と汝の家を牧者に付
れば若し汝凡ての煩雑と凡ての虐待より守られて、すべての善き業と言に達し、凡ての義の徳を
持たんと願はゞ、我が汝に與へたる此等の誡律に歩め。さらば汝は凡ての悪を服せしむるを得ん。
そはもし汝此等の誡律を守らば、此世のあらゆる慾望と快樂汝に服せしめられ、成功汝のあらゆ
る善き業に伴ふべし。汝は自ら彼の經驗と愼重をとりて、凡ての人に、彼は神の御前に大なる譽
と威嚴を持ち、大なる力をもてる司にして、其職の大なることを告げよ。全世界のうちにて改心
の力は彼にのみ授けられたり。彼れは汝に力ありと見ゆるか。然るに汝は彼の經驗と彼が汝に
向ひて表はしたる愼重とを蔑しつゝあり。』

二　我れ彼にいひぬ『彼に問ひ給へ、君よ、彼の我が家に入りし時より、我れ果して何かふさはし
からぬ事をなせしか、又は何かについて彼を怒らせしかを。』彼答ふ『我れも汝が何もふさはしか

らぬ事をなさゝりしこと、又爲さゝるべきことを知れども、汝が忍び耐へんがため、此等の語をいふなり。そは彼れ汝について我に善き報告をなしたり。汝は此等の人々にいふべし。これ彼等、悔改めたる者も、悔改めんとする者も、共に汝と同じ心を持ち、彼れ又彼等についても善き報告をなし、我又これを主に告げ得んがためなり。』我れいふ『君よ、我は神の大なる業をあらゆる人々に知らしめたり。我れは凡てこれを愛する人々が、前には罪を犯したるも、此等の語を聽きて悔改め、再び生命を受けんことを望む。』彼曰ふ『さらば此職を續けてこれをなし終へよ。凡て其誡律に從ふ人々は生命を得、主の前に大なる崇めを受くべし。されど彼は自らの譽を神の前に受くべし。されど其誡律を守らざる人々は其生命より逃れて、彼を蔑すべし。されば凡て彼等はすべて自らの血についての責を負はん。

三

『且つ我汝に、汝と共に住まんがために此等の處女を送りぬ。我れ彼等の汝に向ひて愼みありしを見たり。されば汝は彼等を助手とせよ。これ汝尚ほよく彼の誡律を守らんがためなり。そは此等の誡律は其等の處女なくしては守ることを得ざればなり。且つ我れ彼等の喜びて汝と共に住むを見る。されど我れは、汝の家より決して離れざるやう彼等に敎ふべし。唯汝は、彼等が潔

き住居に宿るを喜ぶ故、汝の家を潔く保つべし。そは彼等は純にして潔く、
前に凡ての力を致せばなり。されば若し彼等、汝の家の潔きを見ば汝と共に止まるべけれど、若
し何等の汚れ、少しにても其處に生ぜば、彼等は直ちに汝の家を去るべし。そは此等の處女は少
しの汚れにても好まざればなり。』我れ彼れにいふ『君よ、我、彼等が常に好みて我が家に住まん
がため彼等を喜ばせんと欲す。』汝が我を托し給ひたる彼は我に向ひて何のつぶやきをもせざり
し如く、彼等もなさゞるべし。』彼牧者に曰ふ『我れ、此神の僕は、生きんこと、又此等の誡律を
守らんこと、及び此等の處女を潔き住居に置かんことを願ふを見る。』彼此等の語を語りし時、再
び我を牧者に付し、且つ其等の處女等を呼びて曰ひぬ『我汝等が彼の家に住むことを好むを見る
が故に、我れ彼と彼の家を汝等に委ねて、汝等が決して其處を去らざるやう汝等に求む。』處女等
は喜びて之等の語を聽けり。

四

かくて天使我にいふ『汝自ら男らしく此奉仕を盡して、凡ての人に神の大なる業を知らし
めよ。さらば汝は此職に惠みを得べし。されば何人にても此等の誡律に歩まば生命を得、其生活
幸福なるべし。されど何人にてもこれを等閑にしなば生命を得ず、其生活不幸なるべし。凡て正
き行ひをなし得る人々に、善行を止めざるやうに告げよ。そは善をなすは彼等に益なればなり。

我曰ふ凡ての人は不利益より救はる要あり。そは乏しきに居る人も、その日々の生活の不利益に惱む人も、共に大なる苦痛と必要をもてばなり。そはこの種の不利益に惱まさるゝ人は鎖に繋がたる人と同じ苦みを受くるればなり。且つ多くの人々はこの種の禍の故に、これに耐へ得ざる時は、自ら死を速む。されば此の種の禍に惱まさるゝ人を知りて、彼を救はざるものは、何人にても大なる罪を犯して、彼血の責を負ふなり。主より善を學びたる汝等、されば善業をなせ。汝等これをなすに遲れなば、塔の建築完成せられて、汝等は其建物より却けらるべし。その他に塔の建物なし。そは汝等のために此建築控へられたり。されば汝等急ぎて正しきをなさずば、塔は完成せられて、汝等は外に投げ出さるべし。』彼れ我れと語りし後、座を立ち、牧者と處女等を我が住居に送り歸すべしと我れに曰ひぬ。」

附録

新約外典概論

緒論

一　正典と外典

外典とは、正典と云ふ語に對して居る譯語である。卽ち正典とは Canon のことで、外典とは之に對して我輩が採用して居る聖經をいふのであるが、字の意味から云へば、Canonとは「眞直ぐの棒」と云ふ意から出て、正しき信仰の標準となる聖經をいふので、而して Apocrypha は「祕せられたもの」との義で、今では正典以外の聖なる文書の或ものを指す語と成つて居るのである。それで、外典を說明するには、先づ順序として正典の如何なるものたるから說明しなければならぬのである。

抑も「外典」Apocrypha なる語が、右の如き術語と成つて用ひられる樣になつたのは、宗教改革の時からである。と云ふのは、その當時まで歐洲一般に用ひられて居た聖書は、第四世紀にゼローム（Johann Reuchlin 1455-1522）が舊約聖書は希伯來語の原本で研究すべきことを鼓吹して、新敎者が之を讀む樣に成つたのは好かつたが、こゝに端なくも希伯來語の舊約書には拉甸語の聖書中にある或ものが缺けて居ることを發見したのである。卽ち「ヴルゲート」の舊約には十四卷多くある。是は慥かに聖書を以て唯一の權威と主張する新敎者にとりては大變なことと云はねばならぬ。一體此等の十四書が、希伯來語の原本にないとすれば、ゼロームは何處から取つて來たのであらうかと云ふことになるが、ゼロームの舊約と同樣に、希伯來語譯の聖書である。

故に次に問題に成るのは此希臘語の舊約書であるが、此希臘語の舊約書は元と阿弗利加の歷山市邊で飜譯されたもので、ユダヤの本國では希伯來語の舊約聖書が行はれて居たが、國外に在つて希臘語を使用して居たユダヤ人間には此希臘語の聖書が用ひられて居たのである。此飜譯は七十二人の學者の手で成つたと傳へられ、通稱之を「七十士譯本」Septungint と云ふて居る。而し

て之を拉甸譯に比べると、大體に於て同じであるが、只だ一卷「エズラ第四書」と云ふのが缺けて居る。卽ち希伯來語聖書よりも多きこと十三卷である。

其處で矢張り問題は、此等十三卷でも、如何にして希伯來語原本に編入されたかと云ふことであるが、之を說明するには玆に舊約聖書の起原を語らねばならぬ。抑も舊約聖書と云ふて今日一冊に纏まつて居るものは、數百年間に數多の記者が書いた數多の文書を集めたものである。而して其蒐集の初めから終り迄には約五百年もかゝつて、其編纂が三度にされたのである。(一)最初に出來たのが「律法書」と云ふて、我等の今日有する舊約書の一番先きに編入してある六卷である。此律法書が公認されたのが紀元前四四四年で、其頃のユダヤ人の聖書には此等六卷丈けしか無かつた。現にサマリヤ人の聖書は約書亞書がなく、唯だ五書丈けである。(二)次に纏まつたのが豫言書と歷史書(師士記、撒母以耳書、及び列王記)で、その年代は確とは判明しないが、多分紀元前四〇〇年から同二〇〇年迄の間である。(三)最後の編纂が其他の諸書で、紀元前二〇〇年から紀元後約九〇年頃までの間に纏まつたのである。斯くて紀元後九〇年頃に開かれたジヤムニアのユダヤ敎の聖書として公認されたのであつた。併し、何故に尙ほ其後も神聖文書は著作され又た蒐集されなかつたのであらうかと云ふに一體ユダヤの

宗教の中心は神殿であつたが、紀元七十年にエルサレムの陷落と共に、其が破壞され、羅馬の異教の兵卒に蹂躙されてしまつた。其後は四季の祭禮も擧行することが出來ず、日々の儀式禮拜も執行することが出來なく成つたのである。於是、彼等の宗教は神の言葉を錄す書物でも中心とせざるを得なくなつた。これ卽ちジヤムニヤの會議が招集されて、神の言葉と認むべきものを一定する必要が起つた譯けである。而して其からは、聖書が神殿の代に成り、ユダヤ教は儀式の宗教でなく、書物の宗教となつた。此聖書は乃ち一定して動かすべからざるものとなつたのである。

併し、右に述べた樣な事情は、ユダヤの本國パレスチナに於けることで、國外へ移住して居てユダヤ人の氣持は少し違ふ。神殿の破壞が彼等の宗教文學の發達上に何等彼地では神聖文學の發達は紀元七十年で停止しなかつた。尙ほ其後も色々の宗教文學が出たのである。之れ卽ちパレスチナの聖書に比べると、歷山市の聖書には十三四の多くの書が加へられてある所以である。餘分のものを有する歷山市の聖書は其他のユダヤの爲めに希臘語に飜譯せられ、本國の希伯來語の聖書の方は國外では餘り讀む人がないので自然に保存されなくなつたが、ゼロームが拉甸語に譯したのも此歷山市の聖書を譯したのであつたのである。

要するにユダヤ人の聖書に二た通りあつた、即ちパレステナの本國で使用されて居たものと、國外で使用されて本國のそれよりも多くの者が編入されて居た者とで、此國外聖書にのみ見得る餘分の十數卷は、ジャムニア會議以後に出來た文書で、從つて全世界のユダヤ人が公認した神の言葉と云ふ譯けではない。之を今日舊約の外典と稱するのである。此外典は前に云ふ通りゼロームの拉甸語聖書の中に入つて、第五世紀から以後約一千年間も西方羅馬敎會で使用され來たのであつたが、宗敎改革の時から、(一)舊約の希伯來語原本を研究し初めてから、拉甸譯本を尊重しなくなつたのと、(二)外典の中には羅馬敎會の敎義に少し都合が宜いことや、また新敎の主張に反對になる樣な事が書いてあるのと、(三)古來敎會の師父等の中でも之を眞に神言と認めなかつた者が若干あるのと、(四)而して特に新敎は羅馬舊敎の如く儀式や制度や僧侶や敎會を中心とするのでなく、何でも聖書一天張で聖書を以て最大最終の權威と爲すが故に、少しでも疑問のある者を其聖書の中へ編入することを許さぬので、改革敎會では此等外典を其聖書から刪除してしまつた。

二　新約外典

前段說明したもものは所謂舊約外典のことであるが、斯の樣な意味から云ふと新約には外典と

稱すべきものはないのである。卽ちかの舊的外典十四卷の書は正しく或地方で聖書として公認されて居たもので、且つ此等十四卷の他に類似のものはなく、世俗の雜書類と區別して纏まつて居たのである。加之、此等は曾ては全基督敎會で聖書の一部と見て居たのである。謂はゆる新約外典と云ふのは、其或ものは使徒時代に書かれ、敎會でも或地方では他の新約書と等しく禮拜の時に讀まれ、大に價値あるものであるが、また或ものは中々其樣なものでないのもあつて、而かも其等の書が幾卷と纏まつて一定して居たことはないのである。

尤も新約の正典と雖も、最初から一定して居たのではない。例せばエチオピアの敎會で用ひて居た聖書には、今日の我等の新約書にないものが八卷もあつたし、希臘敎會の正典には約翰默示錄がなくて、他の若干書類が入つて居たし、叙利亞敎會の正典には雅各書、彼得前後書、猶太書、約翰の三書、及び默示錄が見へぬし、ムラトリ斷片(百七十年頃)に擧げた正典では希伯來書、雅各書、彼得後書を除いて而して彼得の默示錄を入れてあるし、其他第三第四世紀頃の敎會師父等は各自或書を認めて或他のものを拒絶して居るのである。併し第三世紀以後に於て敎會として別の正典を編輯して居たとはない。只だ第二世紀の末葉に、希臘羅馬東西敎會で違つた正典を認め

て居た。卽ち此等兩正典に共通であつたものは、四福音書、使徒行傳、保羅書簡、約翰第一書、彼得前書、及び約翰默示錄だけで、而して此等の他に、東方敎會では約翰第二第三書と猶太書とを加へ、西方敎會では約翰第二第三書と猶太書とを加へて居たのである。若し此狀態が永續して居たらば、嚴格なる意味の新約外典は成立し、希伯來書、雅各書、約翰第二第三書、及び猶太書はそれになつた譯けである、而して彼得後書は東西兩正典の孰れにもなかつたのであるから或は正典にも外典にも入らなかつたかも知れぬ。併しながら東西兩敎會は何時までも其正典を固守せず、第三世紀には兩正典が合同し、且つ彼得後書までも加へて今日我等の有する如き新約書を作つてしまつた。斯くて舊約外典の如きものは新約には殘らなかつたのである。

最も廣く用ひられて居た東西敎會の兩正典が合同したので、嚴格な意味の外典は出來なかつたのであるが、併し前に云ふ如く、小地方の敎會で聖書と等しく用ひて居た文書は若干ある。其等の新約學者は廣義に於て新約の外典と稱して居るので、卽ち左の如きものである。

第一類　或時は聖書の內へ入れられて一般敎會の禮拜に用ひられしもの。

聖書集、クレメントの書簡、十二使徒の敎訓、バルナバの書簡、ヘルマスの牧者、彼得傳福音書、彼得默示錄。

第二類　或一地方に於て聖書とせられしもの。

希伯來人福音書、埃及人福音書、エビオン宗福音書、

第三類　出處怪しき小說的のもの。

(一)福音書類——雅各福音書前篇、多馬傳福音書、ニコデモ傳福音書、約瑟傳、等
(二)諸使徒行傳——保羅行傳、彼得行傳、多馬行傳、安得烈行傳、約翰行傳、等
(三)書簡類——アブカラス往復文、保羅ラオデキヤ書簡、保羅とセネカの往復文、クレメント第二書簡、
(四)默示書類——約翰默示錄、保羅默示錄、摩西默示錄、エスドラス默示錄、等

其地一々數へると枚擧に暇ないことであるが、先づ右の如きものが、今日普通に新約外典と稱するうちに入るものである。

終に、此等の書が今日我等の研究に如何程の價値あるかと云ふ事も問題であるが、それは新約研究に就ては大して重きをなすとは言ひ難い。此等の書の正典福音書以外に如何に多くイエスの言行に關する材料を提供するかと云ふに、それは少ないのである。其他新約の研究に如何程の光明を與ふる處があるかを見ても其も少ない。併し此等の書が如何に僞作であつても、又馬鹿らしい小說的の事が書いてあるにしても、其中に書いてある事は、其著作時代の基督信者の信念と思想の反影である事は事實である。故に此等の文書は基督教會の極初代に於ける信徒の信仰狀態を示すもので、從つて原始教會の歷史や教義の發達を研究

する學者には多大の材料を與へる者である。例せば各種異端説の起原や其聖書觀、聖母禮拜の進歩や其他迷信の發展など、此等の書を讀むと、あり〳〵と鏡に影して見る如き者がある。卽ち此等新約外典は教會師父文學と相俟つて初代の基督教を我等に示して居るものである。

外典福音書などに耶蘇傳研究資料の少ないことと、其用が他の方面に大なることは右に言ふ如き有樣であるが、併し新約研究上の價値とても若干ないことはない、例へば、希伯來人福音書の如きは、今日學者間の定評として、耶蘇傳資料を少しは提供する所があると認められて居るし、彼得傳も其異端分子を除去すれば全く信賴するに足る叙實であるとせられて居る。又た聖言集も共觀福音書問題に光明を與ふる所のものがあり、他の小説的福音書と雖も尙ほ正典福音書の記事の眞價を反面から證明するの役に立つし、其他、各外典中に散見する種々の文句は原文批判の參考として多大の價値あるものであり、又た其記す處のものには當時信徒が了解して居た處の思想を示して居るから、今日の新約書の解譯上に是も大なる參考と成るものがあるのである。

聖書の外典に關する文獻は、日本語では一向にない。英語の譯本ではロビンソンのが良いが、ホーンのは間違が多くて何等の價値もない。獨逸譯ではヘンネケのが最も良い (Edgar Hennecke :—*Neutestamentliche Apokryphen*) 佛語では原文對照且つ註譯

附きの非常に良いのを近頃出だしたが、未だ二冊しか公刊されて居ない。ブスケ及アマンの監修である。(J. Bousquet et E. Amann :—*Les Apocryphes du Nouveau Testament*) 併し徹底した研究の參考書としては各巻箇別の研究文獻によらねばならぬ。而して其は英獨佛に豐富で、例へば希伯來人傳福音書の研究丈けでも、現在の所で我輩の手許に知れて居る丈けでも七十六あるしオクシリンカス斷片の研究丈けでも百二十九種ある。其他の研究悉く此調子でもないが、本書に收めた外典十四卷に關する諸研究書全部を云へば無慮數千になる。(其内若干重要なものだけでも參考書として、卷尾に掲げやうと思ふたが、其を示したとて、碌な神學圖書館のない日本では無益であるから一切掲げるを止めた。)

三 外典福音書

我等が有する新約正典に收めたる四福音書以外に、多くの耶蘇傳が書かれ、各地に流布して居りしことは、ルカの言(路一一三)が無くとも、想像し得べきことである。僅かに一年餘の公生涯でもあるが、其間イエスは東奔西走のうちに多事多難、路加(ルカ)傳福音書は、「凡ての事を詳細に推し尋ねて序を正して書いた」とあるが、實際はイエス宣教の一日の事件と說教訓話の記錄だけでも路

加傳一冊位のものは書き得たのである。（一）故にイエスの死後、星霜を經るに從ひ、又た其直弟子等が此世を去るに從ひ、口傳的に傳へられた彼の訓言また物語が筆に記され、一の傳記が出來ても又た其補遺的のものが書かるべきは、當に然るべきことである。（二）加之、教會は發展し、信徒は增加し、斯教は一世の尊ぶ所となるに從つて、賢か愚か、信徒は人爲的にでも其教祖に後光を加へんことを欲るのが、人の神祕を好む心の要求である。於是、實傳に加ふに怪說奇辭を以てする傾向を生ずる。而して此傾向は教祖在世の年代を遠ざかるに從つて益々甚しくなる。（三）尙ほ此實傳修飾若くは變造と云ふことは他の方面からも來る。卽ち教會が大きくなり信徒が增加するに從つて、內部に所謂異端邪說が起るのは已むを得ないが、此等の異端者は其說の支持の爲めに論據とすべき大なる權威を得んことを欲し、イエスの言辭を自己の說に適する如く變更し、又た奇怪なる記事を加へたる傳記を發行するに至るのである。

此の如くして基督教會に多くの蘇耶傳が著作された。併し流石に餘り目に餘るやうな、上に謂ふ第三種の動機から書かれた如き、爲めにする處ありて編纂されたものは、其一宗一派に用ひられた丈けで、天下に普ねく公認されず、矢張り最古の單純なのが多數の教會で用ひられた。其後、地方的會議であつたが、紀元三百六十五年頃に開かれたラオデキヤの宗教會議で、又た三百九十

七年の第三カルタゴ會議に於て、今日我等の有する二十七卷が正經と公定され、それが天下一般に公認されるやうに成つた。卽ち耶蘇の傳記では、馬太傳、馬可傳、路加傳、及び約翰傳の四福音書が正典（カノン）に入つたのである。併し玆に入典せざりし典外福音書と雖全然小說的のものゝみではない。中には上に謂ふ所の第一種の如き、正典福音書と同樣の動機で書かれ、其材料も正典福音書のそれと同じ處から採り、而かも正典福音書に記載洩れになつた所を補はんとしたものもあつたらしい。只だ惜むらくは、此等の典外書は、暫らく各地で用ひられ、而して信徒の修德の用に供せられて居たが、正經中に加へられざりし悲さ、遂に漸次其跡を絕つに至り、今日では其斷片しか殘つて居ない。併しながら、前に言ふた第二種の動機から出たもの、卽ち敎祖に人工的後光を與へんとする誤りたる考を以て書かれたる、全く小說的記事多きものは、史的事實の如何に關はらず、人の信念から來る宗敎的慾望を滿足せしむる處あるが故に、其後も益々著作せられ、古きもよく保存せられて、希臘語と拉甸語のもの丈けでも二三十種殘つて居る。

本書に收むる所の福音書は、右に言へる第一種卽ち最も正典に近き外典福音書の斷片と、及び第二種の若干である。

各論

一　希伯來人福音書

本書は外典福音書中最も古きものゝ一で、初代の教會に此く題する福音書があつたことは確實で、ゼローム（三四六―四二〇年）は叙利亞（シリア）地方で一本を得て之を希臘語と拉甸語とに飜譯した。又た其より前には、ユーセビウス（三三〇年頃）、オリゲヌス（二五〇年頃）、歷山市（アレキサンドリヤ）のクレメントス（二〇〇年頃）、ヘゲシパス（一七〇年頃）、イグナチウス（一一五年）、等の教會師父等の書に引用されて居るのを見る。何人が此書を書いたかと云ふことに關しては、近代神學者の大問題となつて居る。（一）昔時ゼロームの如きは、此書は使徒マタイが書いたもので、今日の馬太傳の原作と考へて居たが、其は今日誰も信ずる者はない。兩者を比較すれば直ぐ明かである。又た近世の學者でも、此書はユダヤ人教徒のために我々の馬太傳を希伯來語に譯したものであると曰ふ者もあるが、兎に角、孰が原作にしても、その間に殆んど似た處がないのが困る點である。（二）本書を又た『聖言集（ロギヤ）、』即ちマタイやルカが其福音書を書く時に其材料として馬可傳と共に用ひたイエスの言論を蒐集したものであると見る者も

ある。併し此説は單に假定に過ぎぬ。否な假定と云ふよりも、寧ろ何等の證據なき空想に過ぎぬ。

(二)それで多くの學者が今日考ふる處では、此福音書も亦た他の正典諸福音書と等しく、同一の資源によつて、パレステナ在住のユダヤ人教徒の需求に適すべく編纂されたのである。而してユダヤ本國で基督教徒は極めて少數であつたから、本書は決して遠くまで流布せずして、遂に消滅の悲運に陷つたのである。

然らば本書の著作年代は何時頃であるかと云ふに、現代の學者は皆な隨分早いとする。其理由は、ヘゲシプスが百七十年頃に本書のことを云ふて居るのみならず、アンテオケのイグナチウスが百十五年にスミルナへ送つたと云ふ書に此福音書から引用して居る文句がある。此が後人の手で作つたものでないとすれば、本書は紀元百年前の作としなければならぬ。而してハーナックの如きは、六十五年から百年迄のもので、慥かに約翰傳よりは古いとして居る。或はさうかも知れぬ。

斯くて本書の價値は甚だ大きくなるのであるが、特にイエスの受洗及び復活に關する記事の如きは大に注意に値する。只だ殘念なことには、本書は原と二千二百行あつたと云ふに、(馬太傳は二千五百行)今は少しも殘つて居ない。只だ古代教會の文獻に引用されたものが殘つて居るのみである。卽ち本卷に譯したものは其である。今其出處を示せば左の如くである。

丨	Hieronymus, Contra Pelagium III, 2. ; in Jes. XI, 2.	丨丨	Origen, Comment. on John, II, 12.
丨丨丨	Hieronymus, in Matt, VI, 11.	国	匡 in Matt, XII, 13.
丰	Cod. evang. 566	丬	Hieronymus, Contra Pelagium, III, 2.
七	Origen, in Matt. XV, 14.	丬	Hieronymus, Epist. XX, 5.
九	Hieronymus, in Matt. XXIII, 35.	丨〇	Eusebius, Theophania.
丨丨	Cod. evang, 566.	丨丨丨	Hieronymus, in Matt. XXVII, 16.
丨丨丨丨	Hieronymus in Matt. XXVII, 51.	丨国	Hieronymus, De viris inlustribus. 2. Ignatius ad Smyrn.III, 1-2.
丨丰	Hieronymus, in Ezech, XVIII, 7.	丨丬 匡	in Ephes. V, 4.
丨七	Eusebius, Theophania. IV, 12.	丨丬	Clem. Alex., Stromata V, 14.

ファユーム斷片

此斷片は、一八八五年維納に於てライナー大侯のパピリ蒐集の内より、ヒッケルが發見せるもので、第三世紀の寫本である、恐らくは寫本の今日殘れるものでは最古のものゝ一であらう。内容は本文に見ゆる通り、馬可十四[三六―三〇]に酷似せるものであるが、チアペリ及びハーナック等の考では希伯來人福音書または埃及人福音書の一頁であらうと云ふことである。依て假に此處に附錄として置いたが、モフットなどは、此は唯だ馬可十四を書いたものに過ぎぬ、決して何れの外典福音書

の一部などと稱すべきものではないと曰ふて居る。

二　エビオン宗福音書

古來、ゼロームとエピファニウスが、此書と希伯來人福音書とを誤つて同一視して居たので、此等二書を同書別名と心得て居た者が多かつたが、近世になつてハーナックが其全く別物たることを明にして、復た之を疑ふの餘地なからしめた。但し今日まで殘つて居る處のものは甚だ僅少で、矢張教會師父の文獻中に引用されたものである。而して此等のものを見ると、本福音書は元來マタイの名を冒して作者の名を僞つて居たらしく、且つ此書は肉食を禁ずる宗旨に適合するやうにしく作つたもののやうである。此第一の點は、イエスがマタイと語る處で彼を第二人稱にして居るので左樣に思はれるのである。さすれば、ゼロームの間違も無理はない。又た第二の點は、洗者ヨハネは蝗を食したと云ふことを作り更へてあるのと、今一つは、路加傳には「我れ汝等と此過越を食ふことを望みに望みたり」とあるを、此處では「此過越の肉を食ふを欲せず」と變へてある。而して此書の著作年代は第二世の終りに近い。

本書に集めた殘片の出處は

一 Epiphanius, Haeres., XXX, 13.14.
三 同 〃 XXX, 13.
五 同 〃 XXX, 14.
七 同 〃 XXX, 22.

二 同 Haeres., XXX, 13.
四 同 〃 XXX, 13.
六 同 〃 XXX, 16,

ストラスブルク斷片

此斷片は、ストラスブルク大學に藏する、第四五世紀頃のパピリの蒐集のうちより、ヤコビと云ふ人が「新福音書斷片」と稱して此を公けにした。蓋し彼は之を以て埃及人福音書の斷片であると思ふた。併しッァーン教授及びシュミット教授は、寧ろエビオン福音に屬するものと鑑定して居る。依て此に附錄とした。用語は古及(コプト)語である。本書に譯したのはヘネケの獨逸譯から重譯したのである。

三 埃及人福音書

此書も希伯來人福音書と同じく、特殊の人民を讀者としたものゝ如くであるが、其が埃及國民

の一般のことであるか、或は原語の「アイグプチオス」と云ふ字は、アレキサンドリヤの都人士に對して一般地方民を指す語でもあるから、當時歷山市の信徒は正典福音書を用ひて居たのに、郡部では主として此福音書が行はれて居たのであるかも知れぬ。其は兎もあれ、本書は第二世紀の終頃には既に歷山市のクレメントスが之を引用して、且つ正典四福音書に亞ぐ價値あり尊重すべきものとして居るし、又た第二クレメンス書の作者は頻りに之に用ひて居る。それからドケタイ宗の重鎭ユリウス・カシアヌス、ヴレンチヌス派の勇將セオドツス、などの異端者が之を用ひ、又たサベリウスの徒や、ナッセネスの徒の間に廣く用ひらるるに至つたと云ふことである。

本書の起原に就ては無論少しも知ることを得ないが、本書の出來た時には、希伯來人福音書と等しく、正典福音書と同じやうな材料を用ひて編纂されたもので、又決して其等の者に比して餘り遜色のあつた者でもなかつたが、たま〳〵其記事中に獨身主義の異端者流の利用する所となり了つたのであらう。而して此異端者に利用せられた文句のみが他の文書に殘つて、其他は今日多く、を知り得ざるのは甚だ遺憾である。其著作年代も無論不明である。ハーナックは、此福音が第二クレメンス書に引用されて居るのを見て、而して其著者は羅馬監督ソテルス（百七十年頃）であると云ふは其が如何に教會内で尊重されて居たかの假定の上に立ちて曰ふ、「羅馬監督が之を用ひたと云ふは

を示し、又ソテルスが用ひたとすれば餘程早くからあつた者に違ひない、慥かに代の者で百三十年より後の作ではない、」と。併し是はちと假定に基く循環論法のやうであるが、兎に角一言半句でも第二クレメンス書に引用されて居るとすれば、其書よりも前の作品であると は爭へぬ。我等は唯百年から百五十年迄の間に書かれたと言ひ得るを以て滿足しなければならぬ。

本書に譯出したものゝ出處は左の如くである。

一 Clement Alexand., Stromata III, 9, 64. 及び同 III, 9,66.

二 Cassianus in Cem Alex., Stromata. III, 13,92. 及び 2 Clem., XII, Clement, XII,2.

三 Clem. Alex., Stramata III, 9,63.

オクシリンカス斷片

一九〇三年、上埃及にてカイロを去る南方五十里、リビヤの沙漠に近きオクシリンカスの町で、砂丘の中から若干のパピリ反古を發堀した。其中の一枚が福音書の斷片であつた。其後ち一九〇五年の十二月に復た一枚發見した。此等はおの〳〵一九〇四年と同八年とに其發見者たるグレンフェルとハントによりて公けにせられ、近頃珍らしい「堀出物」とあつて、歐米の學者を騷がした。

公刊者の言ふ所によれば、第一の斷片は二百五十年以前の寫本で、著作は百五十年以前のものでなければならぬ、併し其二の方は其程古くないと云ふ。内容は本書に譯出した通りのものであつて、埃及人福音書と似た所があり、又た第二クレメンス書に引用されて居る出所不明の外典福音書とも似通ふた所がある。於是、或學者は此斷片全部が埃及人福音書の一部であると曰ふ。併し其には何等の確證はない。或は此斷片の原の福音書は第二クレメンスの資源であつて、而して其が彼の希伯來人福音書でないとは云へぬ。その孰れにすも、此等二枚の、而かも年代の違ふ寫本の、斷片を以て此問題を決することは出來ぬ。只だ出版者は之を以て埃及人福音書に大關係のあるものと爲すが故に、此處に附錄として置いた。

尙ほ其後一九一一年に、第三の斷片が同じ出版者の中で公けにせられたが、第四世紀の寫本であつて、明かにヴレンチヌ派か何かの異端に屬するものであつて、埃及人福音書に（或は希伯來人福音書にも其他本書に蒐收せるものにも）關係のないものであるから譯出しなかつた。

四　彼得傳福音書

一八八六―七年の冬、上埃及アクミーム（パノポリス Panopolis）に於て、佛蘭西考古

學會派遣員が或る古墳から若干の希臘語で書いた第八世頃の古文書を堀出した。此が其六年後に、在カイロ佛蘭考古學會派遣員紀要第九卷第一號 Mémoires publiés par les membres de la mission archéologique française au Caire, IX-1 として巴里でブリアン氏によつて公けになつたが、其が彼得傳福音書と彼得默示錄とエノク書との斷片であつたので、忽ち學者間の大問題となつた。實物は今カイロ市ギヅエー博物館に藏まつて居る。

ユーセビウスの教會史によれば、等二世紀の末に叙利亞あたりの教會で用ひられて居たが、アンテオケの監督は、初め無關渉であつたが、後ち之を一讀して、「此書にイエスに關して錄す處は概ね正しいが或箇所には後人の手で加へた處がある」と曰ふた、と云ふことである。ユーセビウス自身も此書を非難し、其ドケタイ異端臭味を攻撃して居る。此書は餘り弘くは用ひられなかつたやうであるが、叙利亞邊では第三世紀に至るも、又た第五世紀に至るも、叙利亞語の本で民間に多くあつたと、「デダスカリヤ」及びセオドレタスは報告して居る。而して又た叙利亞のみならず埃及までも流布して居たことは此斷片の發見によつて證する通りである。此書の編纂に關して、何人が何處で書いたか無論わからぬ。併し年代は隨分古いやうである。若し、此がハーナック、ゾーデン、ロッヅ等の主張する如く、ジャスチヌスの使用したものでありとすれば、百五十年以前の

作となる譯けである。シューベルトの曰ふ如く、此等兩者の間に相似なる言句のあるのは、更に第三の共通資源があつたからであらうとするのもよいが、其には其共通資源を提出して見せねばならぬ。其處で又一方に於て、彼得は四福音を用ひて居るや否やと云ふのが問題であるが、勿論馬太と馬可とを用ひて居ることは明かである。路加と約翰とは如何。我等は矢張り此等も用ひられて居るやうに思ふ（『神學研究』十一の三、拙著論文中正典との對照句を見よ）。さすれば第一世紀の終り頃より以後の作でなければならぬ。依是觀之、此福音書の著作は、まづ紀元百年頃から百二三十年頃までのものとするのが妥當であらう。併し或者は、此書は四福音を基礎としてドケタイ宗若くはヴレンチヌス派の異端説を支持せんが爲めに編せられたのであらうと曰ふが、必しも然りとは曰へぬ。何となれば、ヴレンチヌス派の著作としては餘りに素朴で初（うぶ）のやうに思はれ、又た十字架上でイエスが苦痛を感ぜなかつたとする如きことは、ドケタイ宗化しなくても、偉らい人と云ふ積りから曰ひ得ることであらう。要するに只だ少しく所謂人工的後光を附け過ぎたものである。兎に角、彼得福音書は、正典福音書を除けば、外典中では希伯來人福音書及び埃及人福言書等と竝び稱せらるべきものである。

五　聖言集

一　オクシリンカス　ロギア

本書の巻頭に寫眞版にして出て居るのが、先年歐米の學界を大に騒がし之が爲め百餘の研究論文を出さしめた本斷片の第一面である。

埃及のオリシリンカスでグレンフェルとハントが福音書の斷片を發見したとは希伯來人福音書の項に記したが、實は其發見以前、一八九七年と一九〇三年の二回更に重要なる發見をして居る。其内容は普通の耶蘇傳の如きものではなく、本文に譯出した如きイエスの聖言集である。此が公刊された時に學界は大に沸騰したが、要するに此聖言集は何時出來たもので、又た如何なる價値のあるものであらうかとの疑問が第一に起るのである。併し是は容易に此ばかりの斷片を與料として判定し得らるゝ問題ではない。とは云へ、一般學者の見る處では、此は餘程古きもので、遲くも紀元百四五十年頃のものと鑑定し、或は第一世紀に屬するものかも知れぬと曰ふ者もある。だが其起原に至つては到底わからぬ。ハーナックは一體埃及人福音書の再構成に努力して多少無理なことも言ふて居るが、此聖言集を以て其福音書から抜書したものであらうと曰ひ、或者は希伯來人福音書、或者は多馬(トマス)傳福音書、或者は各種の福音書から書き抜いたものであるなどと曰ふて居る。何れの説も只だ想像に過ぎぬ。元來此聖言集にある文句に似たやうな福音書は我等の知れる範圍では無い。於是、やはり此は何れの福音書から取つたものでもなく、全く獨立した餘程古い

聖言蒐集であらうと思はれる。兎に角、此聖言集には何等異端説の臭味がない。極めて純なるものゝ如くである。而して原始教會に現れた最初の文獻は此の如きものでなければならぬ。卽ち基督傳説が文書になつた第一の試みである。或は教祖の一生を錄した記事も然りであるが、其教訓の方が先づ筆にして殘されねばならぬ。然り而して此如き聖言集の編纂を試みた者は一二ではなかつたらうが、此オクシリンカス聖言集が如何程忠實にイエスの言を傳へて居るかは知る由がない。只だ我等が與へられたる丈けのものを以て見る所では、此聖言集には別に異端説の支持と云ふ如き動機で蒐めたものではないやうである。但し更に多くの與料がなければ何とも斷言は出來ぬ。併し若し此聖言集が忠實に正確にイエスの言を傳へて居るものとすれば、それこそ大變で、福音書を研究する者は非常な注意を之に拂はなければならぬことになる。要するに、今日の處では、共觀福音書の著者等が其著作材料に用ひた聖言集も亦た此種の如きものであつたであらうと考へられる。併し其れと此とは全く別物である。

二 アグラファ

一七七六年にケルナーが其書（Kärner,—De sermonibus Christi ἀγράφοις）を出してから、「アグラファ」と云ふ語が、イエスの言にして正典に記してないもの卽ち典外聖言を意味するやうになつ

た、而して其後ち多くの新約研究者は其蒐集を試みたが、アルフレッド・レシのそれで頂上に達して居る。此レシの蒐集は多大なもので、到底歐洲の大きな神學校の圖書館に入り得る者でなければ、其資料を得ることは出來ぬものである。併しイエスの聖言と稱しても、慥かに彼の言であるか、或は後の人、例へば異端者流が、彼の言と稱して文書に記したものではないか、之を鑑定することは困難である。彼等の書物に、『イエス曰く』云々としてあるものを皆な丸呑に彼の言として受けることは出來ぬ。其處で現代の新約原文學者として偉なるネストレの如きは、その Novi Testamenti Graeci Supplementum に確實なものとして僅かに二十七しか擧げて居ない。實にレシの極端である。其處で本書には色々と諸書を參考して約百三十を收めた。無論此等が悉く眞にイエスの言であるとは思はぬ。其判斷は要するに主觀的のものであるから、讀者自身をして之を爲さしむるべく、成るべく多く提供したのである。

オクシリンカス斷片も、勿論此『アグラファ』の內に入るべきものである。併し此は最近の發見であり、且つ隨分學界を騷がしたものであるから、讀者の參考に便宜のため別に置いた。尙ほ古いアグラファの出所は之を示しても、我國では良い圖書館が無いから餘り利益はないが、略ぼ之を知り得る丈けにして、各項の終に括弧內に記して置いた。

六　ヤコブ福音書前篇

前き に言ふた如く。耶蘇傳の第二種に屬するものは希臘語と拉甸語のもの丈けでも二三十種あるが、皆な比較的後日の作である。此等の書は大體に分類すると、(甲)耶蘇誕生前のマリヤとヨセフの記事、(乙)耶蘇自身の幼時の記事、(丙)及び耶蘇の審判と其以後の記事、即ち童貞産に關するもの、の三種である。併し此等二三十種のものは、之を比較研究して見ると、皆な『多馬(トマス)傳福音書』と、『ピラト行傳』との三書に基き、此等に修飾を加へて出來たものゝやうである。即ち此處に譯出せる『雅各福音書前篇』を基礎とせるものに、『僞馬太福音書』、『瑪利亞誕生記』、及び『大工約瑟傳』などがある。

第十六世紀の中頃、佛人ボステルなる者、東方の國語をよくし、比較語言學研究のために東方諸國を遊歷中、多くの敎會で愛讀せらるゝ一の宗敎書を發見した。以爲らく是れ馬可傳福音書の前篇であると。乃ち一本を寫し得て大に喜び、Proteuangelion sen de natulibus Jesu Christi et ipsius matris virginis Mariae sermo historicus divi Jacobi minoris と題して一五五二年に之を公刊した。之れ本書の近代に於ける出版の初である。而して『雅各傳福音書前篇』なる名稱も亦た此

から初まつたのである。併し此本は拉甸語であつて、原書は元來希臘語であるものゝやうである。譯本では、拉甸のほか尚ほ叙利亞（シリヤ）本、古及本（コプト）などあつて、此等現存せる各種の古代寫本の數は五十を下らない。希臘本の出版は一五六三年のミハエル・ネアンダーのそれを以て嚆矢とし、而してチッシェンドルフの希臘原文には、第九世紀の寫本を初め、十七種の異本を參考に供して居る。

古代に於ける本書の消息に關しては、オリゲヌス（二五〇年）は『ヤコブ書』なるものゝあるを曰ふて居るが、果して本書と同一なるや否や不明である。ジャスチヌス（一五〇年）はイエスが生れたりと云ふ洞穴のことを二回も曰ふて居るが、或は本書を見たのかも知れぬ。第四世紀以後になると本書に記載せる事に照合すべき文獻は少なくない。

本書の編成に關しては、ツァーン其他の反對主張もあるが、最初から單獨の手で著作されたとは言へぬ。勿論極めて巧妙に編纂されてあるから、明白に其編輯資料を分別することは困難ではあるが、例へば第九章に突然ヨセフの名を出す如き、また第十章の終と第十二章にマリヤが紫と緋を縫へることの如き、前後に關係なき異分子を物語中に入れてあるのはこれ明かに材料の單一なるを示すものである。而して第二十三章以下のザカリヤ物語も慥かにその著作年代がオリゲヌス以後にありとしなければならぬ。事情此の如くなるを以て、本書の著作年代に關する學者の

説は一定して居ない。ツァーン等は第二世の初、百年から百十年頃までのものとするが、又た一方には第四世紀以後のものとする説も多くある。ハーナックは、本書全部の編輯は三五〇年より後のことであるが、其内マリヤ物語は二五〇年前後、而してザカリヤ物語は三一〇年頃の作とする。併しオリゲヌスが所謂「ヤコブ書」なるもの果して此マリヤ物語とすれば共は今少し古いものとしなければならぬであらう。

要するに本書の作者はユダヤ人なる基督者であつて、尚ほ大にユダヤ教の儀式を重んずる如き傾向もなく、極めて單純に又た自然に其物語を記録せると、又た本書には少しもドケタイ宗の如き如きことは、他の多くの小説的福音書に比して出色あるものである。蓋し此書が古く各地に歓迎せられて居たのも亦此故であらうと思はれると共に、此書の或部分は慥かに第二世紀の前半頃に屬する者ならざるべからずと思はれる。併し本書最初の出版者ポステル及びオリゲヌスの書が本書に題する如く、イエスの兄弟なるヤコブが其著者たることは斷じてあり得べからざることである。

七　多馬傳福音書

イエス幼年時の事を記したものが數多あり、正統教會の主權が達しなかつた東方に殊に多くあ

るが、皆な此福音書に基きて作られたもの、如くである。處が本書の種類も四種ほどあつて、皆な多少づつ違つて居る。叙利亞本は多馬（トマス）の名も冠してない。而してヒポリツスが此書から引用して居る文句は現在の本書中に見へぬものであること、又た現在のものには昔の人が之を攻撃した如く何等の異端分子を見ないことゝに由つて見ると、第二三世紀頃にあつた此書は更に違ふものゝ如くで、ニケフォラスの言によれば昔時のそれは一千二百行もあつたと云ふから、現在のものゝ約二倍である。此書はイレネウス（一八〇年）も亦た引用して居るが、此等のことを以て考ふると、イエス幼年時代の傳記は古く紀元一五〇年頃からあつたものゝやうである。而して其は餘程大きいものであつたが、其を第六世紀頃以後に、正統教會で其異端的の部分を刪除して現今の如きものを作つたのであるらしい。併し何人が此改作を施したかは誰も知らぬ。

八　ニコデモ福音書

ニコデモ福音書なる名稱は第十三世紀より初まり、古來よりのものに非ず。チッシェンドルフによれば、或英國人がニコデモを以て英國の使徒となし、之に一の福音書を與へて其名を冠せしめたるに過ぎぬ。實はピラト行傳と稱するものと及びイエス黄泉行記との全く別物なる二書を合本

とせるものである。

(一) ピラト行傳

此書は古來弘く民間に讀まれたるもので、イエスがピラトの法廷に於ける審判及びユダヤの最高會議のことを錄す。テルツリアヌス(二〇〇年)は此の如きピラトの報告書なるものを見たることがあるし、又たユーセビウス(三三〇年)も此の如きものを知れりと云ふ。併しユーセビウスの見たと云ふのは、此書と異り、異教徒の手に成つたもので、寧ろピラトの法廷に於けるイエスを嘲笑するものである。此基督者的のものは彼に對抗すべく書かれたものゝ如くである。尙ほチッシェンドルフによれば、ジャスチヌス(一五〇年)にも知られて居たとあるが、其は確實ではない。何人が此書を書いたかは勿論不明である。又た其著作時代に關しても大分異說がある。チッシェンドルフの如きは、ジャスチヌスが之を知れりとして、第二世紀の初めの作とするが、其は疑問である。從つて彼の主張するが如く、此書に磔刑事件に關する價値ある傳說があるとは俄かに保證は出來ぬ。或者は四世紀若くは五世紀に屬するもので、何等の史的價値なき小說であるとする。何となればユーセビウスの見たと云ふのは基督者の書いた此書とは全く別物であるし、又たテルツリアヌスが引用して居る文句は必しも此書から出たとする證據はないと曰ふのである。ハーナックの曰ふには、テルツリア

ヌスの文句は寧ろ後にニコデモの記者に用ひられたのであると。併し又た最近には、ランデル・ハリスが此書の二世紀説を強硬に主張して居る。我輩の見る處では、ユーセビウスの見た異教的ピラト行傳を作つたので、其は早く第二世紀中であつたが、異教徒のそれの如く短いものであつた。其を四世紀になつて作り直ほして大きく面白い小説にしたのが今日殘つて居るものであらうと思ふ。

(二) 耶蘇黄泉行記

死より甦りたる二人の青年が、黄泉に於て見たるイエスの活動を此世で語りたる所を記せるもので、全くの想像的小説である。第四世紀頃の作で、使徒信經の此條頃が第四世紀に如何なる位置に在つて如何なる意義を有したかを示すほか、何の價値なきものである。只だ小説的耶蘇傳の最後の一齣を示すべく玆に譯出して置くのである。

九　保羅及提苦拉行傳

古來希臘語及び甸甸語でパウロとテクラに關する宣教譚がある。稱して『保羅及提苦拉行傳』と呼ばれてあつた。其内容はパウロがイコニオムに傳道中、テクラと云ふ其地の若い未婚の婦人が

大層熱心な信仰を起して信者となり、自ら童貞を誓つて神に奉仕せんと云ふことになる。其時迫害が起つてパウロは逐はれ、テクラは火刑となるも火焔の害を受けず、パウロの迹を追ふてアンテオケに到るも、其處にて復た彼の美貌の故に迫害せられ猛獣の刑になるが矢張り害せられず、遂に女皇の保護を受け、復たパウロの後を逐ひ、後ちイコニオムへ歸りて高齡を以て死す、と云ふパウロよりもテクラの方が主となつて居る譚である。所が近年シュミット博士がハイデルベルクのパピリの内から、古及語で書いた『保羅行傳』なるものを發見し、一九〇三年に之を出版した。此の書はパウロが初めアンテオケに現れ、或る死兒を活かす奇蹟を行ふて信徒を多く得たが、魔術師として遂はれ、イコニウムに行き、其處でテクラ事件で又た逐はれ、ムルハに行き、其よりシドンへ行き、其處でアポロの宮に幽閉せらる事があり、次でツロへ行き、エルサレムへ移り、フィリッピへ行き、其處からコリント人へ書を送り、遂にローマへ行きて殉教して死すと云ふ長い記事である。それで彼の保羅及提苦拉行傳なるものは、此保羅行傳の一部であると云ふことが明かに成つたので、而して此「保羅行傳」はテルツリアヌス（二〇〇年）オリケヌス（二二五年）ユーセビウス（三三〇年）等の書に出て居り、且つテルツリアヌスの書には、或る亞細亞の長老がパウロを敬愛するの餘り著作したことを告白したとあるから、此書は第二世紀のうちに書かれたものゝ如くである。併し、

ラムゼーの曰ふ如く、此書の現形は或は其頃完成したにしても、其材料として用ひたパウロの宣教記事は早く第一世紀中に書かれたものもあつたかも知れぬ。而してラムゼーは存外此には事實談が多いやうに曰ふが、ハーナック等は左樣に考へぬ。矢張り第二世紀の後半の作であらう。

然りと雖シュミットの保羅行傳の古及原本は缺字甚だ多く、餘程彼の手入と再構成を加へた者であると共に、一方古來ある保羅及提苦拉行傳は原文も比較的良好で又た希臘拉甸兩語あり、加之此ある。尚此飜譯には最近出版に成つた、ブスケ・アマンの希臘本に據り、又其佛譯をも參考した。

一〇 クレメンス書

本書は一般に羅馬のクレメンスが書けるものとせられ、多くの原本も亦た斯く題してある。併し古及本の終尾には『羅馬人より哥林多人へ送れる書』と記してある。此名稱は歷山市のクレメントスも知れる所であつたが、此書の內容から遂に『クレメンス書簡』と稱せられるに至つた。元來本書は哥林多教會に內訌起り、分派を生じ、遂に二三長老を黜職したに對して、羅馬教會より抗議をなし忠告を試みた者である。故に書中一回だもクレメンスの名を記した處なく、又一個人の書

簡として認められた者ではない。併し第一世紀の終り羅馬教會第三四代目の監督にクレメンスと名くる者あり。本書は其執筆によるとする古來の傳説を否定し得る證査は少しもない。而して本書は最古寫本の二三の新約聖書原本中に編入せられ居るものあり、又歷山市クレメントス其他の者に正典視せられて引用せられ、慥かに弘く初代の教會に於て讀まれて居た。尙ほ此他に、『クレメンス第二書』と稱する哥林多教會に宛てたる説教體のものあり、又童貞に關するもの、如く、又主の兄弟ヤコブに與へたる書簡二通、尙ほ叙利亞語で現存し、極初代に書かれたるものに非ざることは學者の定論である。其他學者間に所謂『クレメンス文學』と稱する宗教文學があつて、其著者としてクレメンスの名を借用して居る。其中に『クレメンス説教集』、『クレメンスの自覺』、及び『使徒法憲』の三大篇もある一として使徒直後時代の作でない。要するに、彼の名を冠する多くの文獻中、眞にクレメンスの著作と云ふべきは唯だ此處に譯出する本篇である。而して此書簡のみは多の地方で聖書の内に編入せられ、他の使徒書と同樣に權威あるものと公認せられたものである。

然れども此有名なる著者が果して如何なる人物なりしかは確實に明瞭でない。傳説は此著者を以て腓立比書第四章第三節にあるクレメンスとなすも、何等の證據はない。又ヘルマス異象篇の

異象第二にもクレメンスなる者があつて諸教會に書簡を送ることを記してあるが、ヘルマスは却つて本書よりも後日の作に屬するかも知れぬ。更に興味あるは羅馬の皇族チツス・フラビウス・クレメンスの事である。クレメンスはドミチアヌ皇帝の從兄弟で、フラギア・ドミチラ姫を娶る。ドミチラも皇族であつたが、チツスは基督信徒で、羅馬國敎者ならざるの故を以て紀元九十五年死刑に、ドミチアは流刑に處せられたと云ふ。此皇族クレメンスが果して基督者たりし證はないが、近世發見せられた羅馬の一基督敎信徒の墓地はドミチアの所有であつたやうである。且つ當時基督敎が皇族間に出入し居りしとも事實である。而して又著者が羅馬の歷史及び文學に通じ又自ら羅馬人たるを示せる跡も書中に歷然たるものがある。本書の著者は皇族クレメンスなりとは不可能の想像でない。唯此の如き薄弱なる論據を以て親王級のクレメンスを當時の羅馬敎會の牧師に擬すは餘りに大膽なる推定ではなからうか。於是此皇族家の一奴隷の開放せられたる者ならんと曰ふ者もあるが、さりとて羅馬敎會が開放奴隷を推載したりとも想はれず。疑問は依然疑問として殘る。唯羅馬敎會三四代目の監督にクレメンスなる名の者ありし事のみは、第二世記より存する敎會聖徒名簿とイレニウスの證言により明である。卽ち其第五章より推定すれば、此著作はネロ帝の迫害以後

で、又た第四十二乃至四十五章よりすれば、使徒等の既に死せし後の事に屬す、即ち紀元七八十年頃より以前のものたることは出來ぬ。而して第四十四章には、使徒等が任命したる長老等の尙は活きて存することを記し、又た一方に於て第二世紀の迫害及び爭論の事を示す處がないのをすれば、本著作は紀元百年より餘り後のものではない。然り而して學者間の考によれば、書簡の首めに記す彼等の間に起れる災禍とは當時の迫害のことで、而かも第五章に記せるネロの迫害とは別である。即ちドミチアヌスの迫害を意味せるものであらう。故に此書の書かれたるは、此第二迫害の終らんとする頃か、或はその終れる直後でなければならぬから、其は紀元九十五・六年であらねばならぬ。或は四、五年後れたりとするも百年までの執筆である。

本書は單簡にして明瞭なると、其敎ゆる敎會統一のことが何時何處にも必要なりしことゝ、本書が新約書の或るものよりも古きものたることゝ、且つ其出所が帝國の首府ロマの敎會であつて自然に天下の尊敬を得たること等に由るのである。併し其思想は極めて平凡、其神學は因襲的、使徒パウロの大敎旨をすら解し居らざるものがある。況んや其文章は冗長にして其言辭は散漫、讀むにたへぬ。唯だ其史的見地より我等の興感を促すものは、本書が新約正典外の最古の文書たると、當

時の基督者の思想を反影し且つパウロの教へが未だ當時の教會に決定的に奉ぜられ居らざりしことを示すのと、及びパウロの哥林多前書及び希伯來書等を引用若くは參照する處があり、以て此等新約文書の高等批評上に若干の資料を供することあるからである。

本書の原本にして現存するものは

一、羅山原本——第五世紀の寫本で、大英博物館に藏す。此原本には本書は新約聖書中約翰默示錄の次に編入してある。又た此原本の寫眞が大英博物館より出版されて居る。

二、君士坦都原本——一八七五年コンスタンチノープル市で發見せられた第十一世紀の寫本で、ライトフートの出版せるものには此原本の寫眞版がある。

三、敍利亞譯本——第十二世紀の寫本にして、現にケムブリッヂ大學に藏す。新約正典中、本書を普公書簡の後ち、保羅書簡の前に編入せり。

四、埃甸譯本——第十二世紀の寫本であるが、第三四世紀頃ローマ市で飜譯せられたるもの、今はナムール學院に藏してある。

五　古及譯本——二部あり。一は第四世紀の寫本で最も美なるもの、今は伯林王立圖書館に藏す。他の一部はストラスブルクに在り。年代やゝ新らしく、且つ缺漏多い。但し此には本書を新約正典中に編入してある。

一一　バルナバ書

基督教會に其初代から、バルナバなる人の認めたりと稱するものが、『クレメンスの書簡』及び『ヘルマスの牧者』と共に、或地方に在りては聖書の正典として教會内で禮拜上に用ひられ、歷山市のクレメントスは聖書として之を其書中に引用し、オリゲヌスも亦た之を新約正典普公書簡の内にパウロの書簡と共に數へ、而して今日現存せる最古の寫本の一なる西乃原本には之を新約聖書の内に編入してある。以て聖書文學として如何に其價値が初代教會内に認められたかを知るに足るのである。本書の特色に關して一言すれば、その書かれたる主なる目的は、舊約聖書に對するユダヤ教的見解に就て、基督教の信徒に警告を與ふるにあるものゝやうでフィローー流の象徴的解釋をなし、或は時としてフィローよりも更に一歩を進みて全然律法の文字通りの解釋を否認して居るのである。著者は此の如きパリサイ宗人等の爲すが如き文字通りの解釋は惡性の天使がユダヤ人を欺かんとして工風せる事であると曰ふ。

本書の著者は只だバルナバとのみで、果して其何人であるか不明である。歷山市のクレメントス以來、古代の論者は多くパウロの侶伴なるバルナバなりと曰ふが、其不合理なる事は此書を一讀すれば明である。此クプロ生れのバルナバはレビ族の者で（徒四三六）云ふ迄もなくユダヤの諸儀

式に精通し、彼はまた聖京の使徒會議に行つた者で、其時に論議せられた處から、ユダヤ教と基督教の關係に就ては十二使徒の意見を十分了解し居る筈である。然るに(一)本著者は極めて普通の儀式すら解し居らず、(二)又た使徒等の考へた如くにユダヤ教を以て基督教の先行的準備とは認めず、寧ろユダヤ人が儀式を守りたることを以て全く不正當なる事として居る。(三)加之、本書にはシリヤ人は皆な割禮を受け居るものとあれど、此の如きことはアンテオケに長く住居した者の陷るべからざる誤謬である。(四)又た本書が紀元七十年以後に書かれたるべきは明かなるにパルナバが死したのは普通六十二年とせらる。而して(五)本書が萬事を比喩的に、解釋する論調は、親しく使徒等に接し居たる者の爲すべきことと判ずることが出來ぬ。然れども此等否定的論斷の外から我等は殆んど何等其著者に關して知ることがない。只だ其論調の比喩的解釋を主とすると、智識(グノシス)と信仰(ピスチス)を相對照することゝ、而してユダヤの風習儀式に通じ居らざる事等より、多くの論者は本書の著書を以て歷山市在住若くは其感化範圍内の異邦人たる基督信者であると推定して居る。

本書の著作時代も明確でない。本書の内容より考ふるに、エルサレムの陷落以前に書かれたりとはなすべからず。又た第五章の使徒等を呼びて『罪ある者のうちにて最も罪ある者』と曰へる語がケルサスに引用せられたりとせば、本書は第二世紀の中頃には既に世に存せしものとしなけ

ればならぬ。さすれば本書の著作年代は紀元七十年より百五十年の間となる。併し本書第四章にある十人の國王を以て羅馬歷代の皇帝を意味するものと解する論者がある。さすれば本書の著作は第一世紀の終りとなるであらう。又た第十六章の神殿再建に關する言を見ると、これ紀元百三十二年の事で、本書の著作は更に後のこととなる。要するに此等の推論一も確定的のものではないが而かも之を否定すべきではない。我等は只だ本書が紀元百年前後に書かれたるものとのみにて滿足せざるを得ない。

本書の價値は主として當時の敎會内に存して居た思潮を語るに在る。初代敎會の信仰が大に疑問としたことは、若し舊約聖書が神の靈感によりて書かれたものとせば、何故に之に錄せられたる諸律戒を勵行せざるかとのことである。此疑念に對して本書は一の解決を與ふるものである。而して此解決たるや敎會内に於て種々なる形に於て弘く考へられたる處のものである。又た聖書の解釋に比喩的方法を用ゆることも、當時敎會内に大に流行したることで、本書に於て我等は具體的に其多くの實例を見、且つ如何なる程度になされたるかを知ることが出來る。蓋しパウロの書簡中に見る如き輕微なるものではない。

本書の原本として今日世に存するものは、

一、西乃原本――紀元三百五十年頃の寫本で、シナイ山にて發見せられ、歐洲戰までは露都皇立圖書館に藏せられ居た。
其寫眞版は曾て英國で出版せられた。

二、君士坦都原本――紀元千五十六年に書かれたる寫本で、一八七五年コンスタンチノープルで發見せられた。

三、ポリカルプ書第九章よりバルナバ書第五章に續き居る寫本が八ある。其原本が元と一であつたのであらう。

四、拉甸譯本――唯一本、露都にあつたが、第十七章を以て終つて居る。故に拉甸本が原形にして、希臘本の第十八章以下は後人の追加せるものにあらずやとの疑が生ずるが、一般學者間には、矢張り希臘本を以て原本と認めて居る。

十二 十二使徒の教訓

曾つて初代の教會に『十二使徒の教訓』或は只だ『教訓』と稱する書があつて、弘く信徒間に讀まれて居たことは、古來多くの文獻に見ゆる所で、歷山市のクレメントスは之を聖書として其書中に引用し、アタナシウスも亦た之を神聖文書の一に數へたるなど、一般教會内に尊重せられて居たことは疑ひない。併し之が近世に於て公刊されたのは一八八五年の事で、希臘教會の僧侶ブライニオスがクレメンス書及びバルナバ書と共に君士坦都で一八七五年に之を發見した。當時の神學界は狂せんばかりの喜びで、十九世紀後半の最大なる發見とまで稱せられたのである。本書に

内容の詳細は勿論本文に就て見るべきも、大體に於て二部に分たれ、第一部は『二つの途』と稱し、所謂生の途と暗の途とを敎へ、初代敎會の一般道德を示して居る。基督者たるものは、山上の敎訓にイエスやパウロの敎に禁ぜられたることを愼むべきを勸告してある。第二部は敎會内の制度を說き、洗禮の儀式、愛餐（アガペー）の執行等に關する事を規定し、又た眞の敎師と僞敎師の區別を示し、斷食に關する注意を與へ、而して世界の終末に就て自ら警戒すべきことをも敎へてある。斯くて此寫本の卷頭には *Διδαχὴ τῶν δώδεκα ἀποστόλων*（十二使徒の敎訓）と題し、卷尾には『世界紀元六五六四年罪業深き書記レオ謹寫』と記して居る。卽ち基督紀元一〇五六年の寫本である。

本書著作年代に關しては、學者間に多大の相違せる意見がある。或は紀元七八十年頃のものとし、或は百二三十年乃至百五六十年頃のものとし、其極端なるものに至つては、早きは五十年、遲きは五百年の作となすものすらある。而して皆な各々相當の論據がある。原本批判の大權威たるハーナックの說によれば、「ディダケー」が現形となるにはバルナバ書に負ふ所多きものゝ如く、而してバルナバ書は博士の意見によれば百三十年頃の作なるを以て、本書は其以後のものならざるべからずと。されど、本書とバルナバ書との關係に就ては、必しも本書が彼書に負ふとなすの外か

解釋なき譯けではない。或は兩書共に第三者に負ふ所があつて、爲めに兩者間に共通點を有するのかも知れぬ。吾人の見る所を以てすれば、本書の記する處を見るに、聖晩餐禮は尙ほ愛餐禮の一部たる如くして未だ分離せず、監督（エピスコポス）の權力も未だ確定せざるもの丶如く、豫言者の職は敎會內に於て最高位置にありて、如此きは本書が敎會制度發達の極初期に書かれたるを明かに示すもの丶如く、卽ちパウロが其書簡を書いた時代と未だ甚だ遠からぬのである。而かも百十七年に書かれるイグネシウスの書簡に於て、此等の制度が大に進歩し居るのを見れば、バーナックが本書に與ふる年代は少しく遲きに失するもの丶やうである。加之、之を外部の證査に於て見るに歷山市のクレメントスが之を聖書として使用したる如き、また本書がユダヤ敎の敎訓書を原本とし之を基督敎に應用して作られたるもの丶如き、共にみな本書が必ず第一世紀の作たるべきを示すものである。故に予は本書を以て其大體に於て紀元八十年より百年の間に現形の如く書かれたるものとする者である。但し何人の手に成れるかは到底知るべからず。

本書の價値は敎會史上に偉大である。原始基督敎會の發達は本書の發見せらるゝまでは說明し得ざるものがあつた。新約文書に於て我等が知れる處と、第二世紀の師父等の文書に見ゆる敎會の諸制度との中間に於て、從來存せし其空間を充たすものは本書である。（一）本書は初代敎會の道

德訓を具體的に我等の前に描出して居る。本書は原と改宗者が洗禮を受けて教會に入る前に讀むべきものとして編せられたるが如く、第一世紀の最終年間に於て基督教の隙を充たすもので、使徒時代の簡單なる教會の組織と儀式が如何にして其後の精緻なる體系となりしかを示す。例へば聖洗禮の如きも、元來流水中に於てすべきも、若之なき時は他の水にてするも可なり、又た冷水にてする能はざる時は溫湯を用ゆも可なり。若し孰れも爲し能はざる時は其人の頂に水を灌するも可なりとし、以て浸禮より灌禮に變化した徑路を示して居る。(三)本書は聖晩餐禮の發達を示し、特に、此儀式に用ひらるべき祈禱中に基督の死が人類の救拯に何等の價値あることをも言はざる如きは大に注意に値する。(四)監督政治は原始教會の制度にあらずして第二世紀に迨びて初めて發達せるものたることも亦た此の處に見ることが出來るのである。故に本書は教會史の必須資料にして、本書を見ずして原始基督教を論ずる者は未だ與に語るに足らずと謂ふべきである。

本書の原本として研究の與料たるものは

一、君士坦都原本——一八七五年にコンスタンチノープル市エルサレム院で發見されたる第十一世紀の希臘語寫本にし

て、現今世に存在する唯一の完全なる本書の原本である。

二、拉甸譯本――元とメルク修道院にありたる第十世紀の寫本の斷片と、及びミュンヘン寫本と稱する第十一世紀の寫本の斷片がある。

一三　彼得默示錄

一八八六年上埃及アクミームに於て佛國の考古學者がなせる大發堀のことは前に（福音書の項）記したが、此發堀はは默示錄丈けでも世界の學者を狂せしむるに足るものである。そは此發堀あつたまでは、古來彼得默示錄なるものが昔あつたと云ふ傳說があるだけで其一頁も見た者はなかつたのである。併し慥かにあつたには違ひないので、ムラトリ斷片の書目（百七八十年頃のもの）にも『我等は約翰（ヨハネ）と彼得（ペテロ）の默示錄のみを公認す』云々とあるまで注解を作つたとユーセビウスが其教會史に報約各書はバルナバの書簡及び彼得默示錄に至るまで注解を作つたとユーセビウスが其教會史に報告して居る。斯く第二世紀の終りに既に此書の存して居たことは慥かである。而して、且つ此書は三に於て第九世紀の中頃書かれたニケフォラスの目錄にも尙ほ之を見ることを得て、百行あるとしてある（約翰默示錄は千四百行）。併し此が文獻上に見得る彼得默示錄の最後であつてそれから次は一千年跳び越して今日其實物を見るのである。而して此發堀されたものは百四十行卽ち原物の約半分

位殘つて居るので、之を古文書に散見する此書に關する記述に徹するに、此書は二部より成り、其前半は世界の終局に關するイエスの訓示であるが、此部は紛失したので、唯だ其結尾のイエスの言が一句殘つて居る丈けである。それで此斷片は原本の後半で、天國の光景と地獄に於ける刑罰の狀態が記してあるが、併し尙ほ此あとに少許失せて居るやうである。

本書の著者が果して何人であるかは、知るに由ないけれども、併し此斷片は確かに古來謂ふ所の『彼得默示錄』に違ひないことは、第一此斷片中に我等と稱して著者自ら使徒たるを示し、且つ常に十二使徒を代表して言ふて居ること、第二には此斷片中の文句はすべて所謂彼得默示錄に關する古來の叙述に一致するのと、第三には古來世に存在せりと傳へられたる使徒の書いたと稱するふ所の彼得默示錄の後半の殘つたものに違ひない。從つて其著作もムラトリ斷片より前、卽ち遲くも紀元百五十年頃と爲さねばならぬ。併し此丈けの思想の發達を示すには、他の第一世紀文書に鑑みても、百年以前のものと爲すことは出來ぬ。

本書の價値は偉大である。默示錄と稱するものは、保羅默示錄を初め紀元二百年前後から第三世紀に亙つて若干あるが、皆な此書を眞似て書いたものか或は其布衍である。故に中世に於ける

基督教會の天堂地獄に關する思想の發達は一に其源を此に發したものと云ふべきである。ダンテの『インフェルノ』も亦た此から出たもので、過去二千年間、歐洲の來世に關する概念を造つたものは此書である。それから又た、基督教の正典默示書に約翰默示錄と云ふのがあるが、彼は世界の過程殊に終末問題を中心として居るに反し、此はオルフォイス文學と關連を有し、靈魂死後の狀態に重きを置いて居る。若し夫れ彼を以て猶太亞思想を代表する默示錄とすれば、此は希臘思想の感化を受けて書かれた默示錄である。書物自體は正典の中に加へられなかつたが、其思想が亞歐の全教會を支配して居るのは蓋し此故であらう。

一四　ヘルマスの『牧者』

新約正典以外のものにして、此書の如くに廣く教會で讀まれたものはなからう。西乃原本（シナイ）には之を新約全書のうちへ加へてあるし、イレニウス（一八〇年）も之を聖書として引用して居るし、ユーセビウス（三三〇年）に迨びて、初めて之を正典から外へ出して居るが、尙ほ信徒修德のために讀むに最も必要として居るのである。

要するに此書は初代羅馬教會に於ける信仰生活と思想を語るもので、近世のバンヤンの『天路歷

程』などに比すべき文獻であつて、或は之を實際著者が見た幻夢の記錄とするも、其道德的に熱心なこと敎訓的目的を有するは確かである。

著者は元と奴隸から開放されたヘルマスと名くる男であつた。其中年餘程過ぎて、其兒女も大低成長してから、自身と家族に關して天よりの啓示を受けたと云ふ。此如き事は一般當時の信徒はよくあつたことで、又た何時でも此の如き事を期待して居たので、決して稀有の事ではない。處が紀元百四十年頃に羅馬の監督ヒギヌスの後繼者として、信徒はピウスと云ふ人を選擧したのであるが、此ピウスはヘルマスの弟であつた。此書は此ピウス監督が在職中に書かれたのであつて、まだつい近頃のことであると百七十年頃書かれたムラトリの斷片に記してある。然るに本書中卷の異象第二の四章によると、當時の羅馬監督はクレメンスであつやうである。それで多くの學者は此ムラトリ斷片の言を何かの間違であるとして、矢張本書をクレメンスの時代に書かれたものとして、其著時代を紀元一〇〇年頃まで引き上げて居る。孰れにするも一理ある。多分は、本書の現形と成つたのは百四十年頃であるが、本書中に錄する默示は數十年に亙つて數回になされたる處のものであつて、其或ものはクレメンス時代のものであらうと思はれる。併し此年代上の問題は何か他に新らしい參考材料が出なければ、今の儘では到底斷定は出來ぬ。

此書の内容は、「教會」が婦人の形で現れて示したのと、「悔悛の天使」が牧羊者の形で現れて示したのと、基督者を管理すると云ふ「大天使」が示したのと、三段に分れた啓示の連續で、各啓示に其々説明が附してある。故に形式に於ては牧會的訓戒書である。而して其取扱ふ問題は主として受洗後に犯せる罪惡で、當時の信念によれば信徒は受洗後は無罪の生涯を送り得べく、又た受洗後に罪を犯せば其は決して赦さるべきに非ずと考へられて居た。併し若し實際左樣であれば、救はれる者は誠に少ないことになる。其を示では、受洗後の罪は今ま一度だけ悔改めるの恩惠があるから、自暴自棄にならずして赦に歸れと云ふので之を布衍して説き、茲に我等は後の羅馬教會の懺悔の教義の萌芽の如きものを見る。又た本書に於てはパウロの神學思想が殆んど少しも現れ　居ないことは注意すべきである。體一第二世紀に於ける教會の思潮はパウロのそれではない。近世プロテスタント派がパウロに與へた如き地位は初代教會の文獻に見ることは出來ぬ。

本書の原本で一貫して完全なものはないが、我等の研究の權威ある典據は左の如くである。

一、**西乃原本**——紀元三百五十年頃の寫本で、曆山市或は其附近で書かれたものである。歐洲戰までは露都皇室圖書館にあつた。併し此は誡訓篇の誡訓第四の第三章の初めまでしか無く其後は失せて居る。

二、アソス原本——此は第十五世紀の寫本で、十牧であるが、内六牧は今尚ほアソスの聖グレゴリ院に在り、三枚はライプチヒに在り、最後の一牧は紛失して居る。此等は寫眞版にして、オクスフォードから出た。

三、其他の寫本斷片——ハムブルク、アーマスト、バーリン、オクシリンカス等、數多の斷片があるが、どうも下卷の誠に此部は拉甸譯を見なければならぬ。

四、拉甸譯——ヴルガート譯本は寫本も二十ばかりあり、一五一三年に巴里で出版したのもある。倘ほ他にパレスチナと云ふのもある。

五、エチオピア譯本——ダバダーが發見して獨乙で出版して居る。

六、古及譯本(コプト)——僅かの斷片ではあるが、巴里の國民圖書館にある。印刷して出版にも成つて居る。

然るに典據は以上の如く、本書の終尾少許は拉甸譯で讀まなければならぬ。併し原語の希臘語も西乃本とアソス本とは大分の差もあり、又た讀み難き箇所も少なからぬので此書は有名である。

新約外典 附錄終



昭和四年十一月廿八日印刷
昭和四年十一月三十日發行

改造社

世界聖典全集
新約外典全

編輯者　世界聖典全集刊行會

編輯代表兼發行者　山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　椎名昇
東京市芝區田村町八十一番地

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

（新榮社製本）

二業印刷合資會社印刷

世界聖典全集

幽玄の哲理！熱烈の信仰!!古聖哲、諸民族の大思想●大感情●大經驗の記錄!!!
當代諸權威の努力はこの至難の飜譯に成功し、前後の兩輯日月竝び天に懸るが
如く、吾等の眼前に展開し來る。

前輯

1	日本書紀神代卷	全	加藤文學博士纂註
2	四書集註	上	宇野文學博士譯
3	四書集註	下	宇野文學博士譯
4	聖徳太子三經義疏	上	高楠、佐伯、菅原譯
5	聖徳太子三經義疏	下	境野、菅原、鼎譯
6	印度古聖歌	全	高楠文學博士譯
7	耆那教聖典	全	鈴木重信譯
8	アヴェスタ經	上	木村歴太郎譯
9	アヴェスタ經	下	木村歴太郎譯
10	埃及死者之書	上	田中達譯
11	埃及死者之書	下	田中達譯
12	新約全書解題	全	高木神學博士譯
13	新約外典	全	杉浦哲學博士譯
14	コーラン經	上	坂本文學博士譯
15	コーラン經	下	坂本文學博士譯

後輯

1	古事記神代卷	全	加藤文學博士纂註
2	道教聖典	全	小柳文學博士譯
3	ウパニシヤツト	一	高楠博士外三氏譯
4	ウパニシヤツト	二	木村博士外十一氏譯
5	ウパニシヤツト	三	宇井博士外二氏譯
6	ウパニシヤツト	四	高楠博士外十氏譯
7	ウパニシヤツト	五	長井博士外十氏譯
8	ウパニシヤツト	六	宇井博士外八氏譯
9	ウパニシヤツト	七	木村博士外十一氏譯
10	ウパニシヤツト	八	高楠博士外十氏譯
11	ウパニシヤツト	九	高楠博士外八氏譯
12	舊約全書解題	全	石橋文學博士譯
13	舊約外典	全	杉浦哲學博士譯
14	イヌ聖典	全	金田一文學士譯
15	世界聖典外纂	全	諸大家著